
suicide magic

不足茶野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s u i c i d e m a g i c

【Nコード】

N 5 0 7 3 B

【作者名】

不足茶野

【あらすじ】

自らの幸運を媒介にして魔法が使える高校生、広野貴明は武内亜也の飛び降り現場に出くわしてしまい、思わず助けてしまう。二人の出会いから始まる『s u i c i d e m a g i c』の秘密。

第1話 「僕は魔法使い」

突然だが僕は魔法使いだ。

名前は広野貴明。

地元の私立高校に通う高校生一年生だ。

成績も真ん中ぐらい。背は175センチ。太っているわけでもなければ痩せすぎているわけでもない。髪の毛だって日に当たれば茶色に見える程度。

いたって普通、ハッキリ言えば平凡な人間。

ただ、唯一の取柄はさつきも言ったけど、魔法を使うこと。

得意な魔法は、結界を張ること。対象は人間。

僕は誰とでもすぐ仲良く話すし、他愛もない話をして笑いをとったりする。

しかし、自分が作った魔法陣の中へは絶対に入らせない。

つまり一定以上の親しい仲間は作らないっていう意味の結界のこ
とだ。

だからクラスの注目も浴びないし、かといって仲間はずれにもされない。

僕の処世術ともいえる。まあ、んなものが魔法なわけ無いの
けど、そう呼んだ方が僕の中でシツクリくるのだ。

といったわけで、僕の高校生活は取り立てて何があるというわけでもなく、今後も上手くやってるものと思っていた。

でも、そうそう事は運ばない。自己紹介も終ったし、早速本題に入ろう。

2月の朝に起こった出来事。休み時間にそいつは来た。

この時期、エアコンのない教室では寒いので日が当たる窓際に人

が集中する。

しかし、その日に限って寝不足で、僕は窓際でなく廊下側の自分の席で寝ていた。しばらくすると、誰かの声がして僕は目を覚ます。ゆっくり顔を上げると、そこにはとんでもないジョーカーが立っていた。

「ねーねー、広野君。昨日のドラマ見た？」

ニコニコしながら話しかけてきたのは、同じクラスの武内亜也だ。僕は心の中で舌打ちした。クラスのヤツ等もこの武内の行為に関心なさそうな振りして、密かに注目をしていた。

みんなの思っていることは唯一つ。

今度の犠牲者は誰かである。

武内亜也は入学当初、見た目は結構かわいいので男の注目を浴びたりした。

髪は軽いブラウンで肩にかかるぐらい伸ばしてて、少し下がり目の瞳も大きく、華奢な感じが一部の男に人気があった（多少好みあり）。

しかし、見た目は見た目。4月のころはみんなと同じようにどこかの女子の仲良しグループのうちの一人だった。

だが、一ヶ月ほどしてそのグループから仲間はずれにされ、そのあと転々と他の女子のグループに入り込むのだがすぐにまた仲間からはずされてしまう。（理由は知らないけど）

おそらく、上手く社会に適合できないタイプのようである。

そして女子全員から見捨てられた彼女は、男達に声をかけ始める。最初は上手くやっているようなのだが、最後にはまた一人に戻る。付き合った男の話によれば、必死なのだという。

初めは何でも言うことを聞いてくれるし、見た目がいいし、ということ付き合いはじめるのだが、だんだんしつこくなっていき、

最後はストーカーまがいのことまでされてしまう。

当然その男は別れる。そうやって彼女はクラスの男に次々と声をかける。何の区別もない。

見た目の良し悪しにかかわらず（別に男は見た目ばかりじゃないが）声をかけた。当然それを利用してよからぬ事を考える男もいたが、結局は離れていった。

そうして、とうとう僕の番が来たようだ。声を掛けたクラスの男が僕で最後だという事と、さっき彼女が言った「ねーねー、。。。君昨日のドラマ見た？」という言葉でもわかる。

彼女が目を付けた男には必ずこのセリフを言うのだった。

『あー、とうとう広野か。』という雰囲気はクラス中に広がる。

みんなの目が僕に注がれているのを感じた。

なかには露骨にニヤニヤしながらこっちを見てくるヤツもいるし……ハッキリ言えば、迷惑。というより、僕は彼女みたいなタイプの人間が大嫌いなのだ。

一人になりたくなくて必死に仲間を探すヤツ。

それでも返事ぐらいはしてやる。

「ごめん。それ見てないんだ」

僕にとっても普通に人にとっても否定の意味に使う言葉なのだが、彼女は違った。

「よかった。実はね、私も見てないんだ。なんか流行りに乗ってるって感じるもんねー」

「はぁ……」

どうやら会話を終らせる気は無いらしい。

今まで何人もの人間とこの会話でやってきただけのことはある。

次の言葉はすでに用意済み。僕も次々と出てくる彼女の話のすべて断ち切った。

しかし、彼女は彼女なりのマニュアルが存在してるのか、僕の言葉に対しても会話を続けている。

その内容は、まさに上っ面の会話の代表というべきものだった。全然、言葉に気持がこもってない。僕はものすごくイヤな気分になった。

必死になって話を作る。見たくもないテレビ、雑誌を見る。それはまるで“自分のようだ”と思ってしまった。

僕は結界の張り方が上手いので彼女のように『へま』をすることはないが、元をたどれば同じだ。何とか会話を続けようと必死だし、感情のない笑顔が余計に憂鬱にさせる。

だからというわけではないが、思わず本音が出てしまった。

「なんでそんなに、必死なの？」

明らかに僕はNGワードを言った。

「え？」

どんな言葉でも怯まず話しかけてきた彼女がここで初めて戸惑いを見せた。僕も言わなくても良い事を言ってしまったと感じたが、いまさら撤回できない、というか止まらない。

「そんなに仲間がほしいわけ？　むなくない？　どうせ誰とでもそうやってやってるんだろ！　だったら他の奴にしてくれないか？　そういうの！」

言った後に僕はクラス中が静まり返っている事に気付く。

いつもおとなしい（わざとそういうふうにいる）僕が大声でどなったからだろう。

彼女、武内亜也も青ざめた顔をして呆然としている。

ものすごく重い雰囲気クラス中には広がっていく。僕も自分のしたことにどうしていいかとまどう。

その時、天の助けというべきか、先生が教室に入ってきた。クラス中が自分の席へと移動を始める。武内も黙ったまま自分の席に帰

っていった。何事も無かったように、いつもの普通の授業がはじまる。僕はホッとした。

第2話 「空も飛べるはず」

やや気まずい雰囲気を感じながら、僕は授業に集中することにした。

そして、授業中ひっきりなしにケイタイのメールだとか、手渡しの手紙が届く。

内容はどれも

『よく言っ た!』

『偉い!感動した!』

『あいつは言っ てやらなきゃ分からない』

『胸がスツとした』

など、どれも僕を褒める言葉ばかりだった。

言っ た直後は少し後悔したが、だんだん後になっ て「もしかしたら、いいことしたんじゃないのか?」なんて思っ たりした。

そして昼休み。

僕は屋上に行くことにした。

教室にいても武内が いると思っ から、居づらし、なにより英雄扱 いるクラスの男どもにはうんざりしたからだ。

ところで、ウチの学校は通常、入り口には鍵がかっ けていて屋上へ行く事はできない。でも、生徒の中に屋上への鍵を作っ た奴が いて3階の男子トイレに隠してある。そこから鍵を取っ て僕は屋上 に向かっ た。

今考えれば、教室にいればよかっ たと思っ っているが……

入り口に差し掛かり、あることに気がつ いた。入り口のドアが開 いているのだ。

先客が いるのかと思っ たけど、自分が鍵を持っ ているのにそんな

はずない。

誰かがドアの鍵を閉め忘れたんだろうと思うことにしてドアを開けた。

一瞬、強く冷たい風が吹き込んできたが、屋上にできれば大丈夫。適当なところで昼食を食べる事にする。寒い2月にわざわざ屋上で過ごすとするヤツもいないだろう。そう思って僕は屋上の真ん中ぐらいまで進んだ。

そのとき僕の視界の端に人影が見えた。
やっぱり誰かいたのかと思い、そっちのほうへ振り向く。

そこには武内亜也がいた。

武内を見た瞬間、僕は多分露骨にイヤな顔をしたに違いない。

「多分」というのは、そんなことよりあることに目がいつて、自分の表情にまで気が回らなかったからである。

僕の中から見て確実に、武内の体が屋上の柵の向こう側にあった。つまり、屋上から飛び降りるような格好になっている。

どういうつもりだ？ ——まさか！？

僕は危険を感じて、声を掛けようと武内に近づいた。

「お、おい」

「……え？」

すると、彼女も僕に気付いたようで、目を大きく開く。

そして少し驚いた顔をした後、武内は柵をつかんでいた手を離れた。

その瞬間、彼女は笑った。

朝のときの上っ面の笑顔ではなく、どこか哀しいそうだった。死ぬ間際になっても僕に愛想笑いをしたかったのだろうか？
そして彼女は僕の視界から消えた。

僕は結界を張っている。それは今も変わらない。

人と深くかわるのがイヤだったからであり、自分を守るためでもあった。

だから、こういう、どうしようもない場面では逃げるのが一番だと知っている。

しかし、昔の僕がそれを許さなかった。

人は助けなければいけないもの。

それが僕の尊敬する人の言葉。

いや、それ以前にこのまま見過ごすなんて夢見が悪いじゃないか！！

自然に僕はそれを行動に移す。

心の中で呪文を唱えろと僕の体は宙に浮いた。

さらに、彼女に追いつくようにスピードも上げる。

そして彼女の服をつかむ。

精一杯の力を込めて引き上げる。

人は予想以上に重かった。

だいたい空中で人を抱きかかえていること自体初めてのことであったから。

彼女は何が起こったかわかってない。いや、わからないほうがいい。

なんせ羽根のついた人間が信じられない速さで移動して、自分を抱えて屋上に戻ろうとしているのだから。

もう一度いう。僕は魔法使いだ

結界だけじゃなく、空も飛べたりする。

第3話 「2年前」

父は魔法を使って死んだ。

2年前――

僕は走っていた。まだ走れば間に合うはずだ。

絡まりそうになる足を立て直しつつ走る。中学生の頃の話。

僕は病院へ急いで走っていた。父は魔法を使おうとしている。

それもただの魔法ではない。死にかけた人間を救う魔法だ。

僕の家系と契約した精霊の力を借りた魔法（少なくとも僕のはそうだ）は使用者の幸福と引き換えによって魔法が実行される。

実行される魔法の難易度によってリスクは比例して増大し、引き換えにする幸福は膨れ上がる。

そして魔法を使用した後、行った魔法の埋め合わせとして、不幸が使用者の身に降り注ぐ。さらに魔法の中でも人の命に直接かわるものは、魔法の使用者の全幸福をもって実行される。

つまり、命に関わる魔法を使えば、あらゆる不幸が起こり死ぬことになるのだ。

父の友人は末期のガンで死ぬはずだった。

しかし、父は諦めない。魔法を使い、友人を助けようとしているのだ。僕はそれを阻止すべく走っている。

季節は秋。すっかり葉の色も変わっている。少し寒い季節。その中で僕は汗だくだった。

僕は父を尊敬していた。今迄だって、魔法を私利私欲のために使わず、人のために使ってきた。（そりゃあ、魔法を使えば自分が不幸になるからということもあるけど）

この頃、父と僕は僕自身の魔法の修行として、人助けをしていた。困っている人を助ける自体あまり好きではなかったが、父と一緒にするのは楽しかったと記憶している。父は僕いつも僕のお手本だった。魔法の使い方、人との接し方、生きていく上での常識。そして、人を想いやること、何でも教えてくれた。

病院に着き、たくさんの人を掻き分け集中治療室へと急ぐ。僕は集中治療室のドアの前に立つ父を見つけ、急いで駆け寄る。

「待つてよ、父さん！」

僕の呼びかけに父は振り向いた。父は少し前まで会っていたのに、すごく痩せたような気がする。

「貴明……」

「魔法を使うの止めてよ！！　いくら友達だからってそこまでしなくともいいだろ！」

父は黙った。僕は立て続けにしゃべる。

「これは運命なんだよ！天地の法則なんだ！　死ぬ運命の人は決して生きることはできないんだよ！」

「そうだな」

この言葉に父が僕の意見を了承してくれたものだと思った。

「運命か……確かにそうかもしれない。でもな、運命は変えられる、いくらでも。だだ、今回それが出来るのは魔法だけなんだ」

父の手は震えていたし、足だって震えている。

それを見た僕は言わずにいられなかった。

「父さん、震えてるじゃないか。怖いんでしょ？　だったら止めよう」

「でもな、貴明。今は分からないかもしれないが、父さんには微笑んで欲しい人がいるんだ」

僕はなんだか泣けてきた。父の目も潤んでいる。

「お前が来てくれて助かったよ。おかげで自分の気持ちの整理がつ

いた。だが、お前には本当に悪いと思っている。父さんのわがままを聞いてくれ」

父は微笑んでドアのノブに手をかけ病室の中へ入っていく。

ただ見送るだけで僕は何もできなかった。

三日後、周りの人間からは奇跡だと言われながら、父の友人は死の淵から生還した。その代償に父が原因不明の病氣にかかり死ぬことになる。

僕はその時、父は自分を犠牲にして人の命を救う英雄のように思えた。

しかし数年後、父の友人は僕の母と結婚する。

助けられた恩も忘れて（本人は知らないのだが）、僕の家庭に入ってきた。

それから、僕は家の人達とは、ほとんど口を利かない。

父が望んでいたものはこんなものだったのか？何のための犠牲だったんだ？

この事で人のために魔法を使うことがどれだけ危険でバカらしいか思い知らされ、僕は他人との距離を保つために結界を張ることになる。人と深くかわりあい、情けを掛けて面倒なことになるなんてのはゴメンだ……

そして現在。場所は屋上。

僕の両腕にはさつき屋上から飛び降り自殺をはかった女の子、武内亜也がいる。つつい魔法で武内亜也を助けてしまった。

とりあえず無言で彼女を空中から屋上へ戻す。果然と僕を見つめている彼女に気づいてはいたけど、僕は見ないようにした。

だが、この状況をごまかすために何か言わないといけない。

うーんと、えーっと……思い浮かばない。

「こ、このことは誰にも言つなよ」

こんな言葉しか浮かばねーっ！　なんだこのありふれたセリフは！
恥ずかしくなった僕は屋上を去ることにした。

案の定、僕はその直後、階段から転げ落ちた。魔法で使った幸福の埋め合わせに不幸が僕に訪れたのだ。高速移動、空を飛ぶ魔法を使ったにもかかわらず、この程度で済んだのはある意味ラッキーだったと思う。

そして、午後は何事もなく過ぎていった。武内も教室に戻り、何事も無かったかのように普通に授業を受けている。僕は安心した。

第4話 「ついてくるなよ」

やっと授業も終わり皆が下校する時間。部活動をしていない僕はとつとと帰ることにした。

その際お昼休みのこともあり、武内に気付かれないように教室を出る。

しかし、いつのまにか先回りされ、武内が校門の前で待っていた。僕はそれを無視して通り過ぎる。

「ちよつと待つてよ」

そんな風に言われたぐらいで立ち止まるわけではない。あつさり彼女の前を通り過ぎると武内は僕の後をついてきた。

しばらく無言のまま、2人の歩く距離も縮まることなく歩き続けた。

「ついてくるな」

「嫌」

「くっ……」

まだついてくる。僕は振り切るために少し早足で歩いた。

すると、僕の歩調に合わせるかのように武内も足を速めた。

「来るなって、ハアハア、言つて、ハアハア、るだろ」

「い、ハアハア、や、ハアハア」

だんだん息が切れて何言ってるのか分からなくなってきた。

そして運悪く目の前の信号が赤になった。このまま無理に横断してしまえばコイツを振り切れるのかもしれない。でも、こんなときに限って車が途切れることは無く、僕は無理やり横断するのを諦めて立ち止まった。心の中で舌打ちすると、後ろから武内の弾む息が近づいてくるのが分かった。

僕は少し身構えて待つていたが、武内がこちらへ来ることは無かった。後ろをうかがうと武内は律儀にも僕との距離を縮めることな

く信号待ちをしていたのだ。

何だかんだ言って『つかず離れず』ってことか。そういうところが自分と似ているような気がして思わず苦笑した。

それから僕達は無言のまま信号待ちをする。やがて反対側の歩行者用信号が点滅を始めた。そして僕はこの信号が青になったら走ろうと決めた。

大きく息を吸い込んで、ダッシュに備えた瞬間、後ろから小さな声が聞えた。

「言っちゃうよ……あのこと」

「はあ!？」

僕は武内の言葉に反応し、思わず振り返ってしまった。

すると彼女はジッと僕を見つめていた。やや俯き加減でこつちをうかがうような目つき。そんなへりくだった態度になんだかいたたまれなくなる。

こうなったらハッキリ言うしかない。僕は少し強い口調で彼女に話しかけた。

「ちょっと待て。助けたのは誰だと思ってんだよ!」

「私、助けてなんて言っていないし」

くそっ、何か腹が立つ。それでもあの魔法の代償として階段から落ちて、何時間が経過した今でも足を軽く引きずって歩いているんだぞ。

「あーそうかい、だったら今すぐ屋上へ行って飛び降りて来いよ!」

ちょっと酷な言い方かもしれないが、これぐらい言わないと僕の気が済まない。すると、武内は少しうつむいた。もしかして泣かせたのか?

しかし、その考えは間違えだったことにすぐことに気付く。

武内は顔を上げた反動で一步僕に近づいた。

「いやっ!!」

「はあ?」

彼女は僕を睨んでいた。どこか必死な様子は、さっきまでのへりくだったような態度ではなかった。

「せっかくのチャンスだもん! 逃すわけにはいかない!」

そついうと僕のほうへどんどん歩み寄って来る。

同時に僕はその後ずさりした。

「あなたの魔法で復讐がしたいの」

『復讐』だつて? しかも、俺の魔法で?

そんなの――

「でっ、できるわけないだろ! オレの魔法をあてにしても無駄だからなっ! 僕は他人のためには魔法は使わない!」

「使ったじゃん、今日」

「うっ……だとしてもだ、実は魔法を使えばオレが不幸になる仕組みとなっているんだぞ」

「そんなの、そっちの勝手だもん!」

すると、彼女は僕のすぐ目の前まで近づいて顔を近づけた。

なんだ? 今朝の上っ面だけの会話にはないような、追い詰められるこの感じは。っていうかこいつちゃんと会話できるじゃん。

と、僕が少なからず武内を見直した瞬間、彼女の口からとんでもない言葉が続く。

「このこと言っちゃってもいいの? バレたらどこかの科学者がやつてきてアンタなんか解剖されちゃうんだからっ!!」

「え?」

「それで、それで……どつかのサーカスに売られて、一生寂しく暮らすんだからっ!」

「何言ってるんのお前」

眉間にシワなんか作って必死の形相で僕を脅しているつもりらし

い。アホかコイツ。いや、アホ決定だ。そんなマンガみたいなことがあるわけないだろ。お前の乏しいんだか、面白いんだかよくわからない発想に付き合ってる暇はない。

自分の言ったことが思ったより有効でなかったことが理解できたのか、いつの間にか武内は俺の目の前で手を合わせ、あがめる様に「お願いします〜、お願いします〜」とか言っていた。

そんな姿に呆れて僕は苦笑しそうなのを堪える。

まあ、考えてみれば科学者までとはいかないまでも僕の周辺の人に知られるとよくないよな。利用される可能性は大いにある。目の前にいるコイツがいい例だ。

僕は自分の結界には誰も入れたくはない。付かず離れずでやっていきたいし、魔法のことも武内以上に広まることを阻止しなければいけない。幸いコイツはアホだ。会話で分かる。上手く誤魔化すことも出来るだろう。

それに『魔法で復讐がしたい』ってのも気になる。大げさに言っただけかもしれないけど、『復讐』なんて使うぐらいだから、きっと何かあるに違いない。

『復讐』……何だか妙に好奇心をくすぐる言葉だ。

僕は頭に手を当て、変に芝居がかった仕草で武内に答えた。

「はあ……わかった。協力してやるよ」

「え、ホント？」

「だから誰にも言うなよ」

「うん！　ありがとう……！」

すると彼女の顔が一変して、満面の笑みになる。

さらに勢い余って武内は僕に抱きついた。何度もお礼を言われ、色々嬉しいというか迷惑というか……

しかし、後にこの安請け合いを後悔することになるなんて思いも

し
な
か
っ
た。

第5話 「正しい魔法の使い方」

次の日の放課後。僕が歩いて帰宅していると、背後から弾むような声が聞えた。

「ひーろーのー君！」

嫌な予感がして後ろを振り向くと武内がこっちへ走って来ていた。学校からは離れた場所だけど、僕は誰かに見られてやしないかと心配になり左右を見回す。

幸い、誰も知り合いはいそうになかった。

「広野君、何で……ハアハア、先に、ハアハア……帰ったの？」

僕の前に立つと武内は乱れた息を整えた。

「あのさ、馴れ馴れしく呼ぶのやめてくれないか」

「えーっ、なんでー」

武内が僕の顔を覗き込む。うわっ、ちょっと、いやかなり、顔が近すぎる。今までハッキリと見えていなかったものまで見えてきた。ふうん、結構、武内って目が大きいんだな……って、思わず見詰め合ってしまった！ やばい……にしても、なんとなく良い香りがするのシャンプーのなのか？ ってか、何考えてるんだ。

そう思うとすぐに僕は視線をそらすように顔を背けた。

「ん？ どうしたの？」

すると武内は少し首をかしげ、さらに僕を覗き込む。肩まで伸びた髪が揺れ、また良い香りが——って、わざとか、わざとなのか？ これ以上耐えられない。

「お前の復讐には付き合うと言ったけど、お前と仲良くするなんて一度も言っていない」

突き放すように言った僕の一言に武内は「あっ」と小さくつぶやくと、僕から距離をとった。

「広野君、ごめん……」

「別にあやまらなくていいけど」

俯いた武内を見て僕は少し彼女が気の毒になった。

「そんなことより、さっそく今日から復讐しよ」

武内は気を取り直したのか、少し笑って歩き出す。

そうだった、今から武内の復讐とやらに付き合うのだった。

しかも、僕の魔法を使つて。

その後の武内は用意周到だった。復讐の相手がどこにいるか、すでに分かつていて、どんどん歩いていく。僕はその後についていた。

「ここだよ」

「ゲーセン？」

暫く歩いて到着した場所はゲームセンターだった。武内はそそくさと屋内に入り、迷うことなく奥へと進む。そして大きな体感型のゲーム機へとさしかかると急にその陰へと隠れるように身を潜めた。いや、それじゃあかえって目立つだろ。

「やつぱりいた。あそこを見て」

武内が指差す方向に目を向ける。

すると音ゲーをやっているうちの高校の制服を来た学生が三人いた。

「今日は、あいつらをお願い」

「『今日は？』って、今日だけじゃないのか！」

「別に今日だけなんて言つてないし」

僕はウンザリしたが、不満を言つてもきりが無い。

渋々、ゲーム機の陰から覗いてよくみると、三人はクラスメートだった。しかも、あまり良い評判は聞かないヤツらだ。特に真ん中にある門脇は良い話を聞いた事が無い。

「それにしてもお前、よくこいつらがここにいるって分かったな」

「あの子達と付き合ってたから、行動範囲は大体分かる」

武内の言つた言葉が僕に突き刺さる。誰とでも付き合つてのは本当だったのか……

「ふられたから復讐するのか？」

「違うよ」

そう言つと彼女は一つため息をついた。

「あいつら最初、三人で私を犯そうとしたの」

「え、え、っ!？」

突然の衝撃発言に僕は戸惑った。

「まっ、未遂だったんだけど」

「いや、そういう問題じゃあ……」

僕は思わず『それって、どこまでやられたの?』と聞きそうになり、慌てて違う言葉を探す。考えた末「で、どうすればいいんだ?」というのが精一杯だった。彼女は少し考えた後、答える。

「このままゲーセンにトラック突入っ!」

「できるか!」

僕は速攻で答えた。その魔法を使った後、僕はどうなるんだ? 考えたくもない。

「えーっ、なんでー? そうじゃなきゃ復讐できないもん!」

「犯されそうになったお前は気の毒に思うが、人殺しはゴメンだ」

「”殺して”なんて言ってないもん。ただ”トラック突入っ!”って言ったただけだもん」

「同じことだろ!」

また僕は速攻で答えた。コイツ、ごねる時は「くもん」ってつけやがるな。

僕に怒られると諦めたのか、武内はうずくまって考えだした。

そして、5分間考えた末の答えは――

「じゃあ、もうタライでいいよ」

「はあ? 意味分からん」

僕の呆れ顔に武内は顔を真っ赤になった。

「あれよ、あれ。そ、そう、ド、ドリフのコントで上から落ちてくるやつ」

「いや、タライの意味はわかるぞ」

「そうだよね……」

さつきまで『トラック突入っ！』なんて言っていた人間が5分考
えただけで何故タライに？ しかもドリフって、お前は一体何歳な
んだよ。ってそれを理解できる僕も僕だが。

「本当にそれでいいのか？」

「まっ、まあ、アイツらだって一応生きてるんだし……」

武内は下を向いてブツブツ独り言を言い出した。顔を真っ赤にし
ながら下向いてブツブツ言う姿はなんだかおかしかった。

ともかく物騒なものではなく『罰ゲーム』に近い『復讐』へと変
わることで、俄然僕のやる気は上がった。面白そうじゃないか！

「よし！ そんじゃあタライを落とすからな、良く見ておけよ」

「うん！」

僕は前の三人を指差す。さらに大げさに身振り手振りを加える。
こんなことしなくても魔法は使えるのだが。

「overhead blockquote tarai blo
ckquoted ground！」

普段は心の中で言うのだが、後ろでは武内が見ていたので雰囲気
を出すために実際に唱えてみた。

すると三人の頭上に大きなタライが現れ、落下。

「痛っ！！」

「あがつ！！」

「へぶっ！！！」

タライは気持ちの良い金属音をさせてぶつかった。三者三様にも
がき苦しむ姿は誰が見ても笑えた。

「何あれ！ 馬鹿みたい！ あはははっ！」

いつの間にか武内も笑ってた。傍から見ても愛想笑いじゃないの
が良く分かった。なんだコイツもこんな風に笑えんじゃん。

僕は武内の笑顔を見て「こんな復讐なら後ろめたいこともない」
なんて思ったりした。

……っていうか、明日もこんなことするんだよな。

無論この後、僕は帰宅中に鳥の糞を頭に落とされるという不運に見舞われた。

第6話 「ふれあいリベンジャー」

こうして僕と武内の復讐の旅(?)が始まった。

基本的に一日一人ずつ今まで付き合ったクラスの男どもに復讐することになった。一度に何人もやれば僕の体がいくつあっても足りないし。

そして、いつも僕が黙って学校を出るのだが、なぜか武内が先回りして復讐に付き合うことになる。

ほとんど毎日下校途中で捕まった。

「で? どうするんだ今日は」

「じゃあ今日は熱湯で」

こっぴどい会話が交わされれば、ターゲットの男の風呂は熱湯風呂に変わり。

またある日は、

「今日はバナナの皮で転ばせて」

と言われ、ターゲットを一回転する勢いで転ばせた。

もちろん、魔法を使っているので僕にも災難は降りかかるが、やっтерることが些細なことなので、実害はあまりなかった。

熱湯をかければ、冷水を浴びせられるし、バナナの皮で転ばせれば、剥かれた中身を食べて腹の調子が悪くなった程度のことだ。他にも生傷は絶えなかったけど……

そしてしばらくすると武内のネタも尽きてきたらしく、後半は僕がネタを考える始末だった。

ただ、嫌なことが起こるというのにそのネタを考えるなんて自分自身馬鹿馬鹿しく思えたが、ついついクラスの奴らが困ってる時間が楽しくて、後のことを考えずにネタを実行してしまう始末だった。

そんな時間を二人で過ごしていたからか、僕は武内と徐々にはあるがうち解けていったと思う。

ある時、僕は武内に聞いてみた。

「なんで声を掛けるのオレが最後だったんだ？」

最初から思っていた疑問をぶつけてみた。

このぐらいきわどい会話でもいえるような間柄にはなっていたはずだ。

すると武内は少し考えた後、答えた。

「広野君は怒るかもしれないけど、『何か似てる』って思ったの。だから、なんか嫌で……近親嫌悪ってやつかもしれない。でも、『似てる人にまで相手にされなかったら』という気持ちもあったの。最後になってごめん」

僕は正直、驚いた。武内も僕と同じことを感じていたのだ。

「謝る必要なんて無い。実は僕も少し、そう思ってたから」

「え？」

「似てるかなって」

「そ、そうなんだ……」

そう言つと武内は俯いた。どうしたんだ？ と僕が武内の顔を覗き込もうとすると同時に彼女は勢い良く顔を上げた。

「はあ、良かった！ 広野君も同じこと考えてたんだ」

「ま、まあな」

なんだか僕は今頃あんな言葉を言つたことに恥ずかしくなつてしまった。

「それにこうして仲良くなれて良かったしね」

僕は『仲良くなれて』という武内の言葉を肯定するか一瞬迷つた。しかし、僕の口は自然に動き、返答していた。

「そうだな。僕も仲良くなれてよかったよ」

こんな返事に躊躇する必要なんて無いんだ。武内の事を嫌なやつだと決め付けていた僕は考えを改めた。話してみなけりゃ、わから

ないなとつくづく思う。

一方、学校での二人の関係は何も変わらない。武内は僕に一切話しかけることはなかったし、それは僕が初めに頼んだことでもあった。

しかし、僕自体はもうそんな事どうでもよかったが、武内は「迷惑かけるといけない」と言って遠慮した。

だが、放課後になれば2人で笑い転げる。最初は武内と一緒にいるのも気分良くなかったが、いつのまにか僕にとってこの復讐が放課後のメインイベントになっていた。

しかし、どんなものにも終わりが来る。

とうとう復讐するクラスの男が一人になったのだ。

だがそのことは僕も武内も口には出さない。

少なくともこの時、僕は寂しさを感じていた。だから今日で終わりということは考えたくはなくて、いつものように努めようとした。「今日はどうする？　トライか？　それとも『志村ー！』（幽霊をちらつかせる事）か？」

しかし、武内は押し黙ったまま歩き続けている。それを見て僕は、彼女も今日で最後なので寂しいのかと思っていた。

でも、それは間違いだと後に気付く。本当に武内に関して間違いだと感じることが多い。

最後のターゲットがいる本屋につくと、いつものそれと違うテンションで武内は様子を伺っていた。やがて、ターゲットを見つけたと、意を決したように僕に言う。

「あいつを殺して」

その声のトーンは冗談で言っているのではないことを意識させるのに十分な低さだった。

僕は息を呑んだ。

第7話 「蚊帳の外」

武内亜也の目は真剣だった。いつもと違う雰囲気には僕は今日のタ
ーゲットを見る。なぜだろうと自分なりに考えてみると思い当たる
節があった。

「あいつは土屋だよな」

「うん……」

ターゲットの名は土屋祐介。武内が女子の輪からはみ出した後、
初めて彼女と親しくなったヤツ。

成績優秀、顔だって客観的に言って整っているし、おまけに誰に
でも優しく、おそらく女子の間で人気があると思う（確かめたわけ
じゃないから分らないが）。

だから武内が最初に付き合い始めたのが土屋だったのは良く分か
る。ただ、僕は誰にでも優しいというところがいつも気になり、あ
まり親しくはない。

「『殺して』なんて本気なのか？ そりゃあ、初めて付き合った相
手かもしれないけどさ」

「うん、そうだよな。でもそれだけじゃなくて、全ての始まりの人
だったから」

『全ての始まり』？ よく意味が分からない。

「それってどういうこと？」

「えっ！？ そ、それは……」

僕は言葉の意味を聞いたただけなのだが、なぜだか急に武内は黙り
込んで自分の指を絡ませたり、口を尖らせたりとモジモジ始めた。
「なんで急に口ごもるんだよ」

「だって……私の初めての人だったから」

「いっ！」

『初めて』ってあの『初めて』だよな。そう考えると僕も胸の鼓動が自分でも分かるぐらいに早くなり緊張した。今まで考えもしなかったが、このとき初めて武内のことを女性だと認識した。

「だったらなおさら殺しちゃだめだろ」

「うん。でも……」

僕はどうか冷静になろうと努めたが全然上手くいかない。『初めての人』という言葉が頭から離れなかった。

一方の武内は黙っている。僕もかける言葉が見つからない。という分からないし。

こうしてしばらく沈黙が続いた。

僕は自分なりの答えを出そうと必死に考える。どうしたら、武内を止められるのか。

そんな時、偶然に武内の持っているカバンの中が見えてしまった。何気なく目に入ったもの——それはナイフだった。

コイツは本気だ！

「お前、本気なんだな」

「え？」

「カバンの中のナイフ」

「あつ、えつと……これは……」

また武内の沈黙が続いた。僕もやっぱり声がかけられない。

どれぐらいたったのか、武内が僕へと顔を向けた。

その表情は笑顔だった。でもそれは以前のような嘘っぽい表情だ。「もういいよ。やっぱり人殺しは良くないよね。じゃあ、土屋君で最後だし、今までどうもありがとう」

武内の肩は震えてた。うつむいた顔からは涙がこぼれ、地面に落ちる。

僕は彼女の涙を見て少なからず動揺した。土屋だけは冗談では済まない何かがあるんだろうな。

そして武内は僕に背を向け歩いていく。僕は離れていく彼女を見て何度も自分に言い聞かせた。

これでいいんだ。これでまた元通りの生活が戻ってくるんだ。……でも、同時に湧き上がってくる思い。

このままアイツを放っておいていいのか？

自然に拳を強く握り締められている自分に気づく。

とうとう僕は止せばいいのに武内を呼び止めてしまった。

「ちよつと待て！ お前、それでもいいのかよ！！」

すると武内は立ち止まった。

「土屋を殺したいほど恨みがるんだろ？ だったら何か罰を与えてやろうぜ」

せめて何かしてやらないと僕の気が済まない。これで最後ならいつものように笑って終わりたいんだよ。

でも武内はこつちを振り返らない。それだけじゃないく、彼女の肩が震えているように思えた。

少し沈黙した後、彼女から微かに声が漏れた。

「だって、まだ好きだから……」

それ以上僕は何も言えなかった。

再び武内は僕から離れ、歩き始めた。ただ、それを見送るしかなかった。

独りになった僕は深いため息をつくと急に体が重くなった気がした。

所詮、土屋と武内の関係に口を挟むこともできない傍観者でしかないのだ。「罰を与えよう」なんて言った自分が馬鹿に見える。

結局、この日は意味もなく疲れて家に帰るなり寝てしまった。

第8話 「真夜中の雑音」

僕は武内の事もあり、家に帰ると夕飯も食べず風呂にも入らずに寝てしまった。

どんな夢を見ていたのかも覚えていない。ただ真っ暗だったような気がする。

そして夜中3時頃だろうか、携帯からの着信音で僕は目を覚ました。半分寝ぼけながら携帯の画面を見ると見知らぬ番号からの電話だった。普段なら無視してしまいそうだが、寝ぼけたせいもあり電話にでた。

すると聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「おつ、広野か？ オレ、門脇」

電話の相手は武内を犯そうとした三人組の一人の門脇健児だった。わずかに電話の向こう側から数人の笑い声が聞こえる。僕は武内のことを思い出し、嫌な気分になった。

「眠いから切るぞ」

「まつ、待てよ！ ……で？ どうなんだ？ どこまでやった？」

「はあ？」

「とぼけるなよ。武内とだよ」

どうやらこれはイタ電らしい。僕は昨日のこともあって声を荒げてしまった。

「お前等には関係ないだろ！！」

「まあそう怒るなよ。実はお前にある事を忠告しようと思って電話したんだぞ」

門脇の声はこの状況を楽しんでいるかのように弾んでいて、明らかに僕と武内への好奇心で一杯に違いなかった。

「聞きたくない」

「その忠告ってのがさ——」

僕の言葉を見殺して門脇は喋り続ける。

通話を切れば済む話なのだが、武内の事ということもあり、そのタイミングを失っていた。

「武内は別名なんて呼ばれているか知ってるか？」

「知らねえよ」

「なんと『リスカの女』って呼ばれてるんだ」

「はあ？」

『リスカ』は『リストカット』の事だよな。とか考えていると門脇がいちいち解説をつけてくれた。

「ようするに手首を切って安心するような女」

「……で？」

「あれ？ 驚かねえのか？ 自傷行為を繰り返すような女なんだぞ」別に驚かないわけじゃなかったが、飛び降り自殺をしようとしていたぐらいだ、武内がリストカットしていても不思議じゃない。

「オレはお前の無神経さに驚いてるよ」

「そうか？ 俺は忠告してやってるだけだぜ。じゃあ、あいつがリスカを始めた理由も知ってるか？」

正直、リスカの事実も知らないのに理由なんか知るわけない。

ああ、僕は武内と仲良くなったようで何も知らない。

それにしたって、門脇から理由を聞くななんて嫌だった。

「聞きたくもない」

「あゝあ、ノリが悪いなあ」

電話の向こう側で門脇のため息が聞こえた。

なんで僕がお前達のノリについていけなくちゃいけないんだよ。いい加減、馬鹿らしくなってきた。

「じゃあ、切るからな」

「待て待て、あわてるなよ。武内がああなったのは全部土屋、土屋祐介が原因らしいぜ」

「なんだと！」

僕は土屋の名前に思わず反応してしまった。すると門脇の笑い声が聞こえてくる。

「おっ、くいついてきたねえ。まあ簡単に言えば土屋をめぐって女子のグループ内で揉めたらしい。で、結局、武内は土屋と付き合った。友情より愛情を取ったってヤツだな。それで土屋と上手くいけば、めでたし、めでたし、だったんだけどな。その後土屋は武内をあっさりふって、違うヤツと付き合った」

僕の聞いた話では仲良かった女子のグループから離れ、一人になってから土屋と付き合ったはずだった。

武内の『すべての始まりの人』の意味がなんとなく分かった。

「おい聞してるのか？　それで土屋を何とか引き止めようとしてリス力したらしいぜ」

「……それで？」

「ここからが問題でな。それ以来、男と別れそうになったら、武内はその男の前でリス力するらしいんだよ」

僕は校舎の屋上での武内とのやり取りを思い出した。

じゃあ、あの飛び降りも僕の気を引くためのパフォーマンスだったっていうのか？

「俺が言いたいのはそれだけ。んじゃあ、頑張れよ。武内と面倒なことにならないようにな」

電話の向こうで笑い声が聞こえ、勝手に通話が途切れらる。

僕はしばらく携帯片手に呆然とした。

くだらない電話の後、屋上での出来事をもう一度考え直す。

あれも演技だったのかな？　結局、僕は武内の思いど通りに動いてただけなのか？

「……いや」

そんなはずない。

第一に僕と武内は（今もだが）付き合っていない。その日に初めて（すでに2月だったというのに）言葉を交わしたんだ。

第二に僕が飛び降りそうになってる武内を見かけたとき、彼女は驚いた顔をしていた。

最後に自殺の方法。リストカットじゃなくて、確実に死んでしまふ飛び降り自殺だった。僕が魔法を使わなければどうなっていたのだろう。

『復讐がしたいの』

『だって、まだ好きだから……』

『もういいよ。やっぱり人殺しは良くないね。じゃあ、土屋君で最後だし、今までどうもありがとう』

『武内は別名なんて呼ばれているか知ってるか？』

『なんと『リスカの女』って呼ばれてるんだ』

『ようするに手首を切って安心するような女』

やっぱり、武内は自殺しようとしたんだ。真似なんかじゃなくて本気だったんだ！！

と同時に嫌な予感が頭を駆け巡る。『今までどうもありがとう』なんて絶対変だ。

まさか、武内は死ぬ気じゃないだろうな。

「そつだ、電話」

僕は慌てて携帯電話を取る……あつ、携帯の番号知らない。

しかたなく、クラス名簿を探し出し、自宅へ電話をかける。こうなったら家族の迷惑になってもいいや！

しかし、何回コールしても電話は繋がらなかった。

「くそっ……」

気が付けば家を飛び出し、僕は武内の家を目指して走っていた。

第9話 「走る男」

僕は走り出していた。あまり考えたくない結論だったが、アイツはおそらく……手遅れだけにはならないでくれ。

武内の住所はクラス名簿で調べた。幸い僕の家から近いと判明。といっても5、6キロ離れているが……

この寒空に汗だくで走る。時折ふらつきながら走り続ける自分が情けなかった。もっと体力を鍛えておけばよかった。考えてみれば自転車も無い、タクシー使うお金も無い。

まあ、魔法を使えばすぐに到着できるだろうが、その後に何らかの不幸が待っているのだ。どんな不幸が待っているのか、僕はそれが怖くて嫌で走っている。

でも、これじゃあ、走ったって、走らなくたって不幸じゃないか？

そして走ること三十分後――

名簿の住所通り、行き着いた先には豪邸が建っていた。

「こんな所に住んでいたのか……」

辺りは深夜ということもあって人通りもなく静かだった。

ふと冷静になった頭で考える。うう、明らかに怪しいな、不法侵入になるよなあ、やっぱり。家の人もいるかもしれないし（そりゃいるだろ）。

第一、武内に何かあったという保証はない。かといって何かあったからじゃあ遅い。

「……行くか」

僕は意を決し、でかい門をよじ登り、玄関へと近づき、魔法で鍵を開けようとした。（こればかりは、魔法を使わなければ開けることが出来ない）

しかし、玄関のドアは鍵がかかっていなかった。恐る恐るドアを開ける。家の中は静かだ。というより、誰もいないかのようなだった。

玄関には靴が一組しかない。しかもこれは武内が普段履いているものだ。

ますます、自殺しやすい条件が揃っている。僕はためらいをなんとか押しのけ急いで武内を探す。そして電気をつけずに手探りで家の中を進む。本当に気分は犯罪者。いざとなれば魔法で逃亡だ。ああ、父さんごめんなさい。でも決して悪い事はしていません……多分。

なんせ初めて入ったところなので勝手が分からず何度も迷う。だが不思議なことに、何度も間違って部屋に入ったにもかかわらず、武内の家には誰もいなかった。やっぱり誰もいないのか。

そして、一番奥のキッチンにたどり着いた。とりあえず一階はここが最後のようだ。ゆっくり室内を覗き込む。

すると薄暗いキッチンの奥でイスに座っている人影を見つけた。慌てて僕は顔を引つ込める。誰だ？ 泥棒か？ なんにしても怪しすぎる。少し怖かったが、「今の自分より怪しい人物はいない」と再確認した事で思い切ってキッチンをうかがう。

覗き込んだ僕から見えた人影は小柄でまるで武内のように……って武内じゃないか！！ こんな暗闇でなにやってるんだよ！ 加えて武内は動く様子も無い。僕はただならぬ雰囲気彼女へ近づいた。

「おい、武内」

彼女は机にうつぶせになっていた。僕は顔を覗き込もうとして机に手をつく。

と同時に液体のようなものが手につく感覚がした。

「ん、なんだ？」

ゆっくりと手を上げ、顔を近づけると――僕の手が真っ赤に染まっていた。

一瞬のうちに背筋が凍りつき、僕は腰が抜け尻餅をついてしまった。すると、その衝撃で武内の腕が机から落ちた。

だらりと垂れ下がった指の先からは何かが雫のようなものが床へ

と落下する。間違いなく血液だ！ 僕は屍餅をついたまま血液が流れる元を探した。そして武内の手首にたどり着くと無数の傷跡から多くの血が流れているのを見てしまった。

「うわあああつ！」

僕は変な大声をあげてしまった。これぐらいでビビってしまうとはなさけない……

しかし、そのことが幸いしたのか、さっきまで動かなかった武内からわずかに声が聞こえた。

「うつん……」

なんと武内の意識はしっかりしていて僕を見つめていたのだ。

「あれ……どうして……？」

僕は武内の声を聞いて少しホツとすると、何とか気持ちを振り絞る事ができて声を上げた。

「お前、何やってるんだよ！！」

「……」

僕の問いかけに武内は答えない。

「黙ってんじゃねえよ！ こんなことして何になるんだっ！」

しばらく空ろな表情の武内とにらみ合ったが、そんな事をしてい
る場合ではないと判断して、とりあえず今は救急車を呼ぶ事にした。
さらに簡単な手当てをしようと武内の手首をタオルで傷口をきつ
く押さえた。しかし、押さえているタオルがどんどん赤に染まって
いくと僕はどんどん気持ちに焦りが生じる。

「くそつ、なんで止まらないんだよ！」

「……のくん」

「タオルがこんなに赤いけど大丈夫なのか……」

「……の君」

「くそつ、くそつ」

「広野君」

ようやく武内が小さな声で僕を呼んでいたのに気づいた。彼女の

手が僕のタオルを押さえていた手と重なる。

「もう……いいから」

僕がその言葉に反応して顔を上げると、武内は笑顔とも泣き顔ともつかない表情を向けていた。

なんでそんな微妙な顔するんだよ。

そう思うと僕は一気に頭へ血が上って大声を出してしまった。

「はあ！？ 良くねえだろうが！ お前は死ぬ気かもしれないけど、そうはいくか！」

すると今度は明らかに苦笑と見て取れる表情でつぶやいた。

「そうじゃないもん……私が押さえるって言う意味。これ一度目じゃないし、慣れてるから……」

「あつ、そうか……」

僕は思わず手を離してしまう。その隙に武内はタオルをもう一方の手で掴むと傷口を押さえ始める。時折苦痛で顔をしかめながら、武内は僕に話しかけた。

「『そうか』って言うことは知ってたんだね。自傷しちゃうこと」

「ま、まあな。当たり前だろ」

僕の返答に武内は「そうなんだ」と呟くと黙ってしまった。

さつき知ったくせに僕は見栄を張ってしまう。なんだか自分がすぐく器の小さい人間に思えた。

救急車を待つ間、明かりのついた室内での血液の赤と手にこびり付いた血なまぐさい臭いに僕は気分が悪くなった。

武内は応急処置を終え、黙ったまま俯いて椅子に座っていた。

次第にこの場にいられないような気持ちになり、家の人を探す事にした。しかし、これだけの騒ぎを起こしているのに何の反応も無い事から、やはり家には誰も居なかった。

このまま独りにしておけるわけもなく、なんとか帰りたい気持ちを抑えて救急車の到着を待ち、しかたなく、救急車へ僕が付き添いで乗った。

病院へ搬送される間、武内は黙ったまま天井をぼんやり見つめ、
されるがままに運ばれた。

僕もそれをただ見つめる事しかできなかった。

第10話 「他人（ひと）のため自分のため」

武内は幸い発見が早く、傷も数は多かったが浅いということ、命に別状はなかった。

それどころか今、目の前にいる。

「ごめん」

病室で武内はベッドで寝たまま僕に謝った。

恥ずかしいのか布団を鼻の上ぐらいまで上げて顔を隠し、大きな瞳だけが僕からみえた。

「別にオレに謝ってもらってもしょうがない。そういうことはお前の両親に言っただな」

僕の言葉に武内は視線をそらし、ため息混じりに返答した。

「うちの親、今海外にいるから」

「そ、そうなんだ」

「うん……」

そう言うつと武内はそのまま寝返りを打つように僕とは反対方向に向きを変えた。

「……はあ」

なんだか妙な沈黙が流れ、それは確実に僕へプレッシャーを与える。

僕は結局何も知らなかったのだ。

携帯の電話番号だって、家族の事情だって……なによりリストカットした手首の傷も。

『仲良くなった』なんて思い上がりもいいところだ。

でも、でも、普段制服は長袖だし、手を繋ぐこともないし気付くわけがないじゃないか！

……と何度も自分で無駄な言い訳を繰り返した。

「じ、じゃあ、オレ帰るな」

次第に武内との沈黙に耐えられなくなり、僕は帰ろうとした。

そして僕が背を向けると同時に武内の声が聞こえた。

「ちよつと期待してたの」

再びベッドへと振り向いたけど、武内はまだ反対方向を向いていた。僕は手持ち無沙汰に頭をかきながら理由を聞く。

「何を？」

僕には武内が何を言おうとしていたのかよく分からない。そして武内は少し間をおいてから答えてくれた。

「屋上で飛び降りた日。私、土屋君に『屋上で飛び降ります』って手紙を出してて、でも土屋君来てくれなくて……」

「代わりにオレが来たと」

「うん」

やっぱりあの飛び降りには土屋のためだったのか。僕は『もしかしたら僕のせいで自殺？』などと考えていたことが恥ずかしくなった。

「悪かったな、期待はずれで」

「そうじゃないよ。ちよつと嬉しかった」

「んなこと言っても——」

「独りで死ぬの嫌だったから」

ようやく飛び降りる瞬間の笑顔の訳が分かった気がした。踏ん切りのついた笑顔だったのか。

本気で死ぬつもりだったのに僕がそれを止めてしまった。とんだお節介だったのかな？　そう思うと僕はなんとなく武内をいじめた気持ちになった。すこしは言ってやらなきゃいけないよな。

「でも、そのおかげでオレはとんだ目にあっただんだぞ」

「だから、ごめん……」

「ああ……」

また嫌な沈黙が訪れそう。慌てて僕はその沈黙を打ち消すように一つ咳払いをした。

「よし、じゃあ改めて明日、土屋に正義(?)の鉄槌を下すか!」

努めて明るく言った。そのほうが楽でいい。

すると武内は力ない声で返答した。

「いいよ。もう十分だから」

「あつ、そう……」

これ以上何も言えなかった。すぐもどかしい。

くそつ、魔法でもこういう雰囲気を良くすることができないよな。いくら不思議な力を持ってたってこれじゃあ意味が無い。

「ねえ、広野君。お願いがあるの」

「何？」

するとまた武内は黙り込んでしまった。「またかよ」という気持ちになり、武内に何か言ってやろうと思ったが、すぐにその気持ちを打ち消した。

それは僕に背を向けている武内の肩が少し震えているような気がしたからだ。僕はもうちょっと我慢する事にした。

すると武内も気持ちの整理がついたのか、相変わらず背を向けたままだけ口を開いた。

「私が寝付くまででいいから……ここにいてくれないかな」

僕は一瞬変な気持ちにならなくも無かったが、やはり自殺を図った直後の人間を独りにさせるわけにはいかない、そう自分に言い聞かせ「……分かった」と返事をする。

すると武内はむこうを向いたまま、僕へと布団から手を覗かせた。「手をつないで」ってことなのか？ にしても傷は大丈夫なのか？ と心配したが、とりあえず手を握る事にした。

触れた瞬間、柔らかく、ほんのり汗ばんだ手の感覚が僕に伝わる。「痛っ」

「ごめん、痛かったか？」

「うっん、大丈夫」

そう言つと武内は自分が楽な体勢になるように体をこっちへ向けた。すると、僕から見た武内の瞳は潤んでいた。僕がそれを凝視す

ると武内は恥ずかしくなったのか目をこする。

「だって、広野君が手を強く握るから……」

さらに武内の赤く腫れた目元から幾筋かの涙がこぼれる。僕は一瞬茶化そうと思ったがやめることにした。それは武内が凄く嬉しそうな顔をしていたからだ。

数時間後、小さな寝息を立ててベッドで寝ている武内を見て僕はあることを考えていた。

もし、この自殺で武内が手遅れだったら僕はどうする？

今のままでは父のように他人のために命を捨ててまで救うことは絶対にできない。おそらく何もできずにただ死ぬのを見届けるしかないだろうな。

本当の死を見たとき僕はどうするのだろう。

やっぱり他人と親しくするのはよくないと思う。これからも境界をかたくなに守っていくしかない。きっとそうだ。

そしてこんな面倒なことはもうこりごりだ。

窓からわずかに光が漏れるようになり、僕はそっと武内の手を離し、病室を出た。

病院を出るとまだ薄暗い外の風は冷たく吹きつけ、さらに僕の心を寒くさせた。

第11話 「私の王子様」

私は白馬の王子様を信じてる。

そりゃあ、”まんま”王子様がないことはずいぶん前から知ってる。

でも、私には王子様がいる。

あの人は他の男とは違う。絶対。

いつもの変わらない高校生活の昼休みだった。

すべてが私の計画通り進んでいたはずなのに……

それなのに友人のくだらない一言から私の計画は狂いだした。

「ねえ、亜由美。聞いた？ またあの子やったらしいよ」

夕子はなんだか嬉しそうに話している。

小柄でポニーテールが似合ういい子なんだけど、この手の話題に

彼女は目がなく、時々ウンザリすることがある。

私は心の中でため息をつきながら、適当に合わせてやる。

「誰が？ 何を？」

「2組の武内亜也が、例のごとく男のためにリスカしたんだって！」

「ふーん。別に今日に始まったことじゃないし。私興味ないな」

くだらない世間話なんて別に聞きたくなかった。

私はそろそろ決行しようとしていた計画があり、そのことで頭が一杯だった。

彼女は少しつまらなそうな顔をした。

「そう言わずにさあー、続きも聞いてよ、ねっ、ねっ」

こうなると夕子は止められない。ホントに楽しそうにポニーテールが揺れてるなあ。私は観念して聞くことにした。

「はいはい。で、今度の相手は誰？」

「えーつとねえ……」

「早く言って」

するとは夕子はもったいぶって間をおいた後答えた。

「今度の相手は同じクラスの広野貴明らしいよ」

「ふーん……って、ええっ!？」

「どうしたの？」

「今、広野貴明って言わなかった？」

「言ったよ」

いや、ありえないし!!

それは私にとって青天の霹靂。

私は急に余裕が無くなり、一瞬平衡感覚を失ったようにクラクラした。

「ほ、本当なのそれ!？」

「うん。だって病院に救急車で広野君と武内亜也と一緒に入っていくところを見た人がいるんだって」

そんな場面目撃したのは誰だよ!

私は夕子の両肩を掴むと前後に揺らしながら詰問する。

「それは誰? だれ? ダレ?」

「ちよ、ちよつと、亜由美、落ち着いて」

「答えなさいっ!」

「わ、わ、わかったから離して! に、2組の門脇君だよ!」

門脇だつて? あの馬鹿でうだつのあがない、あの門脇!?

私は冷静に判断しようと頭の中で整理し、必死にこの事実の粗をさがす。

「でも、たまたま広野君が武内亜也のリスカ現場に居合わせていたのかも」

「ないない。だって最近あの2人放課後よく一緒にいるって話だよ」

「はあ!？」

私の気持ちをよそに夕子は楽しそうに即答した。わずかな望みをあつさりと断ち切ったのだ。

「夕子」

「なに、亜由……え？」

私は夕子を睨みつけながら彼女の頬を軽く叩く。

彼女の頬からベチベチという音を聞きながら私は質問した。

「誰がそれを見たって？」

「だ、だから門脇君だって……なんか、亜由美怖いよ」

「それってホントなのかどうだか。門脇っていい加減なヤツだし」

「亜由美、なんだか目つき悪い……」

そんな事実、絶対信じない。

だって私の王子様は広野貴明なんだから。

ある事があって、私は彼にふさわしい女になろうと努力をしてきた。

髪の毛の長い人が好みだって聞いたからロングにしたし、またある時は頭のいい女の子が好きだって聞いたから、勉強をがんばって学年トップ。

見た目も大事だと思って雑誌で研究し、おしゃれにも気を使った。それ以外にも私は彼に好かれようと自分にできるあらゆる努力を惜しまない。

その結果、私に声をかけてくる男はいくらでもいるぐらい（実際にいるし）魅力的な女になったと思う。それだけじゃなくて、彼と付き合った時に困らないように男と付き合う練習もした。（もちろん大事な部分はとってあるけど）

「ところでさあ——君とはどうなの？」

「なんでよりによによって……」

あのどんな男でも付いて行くような軽い女、武内亜也と彼が付き

合ってるの？

きつと広野君は武内亜也に騙されたに違いない。
そこまで考えて慌てて否定する。

うつん、そんなはずない。広野君がそんな簡単に騙されるわけないよ。

——って私は何を信じたら良いの？

「ちよつと、亜由美？」

「ああ、ウソ、ウソ。はいはい、捏造、捏造」

自分でもよくわからなくなった。

分らないなら、とりあえずは現実逃避しよう。うつん。

「亜由美、私の話、聞いてる？」

「え？ 何？」

「今何も聞いてなかったでしょ」

「あはは……」

やばっ、夕子の話全然聞いてなかった。

今の私には彼女の与太話を聞いている余裕はない。

でも、自分の動揺を知られるのは嫌なのでとりあえず謝る事にした。

「ごめんごめん、何だっけ？」

「だからあ、土屋君とはどうなのよ？」

土屋？ 誰だっけ？ うーん……あつ。

そういえば土屋って、私が一週間前に別れた『練習男』のことだ。
「別れた」

それを聞いた夕子は一瞬嬉しそうな顔をしたが、すぐにまずいと思ったのか、残念そうな表情へと変化した。

「残念」。2人はいい感じだと思ってたのに」

っていうか絶対思っていないだろ。このゴシップ好きが。

いやいや、はっきり言ってそんな事はどうでもいい。

私がこれだけ動揺しているのには理由がある。

一つは広野君が他の女と付き合ってるかもしれない事実。

でもこれは私が告白すれば済む問題。だって、彼は絶対私を選んでくれるはずだから。

そしてもう一つの理由が告白時期に関係していた。

実は練習男、土屋と別れた私は準備期間を経て2、3日中には広野君に告白するつもりだったのだ。タイミングが悪すぎる。私はこういうことがキツチリ進まないと気になるタイプなのだ。

「じゃあ、今日は私が亜由美を慰めてあげるね」

「夕子。何を勘違いしているのかしらないけど、振ったの私だからええっ！！」

驚く夕子を横目に私はある結論に達していた。

「亜由美、それってどういう事？ 私に詳しく教え——」

「ごめん、夕子。私、用事おもいだしたから」

私は勢い良く椅子から立ち上がり、教室を飛び出す。

行く先はもちろん門脇がいるクラス。

彼が武内亜也と付き合ってるはずがない。

そう、真相を確かめなくては！

第12話 「王子様へ告白」

2組まで来ると近くの人に頼んで、さっきの話の情報源を呼び出す。

情報源は軽薄な雰囲気を漂わせて、へらへらとやって来た。

「これはこれは5組の超優等生、坂本亜由美様じゃないですか。どうしたのですか？ ま、まさか俺に会いたくなったとか？」

「うるさい、黙れ、バカ。そんなことよりも門脇、広野君のウワサって本当なの？」

「っちえ、ノリ悪いなあ。それに人に黙れって言っておいて質問するなよあ」

門脇は以前、私に声をかけてきて以来、なんとなく気が合うし、広野貴明と同じクラスという理由でとりあえず友達としてよく話をしている。

あまり評判の良くないヤツだけど、話してみるとそんなに悪いやつでもない。憎まれ口だつて挨拶の一つに過ぎないし。

門脇は男にしては割と長い髪の襟足を指でもてあそびながら私の質問に答えた。

「広野？ ああ本当、本当。アイツに昨日電話して武内の話をしたらさあ、ムキになっちゃってさあ、なんか笑えたんですけど」

「ちっ！」

私は無性に腹が立ってきて門脇のスネを蹴る。

「いつてーなっ！ テメエ、犯すぞ！」

「人を小馬鹿にした罰よ。前みたいに上からタライが落っこちてこないだけでもありがたいと思いなさいよ」

「そうなんだよ！ 今考えても訳わかんねえ、だいたいなんであんな所にタライが……」

私は門脇の話を無視して教室内を見渡し、広野貴明がいることを確認した。

彼を見るだけで少し緊張したけど、意を決して門脇へ話しかける。

「門脇。アンタに頼みごとがあるんだけど」

「頼み？ 何だよ一体？」

「放課後、広野君を屋上に連れてきてほしいんだけど」

私の言葉に門脇はおどろいた顔をした。

けどその後すぐにニヤニヤしながら言った。

「告るのか？」

「あんたには関係ない」

するとますます門脇はニヤついた。

「なんだよオレとお前の仲じゃねえか。教えてくれてもいいだろ」

「はあ？ ふざけんな、この出歯亀」

駄目だ。コイツに何言ってもからかわれるに違いない。

もう、こんな下衆な男に分かつてもらおうとも思わない。

しょうがないので最後の手段だ。私は門脇を脅すことにした。

「もういい、アンタには頼まない」

そう言って立ち去ろうとするフリをして、思い出したように言う。

「あつ、そういえばアンタ、以前に武内亜也を犯そうとしたらしいじゃない。言葉だけじゃなくてまさか本当にやるとはねえ」

すると門脇の顔はみるみる青ざめた。

これも夕子から聞いた噂話ではあるが、コイツの様子から見てどうやら本当らしい。

「まっ、待てよ！ わかったよ、面白そうだし。放課後、屋上に広野を連れてくればいいんだな」

「『面白そう』は余計だけど。おねがい」

と言いながら広野君をチラリと覗く。

ああ、やっぱり私を見てるわけ無いか。

その日の授業は上の空だった。

何せ今回が告白の本番だから。

門脇に見透かされたのは癪だけど、もうつかうかしてられない。

。努力は報われる。私はいままでの練習を思い出してイメージトレーニングを繰り返す。

今、私は「早くしなきゃ先を越される」って気持ちだけが先行している感じなのかな？

でも、もし武内亜矢とかいう女に広野君を盗られたら、2年間想い続けた私の感情はどうなってしまうの？

っていつか先を越されることはなにより嫌だった。広野君の初めての女は私なんだから。

「初めての女は」だって。……は、恥ずかしい。私、本当に今日告白するんだ。

なんだか興奮やら腹立つやらで時間はあつという間に過ぎていった。

気づいたら放課後になり、私は屋上で待っていた。

うーん、なんだかさっきからドキドキする。これって緊張してるって事だよ。坂本亜由美ともあるう者がなにやってるんだか。

あんまり緊張したんで、「人」っていう字を手のひらに書いて飲み込もうとしたが止めた。そんなものに頼ってどうする。私は私なんだから。

すると屋上のドアノブが回る音がした。その瞬間ドクンと心臓が高鳴った気がした。

ドアノブが回りきると扉が開いて二人の人影が見えてくる。

私は直視できずに俯き加減で、屋上にやってきた門脇と広野貴明をうかがった。

「おい、坂本。つれてきたぜ」

門脇はなぜか得意そうな顔をしていた。

反対に広野君の顔は心なしか少し疲れている様に見える。

私はなるべく広野君を見ないよう、門脇に話しかけた。

「ありがとう。あなたはもう帰って」

「ええーっ、これからがお楽し——」

「早く」

「っちえ……わかったよ」

あきらかに不満そうな顔で門脇は屋上からいなくなった。

ドアが閉まる音がすると、急に静かになったような気がする。

目の前には本当に広野君がいるんだな。

何度も思い描いてきた場面だけど……ああ、駄目だ、緊張してき

た。何だか息苦しいし、手に汗をかいてきた。足震えてないよね？

やっぱり「人」って書いておけばよかった。

そうやって私が色々と動揺している間に、なんと広野君から話しかけてくれた。

「何の用？ 悪いけど僕、急いでいるんだ」

「えっ！？」

け、結構、冷たい感じの言葉だな。

少し予想していた言葉とは違うけど、想定内、想定内。

私は息を整えると広野君をに近づいた。

じつと彼を見つめる。

いざ告白つて時に顔を見られるよう何度も彼を思い出し練習した動作。感情が高ぶっているせいか、自分の瞳が潤んでいるのがよくわかる。よし、いい傾向だ。可愛く見えるはず。

私は勇気を出して話しかけることにした。

「私、坂本亜由美といいます」

「坂本さん？」

広野君は明らかに私のことを知らないような素振りを見せた。

やっぱり広野君は覚えてなかったのかとがっかりもしたが、大丈夫。まだ描いた通りの展開の範疇を超えていない、と気を取り直した。

そして何度も練習したセリフを言う。

「広野君は私のことをよく知らないかもしれないけど、ずっと前か

ら……」

言葉が詰まって上手く続けることができない。
やっぱり練習通りにはいかない。どんどん私の顔が俯いていく。
あと一歩なのに、たった一言なのに。人に好きって伝えるのは難しい。

もう少し、もう少し……頑張れ。

「広野君が好きです。私と付き合ってください」

言葉を発した瞬間、卒倒しそうぐらい緊張がピークになった。
私は思わず、広野君から視線を外してしまった。

と同時に身体的にも精神的にも少し楽になった。

でもドキドキは止まらない。

だって、返事を聞いていないから。

私は再び視線をゆつくりと広野君へ戻す。彼の反応を見るためだ。
視界に入った広野君の反応はがっかりしたものだった。

一言で言えば無表情。

私の告白に何も感じていないようだった。

嫌な予感がする。

自分でも分かるぐらいに唇が震えてきた。

まさか、そんなはずないよね。

私にとつての長い沈黙が続く。

そして広野君は手を頭にやりながら、私から視線を逸らした。

「ごめん、今はそういうの考えられない」

そんな馬鹿な！ 嘘でしょ……

イメージの中ではOK以外の答えなんてなかった。

だって、広野君言っただじやない。

私を『魔法』で守ってくれるって！

第13話 「2年前 part2」

これは2年前の話。

私には見えていた。その山の頂上がどんなものか。

その山は私。これから進むべき道。どんなふうになるか。

だから私は諦めていた。

同じ年齢の子達が恋や友達・勉強に熱中する中、冷めた目で見た。

あの子達は何をそんなに必死になって頑張っているのだろう。

たいして変わりやしない。もう、アンタの人生決まってるのよ

どれだけががんばっても普通の人間には限界があつて、所詮、世の中の流れには逆らえない。先が見えてる。

そう信じていた。

だったら予定通り生きているほうが楽じゃん。

私はそんなことを考えている女の子だった。

中二の秋、下校途中。

いつもの時間、いつもの道。毎日同じことの繰り返し。安心できるこのルートなのに私はなぜか今日に限って嫌になった。

それは学校での会話を思い出したからだ。

「そんなに一生懸命してなんの役に立つの？ プロにでもなるつもり」

こんなことを言い出したのも、今日部活をサボって一緒に帰ろうと約束していた友達が、やっぱりバレー部の練習へ行くと言い出したからだ。

「別にそういうわけじゃないけど……」

どうせそんな答えが返ってくると思ってた。

だから私はそれを鼻で笑ってやろうとリアクションも決めていた

のだ。

「ふうん、だったら頑張っても無駄じゃん。カッコ悪い」

私はすごく勝ち誇った気持ちでいたのだけど、友達を哀れむような目つきでこっちを見ていた。

「なに？ 凶星だったから何もいえないんでしょう？」

「はあ……きつい練習を耐えた後の帰り道での達成感とか、所詮アンタには分からないよ。同じ道を同じように帰る帰宅部の亜由美にはね」

「——っ!!」

そこで悔しいことに私はなんら言い返すことができなかったのだ。ああ、滅茶苦茶ム力つく。

そこで、いつもの帰り道を外れ、たまには別の道で帰ることに決めた。

周りの景色も木々の葉が徐々にその色を変える時期。気持ちの良い風を感じながら、ゆれる木々からひろひらと舞い落ちる枯葉。もう、秋なんだね。こんな景色も学校の近くにあったんだ。——とか、学校が暗くなるまで練習して帰るアンタ達には分からないでしょ？ 周りの景色がこんなにも時間によって違うつてことを。

帰宅部にだつてそれなりの楽しさがあるんだよ！

なんて思いながら私は勝ち誇ったように浮かれていた。

でもすぐに高揚感は薄れ、私何やってんだと毒づく。こんなに必死になって街の変化を探して、バカみたい。

するとなんだか気持ちが落ち込んで、いつの間にか私は下を向いてとぼとぼ歩いていた。

だから気付くこともなかった。正面から歩いてくる男に。

まず、突然何かが私にぶつかってきた。

初めは何がなんだか分からず、しりもちをつく。呆然とする私に光るものが目に入った。

それは、果物ナイフ——を持った男。

なんで普通の路上にナイフを持った男が？

その直後、顔が熱くなり、何かが目に入って、一瞬目が見えなくなった。私は手で目に入ったものを拭う。

ぬるつとした感触とともに手についたものは、おびただしい血液。

「いやあああつ！！」

私はようやく自分の顔が男のナイフで切りつけられたことを知り、悲鳴をあげた。その直後に襲い掛かる痛みに私は歯を食いしばる。

悲鳴を聞いた男は満足そうな笑みを浮かべて、こちらへ歩み寄る。私は恐怖のあまり動くことも声を出すこともできない。涙と血が混じって落ちる。男はナイフを振り上げた。

「ひっ！！」

私が顔を逸らした瞬間、男のうめき声とナイフが地面に落ちる音が聞こえた。

「……何？」

ゆっくり振り向いて状況を確認めると、さらに男は突然10mほど吹き飛び、そのまま男は気を失ったのか倒れたまま動かない。私は何が何だか分からず、ただ座り込んでいるだけだった。

「もう大丈夫だよ」

その声には血にまみれた瞳の中から懸命に覗いた。するといつのまにか隣に男の子が立っていた。

背格好から見えて私と同じぐらいの歳に見える。男の子は私を安心させるためなかに、優しくそんな笑顔でこっちを見ていた。

「今すぐ助けてあげたいけど、その傷を治す魔法を使っちゃうと僕の身が危なくなるんだ。だから、治癒力を少し活性化する魔法で我慢して」

そつと男の子は私の顔に手を当てた。すると再び顔が熱くなる。

私は怖くなってしまう顔を見てしまった。

「大丈夫、大丈夫だから」

男の子の声で恐怖で一杯だった私の心が次第に落ち着いていく。
なぜか彼の声が私の体にしみこんでいくようだ。まるで魔法みたい
いや、確かに男の子はさっき魔法って言った。じゃあ、これは本
当に……

私は再び男の子へと顔を向けた。傷口に彼の手がふれると何だか
心地よい暖かさが伝わる。暫くして男の子が手を離すと、すでに痛
みは無くなっていった。

私は男の子に次の言葉を言うのが精一杯だった。

「あ、ありがとう……」

すると私の言葉に男の子は慌てだす。

「い、いや、実際助けたのは僕じゃないよ。あつ、父さん」

彼の後ろから父さんと呼ばれた男の人が近づいて来た。長身で眼
差しが優しいという印象の男性。

「やばいな、ヤツを飛ばしすぎた」

「逃げる？」

「そうだな、もうすぐ警察も来るだろうし」

私にはこの会話の意味はよく分からなかった。

しかし、さっき男の子が言った言葉がひとりでに口をついた。

「魔法？」

二人はいつせいに私を見た。

「貴明、お前まさか魔法のこと……」

「あつ！！」

「『あつ！！』じゃないだろ。」

父さんと呼ばれる人は困った顔をして少し考えた後、「まっ、い
いか」と言いつた。男の子は私の耳元で

「このことはナイショでおねがい」

と言に残し、二人は走り去った。

その後、すぐに警察が到着し、通り魔犯は捕まった。と同時に私
は病院へ連れて行かれた。

『一生消えないかもしれない』と言われた顔の傷は、暫くしたら消えた。周りのみんなは奇跡だと喜んだ。

だけど、私は知ってる。

これは奇跡じゃない魔法なんだ。

第14話 「だから今日も頑張れる」

顔の傷が治る少し前の話。

通り魔事件の後、私は人に会うのが怖くなった。いろいろな人が見舞いに来たけど、そのたびに表情が強張り、手が震え、人の目を見るのができなくなる。夜も夢で何度もうなされ、よく眠れない。時間がたつにつれてさらに酷くなり、お医者さんはおるか、家族さえもなかなか近づけなくなっていた。

自分でも何とかしようとは思っているけど、そういう気持ちがさらに私を追い詰め、どうにもならない。それに加え、顔には大きな切り傷が残っていて顔中に包帯を巻いている。そのため病室から出ることも叶わず、こもりつきりになった。

そして入院生活の支えはあの事件のときに助けてくれた彼の存在。あの時の笑顔は忘れない。唯一、信じるに値する人間……彼なら私を守ってくれる。

でも、彼が何処の誰かもわからない。

あの日も私はいつものように病室から見える風景を眺めていた。外を歩く人たちを見れば少し憂鬱になるけど、これが今唯一私と外の世界を繋げているものだった。

その中で病院へ向かって走る一人の少年が目にとまった。人の流れとは明らかにスピードが違うので、いやでも目に入った。

そしてこれが私にとって信じられない幸運になる。病院へ走ってくる男の子は、見覚えのある顔。絶対に忘れない私を助けてくれたあの男の子だった。

窓に駆け寄って、もう一度確認する。やっぱり彼だ。

どうしよう。今病室を出て探せば会えるかもしれない。

一方で院内は人がたくさんいるからきつと途中で動けなくなってしまう……怖い……でも会いたい……ああ、もうどうしていいかわからない。

そんな時——ふつと頭をよぎる魔法のこと。顔に感じた暖かいイメージ。

何ある。きつとある。こんな私に差した光なんだから。探さなきゃ！そして彼を見つけるんだ！！

私は急いで病室を出で、彼を探す。

そのときばかりは、人を怖がっている暇はない。むしろ人を押しのけて進んでいた。

『彼に会えば何かが解決する』そんな気がしていた。

でも探し始めて一時間、病院中を探したけど見つからない。私は気落ちしてしまい、探すのを止めて立ち止まった。そこでようやく私は自分が人だかりのど真ん中にいることに気がつく。

——怖い、人がこんなにいる。

次第に足が震えてて、目眩がする。私はふらつきながら近くにあった待合用の長いすに倒れこむように座り、人の声が聞こえないように耳をふさぐ。

私はこのまま一生、他人を拒絶することを繰り返し、暮らしてゆくのだろうか？ 私は自然に涙が溢れそうになった。惨めな気持ちになりながら、彼を探すことを諦めることにして長イスから立ち上がろうとする。

その時、私の視界の端に見覚えのある横顔が見えた。

私は瞬間的に振り向く——彼だ。

『もう大丈夫だから』そう言ってくれた横顔。助けてくれたあの少年がなんと長いすの反対側に座っていた。

私の手足はは相変わらず震えている。

でもそれは、他の人と接して表れる症状とは明らかに違うものだ

った。体中に響くぐらい心臓の音が聞こえる。顔もなんだか熱い……でも、いやな気持ちじゃない。

極め付けに今、私は立ち上がり彼に近づいて自分から声を掛けようとしていた。勇気を振り、言葉を搜す。

「あ、あの……」

しかし、彼の反応はなかった。それどころか、存在さえ気づいていない。私が顔中包帯だらけだから無視されてるのかな？ 恐る恐る彼をうかがうと、どうもそういう訳ではないようだ。

彼はなんだか落ち込んでいる感じで俯いている。そこへ入り込む隙はなさそうだ。

どうすることもできないのだろうか。だんだん自信がなくなってくる。

すると浮かんでくる弱気な私。

そうだこのまま彼の前を通り過ぎて病室に戻ってしまえば何も無かったことになるじゃない。んで、何も変わらずに退院して学校に復帰して、いつもの道を登校して下校する。人が怖いのも時間が解決してくれるよ。それで良いじゃない。わざわざもう一度恥ずかしい思いをしてまで彼と話さなくちゃいけないの？

だいたいなんでこんなに必死になって考えてるの？

さまざまな想いが駆け巡り、結局、私は彼の前で再び声も掛けられずに立ち尽くした。

しばらくそんな状態が続いて私の気持ちに限界がやってくる。ゆっくりと足を右足を後退させた。

その時、ようやく彼が顔を上げて私に気がついた。

「ん？ 何か用ですか？」

「え、えつと……」

やった、気づいてくれた！

でも……あれ？ どうしたのだろうか。あれ程待ち望んだ瞬間なのに上手く言葉にできない。

ありがとうって言いたいの……頭よもつと働いて、口だって動いてよ。じゃないと一生後悔するじゃない！

……って私今、必死だ。ああ、カッコ悪い。

「あの、用がないんなら——」

「ちょ、ちよつと待って！」

でも、こんな自分も悪くない。

必死じゃなきゃ掴めないものもきつとある！

「あ、あの、私、その、この前は助けていただいて……その……あ、ありがとうございました」

「ん？ 何のことかな？」

「ええ！？」

今の言葉はかなりショックだった。彼にとっては私のことなんて大したこと無い出来事だったのか……

だけど、ここで引き下がるわけには行かない。頑張らなきゃ。それだけの価値はある。だって私にとって彼は唯一の希望だから。

「その……ま、魔法で——」

「ええっ！？」

魔法という言葉を聞くと彼は急いで私の口をふさいだ。

「わわわ、お、お、思い出した！ この前の通り魔事件の子だね。思い出したから、そのことは内緒で……」

彼の柔らかい手が私の唇に触れる。すごく温かい。

——って触れられた！！

「いやあああっ！！」

あの事件以来、医者、看護婦以外には私に触れさせた事はないし、他の人が触れようとすれば、事件のことを思い出して私は悲鳴を上げた。もちろん今回も例外ではない。

そしてこの状況に周りの人たちは動きを止め、私たちを見る。

「え？ ちょ、ちよつと！ 僕、何もいかがわしい事してないよね！？」

彼はふさいだ手を慌てて私の口から離れた。

私も誤解を解くために両手を大袈裟に振りながら弁解する。

「ご、ごめんなさい。急に触れられたもので、つい……」

「その発言は明らかに周りに誤解を招くよ」

「あつ、すいません！ 皆さん、ちょっと驚いただけなので、ご心配なく……」

私の言葉を聞き、周りの人たちは再び元の流れで動きだした。

あつ、でも私、今まで他人との関わりを断っていたのに、さっき周りの人へ言葉を投げかけた。

なんだろう今までとは何かが確実に違う気がする。

これは目の前に彼がいるからだろうか。

気づくと彼は不思議そうにこっちを見ていた。早く、説明しなきゃ。そして私は改めて御礼を言った。

すると彼は少し照れながら答えてくれる。

「別にお礼なんていいよ。そういう為にやったんじゃないし」

彼がイメーシ通り優しい人で私はなんだかほっとした。

少し安心して余裕が出ると、さらに彼と会話をしたくて私は話題を探した。

「あの、今日はお父さんと一緒じゃないんですね」

単純にお父さんにもお礼が言いたかったただけなのだけど、それを聞いた彼は下を向いた。

「うん、チョツとね。父さんの友人が病気になっちゃって、そのお見舞いに……」

私は彼の齒切れの悪さに、なんとなく良くないことを聞いたように感じた。

すると彼は真剣な眼差しをこちらに向ける。私は思わず少し横を向いてしまった。

「こんなこと君に言うのはスジ違いだけど、聞いてくれないか？ 誰かに言わなきゃ、僕、どうにかなりそうで……」

彼が大して知らない私に何か望んでいる。……嬉しい。

そう思うと自然に頷いていた。

「父さんが死ぬかもしれない」

彼は今にも泣きそうだった。なぜ、友人の見舞いに来ている彼のお父さんが死ぬのかはわからない。

でも、少なくともわかることは彼が落ち込んでいることだった。

「あの、事情は良く分からないですが、元気を出してください」

「え、うん……」

なんだか照れくさくて変な感じだ。

人が怖くて、彼にそれを慰めてほしいと思っていた私が、今、その彼を慰めている。いつも病室で泣き言を繰り返していた自分が励ましていた。

他人との接触を拒んでいた私が積極的に彼のことに首を突っ込んでいて『彼のために何かしてあげたい』と素直に思えた。

意味の無いことに一生懸命になるってこういうことなのだろうか。

「ありがとう。こんな見ず知らずのオレなんかの為に」

「いいんです。この前、危ないところを助けていただいたから」
すると、彼の顔は赤くなる。

「あつ、あんな程度ならいつでも魔法で守ってあげるよ」

「ほ、本当ですか？」

それは私が今、一番聞きたい言葉だった。

私を守ってくれる人がいる。魔法に関係なく、それだけでも十分嬉しかった。

さらに彼は私をドキリとさせる言葉を続けてかけてくれる。

「きつと、かわいいんだろうな」

「え？」

「その包帯取ったら」

この時ばかりは包帯があることに感謝した。

自分でも分かるぐらい顔が真っ赤だったから。

「僕、もう行かなきゃ」

彼は立ち上がった。

私は何か言わなければいけない焦燥感に駆られた。
考え抜いて出した答えはたいしたことは無いものだ。

「あつ、あの名前は？」

「えっ？ 僕は三田貴明だよ。それじゃあ」

と言いつつ彼は走り去った。

私は自分の名前を言い忘れていた事に後で気がついた。ホントに
うかつだった。

そして、この日を境に私は徐々に身体的にも精神的にも回復した。
なにより諦めの気持ちが無くなったのが一番の収穫かもしれない。
彼のいつでも守ってやるという言葉に今日も頑張れる。

第15話 「さよなら王子様」

そして現在。ここは屋上。

私は広野君が言った事を信じられず、もう一度告白した。

「広野君が好きです。私と付き合ってください」

大丈夫きつと上手くい。広野貴明はきつと私の彼になってくれる。

しかし、彼は困ったような顔をした。

「ごめん。本当に今はそういうの考えられないから」

結局、返事は同じ。私は目の前が真っ暗になったような感覚に陥った。暗澹たる気持ちを抱えながら、ふと夕子の言葉が頭をよぎる。

『今度の相手は同じクラスの広野貴明らしいよ』。

まさか、そんな……私は恐る恐る広野君に確かめようとした。

「武内さんが原因なの？」

「……何が？」

『武内さん』で広野貴明の表情が少し変わった事を見逃さない。

「やっぱりそうなんだ……」

軽い失望と同時に私は怒りがこみ上げてきた。

「武内さんと私、どこが違うの？ 見た目？ 頭の良さ？ 性格？
教えて！」

私はいつの間にか声を荒げていた。

だって、すべて彼の好みに合わせてんだよ？ なのに全てに劣る

武内亜也が選ばれるなんてことはないはず。

すると彼はしばらく黙っていたけど、やがて搾り出すような声で
答えた。

「彼女は関係ない」

それが余計に私の心の琴線に触れた。武内亜也は彼にかばって
らっている。

2年前は私をかばってくれたのに。

——絶対に認めない！

そう思った瞬間、私は走り出していた。このまま諦めるのは絶対に絶対に嫌だ！

勢いのまま私は屋上の柵に手をかけ飛び越えた。柵にしがみつきのながらゆっくりと振り返り、広野君と向き合う。

「お、おい。ちょっと待て！」

「いや！！ 武内さんと別れてよ！ そうじゃなきゃあ、私飛び降りる！！」

迷惑だろうとなんだろうと私たちの中に割り込んだ武内亜也が許せない。

私は少しだけ柵の向こうを振り返る。すごく高い。思わず息を吞んでしまった。伊達に3階建ての校舎じゃないわね。ああ、何で私は飛び降りるなんて馬鹿なこと考えてしまったんだろう。って、今頃言っても遅い。もう、この勢いは自制できそうにない。

もしかしてアレのせい？

まさか……

アレのことは気にも留めてなかったのに。

2、3日前に突然家に郵送されてきたアレ。送り主も分からないその荷物は送られてきた当初は無視。なのにどうしてだろう、いつの間にか箱を開けて見てしまった。

でも、今となっては感謝してるよ。だってとっさにアレが提示する選択肢が浮かんできたのだから。

アレの名前は『suicide magic』

アレを見た日から少しずつ私の心の中で芽生えた考え。

私は死を賭けてでも、彼をものにする。

それに飛び降りようとはしているが、案外楽観的だった。仮にコ

コで落ちたとしても彼の魔法がある。いざとなれば私を助けてくれるのだ、あの時のように。

だって彼は白馬の王子様だから。

恐怖心を押さえつけると、改めて広野君と向き合う。

でも、彼は黙ったまま動かない。

ねえ、何もしてくれないの？ 私が心配じゃないの？

どうしたら彼は私に振り向いてくれるの？

——そうだ。まだ私と彼を繋ぐものがあつた。私は最後の望みをかけて広野君へ話しかけた。

「私はアナタのこと何でも知ってる」

「は？ 何言つて——」

「アナタが魔法を使えるって事もね」

この言葉は確実に彼に影響を与えようと思った。もしかしたら私のことも思い出してくれるかもしれない。そんな淡い期待も抱いた。

しかし、彼の表情に変化はなかった。

「魔法？ 何のことかさっぱり分からないけど」

彼は嘘をついている。考えてみれば当たり前かもしれない。私のことは覚えてないだろうし、素直に認めるほうがどうかしてる。だから私は彼をさらに追い詰めることにした。

「いいわ、そこまで言うなら本当にココから飛び降りるから」

これなら否が応でも魔法を使わなくてはなくなる。私が本当に飛び降りるかどうかの瀬戸際だ。私は広野君に対して無理やり笑ってみせた。

それでも、彼は相変わらず表情ひとつ変えない。

次第に不安が募る。引き止めてくれるだろうか？

暫くしてようやく彼は口を開いた。

「勝手にすれば。ホントに死ぬ気もないのにそんな事を言う人間は思い知ったほうがいい」

さらに彼は一呼吸置いて吐き捨てるように言った。

「本当に死ねば分かるさ、僕が魔法なんて使わないこと」
「っ!!」

そんな言葉は聞きたくなかった。

彼は本当は優しく、勇気があって、私のことを守ってくれる王子様……であって欲しかった。

「本当に飛び降りるんだからっ!!」

私はいつの間にか叫んでいた。すると彼はため息をつく。

「どいつもこいつも勝手に死のうとする。もういい。オレにはもう関係ない」

「……くっ」

自然に私はあの事件以来の涙がこぼれた。

すると、どこからか聞えてくる声。きっと私の心の中の声だ。『手を離せ』って言ってる。その言葉はどこまでも私に優しく響いた。

さようなら王子様――

私は脱力するように柵から手を離れた。

第16話 「ご挨拶といきますか！」

手と柵がどんどん離れていく。私はそれをただ眺めていた。体がどんどん傾いていつてぼんやり思う。ああ、もう手が届かないや。落ちながら彼のほうを見る。目が潤んでよく分からないけど、無表情だった様に見えた。何の感情も向けられないことがこんなに悲しいなんて思わなかった。せめて笑ってくれてたら恨むこともできたのに。

やがて足が屋上から離れ、浮遊感だけが私を包んだ。下にはアスファルトが見える。あそこにぶつかったら死ぬのかな？

でも彼なら……彼なら助けてくれる、ってまだ期待してるんだ私落ちる時間はとても長く感じられ、私は彼の助けをずっと待っていた。

でも地面が近づくにつれて期待は絶望に変わっていった。

カレハオウジサマナンカジャナイノ？

ああ、なんでこんなことしたんだろ。

ああ……

まぶたを閉じると、瞳に溜まっていた涙がこぼれ、一瞬頬を伝ってすぐに離れていった。

——そして私は地面に落ちた。

まず右肩に重い衝撃が走り、続いて全身が下に叩き付けられた。ぐんと地面がへこむ様な感覚の後、一気に押し上げられるような反動を感じて私は倒れたまま静止する。

私死んだのかなあ……ってなんでこんなに冷静に解説してるの？あれ？

「おい！大丈夫か！」

私を呼びかける声で我に返る。確か私は死んだはず。私は目を瞑ったまま自分の頬を触ってみる。あれ？ 生きてる。

そして目を開けると目の前には門脇が私を覗き込むように見ていた。

「私……」

何がなんだか分からない私に門脇が頭を掻きながら答える。

「あのさあ、悪いとは思ってたんだけどよお、お前と広野のやり取りを覗いててさ。あつ、でも心配すんなよ、会話はよく聞こえなかったから」

やっぱり聞いてたのかこの出歯亀野郎。そんなことより今の状況を説明してよ。

あれ？ なんだかこいつの声が聞えたら元気になってきた。

「そしたらお前が屋上から飛び降りただろ！ 急いで下まで降りてきたら、お前が高跳び用のマットの上に落ちたし！ またビックリしてさあ！」

よく見ると私は陸上の棒高跳び用のマットの上にいた。

あの上下に揺れる感じはマットの感触だったのか。

「お前ココまで計算して落ちたのか？ 凄えな！」

「私が計算？」

門脇はやたら興奮している。私にはまだよく状況が飲み込めない。私はよく分からなかったが、これだけは言える。『計算』などしていない。

「しかしお前が飛び降りるほど広野のことが好きだなんて……しっかし、アイツひどいな。お前が飛び降りたっていうのにどこかへ行っちゃった」

「あつ……」

私には彼が行ってしまった訳が分かる。

結局、彼の魔法に助けてもらったのだ。

「明日、オレが広野の奴をシメてやる！！」

門脇は何度もマットを殴った。

「やめて、私が悪いんだから」

「でもよお……」

アレを真に受けた私が悪い。自殺なんかしても彼が振り返ってくれるわけがない。それではあの武内亜也と一緒にだ。

一気に意識がハッキリとしてやる気がみなぎってくる。どうしたことだろう？ さっきまではあんなにネガティブだったのに。

私は自分の手を開いたり閉じたりした。まだ、動ける。

『これは私の問題だから』

そう思うと居ても立ってもいられなくなった。やっぱり私はこうでなくちゃっ。

次にやることはひとつだ。

「門脇、教えてくれる？ 武内亜也の入院してる病院ってどこ？」

立ち上がる私を見て、門脇は心配に見つめている。

「急にどうしたんだよ、体は大丈夫なのか？」

「お氣遣いありがとう。でも私、それよりしなきゃいけない事があるから」

広野君を諦めるなんて選択肢は私にはない。彼なら必ず、先の見えてる人生をきつと変えてくれる。やっぱり、広野貴明は私の王子様なんだから……告白するのはまだ早すぎた、ただそれだけ。

私のことが分かってももらえればきつと付き合えるはず。

マットに寝転んでいたので制服が少し乱れてる。私は軽く身だしなみを整えた。

急激な私の変化に門脇は戸惑っていた。

「どこいくんだよ、しなきゃいけない事って何だよ」

「病院。宣戦布告！！」

まず目の前の障害を取り除かないと。

私は駆け足で学校を出て、目指す病院へ急ぐ。善は急げ、宣告も急げ！

では、ご挨拶といたしますか！

第17話 「思い出来訪者」

三月に入った平日の午後、私は高校生なのに学校へも行かず、病院にいる。

はきはきとした声が私の耳に入ってくる。

「それじゃあ武内さん、夕食の時間は……って、言わなくても分かるか」

「はあ……」

何度目かの入院なので説明してくれる必要は無いけれど、そうやって言われるとちよつと寂しい。看護師ならもう少し言動に気を使つて欲しいな。そう考えると、ベッドに付けられている『武内亜也』という名札はもしかしたら使い回しかもしれない。

「あつ、それとご両親から電話あつて、心配してたよ」

「はあ……」

私の携帯には電話する必要も無かつたわけだ。

必要事項を告げた看護師さんは足早に病室を出て行った。そりやそうだ。私よりもつと大切な患者はいるだろうから。

『一応、検査のため3日間の入院』ということになり、現在病室で寝ている。

形式上のカウンセリングも終わり、私は時間をもてあましていた。病院側もなれたもので私を放置しても大丈夫と思っているらしい。

さらに病室は個室で、他の患者さんとのトラブルもない。実際、両親だつてまたかと思っているに違いない。

昔はドイツから飛んで帰ってきてくれたり、一緒に向こうで住もうと真剣に検討してくれたものだ。（私は土屋君と離れるのが嫌だったから断つたけど）

……って、いつもならここで落ち込んだ気持ちを引きずって涙ぐんだりするところなんだけど、今回はなぜか違う。

アイツのせいなのかな？ …… まさかね。

病室にいただけというのは本当に暇でテレビを見たり本を見たりするぐらいしか時間をつぶせない。

でも本はあまり読まない、テレビも少し前まで私は毎日欠かさず見ていたのだけれど、最近になってそれも止めた。必要がなくなっただけだ。

昔はただ話題作りのため、義務のように内容を覚えようと眉間にしわを寄せながら見ていた気がする。しかし、いざテレビを見なくても良くなったら、何も見なくなってしまう。

もうそんな話をする人もいないし、唯一話をしてくれる人はテレビをあまり見てないらしい。

その人とは広野貴明といって魔法を使えるクラスメイト。彼には本当に世話になりっぱなしだ。

「あゝあ、私なんで生きてるんだろ」

広野君が聞いたなら怒りそうな独り言を呟く。別に良いや。本当に死のうとしたんだし。

現在、白い天井をみながら私はそんなことをぼんやりと考える。

先日、私は本当に死ぬつもりで手首を切った。

今までのリスは、別れる男への見せしめだったり、自分自身のストレス解消のような感じだったから本気で死ぬつもりはあまり無かった気がする。だから今回は、確実に死ぬために誰もいない自分の家でリスをした。

そんな時になぜだか知らないけど広野くんが家に来て私を病院へ運んでくれた。私は彼に対して拒絶していただか、感謝していいんだか、分からなかった。

ただ、病院に運ばれる途中、漠然と考えていたことがある。

何でリスで死ぬと思ったのだろう。もつとすぐに死ぬる確実な方法なんていくらでもあったのに。

しかし、その答えも今となつては良く分かる。私はまだ信じていたんだ。これだけやってるんだから土屋君はきつと戻ってきてくれるなんて。

その証拠に私は救急車で病院に運ばれる間も、処置を受けている間も取りとめもないことを考えていのだ。

『土屋君は見舞いに来てくれるかなあ』なんて。

最低だな私。広野君が付き添ってくれていた間、土屋君のことを考えながら過ごしていたのだから。

——と完全に自分の世界に入っていた私。

だから、突然の来訪者に気づくことは無かった。

「なんなの、もうっ!!」

突然、ものすごい音を立てて病室のドアが開いた。普通、病室のドアって静かに開くものなんだけど、勢いが違った。

私は我に返るとビックリしてドアへと振り向く。と同時に怒鳴り声が私の耳へ届いた。

「ちよつと、私が何回ノックしたと思ってるの!」

「す、すいません……」

反射的に謝ってしまう。

一体誰なのと確認すると、ドアの前には私と同じ学校の制服を着た女の子が立っていた。

女の子はすぐかかと病室に入ってくるとベッドにいる私の前まで歩み寄ってくる。

さらには私を指差して、とんでもないことをふっかけてきた。

「あーもう、信じられない。アンタ絶対B型だ。決定、アンタ自分勝手なB型」

「それはあまりにもB型の人に失礼じゃあ……私、A型だし」

「じゃあ、アンタは自分勝手なA型に決定!」

「ええっ!?!」

それって『自分勝手な』を付けたかっただけじゃあ……

っていつか、何事？ アナタは誰？

私のキョトンとした表情に構わず、彼女は質問した。

「アナタ、武内亜也なんでしょ？」

どうやら相手は私のことを知っているらしい。

少し落ち着いて観察をする。もしかしたら思い出すかもしれない。パツと見、背が高いし、スタイルも良い。モデルみたい。ツヤのある長い黒髪もお手入れが大変そう。制服着てなかったら女の子じゃなくて女性だね。……って感心してる場合じゃないや。

少しキツめの目に高い鼻もバランスが良く、キレイな顔立ちの女子だった。

でも、私にはまったく見覚えが無かった。

「何ジロジロ見てるの、さつさと質問に答えて」

「……はあ。私が武内ですけど」

するとその女子は肩に掛かった艶のある綺麗な黒髪を手で払うと私の全身を見渡す。どこかそんな仕草も絵になっているように思えた。にしてもさつきは私のことジロジロ見るなって言ったのに……

「ふーん。自殺騒ぎを起こしたわりには元気そうじゃないの、残念」

「はあ……」

いきなり知らない人に『残念』なんて言われた。事情が良く分からないし、失礼じゃない？

この押され気味の状況に私は恐る恐る尋ねる。

「あ、あの、何かご用でしたか？」

「そうね、用といえは用かも。アナタ！」

女の子は私を指差しながら睨むように見てきた。

「広野貴明とはどういう関係なの？」

「……え？」

不意に広野くんの名前をだされた私は戸惑った。

なぜに広野君？ っていうかい加減アナタ誰なの？

私の疑問に構わず、女の子はさらに質問を被せた。

「恋人？ 友達？ ただの他人？」

ドンドン迫ってくる質問に私はあたふたした。うーんと……なんて答えればよいのやら。広野くんとの仲なんてあまり考えたことはなかったし。

そこで私が出した結論は当たり障りの無いものだった。

「ク、クラスメートです」

とりあえずその場しのぎのため答える。

すると彼女は私を見下すようにして（ベッドから見てるからそう見えるのかもしれないけど）口の端を吊り上げながら皮肉たつぷりな口調でこたえる。

「ふーん。どうとでもとれる言い回し。そうやって物事をあやふやにするのが好きなわけ？」

なんで初めて会った人にここまで言われなきゃいけないんだろう。ちよつと、いや、かなり腹が立つ。

そんな私の気持ちに構わず、女の子は話し続けた。

「まあいいけど。アナタがどう思っただろうが、私は広野君の気持ちさえこつちへ向いてくれたらいいんだから」

さつきから広野君、広野君って……あつ、もしかして彼女は広野君のことが気になっているのかな？

でも、だったらなんで私のところへ来るのだろう。ますますなぞだ。私、広野君の彼女でもないのに。

すると彼女はただでさえ近づいているのに、また一步私に近づいた。

「私の名前は坂本亜由美」

「——っ！」

私は坂本亜由美という名前を知っていた。

それは土屋くんが別れるときに”好きになった”といていた人の名前だから。

そんな私に関係なく彼女は喋り続ける。

「アナタにその気がなくても言わせてもらうわ。広野貴明は返してもらおう」

そんな言葉も耳に入らず、私の脳裏には自然に土屋くんとの日々が浮かび上がってきた。

第18話 「あの頃」

私はいつも独りだった。

両親は新聞や雑誌等で世界的な音楽家と呼ばれている。そのおかげで海外での仕事が多く、普段から家にはほとんど不在だった。ぽつりとした家に独り。

だから小さい頃はいつも寂しくて泣いていた記憶だけ。誰もいない、そんな気持ちが離れなかった。

このことが原因なのか、小・中学校と私は人に合わせることに執心した。合わせてさえいればみんなの輪の中にいられる。独りじゃない。

たとえそれが、友達と呼べない間柄でも……

高校一年生の夏間近、セミの鳴き声がうるさくなるこの季節。

あの日の昼休みも私は”友達”の頼みごとを聞き、売店へと急ぐ汗をかいてまわり付く夏服に少し違和感を感じながら、みんなの昼食を買いに行くために渡り廊下を走っていた。

「ええっと、美咲ちゃんはたしか鮭弁、まなみちゃんはおにぎりで中身はツナマヨっと……」

私は相変わらず生活のほとんどをみんなに合わせることに集中していた。そのためには大抵の頼み事は聞いたし、みんなの話題についていけるように情報収集だっただけ。

その成果として自分を”友達”と呼んでくれる人達の輪の中に入ることができた。私はそれで良いと思った。だって誰かと一緒にいるって安心できるし、独りなのだと考え込まなくて済むから。それは今後も変わらないだろうなと思う。

購買部で買い物を終え、両手に抱えた頼まれたモノを確認しながら急いで戻っていた私。

「思ったより人が込んでたし。ああ、早くしないと……」

焦って買った商品を確かめるために下を向きながら走っていた。そのせいで、曲がり角から人が出てきたことに気づくことは無かった。

「うわっ」

「きゃっ！」

上半身への衝撃で私は何の回避も出来ずにその場に倒れてしまった。反射的に私は手をついてしまう。

しばらく何かが起こったかわからずただ尻餅について茫然としていた。ぼんやりとした視界の中で私の前を誰かが動くのが見えた。

「大丈夫？ 武内さん」

よく通る声が耳に入ると同時に私は我に返った。

すると目の前には男の子が私を覗き込んでいた。状況から考えて私にぶつかった男の子だろう。しかも名前を呼んでいた。背が高いせいか私の全身を彼の影が覆う。

でも、私はその男子が誰だか知らないし、何も言えない。

すると少しくせつ毛の短髪に手を当てながら彼は困ったような顔をした。

「あれ？もしかして僕のこと分らない？ 同じクラスの土屋祐介」

「土屋……君？」

彼は私の手をとって立たせてくれる。瞬間的に彼と顔が近くなる。目鼻がハッキリしていて、どこかの彫刻めいた均整の取れた顔立ち。私はその顔に少し見とれてしまった。

「まだ、わからない？」

「えっ！？……ええっと、うん、思い出したよ。同じクラスの土屋君だよな？」

焦った私に「それじゃあ、僕の言った事と同じだよ」と彼は軽く笑った。私も一緒のように思わず笑ってしまう。

気持ちが悪くなったことで、ようやく土屋祐介君のことを思い出

す。

確か土屋くんは”友達”たちの話の中でよく出てくる男子の名前だ。カッコいいとかさわやかだとか悪口はほとんど聞いたことが無い。

「せっかく買ってきたものが台無しになっちゃったね……」
「えっ!？」

私はそこで初めて自分が両手を床についているので、何も抱えていないことに気づく。慌てて周りを見るとさっき買ったパンやらおにぎりやらが散乱していた。

その光景に私はさらに深刻な事態が飲み込めた。全身の血の気が引くのを感じる。とりあえず、パンのほうは大丈夫そうだが弁当や変形したおにぎりはどうにもならなかった。

「どうしよう、私、私……ああ……」
床を四つん這いになって買ってきたものを手に集める。おろおろするばかりで何もできない。次第に手が震え、目の奥が熱くなってきた。

すると土屋君がパンを手にした私の腕を掴む。動きを止め見上げると土屋君は微笑んでいた。

「武内さん、落ち着いて」

その笑顔が本当に綺麗で私は動きを止めてまた見入った。

彼は腕時計で時間を確認すると「うん」と頷いた。

さらに「ちよつと待ってて」と言い残すと走っていく。

何が何だか分からず私はその場に取り残された。かすかに掴まれた腕には掴まれた感触が残っている。彼の華奢な身体からは想像つかないような力強いものだった。

しばらくして冷静になると、私は必死に”友達”たちへの言い訳を考えていた。

『これでまた私は独りになるのかなあ……』

そう考えるだけで今にも泣きそうだった。これが本当の友達だったら謝って許してくれるのかな……でも私、許してもらえる自信ないよ……

「おまたせ！」

不安の絶頂にあつた私の耳にまたあの良く通る声が飛び込んでくる。なぜだか少し安心できる声、土屋くんが戻ってきたのだ。

「武内さん。これ良かった」

戻ってきた土屋君が差し出してくれたものはさつき駄目になったおにぎりと弁当の代わり。

「だ、駄目だよ。もらえないよ」

「ぶつかつた僕が悪いんだ。だから、受け取って」

戸惑う私に彼はまた笑顔でこっちを見ていた。

初めて男の子から親切を受けてどうしていいか分からない。顔が赤くなるのを感じて私は思わず俯いてしまった。

「もらってよ、せっかく買ったんだし、ね？」

「で……でも……」

遠慮がちな私は次に土屋くんが言った言葉に胸が痛む。

「これ持っていけないと仲間はずれにされるだろ？」

「え？」

どうしてそれを！？

土屋君の言葉に私は顔を上げて反応してしまった。すると彼はやっぱり微笑んでいた。

「独りって誰でも嫌だもんな」

「っ……！」

私は感情が高ぶり、瞬間的に手で口を覆ってしまった。そうしないと声を上げそうだったから

まるで心が見透かされているような気がした。それは怖くもあり嬉しくもあった。私は今までの緊張が解け、瞳の暖かさを抑えるこ

とが出来なくなってしまう。

「おっ、おい！　どうしたの？　僕、なんか気に障ることも言っ
た？」

「……なんでもない。ごめん、ごめんね」

泣きながら謝る私に土屋くんは慌てていた。

だって涙がドンドン溢れてくるのでどうにもならないよ……これ
って涙の理由が解ってもらえた喜びなのかな？　よく分からないよ。
これが土屋くんとの出会いだった。

第19話 「掴めるもの」

私は何かを掴もうと、もがいてた。

しかし、そう思えば思うほど指の間と間をすり抜けるように逃げていく。誰かにしがみつきたかった。

助けてもらって以来、土屋くんとよく話すようになった。それは大抵お昼休みの”友達”達の食べ物を買いに行った最中、土屋くんが手伝ってくれている時だけのこと。

今日も両手いっぱい買ったものを抱えて廊下を歩いていると、よく通る声が私の背後から聞こえた。

「武内さん、手伝うよ」

「うん、ありがとう」

私はいくつかの食べ物物を土屋君へ渡すと並んで歩く。そして、おしゃべりしながらの教室までの道はとても楽しかった。

「前から思ってたんだけど、どうして買い物袋に入れないの？」

「えっ、つとそれは……」

私は思わず口籠ってしまふ。

でも、答えは初めから決まっていた。そんなことしたら彼が手伝う口実が無くなるのでしないからだ。

そこまで考えが回らないのかな？ それとも、もうこうやって歩くのが嫌なのかな？

なんて不安になりながら一緒に歩く。

すると土屋君は思いついたように「あっ」と呟き、私へ耳打ちした。彼の息が私の耳にかかって、ドキドキした。

「そうか、武内さんの気遣いか。買い物袋無しで並んで歩いてて、冷やかされても困るしね」

「えっ、う、うん……」

土屋君の意味ありげな言葉に私は恥ずかしくなりつつも、『誤解

されちゃう』のが嫌なのかなと少しがつくりした。

結局、なんだか惜しいなと思いつながら、私は半端な返事をした。

教室までは時間も短い。時間にして5分か10分の事。

でも、土屋くんの話題は豊富で政治、経済、科学技術といった私にとつて難しいものからお笑いやマンガ、小説の話という身近に感じるものまで様々だった。

そしてどの話も馬鹿な私にも分かりやすく、いつも感心していた私といえは賢くもないし、かといって熱中してるものもはなにもないのでせいぜい”友達”たちの会話についていくために見ているドラマの話ぐらいしかできなかった。

「ねえ、土屋くん。昨日のドラマ見た？」

この頃から私は口癖のようにこの台詞を言っていた気がする。土屋君はあくまで台詞でしかないその言葉にも嫌がらずに答えてくれた。

「うん見たよ。最後のほうで主題歌が流れてきたときなんか泣きそうになったよ」

土屋くんは顔もいいし、頭もいい。それに加えてすごく優しい、女子の人気もある。

だから、なんでこんな私のために親切にしてくれているのか理由が分からなかった。もしかして私のこと……なんてくだらない妄想もした。

しばらくして教室が見えてくるにつれて私は名残惜しい気持ちを抑えながら土屋君にお礼を言う。

「ありがとう、もうすぐ教室だから……」

「そうだね。じゃあこれ」

彼から食べ物を受けとりながら顔をうかがうと、やっぱり微笑んでいた。私はその表情を見て気持ちを切り替え、教室に入る。土屋君の笑顔が私に頑張れと言われているような気がした。それは勝手な想像かもしれないけど、自分の気持ちがそれで盛り上がるのである。

れば構わないと思った。

ただ言える事は、土屋くんの気持ちは分からないけど、私の中で確実に彼の存在は大きくなっていることだった。

でも——それは私だけではなかった。

「つーか、亜也。アンタ最近、土屋ちゃんと仲いいんじゃない？」

この言葉は”友達”の中の一人、美咲さんから言われたものだった。彼女はリーダー的存在でいつも”友達”たちを仕切っている。

「……え？」

いつバレたの？ とつさに私は辺りを見渡す。

すると美咲さんの周りに座っている数人の女の子は意味ありげに笑いながら私の反応を楽しんでいるようだった。

美咲さんは肩にかかっていた自分の髪を掴んで気だるそうに毛先を眺めながら話を続けた。

「なんか最近、買ってくるスピードが遅いから変だと思ったけどね」

「えっと、それは……」

彼女の視線が毛先から私へと移るとすぐに鋭いまなざしに変化した。

いつも以上の攻撃的な口ぶりに私は少し怖くなった。

「『えっと、それは……』じゃないでしょ。アンタちよっと調子に乗ってんじゃないの」

「そ、そんなこと——」

弁解しようとする和美咲さんは私の言葉へかぶせるようにハッキリとした口調で言った。

「パシリのクセに偉っそー」

それは、今までハッキリ言われたことがなかった言葉だった。あくまでも”友達”だという建前で接してくれていたはずだ。

来るときが来たな……分かっていたことだが、いざ言われてみるとショックを隠せない。

すると美咲さんの周りにいた人たちが口々に話し出す。

「なに？ アンタのそういう態度が私たちの機嫌を損ねるってわかんないの？」

「なんかハッキリしないし、たまにウザイ時あるよね」

私だってハッキリ言えたらどんなにいいだろうと思う。

でも、その気持ちを言ってしまったら後はどうなるの？ また、

独りになるじゃない。自然にキュツと下唇をかみ締めた私。次に
という言葉は決まっていた。

「……ごめん、気をつけるよ」

「当たり前だつーの。今度から10分以内に戻って来てよね。じゃないと……わかるでしょ？」

「う、うん……」

その瞬間、私の中で何かが陥落した気がした。人として大切なものの、本当の気持ち。

この日以来、私は土屋君を避けるようになった。お昼休みだけじゃなく、話しかけられないように彼の視界に私が入りそうになったら、逃げるようにその場を去った。

独りになるのが怖かったから、“友達”をとった。

だって、土屋君が私を守ってくれるはずないから。なに夢見てんだろ私。

避けるようになって初めは土屋君も何とか私に話しかけようとタイミングを計っていたみたいだけど、今では目もあわせてくれなくなった。最初に避けた時の土屋君が見せた複雑な表情が忘れられない。自分で何度もこれでいいんだと言い聞かせた。

でも、土屋君を避けようとする余計に彼を意識しながら学校生活を送る羽目になった。行き場の無い気持ちだけがどんどん私に蓄積していく。

もう自分でも何が何だか分からなくなった。

そして、今日もお昼休みが来る。私は10分以内で買いに行くという約束を忠実に守るべく廊下を走る。あの時よりさらに夏に近づき汗が私の頬を伝う。両手に食べ物を抱えているので拭うこともできない。こんな格好で走るのも情けないけど、両手をふさいでいるのはどこかまだ彼を引きずっているのだと思う。

やがて土屋君とぶつかったあの曲がり角に差し掛かる。前は良くここから呼び止めてくれたものだが、もうその姿は無い。私は軽いため息をつきながら進んでいった。

するとタイミングを計ったかのように私の前に誰かが立ちふさがった。私は止まる事ができずにそのままぶつかってしまう。

また、食べ物を撒き散らしちゃう。そう思うと瞬時に私は買ったものをかばう様に背を向け衝撃に備えた。

しかし、思った以上の衝撃はこなかった。それは私はぶつかった人に後ろから抱きとめられたからだ。

「やっと、捕まえた」

「えっ？」

聞き覚えのある優しい声。私は俯いたまま動けなかった。

「いつも避けられてばかりだからさ、強硬手段」

今私確かに土屋君の腕の中にいる。段々からだが震えてきた。

「どうしたの？ 驚かせちゃった？」

「……ううん、違う」

私は恐る恐る顔を上げた。

すると信じられないくらい近くに土屋君の顔があった。

頭の中が空っぽになる。頬が熱い。

「ちゃんと話をしようよ」

土屋君の声は私の耳へ染みこんでいく。そして染みこんだ感情が涙と変わり瞳から零れそうになってしまう。

『ずっとこのままがいい』

でも、この感情はどこへも行き場が無い。

「ごめんなさい……」

「どうして謝るの？」

「ごめん、本当にごめんなさい」

今の私にはこれしか言えなかった。

独りになるのは嫌、でも土屋君とは話をしたい。中途半端な私がここにいます。

私が何も言えず震えていると、土屋君は不意に体を自由にしてくれました。

名残惜しさだけが包まれていた背中に残る。

「もう無理強いはいしないから、これだけは教えてよ。なんで僕を避けるの？」

「——ごめんなさい」

私は土屋くんを見ないように走り出した。これ以上顔を見たら泣きそうになるに違いから。

しかし、私が走ったところで男子の足にはかなわない。土屋君は私を追って来た。すぐに肩をつかまれ、土屋君と向き合う。同時に視線がぶつかり、見詰め合ったまま私は動けなくなった。

「どうしたの？ 何があつた？ よかったら話してよ」

「ゴメン、それはできないよ……」

これが現状で私が言える精一杯の言葉だった。

そんなの話せるわけ無いじゃない。独りになりたくなかったから虚構の友達を取ったなんて……

だけど土屋君は私に光を与えてくれる。

「僕じゃあ何もできないかな？」

「……えっ？」

「僕と武内さんは『友達』じゃないの？ 少なくとも僕はそう思ってた」

私の胸の奥からじんわり何かが湧き上がってきた。それ以上は言わないで欲しい。言ったらまた泣いてしまいそうだ。

「武内さんのために何かをしてあげたいんだ」

ずっと待っていた言葉。私になんか誰も言ってくれないだろうと思っていた。なんでこんなに暖かいのだろう。

そしてまた私の瞳からは涙がこぼれてしまった。

私は目を赤く腫らしたまま教室へと戻る。ある決心を胸に彼女達の元へと歩み寄った。

泣き顔でくしゃくしゃの私を見て”友達”たちは笑った。

「なに？ その変な顔。私たちを笑わせたいの？ そんなことより、ちゃんと買ってきた？」

「つい１０分過ぎてんじゃん、遅いんだよ」

”その人達”は私が両腕に抱えた食料を奪っていった。この人達はいつまでもこうやって私から奪っていくことだけを繰り返すのだろう。

——そういうのはもう御免だ。

「あ……」

「ねー、それおいしそうだから交換してよ」

「あの……」

おずおずと話しかける私に”その人達”は無視をした。聞こえなかったかもしれないけど。

大丈夫、きつと大丈夫。私はもう一人じゃないはずだから。

私は生まれて初めてつてぐらいの勇気を振り絞った。

「ねえ、私って一体あなたたちの何なの？」

ついに、私は言ってしまった。

その瞬間、”その人達”は一斉に静まり私を見る。

緊張が私の中を駆け巡った。

「はあ？ 何言ってるの？ 友達じゃん、と・も・だ・ち」
そういつて”その人達”は笑った。

同じ友達という言葉でもここまで違うものなのかと愕然とすると

同時に初めてある感情が芽生えた。

それは怒り。

「……もう嫌なの。あなたたちの言いなりになるのは」
すると笑いは一斉に静まり、私を睨みつける。

「アンタそれマジで言ってるの？」

美咲が脅すような声で言う。私は恐怖で今にも逃げ出したかった。
でも、言わなければ。ハッキリと言わなければ。

「私はこんな”友達”じゃない。”本当の友達”がほしいの……」

一瞬、間があつて”その人達”は再び笑い出す。

「はあ？ 本当の友達？ なにマジになってんの？ 恥ずかしくない？」

「寒いよね、寒い」

「正直、ウザくねえ？」

私はみんなに合わせるためにいつも自分を殺してきた。もともと
『なにもない』私だったからその時はよかった。
でも今は違う。

いつもすり抜けていた手にはハッキリと彼の手が見え始めていた
から。

「私は本気なの！ もうあなたたちとは付き合えない！」

でも、”その人達”は相変わらず笑っていた。

薄笑いを浮かべながら美咲さんが馬鹿にしたように言う。

「あつそ。別にアンタなんかどうでもいいから、勝手にすれば」

言い方はどうであれ、これでハッキリした。もう”この人達”と
は関係ないんだ。私の好きにしていいいんだ。

というより、初めから自由にしておかっただ。

私の中で何かが動き出した瞬間だった。

第20話 「掴んだもの」

「武内さんのために何かしてあげたいんだ」

この一言が私を変えた。”友達”とも縁を切り、私は新たなスタートを切ったといえる。

あの日以来、私の高校生活は土屋君中心に回り始めた。これからは誰にも気兼ねなくいつでも彼に話しかけることができる。今まで生きていた中で一番楽しかった時期だった。

土屋君が言った内容を真に受ければ、ずっと一緒にいてくれるものだと思っていた。でも、彼には彼の人間関係がある。私はその中に入ってまで行動を共にすることができなかった。

私はどうしてもお話がしたくて近くまで行くけど、学校にいる間、土屋君は男友達とお話しをしているので遠巻きに見ているだけしかできない。たまに男友達が気を利かせてくれて話す機会があったけど、なんだか冷やかされているようであまり話が出来るような環境ではなかった。

とはいえ、一人でいる時間も土屋君と次にお話するときの話題を考えたり、彼と目が合ったら軽く手を振ってみたりして過ごしている。特に孤独を感じることは無かった。

結局、二人でお話が出来るのはお昼休みだとか、下校の時間なんかに限定された。お話できる時間は貴重で短く思えた。

お話の内容だつてくだらない。これはある日の会話。

「僕、最近家の人にビデオの撮影頼まれてさ、あれ結構画面の遠近を合わせるの大変だよな」

「家の人って？ 両親？ 兄弟？」

「僕一人っ子だから両親に頼まれたんだよ。両親が仲良くってさ、大抵僕が撮って二人が映るみたいな感じかな」

「へえ……」

普段両親がいない私にとってはうらやましい話だった。仲の良い両親、友達の多さ、屈託の無い笑顔、どれも私が持っていないものだった。

だから余計に惹かれたのかもしれない。

「土屋君、じゃあさ……」

「なに？」

こうやって楽しく話せるようになって土屋君との距離は確実に縮まっていったと思う。

だからこんな冗談も言える。

「よかつたら今度私も撮ってね」

「えっ？ な、何を！？ ええー！？」

すると土屋君は顔を真っ赤にして大慌てしてた。

「あはは、冗談だよ、冗談」

カッコいい外見もさることながら、言動やしぐさも微笑ましかった。

だから私はすごく満足だった。

初めの頃は……

しかし、そんな私にもだんだん「欲」が出てくる。

たしかに土屋君は私を友達として扱ってくれる。だけど私はそれ以上のものが欲しくなった。つまり、恋人という関係に憧れだしたのだ。もっと一緒にいたい。

実際はそう思うけど、なかなか意思表示はできなかった。私は彼との関係では完全に「待ち」の体制になっていた。

その理由としてある噂があげられた。

この頃からクラス内で私と土屋くんの関係に関して、良くない噂が流れていた。簡単に言えば、私が土屋君に付きまたって迷惑を掛けている、という類のもの。

私は少し動揺したけど、土屋君は「気にしないよ」と言ってくれ

た。私も周りがどうであれ自分が幸せなのだからいいじゃないと思
い直すことにした。本当に土屋君の言葉は安心ができる。私にとっ
ては魔法の言葉だ。

ただ、この噂で私は必要以上に意識してしまい、自分から行動を
起こすことに億劫になってしまった。

そしてもうすぐで一学期も終わろうかというある日、私はいつも
のように土屋君と一緒に帰るべく校門で待っていた。土屋くんはク
ラス委員ということもあり、学校の用事で遅くなるという話で、私
に「待たなくていい」と言い残していた。

だけど、一日だって一緒にいる時間を無駄にしたくないので私は
待つことにした。そんな自分がこそばゆくもあり、好きになれた。
下校する人がまばらになり、やがて校門で私は一人になった。本
当に待ちどおしい。でも同時にだんだん心細くなっていく。土屋く
んの存在が私の中でどれだけ大きいか思い知らされた。私は俯き、
ため息をつく。

と同時に聞き覚えのある声が聞えた。

「なあ、アレって土屋君の背後霊じゃないの？」

「ホント、つくづくストーカーだね。迷惑だって分からないの？」
これは確かに私に向けられた言葉だった。一瞬にして自分の血の
気が引いていくのを感じた。

顔を上げるとすでに至近距離まで数人が私を囲むようにして近づ
いていた。

よく見るとそれは私の元”友達”達。

瞬間的に身の危険を感じた私はそこから逃げ出そうと走り抜けよ
うとした。でも、彼女たちは私へと一気に集まり、身動きが取れな
いように囲んだ。

「なんで逃げようとしてるの？」

「やましい事でもあるんじゃない？」

私は身を守ろうとカバンを胸に抱くように丸くならうとした。すると誰か私の制服の胸倉を掴んで顔を無理やり上げさせる。

「痛っ」

視線を上げた先にいたのは美咲だった。

「ストーカーには職務質問する必要があるよね？」

彼女達と別れてから間接的な嫌がらせはよくあった。上履きを隠されたり、私の携帯へ一斉に中傷のメールが届いたりなんて典型的なものだったりしたので、気にしないことにしていた。

だけど、この日初めて私は直接的な暴力によるイジメにあうことになった。

私は引きずられるように人気の無い校舎の裏に連れて行かれた。さらに突き飛ばされた私は転んでしまい四つんばいになる。手を地面につくと日影ということもあり、ひんやりしてた。すぐにわき腹へ誰かの蹴りが入り、私は息がつまり体を丸めた。丸めた背中には何度も誰かの蹴りが入る。鈍い痛みが何度も襲う。

殴られたり、蹴られたり、たしかに痛みはあった。でも、それよりも「こんなことをされる自分」が情けなくて、可愛そうで心の方が痛かった。衝撃が来るたびに震える体に涙が流れた。

どれぐらい時間がたったのか分からないけど、空はオレンジ色に染まっていた。

誰もいなくなった暴力の現場で私はただ呆然とうずくまっていた。涙はもう乾いている。背中や手足はまだ痛む。心は空っぽだった。その日から私は学校を休んだ。

休み始めてから一週間、誰も心配することはなかったし、土屋君も見舞いに来なかった。部屋の中で脱ぎ散らかされている泥だらけの制服を見るたび私の心はどん底に落ちた。どこまでも深く底のない沼に沈んでいるような感覚に襲われる。

やっぱり嫌われたかな。そうだよ、いじめられる様な私だもん。浮かれていた自分が情けないよ……

そして8日目。まったく学校に行こうという気になれない。断続的な眠りから目を覚ますと16時を過ぎていた。なんだ……もう今日も終わりか。なんて思った矢先、玄関のベルが鳴った。

もしかして！？ 私は一気に期待に胸が膨らみ、ベッドから飛び起きた。今までの落ち込みがどこへやら、軽く身だしなみを整えて玄関へ急ぐ。少し緊張しながらも玄関のノブをまわし、訪問者を招き入れた。

「来てくれたんだ！」

「あつ……」

土屋君は私の顔を見ると緊張した面持ちで無言で立っていた。やっと土屋くんが来てくれた。私はすごく喜んだが、どうも様子がおかしい。

私は彼を見て喜んでいたし、実際笑顔で対応したはずだ。

「土屋君、久しぶりだね」

「うん……」

「元気にしてた？」

「そうだね……」

「とにかく入って」

「うん……」

土屋君を家の中へ招き入れる。後ろから付いてくる彼の足取りは重そうだ。これではどっちが学校を休んでいたか分からない。

それでも私は嬉しかった。だってここまで来てくれたんだもん。そして私の部屋へと入ってもらうと適当な場所へ座ってもらった。しばらく、雑談などをしたが、彼の言葉は歯切れが悪く、ハッキリしない。

私は堪らず、土屋くんに訊ねた。
「どうしたの？ 具合でも悪い？」

「えっ、いや……」

すると土屋君はうつむいて黙ってしまった。

未だ元気の無い理由は分からないけど、なんだか私は複雑な気持ちになった。この状況を不安視する反面、なんだかおかしい気持ちになったからだ。

「土屋君、なんだか……反対になっちゃったね」

「……反対？」

「だって、初めて会ったときは私が黙ってばかりで、土屋君に心配かけたでしょ？」

変な感じだな。見舞いに来たはずの土屋くんを私が積極的に話しかけている。

私の言葉に土屋くんは再びうつむいた後、しばらくして話し始めた。

「僕……君に悪い事をしたんじゃないのか？ 僕さえ何も言わなかったら、今ごろ女子の輪の中でそれなりに楽しくやってたと思うんだ……」

「そんな……」

いつの間にか土屋君は正座をしていた。太股に置かれた拳がぎゅっと握られている。

どうやら土屋くんは、何処からか私がイジメにあつた話を聞いたらく、さらにそれを自分のせいと思っているみたいだ。

申し訳なさそうに肩を震わせてる。どうしてこうなったのだろう。イジメのせい？ ううん、違う。

きつといつまでもウジウジと悩んでいる私のせいだ。

「そんなことない！」

私は大声を出して土屋君に近づき、彼の握られた拳の上に手を置く。

何悩んでたんだろう私。自分以上に悩んでくれた人がここにいたんだ。

元気を出さなきゃ、いつまでも色んなことで自分の殻に閉じこもってる場合じゃないよ！

「私、土屋君といるときが一番幸せ」

「武内さん？」

土屋君は私の勢いに少し面食らっているようだ。だからって止めるわけには行かない

もう気を使って遠巻きで眺めたり、会えない時間を我慢するなんて嫌だから。

「もつと、もつと話がしたいし、一緒にいたい……」
待つてるだけじゃ駄目なんだ。

私から動かなきゃ、空いた手は誰も掴んでくれない。

そのまま土屋君へと体を預けた。

「私、土屋くんが好きだよ」

ついに言ってしまった。

それだけじゃなく今私は土屋くんを抱きしめている。

「武内さん……」

「私じゃ駄目かな？」

私は土屋君へ体を預けたまま目を瞑って返事を待った。すぐドキドキしてる。きつと土屋君にも伝わっているに違いない。恥ずかしいだとかそういう問題ではなく、私の頭は熱くて真っ白だった。

「僕は……その……」

その時、ゆっくりと何かが私の背中に触れた。間違いなくそれは土屋君の手だった。さらにいつの間にか彼の腕が私の背中にまわって、私は抱きしめられていた。

抱きしめられることで体が引き寄せられ、直接触れ合うと彼の心音が良く分かった。よかった土屋君も緊張してるんだ。

「駄目じゃない。僕も武内さんが……好きだ」

その日、私と土屋くんは初めての夜を過ごした。

次の日も私の家で一日中、一緒にいた。私の手はもう空をきることはない。土屋君にしっかりとしがみついたのだから……

第21話 「斜陽」

私は本当に強くなったと思う。少なくとも土屋くんがいればどんなつらい学校生活も苦にならなかった。それは気持ちだけじゃなくて体のつながりもできたせいかもしれない。

夏休み、私は土屋君と毎日のように会った。彼も嫌がらずに会ってくれる。

休みの間はクラスの誰とも会う機会がないので嬉しい。イジメを受ける心配もないし。

今日もこうやって土屋君と私の家にいる。
ソファに座りながら、彼の肩に頭を乗せる。それからずっとこのまま。こんな怠惰に過ごして良いのかな？　っていうぐらい私たちはただ一緒にいられる時間を過ごしていた。

「そつえば背中のアザもなくなったね」

「うん」

「よかったよ……」

土屋君は目を細めて私を見る。本当に優しいまなざしだ。彼を見ているだけでなんだか守られている気持ちになった。

あんまり暗い話もしたくなかったので私は話題を変えた。

「今度さ土屋君の家に連れてってよ」

「いっ」

「どうしたの？　駄目？」

私は覗き込むように土屋君を見つめる。

すると土屋君が肩の力を入れたのが私の頭に伝わった。緊張してる？

「そついう目で見られても困るよ……」

「いけない事言った？」

なにか彼の家にいけない理由でもあるのかな？

もしかして拒否されてる？

「いや、そうじゃなくて……」

土屋君は申し訳なさそうに頭をかきながら答えた。

「両親に紹介する時は正式な形でやりたいんだ」

「え？ 正式な形って？」

「そ、それは……」

言葉に詰まった土屋君は顔を真っ赤にさせて黙ってしまった。

そんな彼を見ているとなんだか笑えてきた。

「土屋君、私たち高校生だよな？」

「えっ、そうだけど。……もしかして、真面目に考えすぎ？」

「うーん。ちょっと考えすぎかも」

「やっぱりそうか……あーっ、恥ずかしい！」

「でも、その気持ちは嬉しいよ、ありがとね」

「そ、そう？ 良かった」

なんとも馬鹿馬鹿しいお話ではあったけど、土屋君の気持ちが真剣だったってわかっただけで私は満足だった。

ちなみに結局、夏休みの間に土屋君の家にお邪魔する機会には恵まれなかったけど、彼の性格からみると両親に会うだけで相当な決意がいりそうな気がした。それは嫌じゃないけど。

こうして土屋君と私の関係は蜜月を迎えていた。

夏休みも終わりに差し掛かった頃、奇妙な出来事があった。

私の元に差出人不明の小包が送られてきたのだ。箱には「本当の解決方法」と書いてあった。こんな得体の知れないものはすぐに捨ててしまえばよかったのだけど、なにか土屋君との話のネタにもなれればと思い、恐る恐る包装紙を開けてみた。

すると中身はケースに入ったCD-R。ラベルには『suicide magic』と印字してあった。直訳すれば「自殺魔法」となる。

私はなんだか薄気味悪くなり、そのまま放置してしまった。

そして、とうとう夏休みも終わり二学期が始まった。

イジメのこともあり学校内ではなるべく土屋君と一緒にいることにした。というより、土屋君が自分から離れないようにと言ってくれたのだ。私は夢中になって土屋君についていった。

しかし、いつも一緒にいられるわけではないので、何度か彼女達の暴力を受けることとなった。それが一週間に一回、五日に一回、三日に一回と徐々に頻度を増していき、最近では毎日のようにイジメられ、耐える日々が続いた。

運の悪い事に秋は学校行事が目白押しで、クラス委員の土屋君とはあまり一緒に帰れない。

結局、私は独りで制服を汚して、足を引きずりながら帰宅するそのままベッドへと倒れこむように寝転ぶ。精神的にも身体的にも疲れてウトウトしていると土屋君が学校を終えてすぐに私の家へ駆けつけてくれた。

私はそれだけで疲れが吹き飛ぶような気持ちになった。

土屋君が私の背中をそつと撫でる。

「今日も……アザ増えたね」

「うん……」

「くそつ、なるべく一緒にいるつもりなのに、こんなことって……」土屋君は歯を食いしばって本当に悔しがっている様子だった。私はその姿を見ただけでも十分な気がする。

でも、土屋君の怒りは収まらないようで、私の腰に回した手が強く握られる。

「明日アイツ等に一言言つてやるよ」

そう言ってくれるだけで嬉しい。私には味方がいるんだと安心できた。でも、その気持ちだけで十分だった。

「……駄目だよ、土屋君」

「どうして!？」

「こんなのは私だけで十分だから……」

極力、土屋君には関わって欲しくなかった。私の情けない姿を知られたくないというのもあるけど、なにより彼が次の標的にされたりしたら、そんなの耐えられない。

私は優しく土屋君の強く握られた拳に手を添えた。

すると土屋君も落ち着いたのか、握った拳が緩んだ。彼はそのまま私の背中に顔をうずめた。

もう彼女達の暴力には慣れたけど、やっぱり土屋君に心配掛けるのだけは嫌だった。

こんな事が繰り返されている最中、事件が起こった。

また学校の行事で土屋君より先に帰ることになった私。警戒しながら帰るけど、今日は誰もあらわれなかった。まあ、そうそう毎日はやられないかと、途中からは安心して帰る事ができた。

何事も無く家にたどり着く。後は土屋君が家へ来るのを待つただと自室にいと、私に携帯電話へメールが入ってきた。送信先を確かめると土屋君からだった。『千歳公園で待ってる』とだけ書いてあった。千歳公園とは自宅近くの小さな公園の事だ。なんである場所なんだろう？ 家に来ればいいのにと不思議に思ったけど、私はとりあえず行くことにした。

公園に到着すると静まり返っていて、日も暮れかかり薄暗くなっていた。秋もだんだんと深まったきたせいか、風も少し冷たかった。私は土屋君をさがすべく辺りを見渡したけど人の気配はない。『待ってる』と書いてあったのだから、どこかにいるに違いない。初めは安心していたけど、だんだんと心細くなつて名前を読んだ。

「土屋くん」

すると突然、いつくかの人影が周りから飛び出し私を囲んだ。こんな時にまた!？

私は身構える暇もなく、囲んだ中の一人が後ろから口を塞がれた。その瞬間、すぐく違和感を覚える。なんだかいつもより私を押さえられる力が違う。なに？ 誰？ 薄暗くてよくわからない。ようやく私は抵抗しようとするけど、別の人影が私の手を掴んだ。それだけでもう動きをとる事ができない。力の差があまりにも歴然としていた。これって女の子の力じゃない！

数分の抵抗もむなしく、私は強引に仰向けに倒されてしまった。すぐに誰かが私へ馬乗りになった。その大きな人影を見上げる事で私はようやく自分が犯されそうになってることに気付く。

必死に守ろうとする腕を払いのけ人影は私の胸を触る。払いのけられた両腕はいつの間にか誰かに捕まれていた。足だってもう動かす事さえ困難だった。

「コイツ、静かにしろ」

「その声！？」

「馬鹿野郎、喋るんじゃない！」

一瞬間こえた声は誰かはわからないけど聞き覚えのある声だった。知っている人間ならばと私は精一杯暴れた。もしかしたら、逃げられるかもしれない。私は最後の抵抗として口を塞いでいる手に思いつきり噛み付いた。

「痛——っ！ このっ！」

口から離れた手が大きく振り上げられる。殴られるっ！ 私は思わず目を瞑った。

「止めろ！ 武内に手を出すな！」

すると怒鳴り声が聞こえ私は目を開けた。

遠くの人影はこっちへ走ってくる。その声で誰かは分かっていた。「僕の携帯が勝手にいじられていると思えば、門脇！ これはどういうことだ！」

「……門脇君？」

落ち着いてよく見ると馬乗りになっているのは同じクラスの門脇

くんだった。あまりの驚きで私は声も出ない。

「あーあ、もうだりい。終わり、終わり」

「それで済むとも思っているのか!？」

土屋君はぶつかるように門脇君へ近づくと彼の胸倉を掴みあげた。睨みつける土屋君に門脇君は罰が悪そうにして横を向いた。

「……ちっ、頼まれたんだよ」

「誰にだっ!」

すると門脇くんは舌打ちをして土屋君へ睨み返す。

「美咲にだよ! だからオレ達は悪くないんだよ!」

「はあ!？ ふざけるな!」

「だいたいこんな事になったのも全部、お前らが付き合ってるのが悪いんだからな!」

「えっ!？」

一瞬、土屋君の力が弱まったのを見計らうと、門脇君は土屋君のお腹にひざを入れた。

「んぐっ!」

土屋君はそのままかがんでしまい、その隙に門脇くん達は走り去った。私はすぐに起き上がり、土屋君へ駆けつけた。

「土屋君、大丈夫!？」

「僕のことよりも、君はなんともないか？」

お腹をさすりながらも何とか立ち上がった土屋君はやさしく髪をなでてくれた。

「大丈夫、なんとも無いよ」

「よかった……ホントによかった。ごめんな、本当にごめんな……」

私は土屋くんを抱きしめられて、守られている実感が湧いた。やっぱり独りじゃないんだ。そんな安心感が私を包んでいた。

第22話 「誰そ彼時」

門脇君達に襲われそうになった私。

だけど土屋君が駆けつけたお陰で事なきをえた。

本当なら一安心と言っべきなのかもしれないけど、そう事は上手くは運ばなかった。

あの日を境に土屋くんは急に冷たくなった様な気がするのだ。

学校内では私が話しかけてもすぐどこかへ逃げてしまう。一緒に帰っても沈黙がちになった。さらに私の家へ来ることもほとんど無くなった。まさか、この前の事件のことが原因？ 何日もろくに話さない日が続く。

何かモヤモヤしたものが私を取り巻いていく。それは間違いなく不安だった。そして慌ててその考えを否定する。大丈夫、時間が経てばきつといつものようにやさしく笑ってくれるよ。

さまざまな思いが交錯して自分では結論が出せそうになかった。

なぜならこの問題は相手があつてのものだからだ。

…… だったら聞いてみればいい。前よりも悩んでいる時間が短くなっている気がする。それは多分、土屋君を信じているからだと思う。

何日かぶりに土屋君と一緒に歩く帰り道。今日も学校を出てから特に会話がない。

土屋君の顔を横目で覗くとなんだか疲れているように見えた。学校行事の準備に加えて、私の問題があるからに違いない。だんだん重苦しい雰囲気私たちを取り巻いた。

こんな状態をいつまでも続けるのは嫌だった。早くいつもの二人に戻りたい。私は意を決して土屋君に聞いてみることにした。私に起こったことだもん、自分で動かなきゃ。

「土屋くん。やっぱりこの前のこと……気にしてる？」

しかし、土屋君は私の問いに対して俯き、何も言わない。

私自身、この前の事はもう気にしていなかった。今でもたまに怖くなることもあるけど、結局は土屋くんが助けてくれたし、今後もしそれは変わらないと思っていた。

だけど煮え切らない土屋君の態度に私は少し焦りを感じた。

「お願い、何か言つてよ……」

土屋くんはそれでも下を向いたまま。

私の中で『もしかして』という言葉が心の底から徐々に浮上してきた。

しばらくして土屋君は小さく口を開いた。

「……らいんだ」

小さな声でよく聞こえない。

私はいつの間にかぎゅっと自分の手を握っていた。

「もう一回言つて、お願い」

「……つらいんだ」

ハッキリと土屋君の口から漏れた言葉。

私は何が言いたいのがよく分からなかった。

「……どういうこと？」

「門脇がこの前言つてたじゃないか『お前らが付き合ってるのが悪いんだ』って」

ちよつと待つてよ、それは……

土屋君の思いつめた口調に私は何も言えなくなってしまった。

「このまま付き合つたとしても、また同じようなことが起こるかもしれない」

もう起きないよ。だって土屋君が守ってくれるんでしょ？

でも、まだ土屋君の話は終らない。このまま行き着くところまで行つてしまいそうだ。

そして決定的な言葉が告げられた

「……もうこれ以上、一緒にいてもお互いのためにならないのかもしれな——」

「私ならかまわない！ 土屋くんがいるならいくらでも耐えられるし、どんなことでもできる！」

これ以上、土屋君の話は聞いていられない私は遮るように口をはさんだ。

嘘なんでしょ？ いつものように優しくしてよ！

私の精一杯の引き止めの言葉にも、土屋くんの表情は変わらない。「君の問題じゃないんだ。これは自分の問題で……僕が耐えられないんだ」

「そんな……」

自分のことはいくらでも耐えられる。私の気持ちも変わらない。でも、優しすぎる土屋君には耐えられなかったのだ。もうどうすることもできないの？

私はなにもできずに立ちすくむ。

「……それに好きな人ができた」

「え！？ 誰なの……」

「5組の坂本亜由美さん……」

誰だかさっぱりわからないけど、それってあまりにも急すぎる話だよね……

学校行事を二人でこなしている間に好きになったとか話していたような気がしたけど、理由なんてどうでも良かった。

「あのさ、武内……」

もうやめて。言わないでほしい。土屋くんは私の最後のよりどころなんだから……

だけど、最後の審判は下された。

「別れよう」

つかんだと思った土屋くんはあっさりと私の手をすり抜けていっ

た。

それから、どこをどうやって歩いてきたのか良く覚えていない。
我に返ったのが、家の玄関先でドアにもたれながら座っていたところだった。ゆっくりと立ち上がり家へと入る。

やっぱり今日も家の中は誰一人いない。

結局、私は以前よりも独りになった。

彼と付き合わなければ、今の状況もそれなりに独りにも耐えられたはずだろう。でも、私は昔よりも確実に弱くなっていた。

再び私は学校を休みだした。

それから一週間後、部屋に閉じこもったまま私の気持ちは爆発寸前だった。

外は黄昏時、ふと薄暗い辺りを見渡す。掃除もする気になれなかったので室内は荒れていた。

なのにふと目に止まったモノがある。

それは気味が悪いと放置しておいたCD-Rだった。きっと包装紙の言葉が気になったからだろう。

そこには『本当の解決方法』と書かれていた。

……本当に解決方法あるのだろうか？

でも、ここに答えがあるかもしれない。

たとえ紛い物でもいい、誰でも何でもいい、私はしがみつけるものなら何にでもしがみつきたかった。

私は気が付けばパソコンを起動させていた。

ケースから『suicide magic』と書かれているCD-Rを取り出す。

パソコンが完全に立ち上がると、CD-Rをディスプレイに入れた。

やがて自動再生が始まり、ディスプレイにはある映像が流れ始め

る。

その内容は実に奇妙なものだった。

第23話 「それでも世界は続いていた」

ディスプレイ上には映像が映し出された。

私はそれを最初は漫然と見つめていた。

映りは粗く、なかなか見えづらい。ドアの隙間から隠し撮りをしているのか、画面の左右は暗く、中央からはわずかな明かりが差し込んでいた。

しばらく薄暗い映像のままで拍子抜けしたけど、時間がたつにつれて何かが動いているのに気が付いた。すると次第に音声がハッキリ聞こえることで、私は画面上で何が行われているか判った。聞えてきた激しい息遣い、うごめいているもの。

それは男女が交わっている場面だった。

突然のことに私は驚いた。そして、ひどくがっかりした。

ただのイタズラCD-Rだったのか……

落胆した私が停止ボタンをクリックしようとしたその時、突然力メラの映像はドアから遠のき、家の廊下を進む映像になった（ここではじめて家の中の映像だとわかる）。

やがて見えたドアが少し開けられ、さっきと同じように室内を覗くような映像が続く。私はまたかと思ったが、今回は事情が違った。

6畳程の室内にはひどくやつれた髪の毛の長い女性がいた。女性は声を殺して肩を震わせ泣いている。なぜ泣いているのかはわからないけど、隣の部屋で行なわれていることに無関係でない気がした。

同じ家の中で同時に行なわれている。悦楽と悲しみ。私は泣いている女の人に少し、自分の姿を重ねた。

こうしていつの間にか私はこの映像にのめりこんでいた。

しばらくしてまた場面が変わる。

今度は全体の薄暗さから夜だとわかった。明かりの付いた一室を

カメラは覗き込む。そこではさつき泣いていた女性が男性に暴力を受けていた。

何度も殴られ、蹴られても女性は抵抗するどころか、男性にすがり付いていく。

振り払われてもすがりつくその姿に私は彼女が他人とは思えなくなってしまうた。

そして数分の暴力映像は終わり、次の場面へ切り替わる。

さつきと場所は同じ。夜というのも同じ。アングルまで同じだった。

しかし部屋は暗く、月明かりで中がうつすらとうかがえる程度だった。私が目を凝らしてよく見ると、室内にはさつきの女性が座っていた。

女性はしばらく動かなかったが、ゆっくりと腕を振り上げる。すると月明かりで何かが光った。それはナイフだった。何を思ったのか女性は何度も自らの手首を切りつけたのだ。

女性は奇声をあげながらリストカットを繰り返す。やがて血がー筋流れ落ち、床を赤に染める。何度も腕を切りつけているうち、いきなり血が噴出した。床だけではなく壁までも血飛沫が付着した。

私は怖くなって声を上げそうになるのを必死に抑えた。

数分後、女性は崩れるように倒れた。しばらく、体が不規則に動いていたけど、それが痙攣しているせいなのか良く分からない。

映像は女性が動かなくなり、絶命してからも続いた。これで映像も終わりかと思った矢先、覗き込んでいたカメラがドアを開け動き出した。カメラが下を向き、映像が床へ移動すると血まみれ畳が映し出された。柱に付着した血液はまだ乾ききっておらず、月光で鈍い光沢を放っていた。おそらく触れれば指先にぬめりを感じるだろう。

さらに部屋中をなめるようなカメラワークが続き、今まで死角に

なっていた場所が映し出された。そこには女性の死体の他に先ほど暴力振るっていた男性がうつ伏せに倒れているのが見えた。しかも背中には包丁が突き刺さっており、すでに絶命している様子だった。

男女の遺体が交互に映し出される。苦悶の表情で倒れている男、対照的に安心しきった安らかな表情の女性が映る。

女性の表情に自分を重ねていた私は安心感を覚えた。やがてカメラから手が伸びて（カメラを映していた人の手）、男の死体が仰向けにされる。次に女性の死体を引きずって男性に上から重なるように移動させられる。

その後、映像は全体像を映した。

月明かりに照らされ重なる死体は、あたかも抱き合ってるかのようだった。

そして映像は終了する。

しばらく私は放心状態でただ画面の前に座っていた。

時間が経過して、ふと前を見ると真っ暗になった画面が鏡の役目を果たし私が映った。

よく見るといつの間にか私は涙を流していた。さらには一週間まともな物を食べなかったせいかな少しやつれている。

——これじゃあまるであの女性みたいじゃないか。

なんだか頭に靄がかかったような感覚になってきた。さらにこの結論を否定できなくなってくる。もう、考えるのも面倒くさい。考えたって答えは出ないのだ。

だったら、流れに身を任せよう。

その瞬間、私は理性の壁を越え、最終結論を導き出した。

「誰にも邪魔されず、私と土屋くんが結ばれるためにはこれしかない」

土屋くんを呼び出し二人で死ぬ……残された方法はそれしかないと思った。

すぐ携帯を手に取り土屋君へと電話をかける。長い間コールした後、やっと彼は電話に出てくれた。

「あっ、土屋君？ 電話してごめんね。私の家に土屋君の置いていた荷物が家にあるから渡すね。明日の放課後、学校の屋上でどう？」

私は電話をきった後、すぐに家にあった包丁を手にした。するとだんだん気分は高揚してきて心は弾んでいった。これで全部終わらせることができる。

次の日私は久し振りに登校した。周囲の冷たい視線にも関わらず、気持ちはスツキリとしていた。もう、授業なんてどうでも良いから。そして放課後、私はすぐに屋上へ向かった。

土屋君を待っている間、さらに気持ちが高揚していく。自分でも信じられないぐらいハイになっていた。

しばらくして、屋上の扉が開き、隙間から土屋君が顔を覗かせる。次に彼は屋上へとゆっくり足を踏み入れ、私をチラりとみると、伏目がちに歩いてきた。私は久し振りに間近で会えた彼の姿に感動した。

しかし、土屋君は私に警戒しているのか、遠く離れた場所で立ち止まった。

「どうしたの？ これ早く取りに来て」

努めて私は明るい口調で話しかけ、適当に物を詰めてある袋を土屋君へ差し出す。彼は何もないと安心したのか、近づいてきた。だんだん彼が近づいてくる。あともう少し。

もっ少しで私の手の内に入る。あと十歩……七歩……五歩……三歩……一歩。

そして土屋君が手の届く範囲に足を踏み入れた。と同時に私は適当に”重い”物を詰めてある袋を振りかぶり、土屋君に向けて打ちつけた。

「ひいっ！」

しかし、土屋君が瞬間的に飛びのいたため、完全には当たらなかった。だが、後ろに下がった反動で土屋君は尻餅をついた。

私はその隙を見逃さずに彼へ馬乗りになった。さらに袋から包丁を取り出し、刃が下へ向くように持ち替えた。

「やめてくれー！」

土屋君が大声を出しながら私の右腕を両手で掴んだ。私はそれに負けじと土屋君へと刃物を近づける。

「こうするしかない……こうしなきゃ、私たちは結ばれない」

「駄目だよこんなこと……やめてよ！」

普段は男の子に敵わなかった力もなぜか今は片手だけでも、刃先はどんどん彼の首筋へと近づいている。

「嫌だ……こんなの……」

土屋君が何か言っているような気がするけど、頭には入らない。

私は体重をかけてさらに包丁を押し進める。

どんどん彼の肘が曲がっていく。私は勝利を確信した。

勝利？ なんの勝利なの？

その瞬間、彼が最後の力を振り絞って声を上げた。

「お願いします、やめて……ください」

「！？」

哀願の言葉を聞いた瞬間、私は我に返る。

すると私と土屋君の顔はあと数十センチというところまで近づいていた。私を見る彼の表情はもう昔のそれではなかった。瞳はじんわりと潤んで涙が溜まっているし、口は歯を食いしばりながらもガタガタ震えていた。

——私、何をやっていたんだ。どこか目が覚めたような感覚がした。

土屋君の上に乗るかかって包丁を振り上げているじゃないか。こんなに震えている彼を見た事がない。

私……私……取り返しのつかない事をした。

力を緩めた私に気づいたのか土屋君は一気に起き上がり、私を押し倒した。包丁が転がり、私はうつぶせになる。

「う、うわあああつ！」

土屋君は私に何をするわけでもなく、何か叫び声を上げて屋上から出て行ってしまった。

ドアが閉まる音がして私は独りきりになった。

大した時間が立つてもいないのに外はもう薄暗かった。

私はぎりぎりのところでなんとか留まることができた。土屋君に手をかける前に気づけてよかった。

だけど、これからどうすればいいの？ 誰にしがみつけばいいの？
そこで私が取った行動は自分がこの世からいなくなる事だった。

転がっている包丁を手に取り、手首へと刃先をあてる。

こんな私なんて……もう要らないよね。

私はここで初めて自分で自分を傷つけてしまう。なんども何度も手首を切りつけた。あのビデオの人みたいに……

制服は血に染まり、袖は破れ、床には大量の血たまりができた。

その時、私は不思議にも安心感を覚えていた。痛い、痛い……でも……
……なんだろう、この救われた気持ちは？

自然に私は涙ぐんでいた。抑えていた気持ちが一気に開放されたように感じた。

——良かった。これで私も救われる。

しかし、こんなことをした私に幸せな結末が訪れるはずは無かった。

「武内さん！？ ああつ、何やってるの！」

声に振り向くとそこには逃げていったはずの土屋君がいた。

「あれ？ どうして？」

「怖くなって逃げたけど、心配してきてみれば……そんなことより、

救急車呼ばなきゃ！」

土屋君は携帯を取り出し、救急車を呼んだ。学校中が騒ぎになる中、私は担架で運ばれた。

運ばれる際に覗き見た土屋君の表情が忘れられない。驚きと哀れみ、なにより侮蔑の表情……

この事件で完全に土屋くんは離れていった。

でも、世界は続いていた。私は一命を取りとめたのだ。

それからの私はなりふりかまわず誰かにしがみついていた。

空いた手を繋ぐために。

しかし、みんな私の手を振りほどいてしまう。

その度にあのCD-Rを見て、死ぬ準備をする。今度の男の子は「私が死んだら振り返ってくれるのかなあ」と不安になり、自分が保てなくなった。

あの日、二人で死ねなかったから……こうしてみんな私から離れていった。

広野君を除いて……

第24話 「病院にて」

再び病室。

私は坂本さんの顔をまじまじと見つめる。

この人は土屋君が好きになった人……

「坂本……亜由美さん……」

言葉に出してみると自分でも分かるぐらい顔の表情が険しいものに変わっていく。自然に手は強く握られていた。

「あれ？」

それを察した彼女が言った。

「どうしたの？ 急に顔つきが変わったけど」

「えっ……」

「敵意丸出しって感じ」

「そういうわけじゃあ……」

すると坂本さんは肩にかかった長い髪を手で払いながら、毅然とした態度で私に言った。

「でも、全然怖くない」

「っ！？」

自分の気持ちを見透かされたようで、私は恥ずかしくなった。

彼女が直接的に土屋君と別れた理由と関係ないことは分かっていた。

でも、心の奥底では納得できていない。ましてや、やたら挑戦的な態度を取られればなおさらだ。

「とりあえず、今日はアナタに宣戦布告したくてココへ来たただけだから」

「宣戦布告？」

まず、宣戦布告の意味が分からない。

仮に勘違いをして私と広野君が付き合っていると誤り込んでいたと

しても、この行動は許されない。

「病人をどうこうするほど私は”卑怯者”じゃないもの。それじゃあ、学校でまた会いましょう」

「ちよっ……」

言いたいだけ言うと坂本さんは帰ろうとした。長くて綺麗な髪の毛がふわりと揺れる。なんとなくそれだけで私は劣等感を感じてしまふ。彼女と私の差を考えるだけで、土屋君との距離を感じてしまい、苛立っていく。

私は自分でも驚くような大声で呼び止めた。

「待ってください！ まだ、私の話は終わっていません！」

「……ん？」

もう後には引けない。

私の声を聞くと、坂本さんは振り向かず立ち止まった。ここがチャンスと思いきって訊いてみた。

「土屋君とはどうなっ たんですか？」

「土屋？」

坂本さんは私の問いかけに首をかしげた。

そして私の顔を見ることなく、呟いた。

「誰だっ け？」

「ええっ！？」

坂本さんは本当に土屋くんのことを忘れているみたいだった。土屋君が無視されているという事実だけで、私は自分の想いまで無視されているようで無性に腹が立った。

そして自分でも信じられないような大声で彼女へ怒鳴りつけてしまふ。

「そんな程度の気持ちで土屋くんとお付き合いしてたんですか！」
すると坂本さんはため息を一つつく。私がもう一度怒鳴ってやろうとした瞬間、彼女は髪を手で払いながら振り向いた。

「悪いけど、私は広野貴明以外の男には興味ないの。そういう戯言は止してくれる？」

「……戯言？」

そう言いながら私の口は完全に引きつっていた。

さらに坂本さんは決定的な一言を言った。

「ホント、土屋だかなんだか知らないけど、どうでもいいから！」

「土屋くんをバカにしないで！」

良く分からないうちに私は勢いのまま怒鳴りあっていた。

坂本さんも怒鳴っていた。

二人とも何を争っているのかよく分からないんだきつと。それにしても、よくつかみ合いの喧嘩にならなかったなと思う。

そんな険悪な雰囲気が頂点に達したころ、病室のドアが半分ほど開かれていることに気づいた。

「あつ……」

ドアを開けた人はただならぬ状態の私達に恐る恐る話しかけてきた。

「もしかして……邪魔だったか？」

声をかけた人……それは広野くんだった。

「ひ、広野君……」

「ええっ!？」

坂本さんは変な声を上げて広野君へと振り向いた。

……変な間が三人を包む。

誰一人次の言葉が出ないし、動けなかった。

「ああ、三すくみってこんな状態なんだ」と、絶対誤用だろうと突っ込まれそんな感想が私の頭に浮かんでいた。

体感の時間にして一、二分だったと思う。誰も動きを止める中、一番初めに反応したのは、坂本さんだった。

「ひ、広野君……お久し振り」

「え？ …… あ、うん」

坂本さんはさっきまでの齒切れのよさとは違い、どこかぎこちなかった。なんどもせわしなく髪を耳にかけるしぐさを繰り返していた。それは広野君がたまに見せる、バツが悪くなつて頭をかく仕草に似ているなと思った。

「あの…… その…… 私……」

私は坂本さんの仕草からのぞく耳に釘付けになった。それは彼女の耳が真っ赤になつていたからだつた。

さらに良く見ると手だつて微妙に震えている。こつちからは表情は読み取れないけどきつとすごく緊張しているんだと思つた。

そんな彼女を見ると私はさっきまでの腹立たしさは少しずつ消えていくのがわかつた。彼女もまた、好きな人前では照れくさくて言葉少なになる女の子だつたんだ。

「な、何？」

「えっと…… 私……」

広野君は気まずそうに坂本さんよりやや上の天井を見つめている。坂本さんは相変わらずモジモジしていた。

なんだか私は急に余裕が出て二人の様子を見守る側に回つた。まるでお見合いの二人を見つめる仲人のような気分。

「…… 私、諦めないからね」

「え、っ……」

「好きだから」

彼女はそれだけ言い残し、駆け足で出て行く。

広野君はそのまま硬直して追いかけることなく見送つた。

坂本さん、あんなに恥ずかしい言葉を…… 私は内心、恋つてやっぱり盲目なんだと感心してしまつた。もちろん人のことは言えないけど。

そして病室内は静かになり、私と広野くんは2人つきりになつた。

広野君はどうしていいか分からないのか、頭をかきながら入り口を眺めていた。

「大変だね」

笑いながら広野くんに言う。

すると彼はようやく私へ顔を向けた。

「な、なんでだよ」

「だって、坂本さん、あなたのこと好きだって」

「えっ、いや、あれは……その……」

私は坂本さんに土屋くんを馬鹿にされた恨みを、広野くんにも八つ当たりしたくてからかってみた。

「うーん。あれで懲りたと思ったんだけどなあ……」

広野くんは眉を八の字にして困ったような顔をした。

これでかなりストレス解消にはなったなと満足していると、広野君は私へ思わぬ反論の言葉をかけた。

「お前だって同じだろ？」

「え？」

「好きなんだろ……土屋のこと」

ああ、完全に負けだ。私は黙って頷くしかなかった。

「もっと前に言わなきゃいけなかった事があるの」

「何をだよ」

こうして今日もお見舞いに来てくれている広野君には本当に悪いなっと思う。

「ごめんね、広野くん。私の事で……巻き込んだじゃって」

でも、広野くんは嫌な顔せずにご答えてくれる。

「気にすんなよ。そんなことより退院してからすぐ学校には来るんだろ？」

私はその問いにはすぐに答えられなかった。

それは本当に何も考えていなかったからだ。

だって、死ぬ気だったんだし、正直もう今回のことで完全に私は

学校へ行く意味を失った気がする。

「えっと……」

「おい、黙んなよ」

そんな事を言われても私はどんどん感傷的になってしまふ。失意の沼にどんどん足を取られるように私の心は沈んでいった。

「だって……私には……もう何も無いもの……」

私の反応を見て広野君は軽くため息をついた。

「バカか？ 土屋が駄目でもこの世には星の数ほど男はいるだろ」

「いないよ」

「いるよ」

「いないよ」

「いるって！ 絶対大丈夫だ」

「……やっぱりいない」

「いるよ！ 命賭ける。百億万円賭ける！」

最後には子供みたいな事とを言っ、広野君は身振り手振りを大げさに、私を励ましてくれた。

でも、今の私にはそれに乗る元気もなかった。

「じゃあ……証拠見せてよ」

「えっ、証拠……」

と言ったきり、広野君は勢いに詰まったように動かなくなった。

それを見て私は自嘲気味にため息をついた。

「ほらね……」

「いや、今証拠見せるとか言われてもさ……」

「だからもういい。いないんだよ。もう、あんなに好きになる人は……いない」

「おいおい……」

すると広野くんは急に黙り込んでじっと私を見詰め始めた。さらに顎に手を当て名探偵よろしく考え事をしていた。

しばらくして「うん」と一言呟くと広野君は私へ歩み寄る。

「よし、決めた。武内、ついて来い！」

急に私の腕をつかんで歩き出す広野君。

「ちよつと、どこへ行くの、今そんな気分じゃ——」

「あんなところにいたら気が滅入るだけだ」

私はただ広野君に力強く引かれるままに連れていかれた。

そしてエレベータに乗って連れていかれた場所、それは屋上だった。

さらに広野くんは「飛び降りるなよ」と言い残して、どこかへ消えていく。

私は一人屋上に取り残された。

すると自然に体で屋上の風を感じた。

少し冷たいけど、なんだか気持ちいい。広野君の言ったとおり病室にいたらもつと気が滅入ってたな。

私は両手を上にあげ、軽く伸びをした。

ああ、このまま風になってどこかへ飛んでしまいたい……って、貧困な発想だな私。

でも、こんな自分に対して自虐的な冗談を言えるようになったのは進歩だよな、多分。

「お、お待たせ！」

そんな広野君の声と共に屋上の扉が勢い良く開いた。

「どうしたのそんなに急いで」

「いや、ああは言ったものの不安になって……」

「そんな簡単には飛び降りないよ」

「あつ……そう……」

少し拍子抜けしたような広野君の姿を見ると、手にはホウキを持っていた。

私はそれを見てまたからかいたくなった。

「広野君、ホウキなんて持って今からボランティア活動でも始める

「気？」

「ある意味そうだな」

「私、掃除なんてする気ないよ」

「違うって」

「え？」

「もう、鈍いなあ……」

私の態度にもうじれなくなったのか、広野君はホウキの使い方を見せてくれた。

「これがないと気分でないだろ」

と言って彼はホウキにまたがる。

「ん？」

「魔法使いつていったらこれだろ？ 乗れよ」

「……何をするつもり？」

彼は咳払いひとつした。

「空中散歩」

どうやらどこかへ飛んでしまいたい夢だけは叶いそうだ。

第25話 「catch up with」(ver.1)

私は「過去」にいる。

一人でいるのは夢で、土屋くと二人でいるのが実は現実なんだと思うことにしていた。だから、「今」に進む気もなかった。

でも、あの日――屋上から飛び降りた日――過去のまま死のうとした私を”魔法”という普通ではありえないもので「今」とつなぎとめてくれた人がいた。

それが広野君だ。

私、「今」に生きていいのかな？

現在、私は広野くんに掴まって、空を飛んでいる。進行方向に対してホウキにまたがっている広野君、その後ろで彼のおなかへ手を回し、横座りしている私。見た目はホウキに乗って飛んでいるのだけれど、なぜか自転車の二人乗りをしているようでもあった。

ホウキに乗っていると言っても実際には体全体が浮いているような感覚でそれほど苦にはならなかった。

半年前の私は果たして今の状況を予測できただろうか？

結構高い場所で飛んでいるので、人が豆粒みたいに小さい。航空写真のような眺めになっている。下の人に見つかったら大変なことになるだろうな。

「なーんか、いい眺め」

私はわざと口に出して言った。言わないと落ち込みそうだったから。

一方、広野くんは何かモゾモゾしていた。さらに深呼吸をして彼は何かのタイミングを計っているかのようだった。

「どうしたの？ 人をこんな空中散歩に連れて来ておいて黙ったまま？」

私に促されて、広野君はおずおずと話し始めた。

「あのさあ……武内」

「何？」

私は話を聞くことにした。気晴らしにはその方がちょうどいい。そしたら広野君は少し横を向いて、私に話しかけた。

「退院したら、学校に来いよ」

「うーん……」

「お前さえ良ければ朝、迎えに行ってやってもいいし」

「でも……」

「だから、黙るなよ」

学校に来说いと言ってくれる広野君の好意は嬉しかったが、私はそれに応えることができなかった。

いまさら学校に行ったところでもう何もないし、誰も待っていない。

だから私は話を逸らすことにした。努めて明るく。

「いいよー。だって、一緒にいたら坂本さんに悪いもん」

「待て待て！ オレは別に坂本と付き合っていないぞ！！」

さっきの坂本さんみたいに耳まで赤くして、口をパクパクさせてシドロモドロになっている。

そんな広野君が面白くて、私はさらにからかった。

「でも言ってたもん『私は広野貴明以外の男には興味ないの！』って」

「うつ……」

とうとう広野くんは前を向いて黙ってしまふ。

なんだか、そんな彼がかわいらしく思えた。

ふと、空を眺める。夕日を浴びて私達の体は赤く染まっていた。広野君の進行方向から考えて、どうやら駅のほうへ向かって飛んでいるみたい。

この街で一番大きな駅では大勢の人達が行き来している。まさかそれを見て「男なんて星の数ほどいるだろ」とか言わないよね？
そうしているうちに案の定、広野くんは私のほうを振り向いて駅を指さした。

丁度、帰宅ラッシュ時で駅の出入り口からは沢山の人が一つの流れにそって吐き出されていた。

「すごくないか？」

「何がすごいのか？」

「あの人の流れだよ。オレああいうのを見ると『すげー、生きてるなー』って思うんだ」

正直言って私は広野君とは違って、その大勢の人達が怖かった。何かに飲み込まれそうだったから。

でも広野くんはあの流れを見て『生きている実感』を得ているみたいだった。

『生きている実感』

それは私に今一番欠けているものかもしれない。

あの駅から吐き出される人たちは、さながら大きな川のうねりのようだ。この流れはどこまでゆくのだろう。

きつとそれぞれの家まで続いてて、一人一人の生活につながっているんだね。

生活してるって事はつまり……「生きてるって事」

帰った家には家族がいて、それぞれ生活が家の中で重なり合っている。

こうして誰かと誰かの生活が少しずつ、たすき掛けで重なっているんだ。だから人は独りでは生きていけない。

でも私の家には誰もいないし、誰ともつながっていない。

「ふーん」

だから広野君の『生きている実感』という言葉に、とりあえず軽く相槌を打つてみる。

しかし、広野くんは私に何か意見を言ってほしかったのか、口を尖らせた。

「少し前からお前に言いたかったことがあるんだ」

「なに？」

私の問いかけに広野君は少し背筋を伸ばした。

なにか改まって言うことがあるのだろうか？

「武内、学校でさ、別に話しかけてきても良いから」

「広野君？」

たしか前にも言われたことがあった気がする。

でも確かその時、私は迷惑をかけるからって断ったのだ。

「……駄目だよ。広野君まで巻き込むわけには行かないよ」

「そんなの気にしない」

「私が気にする」

「お前なあ……」

すると広野君は急に黙り込んだ。

怒らせたかな？

私の心配をよそに広野君はしばらくして首を横に振った。

「でも……もう無理だ」

「なんで？」

「だって僕とお前は共犯者なんだから」

その瞬間、私の心へ何かがそつと触れた気がした。

広野君は恥ずかしいのか、前だけを見て飛んでいる。

「僕はお前の復讐に加担した。十分、アイツ等に喧嘩を売ってる」

「それは私が無理やり……」

「途中まではな」

「途中まで？」

「いい加減気付けよ。オレの言いたいことを」

「え？」

広野くんは無理やり咳払い一つした。

「お前が入院している間、分かったんだよ」

「なにを？」

「一人で下校することの物足りなさが」

「……広野君」

「また騒ぎたいんだよ。それがどんな空騒ぎであっても」
突然のことで私はどんな表情をしていいか分からない。

心に触れたもの……それは広野君の生活だった。

私にも生活を重ね合わせてくれる人がいる。

それだけで胸が一杯になった。

私、「今」を生きていいんだ。

「……そんなこと言ったら駄目だよ」

私はそう言うのが精一杯だった。

もし、土屋君との事がなくて、これが初めて言われた言葉だったとしたら私は泣いていたと思う。

私は広野くんの背中にそつと頬を当てて体を預ける。背中越しに心臓の音が聞こえた。

それは確かな広野くんの『生きている実感』だった。

広野くんはいいやつだ。こんな私にあんな温かい言葉をかけてくれる。こんなことなら広野くんを好きになればよかった。もっと早く知り合いたかった。

でも……過去は消えないし、土屋くんのことは今でも好き。それに広野くんには坂本さんという綺麗な女の子が現れた。だからそんなことを考える私はよくない。考えちゃいけない。私はおどけてみせることで、その場を乗り切った。

駅からの帰り道、ホウキに乗りながら私達は黙り込んでいた。

広野くんの顔が夕日に照らされてか、赤くなっている。そんな広野くんを見て私はもう少し学校に行ってみることにした。

まだ、私は誰かとつながっていたから。

そして、もう一つ芽生えた思い。

それは学校へ戻ったら、土屋くん「さよなら」を言おうってこと。「過去」としての土屋君はもういないから。

彼にしてみたらもう終わったことかもしれないけど、私のケジメとして……

この時、初めて私は「今」に追いついた気がした。

第26話 「catch up with」(ver.2)

ホウキに乗って空中散歩だなんて我ながら馬鹿げた提案だ。

しかも、後先考えずに魔法を使って……どんな不幸が待っているのか……

でも、話したいことが僕にはたくさんあるんだ。真面目な事からくだらない事まで。この時間はいつまで続くかわからないから……

僕はちよつと前まで色々なことに怒っていた。

一人目は生まれて初めて告白された相手に。

坂本亜由美という女の子は(たぶん)僕の気を引こうと、屋上から飛び降りようとした。それは武内の事もあり、死に対して酷く敏感になっていた僕を苛立たせたに過ぎない行為だった。

そして、僕は彼女を脅すつもりで「死ぬなら死ねばいい」と言った。

しかし、彼女はそれに怯まなかった。さらには自分の気持ちを貫いて飛び降りる。結局は僕の魔法で助けたけど。(当然その後、階段を転げ落ちた)死を軽んじた彼女のやり方は最悪だと思う。

ただ、彼女の気持ちは後ろに座っている武内を見ているとなんとなく理解できた。

どうしようもなく真っ直ぐなのだ。

それに対して僕はどうだっただろうか。

正直、今日は武内の見舞いに行くつもりは無かった。それどころか関わり合い自体を止めようとも思っていた。「付かず離れず」が信条だった僕にとっては当然のことだった。

だけど、そんな気持ちを吹き飛ばしたのは間違いないく坂本亜由美の行動だったといえる。ウジウジしてた僕の心に行動を促した。

少なくとも父さんの死によって僕が失ったものを彼女は持っていた。僕はどこかで斜に構え、「真っ直ぐな気持ち」を馬鹿にしていたのかもしれない。そんなことは稚拙で格好悪い事だと。

しかし、その反面、むき出しの真剣な気持ちに怖かったのだと思う。自分が受け止める器量があるかどうか不安だったのだ。

坂本亜由美の告白にしても武内の自殺にしても。

でも、そんなことは気にしないことにした。

格好つけて何も伝えないよりも、拙くても良いから自分の気持ちを伝える方が大切だと思った。

なぜなら父さんのしにしても武内の自殺騒ぎにしても、僕は悔しかったのだ。その苦しみを教えてもらえなかったことを、軽減してやれなかったことを。なにより僕から彼等の気持ちを聞いてやれなかったことを。

だから僕の気が変わらないうちに、まずは武内に自分の気持ちを伝えようと思う。

武内を父さんと同じ結末にはさせない。事情は違えど、死んで欲しくないことには代わりないんだから。

それにしてもホウキというものは、やはり座り心地が悪かった。特に男はまたがって乗ってはいけない。後ろの武内は横座りして僕に掴まっていた。わずかに僕の体をつかむ武内の両手を感じながら僕は最初の言葉を探していた。

だけど最初に声を発したのは武内だった。

「なーんか、いい眺め」

さっきまで塞ぎ込んでいたのだが、どうやら彼女の気は晴れたみたいで安心した。

反対に僕はといえば緊張をしている。なんせ、これから言うセリフはひどくキザで恥ずかしいものだからだ。

心の中で呪文を唱える。「伝えることは恥ずかしくない」「伝

えることは格好悪くない」……まだ不安だ。ちょっと深呼吸してみるか。

などと色々考えていると武内から声がかかってしまった。

「どうしたの？ 人をこんな空中散歩に連れて来ておいて黙ったまま？」

いきなり出鼻を挫かれてしまった。僕は自分でも分かるほど動揺しながら、小さな声で武内に話しかけてしまう。

「あのさ……武内」

「何？」

あっさり返答されてしまった……おい、次どうするよ。父さんみたいに死のうとしなくなるにはどんな言葉をかけたら良いんだ。

……んな都合の良い言葉あるはずねえ。

散々悩んだ末、ようやく無難な言葉が見つかった。

「退院したら、学校に来いよ」

「うーん……」

しかし、武内はあいまいな返事をした。少しだけ不安になる。

そう考えたら、なだか僕は必死になっていた。

「お前さえ良ければ朝、迎えに行つてやってもいいし」

「でも……」

「だから、黙るなよ」

……しまった。ちよつと必死すぎたのか？

僕は横目で武内の少し困つたような表情を見逃さなかった。

でもそんな心配をよそに武内は軽いトーンで答える。

「いいよー。だって、一緒にいたら坂本さんに悪いもん」

「待て待て！ オレは別に坂本と付き合つてないぞ！！」

僕は結構勇気を出して学校へ誘つたにも関わらずあっさり断られた事や、坂本の話が出てきた事を含め色々な意味で慌てた。

そんな僕に武内は坂本の話を重ね掛けてきた。

「でも言ってたもん『私は広野貴明以外の男には興味ないの!』って」

「うっ……」

それ以上何も言えなかった。

こういった話では武内には敵わないのだろうか。

少しだけ、めげてしまった。

日は確実に落ちようとしている。僕達は日を受けて確実に赤く染まった。

僕はさっきの失敗を挽回しようと考えていた。そして思いついたのは駅へ連れて行くことだった。

確かさっき「男は星の数ほどいる」と発言したばかりなのでいい機会だと考えた。

「あれをみるよ」

僕は後ろを向き、駅のほうを指差す。駅周辺では大勢の人たちが家路を急いで、さながら川の流れのようになっていた。

「すごくないか？」

「何がすごいのか？」

「あの人の流れだよ。僕はああいうのを見ると『すげー、生きてるなー』って思うんだ」

そして次の言葉「なっ、さっき言った通り男なんて星の数ほどいるだろ？」につなげようと武内へ顔を向けた。

「……!」

その瞬間、僕は言葉を飲み込んだ。

夕日に照らされた武内の笑っているような、泣いているような……なんだかやるせない表情が見えたからだ。

この顔を見て思い出したことがあるのだ。

それは武内の復讐に付き合う初日、僕の一言に端を発する。

『お前の復讐には付き合おうと言ったけど、お前と仲良くするなんて一度も言っていない』

これはやたら近づいてくる武内を引き離したくて、つい言ってしまった言葉だ。

それに対して彼女は今のような表情をして僕と距離をとったのだ。結局自殺騒ぎが起こるまで、武内は校内で僕に話しかけることは無かった。

まずい。もしかしたら今も同じ状況では？

武内の気持ちが離れてしまっている？

そう直感で感じ取った。

——取り戻すなら今しかない。

僕に見られていることに気づいたのか、武内は表情を明るく変え、ことさら軽い口調で、適当と言わんばかりに返事をした。

「ふーん」

僕はすっかり我慢できなくなっていた。

だからハッキリ言うことに決めたんだ。

「少し前からお前に言いたかったことがあるんだ」

「なに？」

いざ、言つとなると緊張もするが、さっきのように空回りする感覚は無い。僕は背筋を伸ばし、決意を固めた。

「武内、学校でさ、別に話しかけてきても良いから」

「広野君？」

予想通りというべきか、武内は眉間にしわを寄せた。だけど怯むわけにはいかない。

「……駄目だよ。広野君まで巻き込むわけには行かないよ」

「そんなの気にしない」

「私が気にする」

「お前なあ……」

何でこんなに意固地なんだよ！

思わず怒ってしまいそうな自分をなんとか抑えた。

だが、武内には今までクラスののけ者にされ続けた負い目や引け目があるんだろう。そう考えると武内は土屋と別れてからは常に独りだったんだ。

であれば、教えてやらなきゃいけない。お前は別に独りじゃないって。

「でも……もう無理だ」

「なんで？」

「だって僕とお前は共犯者なんだから」

僕は恥ずかしくて武内へと顔を向けることができない。きっと耳まで真っ赤だ。

だけど真っ直ぐな気持ちは伝えなきゃ意味が無い。馬鹿にしちゃいけない。

「僕はお前の復讐に加担した。十分、アイツ等に喧嘩を売ってる」

「それは私が無理やり……」

「途中まではな」

「途中まで？」

そうだよ。僕はいつのまにか武内と過ごす放課後が楽しくてしょうがなかったんだ。

たから結局この病院へやってきたんだ。また、同じ日々が過ぎたくて。

「いい加減気付けよ。オレの言いたいことを」

「え？」

くそっ、緊張してやけに言葉が出にくいな……

僕は意味も無く何度も咳払いをした。

「お前が入院している間、分かったんだよ」

「なにを？」

「一人で下校することの物足りなさが」

「……広野君」

本心だった。死ぬとか死なせないとかどうでもいい。ただ、ずっと楽しく過ごしたかったんだよ。父さんにしても武内にしても。

「また騒ぎたいんだよ。それがどんな空騒ぎであつても」

他人から見れば、かなり大げさで恥ずかしいことを言つたに違いない。でも、それでもいいじゃないか。この言葉は彼女に届きさえすればいいんだから。

そして僕は武内の言葉を待った。

しかし、しばらくたつても返事はこない。

僕の緊張はピーク達した。

「……そんなこと言つたら駄目だよ」

という言葉と同時に彼女は僕の背中に体を密着させてきた。緊張はピークに達する。

「ドキドキしてる……広野君、あのね……」

この言動と行動の違いを僕はどう解釈したら言いのだろうか？

イエス？ ノー？ ハッキリしてくれ。

僕は頭に血が上りつつ次の言葉を待った。
すると……

「……緊張してる？」

「え？」

「さつきから私の顔に心臓の音が響くんですけど」

「はあ？」

「なにに？ さつきの言葉寝ずに考えた？ うんうん、カッコよかったよ」

「お前なあ……」

撃沈。折角の勇気が彼女には全然伝わっていなかった。

まあ……でも、こうやって軽口をたたけるといふことは元気になった証拠だよな。

こうなったらポジティブシンキングでいこう。

何でも来いっ！ なんでもシンキングだ！

「悪かったな緊張してて。しかも、ありがちな言葉だったしな……」
「ありがちな言葉でいいよ。どんな言葉でも一番重要なのは『誰に言ってもらうか』だから」

「な、なんだよ急に……」

自分でもわかるくらい顔は真っ赤になっている。顔が熱い。

それからしばらく、武内は黙って僕の背中に体を預けていた。

僕は間が持たなくなつて、ホウキをUターンさせて病院に戻ることにした。

帰り道はお互い黙っている。僕はさっきのセリフの後悔で頭の中がいつぱいだった。

武内はどうせ土屋のことでも考えているのだろうけど……

「そうだね。うん」

なぜか彼女は急に話し始めた。

「どうした？」

「私、退院したら……学校行くよ」

「ええっ!？」

急にどうしてそんな変化が？ と不思議に思ったが、結果よければ全てよしという気がした。

「あつ、でも一人で行けるからご心配なく。坂本さんに逆恨みされるのはごめんだもん」

どうやら彼女は僕と坂本をくつつけたらしい。

ここはちゃんと弁明をしなければ。

「だからそれは——」

「うっん、いいの、いいの」

武内は手をひらひらと揺らして納得している。

これは非常によくない。

僕がさらなる説明を加えるべく思索していると、後ろで武内は独り言のように呟いた。

「いつまでも塞ぎこんでもいられないよね。それに……」

「それに？」

「広野くんがいるから。また自殺しても魔法で何とかしてくれるんでしょ？」

「なんとなく『広野くんがいるから』で止めておいてほしかったよ
うな……」

「私も坂本さんのようにハッキリ物が言える女の子になりたいな……」

「いや、それは考え直してくれ」と言おうとしたが止めた。

「なんにしても武内が自分から動き出すと言ったのだ、よしとしよう。」

そうこうしているうちに病院が次第に見えてきた。

病院に到着したら今日もじき終る。

また明日から僕達の戦いが始まるうとしていた。

第27話 「蠢動」(前書き)

今回からお話の展開も後半突入なので、簡単な登場人物紹介と前回までのあらすじを書いてみました。
必要なければ読み飛ばしてください。

<登場人物>

● 広野貴明

魔法を使える高校生。自分の運を媒介にして魔法を唱えるため、唱えた後は不幸が訪れる。
父親の事件をきっかけに深く人と付き合うことを嫌うようになる。
しかし、武内亜也との出会いで少しずつ心境に変化が訪れる。

● 武内亜也

広野と同じクラスの高校生。「リスカの女」と言われていて自傷行為を繰り返す女の子。
飛び降り自殺を図ったところを広野に助けられる。元彼の土屋祐介のことが今でも好き。
それゆえに過去を引きずり、ネガティブな思考に陥りやすい。
しかし、広野との出会いで少しずつ前向きな考え方に変化しつつある。

● 坂本亜由美

広野と同級生。中学生の頃広野に助けられたことがあり、その頃から好意を抱いている。
土屋祐介の元彼。しかし、坂本は彼との付き合いを練習だを称し、もはや名前さえ覚えていない。
容姿端麗で頭もよい、積極的な女の子。

●土屋祐介

武内の元彼。

誰にでも優しく、女子に人気がある。

●門脇健治

広野と同じクラス。

いい加減な性格とガラの悪さで、あまり評判は良くない。

なぜか坂本亜由美と仲が良い。

<これまでのあらすじ>

クラスの嫌われ者だった武内亜也が飛び降りる現場を目撃してしまふ広野貴明。

とつさに武内を魔法で助けてしまふ。彼は運を媒介に魔法を唱える魔法使いだった。

武内に魔法の存在を知られてしまった広野は半ば強制的にクラスメイト達への復讐を頼まれる。

最初は嫌々復讐に付き合っていたが、復讐のやさしい内容や彼女自身のキャラクターにだんだんと打ち解けていく。

しかし、武内の元彼、土屋祐介を目の当たりにして、武内は復讐を止めてその場を立ち去ってしまう。

その夜、自殺を図る武内。

門脇からのイタズラ電話で武内の身の案じた広野は彼女の家へ向かう。

武内の家に着いた広野は血まみれになった彼女を目の当たりにしてショックを受ける。

なんとか病院まで運んだが、これ以上彼女と関わりあうことを止めようと考ええる。

一方、広野と武内の仲を誤解した坂本亜由美は計画を前倒しして、広野へ告白する。

坂本は以前、広野に危ないところを助けてもらって以来、彼に好意を抱いていたのだ

そして自殺まがいの行為で広野へ告白するが、逆に反感を買い、振られてしまう。

それでも諦めない坂本は武内が入院している病院へ行き、広野は渡さないと宣言する。

坂本が土屋の元彼女ということもあり、武内は彼女と口論となってしまう。

そこへ訪れる広野。坂本は「まだ好きだ」と病室を後にする。戸惑う広野。

病室に残された武内と広野。土屋のことで落ち込み気味の武内を見て広野は魔法を使つての空中散歩を提案する。

広野の拙いが必死な励ましに武内は元氣を取り戻す。

そんな武内を見て広野もまた、嬉しく思ったのだった。

それでは本編をどうぞ。

第27話 「蠢動」

武内を励まそうと思って、魔法使い定番のホウキでの飛行をやったのが間違いだった。

その日の帰り道、なんと僕は車にはねられたのだ。

幸い（？）車は急ブレーキを踏み、十分スピードが落ちたところでぶつかっただので、軽傷ですんだのだが……

とりあえず「一応、検査入院」ということで現在、入院している。しかも、個室だ。なんでも、僕をはねた人の知り合いがやっている病院らしい。僕自身は別にこの事故のことを大げさにするつもりはさらさらないので、病院にはこだわらない。

「それじゃあ、着替えはここに置くから」

「わかったよ」

病室では着替えを持って来てくれた母さんがいる。

たかが一週間程の入院なのに大袈裟だ。

「お父さんもね、明日来るって」

「あっそう……」

僕の態度を見て母さんはため息をつく。

「貴明、もう少しお父さんに愛想を——」

「今、反抗期だか無理だよ」

「それは自分で言うものじゃないでしょ……」

実は事故をした後、病院へ真っ先に駆けつけてくれたのは今の父だった。

その時、僕は大了したこと無いからと追い返したのだ。

正直、死んだ父のこともあり、仲は上手くいっていない。

どうしても納得できないのだ。

命を捨てた死んだ父と、命を拾った今の父の運命を。

そんな僕を見て母さんはまたため息をつく。

何とかして僕とあの人を仲良くさせようとしている態度を見るにつけ、自分の気持ちがどんどん荒んでいくように思えた。

「貴明」

「なに？」

「魔法も程々にしてね。死んだお父さんもよく怪我してたから……」

「母さんに言われたくない。魔法が使えない人にはこの気持ちはわからないよ」

「貴明……」

本当はこのまま続けて死んだ父さんのことを責めてやりたい衝動に駆られたが、何とか自制した。それを言ってしまうは全て終るような気がしたからだ。

父さんが守りたかった家庭だから僕も我慢しなければいけない。

「ごめんなさい……」

「……謝らなくていいよ」

肩を落として落ち込んでいる母を見ると自分を責めなくなる。

だけど、同時になぜあの時、父さんを止めてくれなかったのかと思うと、やるせない気持ちになった。

「じゃあ、母さんがえるから……」

「退院まで来なくていいよ。あの人にもそう伝えておいて」

「貴明っ！」

「なに？　僕にこれ以上の事を言わせる気？」

「……父さんは何も知らないんだから、責めるのはやめてあげて」
そう言い残すと母さんは病室を出て行った。

静かになった病室は父さんのことが頭から離れず、上手く切替が
できなかった。

誰でも良いから忘れさせてくれないか……

「あの……」

するとタイミングよく病室のドアが開く。

あまりのタイミングの良さに、僕は母さんが帰ってきたのかと思
った。

「なにしに戻ってきたんだよ、帰ってくれ!」

「えっと……邪魔だった?」

ドアからそつと顔を覗かせたのは母さんではなく武内だった。

僕は慌てて武内にあやまる。

「あ、いや……ごめん。人違い」

「そう……じゃあ入って良い?」

「どうぞ、どうぞ」

「失礼します……」

ゆつくりと室内に入った武内は、辺りをキョロキョロと伺った。

「へえ、結構良い個室だね」

「そうかな?」

武内がお見舞いに来てくれたことで、僕の気持ちは落ち着いてい
った。

そして、武内は僕のそばまで来ると、マジマジと見つめてくる。

僕はすぐに照れくさくなって、横を向いてしまった。

「ど、どうした?」

「広野君でも『帰ってくれ』なんていうんだなと思って」

「ああ……」

横目で武内を見ると、彼女は微笑みながら僕へ話しかけた。

「深くは詮索しなから」

「助かるよ」

「……でも、浅くは聞くよ」

「なんだそれは?」

「要するに……愚痴ぐらいは聞いてあげるって事」

「ああ、そういうことね」

武内の心遣いがなんとなく嬉しかった。

触れそうで触れない距離。

今はそれが良いと思った。

「ねえ、お見舞いのリンゴ、剥いていい？」

「え？ 剥いてくれるのか？ ありがとう」

「何言ってるの？ 私が食べるために決まってるでしょ？」

「お前なあ……」

武内は机に置かれていたリンゴを手にとると早速、同じく置いてあった果物ナイフを取って剥き始めた。

彼女は少し前、自殺騒ぎを起こした。それはいつもの自傷行為とは違い、本気の自殺だった。武内は色々あってかなり落ち込んでいたが、最近ようやく明るさを取り戻した。

しかし、その明るさが本物なのか、僕にはまだよく分からない。

目の前の武内は手際よくリンゴを剥いている。剥かれていく皮も薄く、そして長い。

そしてチラチラと制服の袖から覗く手首からは、いくつもの切り傷が覗く。

今までは気にもしなかったけど意識すれば勝手に目に入った。僕はなんとなく武内に悪いような気持ちになり視線を逸らした。

「広野君。あのさあ……」

「なんだよ」

僕は手首のこと忘れようと、一生懸命にリンゴを向く手さばきを見つめていた。

武内はやや間を置いて僕に話しかけた。

「……この前はありがとね」

「何が？」

僕は何も考えずに答えた。

すると武内の手が止まり、ふっとため息をついた。

「はあ。言わなきゃわかんないの？ そんな気持ちであんな恥ずかしい言葉を言ったわけ？」

「はあ？ …… あっ」

僕は我に返り、この入院の原因となった空中散歩のことを思い出した。

あの時言った色々な恥ずかしい言葉が蘇り一気に顔が赤くなる。

「バ、バカ！ あんな事二度と言うか！」

「恥ずかしかった？」

「当たり前だろ！」

「…… ぷっ、あはは。 そうだね、もう止めておいた方が良いよ」

僕を見て武内は声を上げて笑い出した。

そうだ、こいつは笑っているほうが魅力的だ。

しかし、自分の名誉のため、僕は話を変えることにした。

「それよりもさあ、お前」

「何？」

「リング剥くの上手いな。 さすが、手首を切ったことがあるだけにナイフの扱いも上手い」

武内の笑い声が止まる。

「はっ ……」

僕は冗談で言っただつもりだけど、すぐに余計なことを言っただけという事実気づく。

一瞬にして場は凍りつき、病室に沈黙が漂った。

…… 空気の読めない自分に突っ込んでいいですか？

でも、この沈黙は長く続かなかった。

それは騒々しい足音を立てて、誰かが病室に近づいて来るのが分かったからだ。 自然に僕と武内の視線はドアに注がれた。

そしてドアが勢い良く開かれる、と同時に長くて綺麗な黒髪が目に入った。

「広野君！！ 大丈夫？ 怪我はない？ 後遺症は怖いわよ！」

「坂本！？」

「あつ……坂本さん」

「でも、そんな心配も私が来たからもう安心!!」

さっきまでの沈黙を破って、大声で病室に入ってきたのは坂本亜由美だった。

彼女は僕が初めて告白された相手だ。

しかし、その時は彼女自身の行動と武内の自殺騒ぎで僕は腹を立ててしまい、結局、彼女を振った。

初めて告白されたというのにそれを断る。良く考えてみれば、もったいないことをしたようにも思える。普通ならそれで話は終わるのだが、彼女は僕を諦めないと言ってくれた。

病院にも毎日見舞いに来てくれている、真っ直ぐな子である……多分。

「うん。一応。軽傷だから大丈夫だって昨日も……」

「駄目だよ、交通事故を甘く見ちゃ!」

すると彼女はずんずん僕に近づいてきた。

よく見ると、いや、見ないでも背中にとてつもなく大きなリュックを背負っているのが分かった。何が入っているんだよ……

「こんな病室に閉じ込められて大変でしょう? 何が必要? 何でも持ってきたから!! 暇つぶしに、はい!!」

というと彼女は100冊はあろうかという本をリュックから取り出した。

「何これ」

「『こち鶴』全120巻。マンガ好きでしょ?」

「まあ、好きだけど……」

「あと、それと病院の食事って味気ないでしょ? だ・か・ら・炊飯器に秋田こまち。大丈夫!! ちゃんとお米は私が研いであげるから!! それに、それに……」

このままでは病室が荷物で埋まってしまう。いや、それよりもなぜリュックにこれだけの物が入るんだ？

僕はなんとなく身の危険を感じた。

「いや、もういいよ」

「……なぜ？」

するとリュックを漁っていた坂本の動きが止まる。

まずい、怒らせてしまったかな？ 慌てて僕はなるべく無難な言葉を探した。

「坂本の気持ちだけで十分だから……」

坂本は僕をじっと見つめる。

なんだか後ろめたくて僕は目をそらす。

「気持ちだけって……なんか『無難な言葉を選びました』って感じがする」

げっ、読まれてる。

僕が慌てている間に、坂本は次のターゲットに目をつけた。

「っていうか、何で武内さんがいるのかしら？」

「え！？ えっと、それは……」

「ここは部外者以外立ち入り禁止よ」

「ええ——っ！？ 私部外者？」

「そうね。むしろ邪魔者？」

「そんな……」

こうなったらもう坂本を止められない気がする。

最初は僕に対して大人しそうな態度を見せていたのだが、だんだん慣れてくると活発で明るく、必要以上にお節介な女の子だということが分かった。

「武内さん、闘志無き者はグランドから去りなさい！」

「で、でも、ここグランドじゃないし……」

「じゃあ、好意無き者は病室から去りなさい！」

「そんな好意とか言われても……」

「お前達、頼むから余計な騒ぎだけは起こさないでくれよ……」

武内は続けざまにやってくる言葉にタジタジだ。

……にしても坂本、お前の言葉の選択はどこか古いぞ。

そんな騒ぎの中、再び病室のドアが開かれた。

皆の視線が一気に集まる。

「すいません、ノックしても反応がなかったもので……」

「あつ、アナタは……」

入り口に立っていた相手。

それは僕が事故った時、ぶつかった車を運転していた女性だった。

第28話 「死んで欲しかった」

「あの、お邪魔してもよろしいでしょうか？」

「……あつ、はい」

控えめな態度で病室に入ってきたのは、南美代という女性だ。

ぶつかった車の運転手で、事故直後、すばやに対応をしたのはこの人だ。救急車（その場で僕はピンピンしていたけど）を呼んで、入院の手続きをすべてやってってくれた。（当たり前といえば、当たり前かもしれないが）。

「ぬっ……敵だ」

「坂本、少し黙っててくれないか」

「……わかった」

南さんは静々と歩いて病室に入る。

年は20代後半ぐらいだろうか？ 隣にいる二人とは雰囲気が違う。僕の中では大人っぽい部類に入る人だ。

坂本からの刺す様な視線を浴びながら、南さんは僕の前まで来ると深々と頭を下げた。

「このたびは本当に申し訳ありませんでした」

「いや、いいんですよ。幸い骨も折れてないし、脳にも異常がないって言われたし」

本当は被害者なのでこんなことを言わなくてもいいのかもしれない。

実際、事故は起きた。でも、その原因が僕の魔法にあるなんて言っただけ信じてもらえそうにないから、なるべくなら穏便に済ませたいと考えたのだ。

「ありがとうございます。でも、ぶつかったのは私ですから……」

「今のところ後遺症もない、それになにより学校も休めたから、僕はOKなんですけどね」

なんて言いながら僕は南さんに笑いかけた。もちろん、雰囲気を良くしようと努力したものだ。

「それに急に休みができる嬉しいものですから」

「ですね、ふふふ。……あつ、ごめんなさい」

南さんも僕に釣られて口にそつと手をあて微笑んだ。

その様子を僕はホツとした。

すると隣にいた武内の口から僕だけに聞えるように独り言を呟いた。

「……加害者にまで愛想振って、このお人好し」

「うつ……」

武内、なぜそこまキツイ事を言うんだ……

幸い、南さんには聞えていなかったようで、彼女は話を進めた。

「色々とした手続きは弁護士さんに任せてあるので、この度はせめてお詫びにとうかがいました」

「わざわざご丁寧に」

「はあ……」

また、武内が僕だけに聞えるような溜息をついた。

そんなに僕の態度に不満があるのか！？

「がるる……」

さらに坂本は南さんを上から下をなめるように睨んでるし……

なんでお前たちは、もつと「上手く人間関係やっていこう」って
いう気が無いんだよ！

……自分が器の小さい人間にみえて馬鹿みたいじゃないか。

大人の余裕なのか南さんはあまり気にしていない様子なのが救いだっ
た。

「それにしてもお元気そうだなによりです」

「まあ、入院なんて少し大げさなんですよ」

「いえ、何かあると大変ですから」

そこまで言うと、南さんは一瞬視線を逸らし、何か続き言つのをためらつたようにみえた。

しかし、しばらくして意を決したのか、話し始める。

「……申し訳ありません」

「気にしませんって」

すると急に南さんの口は真一文字になり、眉間にも皺がより、表情が険しいものに変わっていく。

「広野さんが元気なのは良い事なのですが……」

「はい」

次の言葉をハッキリとした強い口調で南さんは言った。

「できることなら死んで欲しかった」

「え？」

初め僕は意味が分からず、キョトンとしていた。

さらにに南さんは話を続ける。

「あつ、安心してください。もう、大丈夫ですから」

「何が？」

僕は少し腹が立った。いくら、軽傷でも事故は事故じゃないか。

そう思っているのは、僕だけじゃなかった。

「ちよつと、失礼じゃない！？ 『死んで欲しかった』だなんて！」

「おい、坂本」

「お願い言わせて。そんな態度で『申し訳ありません』なんて言われても、ぜんぜん納得いかない！」

我慢できなかったのか、坂本の怒鳴り声が病室に響く。

僕は坂本が代弁してくれたことで、気持ちがスッキリした。

それに対し、南さんは慌てて頭を下げた。

「す、すいません。こんなことおかしいですよね」

「当たり前っ！」

「……でも……これは広野さんの為ですから」

「はあ！？ ちよつと、何言っ——」

僕は文句を言おうとする坂本を止めた。
そんな行動ができたのも、坂本が怒鳴ってくれたお陰で、何とか冷静さを保てていたからだ。

なぜこんな事を言うんだろう？ 何か訳があるのかもしれない。
また、武内にお人好しと言われそうだけど、僕は聞いてみることにした。

「なぜ、死ぬことが僕のためなんですか？」

南さんはしばらく考えた後、小さいがしつかりした声で答えた。

「……それが『本当の解決方法』だから」

「えっ！？ 今なんて……」

武内が何か呟いたが、僕にはハッキリと聞えなかった。

それよりも……僕はからかわれているのだろうか？

このままでは怒鳴りそうだったので、必死に気持ちを抑えた。

「もういいですから、今日のところは帰ってもらえますか？」

僕はなるべく丁寧に言った。

しかし、言葉の勢いは明らかに怒りを隠せなかった。

「そうですね、今日は帰ります。ごめんなさい」

結局、最後まで南さんが何の目的でここへやって来たのかわからずに、追いついてしまった。

いや、むしろ追いついてスッキリした。

南さんが去ったあと、坂本は息巻いた。

「まったく、失礼な人！ ひっぱたいてやろうと思った！」

「今度、頼むよ」

僕は思わず同意してしまった。

「……でもあの人、何かあるんじゃないの？ 何か途中から様子が変だったし……」

武内が南さんの弁護をしたことに僕は少しムツとした。
死んで欲しいなんていう人に理由なんてあるのか？

それにいち早く反応したのは、坂本だった。

「あなた、どっちの味方なの？ 向こうの味方をするなら敵よ！ チーム広野から出てって！！」

チーム広野って何だよ。

「そうじゃなくて……私は……」

「あー、あなた『……』が多すぎ！ それに、言い訳は聞きたくない！」

「ただ、私はあの人が言った『本当の解——』」

「うるさい、うるさい！ だいたい、武内さん、なんでアナタがここにいるの？」

「そ、それは……」

「手に持つてるリング貸しなさい！！ 私が広野君に剥いてあげるんだから」

坂本はズンズンと武内に近づいて手を伸ばし、強引にリングを奪おうとする。

「え？ でも……これは私が食べ——」

そして武内も必死に抵抗する。

「いいから早く——！」

二人は押し問答になり、リングとナイフがお互いを行ったり来たりした。

見ている僕からすれば、非常に危ない！

すると、予想通りナイフが二人の手を離れた。

「あっ……」

「いやーっ、広野君、大丈夫！？」

気づけばナイフは僕の寝ているベッドへ突き刺さっていた。

一気に血の気が引いていく。

「どうしよう、どうしよう！ 広野君が！ 広野君が！ 病院に殺されるっ！——」

「……刺さらなくて良かったね」

お前たちがやったんだろ！

僕はウンザリして、大きく溜息をついた。

「もう、今日は二人とも帰れ。面会時間も過ぎてるし」

それを聞いた坂本はすかさず持っていたリュックへ手を伸ばした。

「大丈夫！！ちゃんと泊まれるように寝袋とか持ってきたし！」

「あつ、面白そう……」

武内、僕は面白くないぞ。

寝袋を取り出した坂本をみて、武内がもの欲しそうに指をくわえてみている。

そんな状況に僕は耐えられなくなった。

「だめだ！！二人とも帰れ！！」

「えっ……」

僕は半ば強引に二人を追いつ返した。

第29話 「真夜中の侵入者」

さすがにあの二人がいなくなると静かになった。

と同時に何もすることが無くなった僕は自然に色々なことを整理し始めた。

それにしても今日は武内と坂本を追い出せたけど、明日もこんな煩い日が来るかもしれないな。

なぜ、女の子が集まればあんなにうるさくなるのだろう。正直、巻き込まれる男の身にもなって欲しい。

……なぜか不意に今、僕はとてつもなく贅沢な悩みを持っているのではないか、とも思えたがその辺はあまり追求しないことにしようと思う。

にしても今の僕は、周りの人間と距離を保っていた以前と比べれば大違いだ。

これが、良い方向に進んでいるのか？ と聞かれれば「？」だが、悪い方向に進んでいるとは思えない。まあ、そういった結論は後から分かるものだと思う。

元をたどれば、僕が武内を助けなければ、こんなことにはならなかった。

しかし、それを言っても始まらない。あいつのお陰で楽しい思いもしたし、しんどい思いもした。こんなに起伏のある生活は、父さんが死んで以来なかった。

武内に出会わなければ、おそらく、『なにもない』高校生活をただ、『こなしていた』だけだったと思う。

それに最近じゃあ、魔法を使うのも悪くない、なんて思ったりする。もちろん車にぶつかるのは嫌だけど。

とにかく本当に武内には幸せになってもらいたいと思う。

土屋と、よりを戻すにしろ、しないにせよ、彼女の望む通りにな
ってほしい。

それ以上の感情は無いはずだ……多分。
こんなことを言ったら坂本に怒られそうだけど。

坂本亜由美……僕に告白してきた女の子だ。

好きだと言われるのはもちろん、あんなに積極的に迫ってくる人
間と出会ったのも初めてだ。煩わしくもあるけど、居ないならそれ
で寂しかったりもする。

それに積極的な坂本を見ると、うらやましくなる時がある。
自分の気持ちを真っ直ぐぶつける事が、僕の付かず離れず上手くや
っていくやり方とは大違いだからな。

最近は特にいつもテンション高いけど、あんな子でも落ち込む時
がくるのだろうか？

……なさそうな気がする。なんでも正面からぶつかりそうな子だ
からな。なんせ、南さんが現れただけで、睨みつけるなんて僕には
ありえない。

にしても、南さんはどういっつもりで、僕に会いに来たのだらう
か。

実は車にぶつかった瞬間から引つかかっていたことがある。

それはぶつかる瞬間、運転席に座っていた南さんは笑っていたよ
うな気がしたからだ。

……こんなことを考えるとネガティブになる。もう寝ようかな。
いつの間にか僕はウトウトし始めていた。

そして夜になり、すぐ消灯時間になった。

普段使わない頭を使ったのが悪かった。消灯時間までに軽く寝て
しまったために今、完全に目が覚めている。

暗くなった室内でベッドのライトを付けるのも嫌だった僕は、力

ーテンを開けることにした。今日は満月のはずだ。

カーテンを開けると案の定、綺麗な満月が空に浮かんでいた。月明かりはうつすらと室内を照らし、なんだか幻想的な気分さえなつた。

……とか、考えていたのも一、二分の話で、いつのまにか僕はベツドの上でゴロゴロしていた。自分の事ながら、風流を感じない男だどつくづく呆れた。

ひとしきりゴロゴロして、ベツトに仰向けになって一息つく。

あゝ、後何時間たったら眠れるんだろう。なんとなく目を瞑り、そんなことを考えていた矢先、気のせいかな窓を軽く叩いた音が聞えた。

『（コン、コン）』

「ん？……気のせいかな」

仰向けのまま目を開け、辺りをうかがうけど何の気配も無い。

まあ、きつと風が何かだろうと思ひ、再び目を瞑った。

やっぱりさっきの物音は気のせいだったのか、病室は静かになった。

第一、ここは二階だし、何もあるわけが無い。

僕は溜息をつきながら壁側に寝返りを打った。

『（ゴン、ゴン）』

すると同時に今度はさっきよりも強く窓が叩かれる音が聞えた。明らかに人が叩いた音だ。

「……まさか幽霊？」

寝返りを一つうてばその窓があるのだが、動けない。

たしかに病院にはそういった類の噂はあるものだけど、まさか自分が幽霊に遭遇する羽目になるとは……考えた末、出た答えは唯一つ。

……よし、ここは無視だ。

僕は目を瞑り無理やり寝ることにした。

『（ガタガタガタツ）』

「な、何だ！？」

今度は明らかに窓を揺すった音だとわかる。

僕は反射的に窓を見た。

すると長い髪の毛を揺らし、幽霊が窓に張り付いていた。

「わあああつ、だ、誰だ！？……ってあれ？」

「早く、開けて！」

「坂本！！」

なんと窓に張り付いていた黒髪の幽霊は坂本だった。

僕は急いで窓に駆け寄り、サッシを開けると坂本は急いで病室へ入る。

彼女は窓から病室に入ると、すぐに窓を閉めて鍵をかけた。

「これでよし……と。はあーっ。死ぬかと思った」

「『死ぬかと思った』じゃない！ 何してんだよ！！」

すると坂本は肩に掛かった髪をさつと手で払いながら答えた。

「え？ 雨どいを登ってそれから——」

「そんなこと聞いてるんじゃない！！」

「だって……広野君の看病がしたくて」

僕が怒っているにもかかわらず、坂本は平然と笑顔で言った。

さも、それが当たり前のように。

その直後、再び窓がたたかれる音がした。

「なんだ！？」

「あつ、忘れてた」

坂本が少しだけ舌を出しながら言う姿に、僕は一抹の不安を覚えた。

恐る恐る窓に近づくと、そこには見覚えのある人物がまた窓に張り付いていた。

「早く、開けて——！」

「た、武内!？」

僕は急いで窓を開けると、武内は急いで病室へ入る。

「ふーっ、さすがにちよつとヤバかったかも」

「『ちよつとヤバかった』じゃない!! 何してんだよ!!」

「え? 雨どいを登ってそれから……」

「そんなこと聞いてるんじゃない!! 二人とも何やってんだよ!!」

「「だって……」」

二人そろって言うな。

「だって、さっきのリンゴ食べたかったんだもん!!」

僕が怒っているにもかかわらず、武内は果物のカゴを漁っている。
「リンゴぐらいその辺で売ってるだろう!!」

リンゴを手にして満足げな武内の隣で、坂本はせつせと寝袋を用意していた。

「坂本もだ! 家の人心配するだろ!」

「大丈夫!! 友達の家泊まるって言うてあるから。それに、いまさら家に帰っても家の人もう寝てるし、私、カギ持っていないし」
ニコニコしながら言う坂本に、さすがにウソだと分かる。

「嘘だろ」

「うん」

あっさりと認めた……すっかり開き直ってる。

すると、坂本は僕に近づき、瞳を細めながら小さくささやいた。

「……好きなんだからしょうがないでしょ?」

「うっ……」

さすがに坂本の方が一枚上手だ。僕は何も言えなくなった。
なんでこんな恥ずかしいことをあっさり言えるんだろうか。

まあ、僕の武内に対しての発言を考えれば人このことは言えないがな……

一方、武内の方はリングに息を吹きかけている。

「お前は帰るよな？」

「帰らないよ。別に家で待っている人もいないし」

「うわゝ、「帰れ」って言いづれゝ！」

困惑する僕に武内はリングを手で拭きながら、俯いた。

「それに……」

「どうした？」

「私のところへ見舞いに来なければ、車にぶつからなかったわけだし……」

武内の言葉に僕は目を丸くした。

「もしかして、責任を感じてるのか？ お前がぁ？」

すると武内は顔を真っ赤にして、そっぽを向いてリングをかじる。そんな後姿を見て僕は噴出しそうになった。

あゝあ、どいつもこいつも……

結局、僕は諦めることにした。どうやってもこの二人は帰らない。それに僕も時間をもてあましていたことだし、話し相手ぐらいにはなるだろう。

「しゃーねえな。じゃあ、話し相手にでもなってくれよ」

「は、話をするだけだからね。変なことしないでよ」

「するか……」

武内は少しうれしそうにした。

「そうそう、変な事するわけ無いでしょ！ だって広野君は紳士だからね」

坂本もうれしそうに返事をした。

第30話 「埒が明かない」

薄暗い病室内で僕達はベッドを椅子に談笑していた。
なかなか楽しく話していたと思っていたのだが……

「駄目だ。埒が明かない」

「どうした、坂本」

それは、痺れを切らしたらしい坂本の提案だった。

「二人つきりで話したい。三人じゃ出来ない話だってあるでしょ？」

「嫌だ」

僕は即答した。そんな危険なことは出来ない。

この場合、坂本云々ではない。僕自身の理性が問題なんだ。

間違いは起こらないと思うが、いまいち自分を信用できない。

しかし、武内は音を立てて手を合わせながら、僕へ笑いかけた。

「あつ、私は坂本さんに賛成」

「おい、武内まで何言い出すんだ」

「いいじゃない、楽しそうだし。それに待ってる間、夜の病院を散歩するのも悪くない」

まったく、真夜中の病院が気にならないなんて、どうかしてるぞ。
でも、武内は本気らしく、ニコニコしている。

「怖くないのか？」

「何回も入院しているから慣れてるもん」

「ああ、お前は病院生活のベテランだからな」

すると武内は口を尖らせて、軽く僕を上目遣いで睨みつける。

「それどういう意味？ まるで私が入退院ばかり繰り返してるみたいじゃない！」

「いや、そういうわけじゃ……」

「まっ、否定しないけどな」

「お前なあ……」

「むつ。ちよつと、二人だけで喋らないでよ」

それを見ていた坂本が僕と武内の間に割り込んで口を出す。

「じゃあ、多数決で決めよ。民主主義的な良い決定方法だと思わない？」

「うんうん、賛成！」

全然思わない。だって、結果はすでに決まっているじゃないか。しかも、すでに僕の意見など無視して、勝手に二人でどちらが先に話をするか決めていた。

「じゃあ、私は外に出てるから。15分ぐらいで帰ってくるね」

そう言つと坂本は病室から出て行こうとする。

僕は真つ先に一番を取るのかと思つていたので意外だった。

「今日はえらく謙虚だな」

すると坂本は何が疑問なの？ と言いたげに首をかしげながら答える。

黒髪がわずかに揺れて、少しだけ可愛く見えた。

「だって、後の方がじっくりいけるでしょ？」

何がじっくりいけるんだ……

僕が実際に突っ込む暇も無く、坂本は病室を出て行った。

「行っちゃったね……」

「ああ……」

坂本が出て行った後、武内と僕は当たり前だが、二人っきりになる。

つーか、やけに室内が静かだ。一人いなくなるだけで、ここまでとは。

僕達は並んでベッドに腰掛けた。

武内は窓の外を見つめながら話し始めた。

「なんか、二人で話をするなんて照れるよね」

「ああ……」

「『ああ』ばかりだね」

「ああ……じゃない。うん」

「それ、全然変わらないから……」

確かに武内とは最近になって、よく話をしたりするようになった。でも、こーやって何気なく話をするという機会は意外に少ない。

こんなに間近で武内の顔を見つめるのもめったに無い。

隣に座っている横顔は月明かりに照らされて、なんかミステリアスに見えていい感じだ。

僕が武内の横顔に見とれていると、彼女は急にこちらへ顔を向けた。

一気に武内の大きな瞳へ視線を奪われる。

「そういえばね、南さんは結婚するらしいよ」

「あ……」

「ん？ どうしたの？」

覗き込む武内に気づき、僕は思わず顔を引っ込めて、正面を向いた。

やばい。心臓がバクバクいつてる。

僕は慌てて取り繕った。

「ま、マジで？ っていうか何でそれを知ってるんだよ」

しかし、武内は別段気にする様子も無く、ニコニコと話を続けた。

「うん、ナースステーションで看護師さんに聞いたんだ」

「なんで、お前がナースステーションの看護師さんと話を？」

「えっと……広野君に追い出された後、坂本さんが『敵を調査する』っていったから。面白そうで付いていったの」

「お前等暇か？」

「暇じゃなかったら、こんなところに居ないよ」

「お前なあ……」

武内と坂本が二人で聞き込みと称して無駄話をしていたと思うと、
なんだかおかしくなった。

そんな僕を見て武内はジト目で突っ込みを入れる。

「でも、坂本さんは広野君に夢中だから暇じゃないけどね」

「うつ……」

なんだろう、この胸に突き刺さるような言葉遣いは……

にしても、ここの病院の個人情報を守られそうに無いな。

「それに私も南さんのことが気になってたから……」

「ああ、そういえば、さっき何か言いかけてたよな？」

「うん。ちよつと私が知っている言葉を南さんが知ってたの」

「言葉？」

「うん。『本当の解決方法』って言葉」

「なんだそれは？」

すると武内は顎に手を当てて天井を見上げ、何かを考えているよ
うな仕草を見せる。

しばらく、その格好でいたが、やがて俯き、さっきまでとは違う
小さな声で言った。

「うーんとね。……話すと長くなるからもういや」

「はあ！？ 中途半端で止めるなよ！」

「今は思い出したいくないことも考えなきゃいけないし」

「——えっ！？」

普段は察しが良い訳でない僕が、直感的に土屋のことだなと分か
った。

それなのに武内は明らかな作り笑いを浮かべながらも、ちゃんと
説明してくれた。

「振られた時に起こったことだから……」

「じゃあ、いいよ。言わなくて」

「うん、ありがとう。でもね……」

「どうした？」

「あの言葉を聞くと無性に我慢できなくなるの」

武内は話しながら、自分の腕をぎゅっと掴んだ。

裾にシワができ、わずかに切り傷が見え隠れする。

瞬間的に僕は武内の血まみれになった手首を思い出した。

「自分を傷つけずにはいられなくな——」

「やめろっ！」

僕は思わず、武内の掴んでいる手に自分の手を重ねた。

「そんなことはもう……絶対にさせないぞ」

武内は掴んでいた腕を放して、僕の手の上に重ねた。

暖かくて柔らかな彼女の手の感触が伝わってくる。

「しないよ、もう」

「え？」

「この前のアレは励ましてくれたんでしょ？ 広野君なりに」

多分、この前のアレとはまさしく空中散歩のことを言っているのだろう。

「え？ ま、まあなあ……」

「さっきはあんなこと言っただけど、ちゃんと届いたよ。広野君の気持ち」

僕は自分で分かるぐらい顔が赤くなった。

そして武内は、さっきまでの作り笑いと違い、晴れ晴れした笑顔だった。

「一度、ちゃんと言っておこうと思って」

「……そうなのか」

「これからは何とか一人で解決できるようにする。誰かに頼ってばかりいられない……そう思う」

「お前……」

武内は今、独り立ちをしようとしていた。

それは、明らかに武内の成長の証だった。

だから僕は思い切って聞いてみることにした。

「土屋はどうするんだ」

すると武内はうつむいて、苦笑した様に見えた。

「……言っただでしょ？ 一人で何とかするって」

それ以上、僕は追求できなかった。

でも、今回はなんとなく不安にならない。

見守ればいいんだ。倒れそうになったら助ければいい。

「でも、あんまり無理すんなよ。どうしても駄目だったら僕を呼べ。魔法で何とかしてやるから」

「……ありがとう」

武内はそのままベッドに寝転ぶ。

音を立てて掛け布団へ沈んでいく武内の体に、僕は何となく目をそらしてしまった。

「でも、いいよね。広野君は」

「何で？」

「だって、あんな感じで好きな子を空中散歩に連れて行けばいいもん。あっ……坂本さんを今度誘ったら？ 彼女ならきっと喜ぶと思うけど」

そう言いながら武内は軽く笑う。

僕もつられて笑った。

「お前なあ、そんなに簡単に魔法使えるわけないだろ。命が幾つあっても足らない」

武内が自殺した時は、こんな風に笑い合える時が来るとは思わなかった。

たったこれだけの事実が素直に嬉しい。

僕は数日前まで無力感を感じていた。

武内と仲良くなったと思っていたのに、彼女が何も言わず黙って自殺したからだ。

でも、色々あって僕は武内の自殺騒ぎのときに思った「他人と親

しくするのはやめる」考え方を変えることにした。
僕の中の結界は彼女達二人のお陰で、少しずつ小さくなっているのかもしれない。

「でもよかった。武内が笑ってくれて」

武内は寝転びながら、僕を見た。

柔らかに微笑んでいる武内に僕は引き込まれた。

「……いつまでもふさぎ込んで、いられないから」

そして僕と武内の視線がぶつかって、結ばれる。

気づけばもう動けなくなっていた。

もう、武内の瞳しか見えない。

「あのさ……お前も喜んでくれたか？」

「何が」

「空中散歩」

僕は何も考えることなく、武内の隣へ寝そべる。

すると武内は静かに瞳をとじた。

「……うん」

「よかった」

自然に僕は武内に近づいていく。

視線の先には月明かりでわずかに光沢を放つ武内の唇が見えた。

あともう少しで――

その瞬間、ドアが乱暴に開いた。

「ちよつと、武内さん！ 何やってるの！」

病室の入り口で仁王立ちで立っていたのは坂本だった！

武内は反射的にベッドから起き上がり、無意味に体操を始めた。

僕はベッドをものすごい勢いで端まで転がって、柵にぶつかった。

坂本、ちよつとお約束すぎるぞっ！

「はい、はい。武内さん、あなたの時間は終わり。まったく、油断も隙もあつたモンじゃない」

この子はどうして言葉遣いが古いんだろう。

と心の中で突っ込んでいると、坂本は僕へと顔を向けた。

「広野君も女狐には気をつけてね」

「は、はい！」

僕はなぜかベッドから飛び起きて、直立不動になっていた。
その隣で体操しながら武内が呟く。

「へえ、女狐ね……」

なに、この状況……助けて。

第31話 「奇襲」

武内がブツブツ何か言いながら病室から出て行く。

坂本はそれをじっくり確認すると、僕を手で制した。

「ちよつと待つて」

すると坂本は病室のドアを開け、顔だけ外へだして辺りを伺っている。

僕は不思議になって訳を聞いた。

「何やってるんだよ」

「よし……邪魔者はいないと」

とか言いながら坂本は病室のドアを閉める。

僕はその行動にピンと頭に来るものがあつた。

「……お前まさか、さつきはそこで覗いてたんじゃないだろうな」

「ま、まさか、おほほほ」

「笑い方がワザとらしいな」

「そ、そう？ まあ、いいじゃない。さつ、お話しでしょ」

そしてベッドをはさんで、僕と坂本はイスに座つて話をすることにした。

武内の時みたいに間違いが起きないとも限らないからな、お互いに。

「やつと、ともに広野君とお話できるね」

確かに坂本とは会つてまだ日も浅いし、初めて会つた時も告白されて飛び降りだったから、まだともに話をしたことは一度もないに等しい。

一体彼女はどんな話をしてくれるのだろうか？

「あつ、そうだ。これ……」

と言つて坂本はリュックを漁りだした。

また何かとんでもないものが出てきそつな予感がする……

僕は少し身構えた。

夕方の勢いで迫られたらひとたまりもないぞ。

「はい、これ」

しかし、予想に反して坂本が差し出したのは数冊のノートだった。表紙には「英語（G）」だの「現国」とか書いてある。

「何これ？」

「各教科ごとにまとめたノートだよ。今、期末テストでしょ？」

「あっ……」

忘れてた。そういえば僕は今入院してるから、退院後、追試組と一緒に期末テストを受けるんだった。

「まあ、クラスも違うし、教科の先生も違うから、テスト対策になるかわからないけど、覚えることは一緒だしね」

「あ、ありがとう」

漫画やご飯（これはどうかと思うけど……）にしろ、テスト対策のノートにしても坂本は本当に僕を気遣ってくれる。

まったく、手ぶらで来てリング食べている奴に一言言ってやりた
いよ。

ベッドに置かれたノートを手に取り開いてみると、確かに各教科ごとのテスト範囲について内容がまとめられていた。

それはポイント別でまとめられていて、読み易いものだった。

「坂本、これ……」

「気にしないで。私がテスト対策に使ったものだから」

んなわけがない。『坂本先生のワンポイントアドバイス』なんて書いてあるし。

しかも、坂本のクラスを担当していないはずの先生が言ったことまで網羅されている。

明らかに僕宛に書かれたノートだった。

「これ調べるの大変だっただろう？」

「そうそう、広野君と同じクラスの知り合いがバカで全然授業聞い

ていないもんだから、大変だったよ」

僕と同じクラスで坂本と仲のいい馬鹿なんて聞いたことはないけど、誰だろ？

さらに坂本はため息混じりに話を続けた。

「しょうがないから、武内さんに聞きながら作ってたし……」

「は？ 武内と一緒に？」

「あつ……」

すると坂本は「しまった」と言わんばかりに口元に手を当てて視線をそらした。

分かりやすい奴だ。

にしても、僕は二人協力してノートを作り上げた事が信じられなかった。

「何だかんだ言つて、お前たち仲良いのか？」

「あつ……いや、これは違うの！ そう、利用しただけです！」

「別に恥ずかしがらなくていいだろ」

「そういうわけじゃ……でも、あの子には一個貸しを作ったのは確かだね」

坂本はバツが悪そうに瞳を泳がせていた。

僕はさつき勘違いをしたのかもしれない。

さつき病室の外を気にしたのはこの事を気にしてたのかもしれない。

自分が武内に感謝してるなんて知られなくなかったのだろう。

「まあ、武内もバカだから大変だったろ？」

「うん、でも大体ノートは完成してたし、私これだけが取り得だから」

と、言いながら坂本は自分の頭を指差した。

そういえば彼女が学年トップの成績だったことを思い出した。

「今のところ彼女に勝てるのこれぐらいだし……」

「ん？ なにか言ったか？」

「うつん、何でもない。あの……ノート喜んでもらえた？」

「もちろん」

「よかった！」

坂本の表情は一気に変わり、柔らかな笑顔に変わった。

その笑顔は月明かりに照らされて、素直に綺麗だと思った。

テストの事は本当に忘れてたし、感謝してもしきれない。

「知り合ったばかりの僕に、ここまでしてくれてありがとう」
すると坂本は首を振った。

「これで少しでも昔の恩返しができたら嬉しいし」

「昔？」

「実は私、高校に入学する前に広野君と会ってるよ」

「い、いつ!？」

「中学二年生だよ」

そんなに前から坂本は僕のことを知っていたのか……

僕はまったく坂本の存在に気付かなかった。

「あの時はありがとう」

「何だよ突然」

「広野君には二度、助けられたから。一度目は中学の時、二度目は屋上から飛び降りた時」

屋上のことは、ばれていた。考えてみれば当たり前か。

それにしても中学校の時に坂本に会っていたのだろうか？

しかも、中二といえば父が死んだ年でもある。

すると坂本はベッドを机代わりに頼杖をついた。

「私、中学校の時、通り魔に会ったの。その時、広野君と広野君のお父さんが魔法で助けてくれた」

なるほど。だから魔法のことを知っていたのか。

あの頃は父さんと一緒になって、いろんな人を助けたからなあ。
少しだけ僕はあの時の「正義の味方」ぶりを思い出して、ニヤッ

いてしまった。

それをみて坂本は「かわいい」と言った。
……て、照れくさい。

気づけば、病室は静まり返っていた。

聞こえるのは、僕と坂本の声だけ。

「通り魔事件の後、実は私、少しだけ人と会うのが怖くなったの。誰にも近づくことさえできなくてね。それで、すっかり病室に閉じこもりつきりになっちゃって……」

坂本が病室に閉じこもりつきりということは、その通り魔事件とは相当心の傷になったというわけだ。

元氣そうに見える坂本にはそんな過去があるのだな、と僕は他人事のように感心してた。

「でも、その時心の支えになってくれた人が広野君、貴方なの」

「僕が!？」

「まるで、正義の味方みたいに颯爽と現れて、去っていった。時間にすればほんの少しだけど、今まで会ったどんな人よりも強烈に私の記憶に残った」

そして坂本が顔にかかった長い髪をかき上げる。

頬杖をつきながら彼女はニッコリ微笑んだ。

「だから……私の憧れ」

坂本は結構ハッキリ物を言うタイプなので、ストレートに憧れと言われるのになれていない僕は、なんだか気恥ずかしくなった。

「言いすぎだぞ」

坂本は大きく首を振る。月光で艶が増した黒髪がふわりと舞う。それほど近くににいるわけじゃないけど、いい匂いがほんのり香る「違う。だってあの頃、斜に構えてがんばる事を馬鹿にしていた私を変えくれたもの」

「そ、それはお前の努力であって……」

「広野君の好みの女の子になろうと努力したの……そして、努力は

報われた」

「えっ……？」

「だって今、広野君は私の目の前にいるから」

……僕は思わず生唾を飲み込んでしまった。

なんだかこのまま告白されても変じゃない雰囲気だ。

そして、僕も雰囲気の流れに流されつつある……

しかし、坂本は表情を変え、僕からは苦笑しているように見えた。

「あゝあ、ここで『好きです』とか言ったら雰囲気出るんだろうけど。でも、今回は言わないね」

僕はなんだか意外に思った。

猪突猛進がモットーのような彼女が意外に慎重だった。

「へえ、てつきり言うのかと思った」

「だって、本気の告白って勇気がいるし……また振られるって結構怖いんだよ」

すると坂本は俯いてしまった。

明るく能天気に見える坂本は、本当はかなり繊細な女の子だった。

「今だって二人きりだから、なんだか緊張して……」

確かに髪をかき上げる手は、心なしか震えている様に見えた。

僕はなんだか坂本が直視できなくなつて、視線をそらす。

やばい、僕は彼女を意識し始めている。

「もつと広野君好みの女の子になつて告白するって決めたから、今日はない」

ふと横目で坂本を盗み見る。実は結構自分の理想に近いじゃないか？

考えてみれば、黒髪で綺麗なロングだし、頭も良いし、なにより甲斐甲斐しく僕の心配をしてくれる。

初めてそこで坂本と二人きりで病室にいることを完全に意識した。

……というか、なんでこう僕は気が多いのだろう。

さっきまで武内といい雰囲気だったじゃないか。

それなのに今、この女の子から目が離せない。

「坂本、あのさ……」

僕は身乗り出して、ベッドの向こうにいる坂本へ近づいた。

その瞬間、大きな音が僕達を襲う。

突然、すごい音をたてて、窓ガラスが割れたのだ。

「きゃあああああっ!!」

坂本が悲鳴を上げる。僕はとっさにベッドをまたいで、彼女をかばう。

ガラスの破片が辺りに散らばり、月明かりで光っている。

さらに割れた窓ガラスからは、誰かが侵入してくるのが見えた。

僕は息を呑んだ。

第32話 「なんとかしてやる」

僕は侵入者に向かい、坂本の前へと立ち、盾となる。

すると坂本はうずくまりながらも、僕の背中にピッタリとついた。

「広野君っ！」

坂本が僕の服を力いっぱい握り締めている。

それだけ本気で怖がっているということだ。

「坂本、大丈夫だから」

「……広野君」

僕は身体をひねって、坂本の頭へ手を乗せる。

少しだけ服を掴む力が緩んだ。

坂本が少し落ち着いたところで改めて正面を向きなおした。

「誰だ！」

目を凝らして暗くてよく分らないが、影から見ると体格はそれほど大きくない。

立つてはいるが、なぜか身体が左右に揺れている。

「広野貴明、死ンデ……」

「その声……」

聞き覚えのある声に僕はとっさにベッド明かりをつけて確かめる。

ライトが点灯すると、一気に姿が明らかになった。

「チッ！」

「あなたは……」

そこには今日、病室へ謝りに来た南さんが立っていた。

ただ、表情は夕方の謙虚な態度ではなかった。

どこか目の焦点があっておらず、僕を見ているようで見ていない。

「南さん！ これは一体どういうことですか!？」

「死ンデヨ……」

僕の言葉を見無視して、南さんは自分のハンドバッグから何かを取

り出した。

それは月明かりで反射して光り、嫌でも刃物だとわかる。

坂本は只ならぬこの状況に、再び僕へしがみ付き震えている。

「嫌だよ……怖い……」

「大丈夫だ。僕の後ろから離れるなよ」

「うん……」

南さんはゆっくりだが、確実に一步一步こっちへ近づいて来た。

大丈夫だと言いながらも、さすがに刃物を目の前にして体が硬直する。

僕自身もパニック寸前になっていた。

かろうじて坂本という存在のお陰で、自分が保てていた。

どうする？ 魔法を使うか……でも……僕は何をためらっているんだ？

しかし、否応無しに結論を出す必要に迫られる。

それは僕がどうやって解決するか考えていると、突然ドアが開いたからだ。

「何かあったの？」

運悪く丁度、僕らと南さんの間に武内がドアから入ってくる形になった。

武内は状況がわからず、病室へ一歩足を入れた。

「武内、早く逃げろっ！」

「えっ！？ ——きゃっ！！」

「——ッ！！」

南さんは素早く片腕を伸ばし、強引に武内の服の襟を掴むと病室へと引き込む。

さらに武内の首へ腕を回すと、首筋に刃物を当てた。

「ちよつと、なっ——！」

武内はそれ以上何も言えなくなった。

「広野貴明！！ 私と一緒に死なさい……」

「何を言ってるんですか！？」

「コノ子ガ殺サレタクナケレバ、オトナシク、窓カラ飛ビ降りナサイ」

「駄目っ！ 広野君、そんなことしちゃ、嫌だからね！」

背中越しに坂本が必死に僕を引き止める。

僕は正面を向いたままそれに答えた。

「大丈夫、心配しなくてもそんなことする気はないから」

「うん。広野君、私を守ってね……」

それにしても夕方、南さんが言った内容を思い出す。

あの時も「死ねばよかった」とか言ってたよな……

「才前ノセイデ、アノ人ハ離レテイッタ！」

「あの人？」

「結婚スルハズダッタノニ……」

「それと俺がどういう関係にあるんですか？」

しかし、南さんは何も答えない。

口は動いているが声になっていないようだ。

「好きな人に振られたんですね……」

「ナニ……？」

突然、武内が恐れることなく南さんへ話しかける。

絡まった腕がキツク締められるが、武内は話すのを止めない。

「苦しいですよ…… 悲しいですよ。 もうどうしようもないんですから……」

「ウルサイ、才前二何ガワカルッ！」

「貴方の気持ちは正確にはトレースできないけど、私にだって好きな人が振り返らない悲しさは分かります。だって私も苦しくて自分を傷つけてしまったから」

「アア……」

そして武内はそつと、南さんの腕に手を添える。

抵抗するわけではなく、慰めるようにそつと。

「でも、大丈夫。かならず立ち直れますから」

「ソナナ事ハナイ……」

「うっん。私には手を引いてくれる人がいました。南さんもきつとなにかあるですよ。そばにあるのに見えていないだけで」

「私ハ……私は……アぁ……あぁ……」

武内は話しながら、南さんを慰めていた。

刃物は相変わらず彼女の首筋に当てられ、いつ殺されてもおかしくない状況なのに。

それは恐らく、さつきから武内が懸命に僕の目をじっと見つめていることに原因があるんだ。

その瞳は「大丈夫だ」と確信に満ちているように、しっかりと光を宿していた。

武内はきつと信じているんだ。

僕は武内の期待を裏切るわけにはいかない。
約束したんだ。

『何かあっても魔法でなんとかしてやる』って。

僕はゆっくり南さんへ手をかざす。

心の中で呪文を唱えた。

その後、大げさに呪文の訳を叫ぶ。

「行けっ！ 純白なるカーテンよ！！」

するとカーテンが突然伸び、南さんの腕へ絡みつく。

「えッ！？」

続いて左右へ揺れるカーテンに、武内へまわされた南さんの腕が離れ、壁際に吹き飛ばされる。

武内の体が自由になり、よろめく様に前へ数歩歩き出す。

僕はその機会を見逃さなかった。

「武内っ！」

「うん！」

武内は何度も足をもたつかせつつも、何とか僕へと走りこんだ。壁に激突した南さんはその後、動く様子も無い。

どうやら気絶しているようだ。

僕は走りこむ武内を受け止め、声をかけた。

「武内、大丈夫か？」

「うん。信じてたから……」

すると武内は僕の腰に膝をついてしがみついているせいか、見上げながら微笑む。

「ねえ、広野君」

「なんだよ」

「……また会えたね」

「んな、大げさな」

「ちよつと、二人でいい雰囲気ならないでよ！」

坂本は僕と武内を引き裂くように、間へ割り込む。

どうやら、坂本もいつもの調子になったようだ。

「坂本も大丈夫か？」

「坂本『も』？」

「変なことにこだわるなよ」

坂本は少し膨れ面だったけど、すぐに機嫌を直して笑いかけてくれた。

「広野君はやっぱり守ってくれた。嬉しい」

そう言う坂本の手は僕の服の袖をしっかりと掴んでいた。

「うつ……うつん……」

僕たちの背後から呻き声が聞こえると、皆の視線がそちらへ向かう。

南さんが立ち上がろうとしていたからだ。

「私……一体？」

さっきとは様子が違い、意識がハッキリしているようだ。

僕は少し安心した。

「それはこっちが聞きたいぐらいですよ」

南さんは周りをみて、状況がつかめたようだ。
ふうつと嘆息する。

「私、またやってしまったみたいですね」

「また？」

「あなたを車でひいた時も直前までの意識が無くて……気付いたらあなたが目の前にいて慌ててブレーキを……」

そう言つと俯く南さんに、坂本は僕の後ろから顔を出して文句を言った。

「そんな言い訳聞きたくないっ！」

「坂本、よせ」

「でも……」

南さんの顔を見る。まんざら嘘をついている顔ではない。

念のため、詳しい話を聞くことにした。

「原因は何か分かりますか？」

「分かりません……ただ、こんな風になったのもあるCD-Rを見てからなんです」

「「CD-R!?!」」

すると武内と坂本は同時に同じことを口走る。

「どうした？」

「「ううん。何でもない」」

またしても二人同時に答えた。変なやつらだなあ。

「そのCD-Rというのが、この……」

言いながら、南さんは持っていたハンドバッグ開こうとした瞬間、動きが止まってしまった。

彼女の手がどんどん大きく震えだす。

「南さん？」

「……失敗シタ。モウ終ワリダ」

わずかだが口調の変化があったことで、僕たちは再び身構えた。
南さんは持っていたハンドバッグを落とし、こちらを睨みつけた。

口は真一文字に閉じられ、さらに口元には力がこもっていく。
そして、とうとう南さんの閉じた口から、血が洩れ出る。

口端から一筋、二筋と流れた。

「もしかして、舌を噛み切った？」

「まさか……」

流れる血を気にすることなく、南さんは僕へと笑いかける。

開いた口からは真っ赤に染まった歯が伺えた。

口から流れた血は顎を伝い、外へ流れ落ちた。

次の瞬間、彼女は窓へよじり始める。

「まって、早まらないでっ！」

「武内、危険だから近寄るな！！」

「でもっ！！」

南さんは窓に上ると、僕たちへと顔向ける。

血走った目からは憎悪しか読み取れなかった。

そして僕たちは何も動けないまま、彼女は暗闇へと消えていった。

「きゃあああっ！」

坂本は声を上げて、僕の方へ顔をうずめる。

南さんが飛び降りた直後に鈍い音がすると、後は静寂を取り戻した。

「し、死んだの？」

「いや、ベッドのマットを魔法で敷き詰めた」

「ありがとう……広野君」

武内はホッと胸をなでおろして、僕の手を握った。

「彼女も私と同じに見えたから……」

「だけど、骨にヒビぐらい入ってるかもしれない。悪いけど看護婦さん呼んでくれ」

「うんっ」

武内は頷くと、ナースステーションに駆け出した。

僕は何だか疲れて、ベッドへ座り込んだ。

そして、坂本は近くに置かれたままの南さんのハンドバッグを拾うと中身を開いた。

「おい、人のモノは勝手に……」

「でも他に危険物を持つてるかもしれないから」

ハンドバッグを調べる坂本を横目に、僕は考えた。

しかし、南さんはどうして僕を狙ったのか？

あの人って誰なのか？

CD-Rって何だろう？

……だけど、いくら考えても分からない。

「ええ！？ これって……」

急に坂本の大きな声が聞こえたので、考えるのをやめて彼女へ声を掛ける。

坂本はハンドバッグの中身に動きを止めていた。

「どうした？」

「何でもない……」

そう言つと再び動き出した。

少し気にはなったが、疲れていたものでそれ以上は構わなかった。

結局、南さんは一命を取り留めたが、こんな事件を起こしてしまったので、別の病院へ運ばれることになった。

退院の時、僕は割れた窓の代金、敷き詰めたマットの片付け、クリーニング代、もろもろすべて払うことになった。

もちろん母親に払わせるわけにもいかないのです、（僕が意地になつていたせいだ）今までせつせと貯めていた金が全部なくなつてしまった。

こつという不幸もあるのだなと妙に納得した。

本当にわけが分からない入院生活だった。
しかし、もっと大きな流れに巻き込まれるのは、
この後の事になる。

第33話 「序章」

もうすぐ、一限目が始まってしまふ。

まあ、出席するつもりはないが、下駄箱にいたんじゃあ、目立ってしょうがない。

さつきから遅刻寸前の奴等が、オレの前を伏せ目がちに通り過ぎていく。まるで厄介ことから逃げるように。

そんなに高校生が下駄箱でタバコ吸ってるのが珍しいのかよ。

……と嫌な気持ちになつているところで、外を見張っていた渡辺が小走りにオレの元へ駆けつける。

「門脇さん、来ませんね」

「くそつ、昨日退院じゃなかったのか」

「もしかしたら、明日からなんじゃないですか？」

「ああ!？」

「門脇さ——痛っ!」

オレはムカつく気持ちをとりあえず、渡辺を殴ることで晴らした。

オレは同じクラスの広野貴明を待つていった。それはもちろんボコるためだ。

ヤツは体を張った坂本亜由美の告白を断った。オレはその一部始終を隠れて見ていた。もちろん坂本が飛び降りた瞬間まで。一歩間違えればアイツの命は危なかった。

オレと坂本はダチだ。結構大切なダチだ。

こんなことは面と向かっていえないがな……

オレは周りから避けられていた。いわゆる「悪いヤツ」ということで、周りの奴等はうわべだけ取り繕って機嫌をとったり、関わりを避けるようにしている。そんな態度に辟易していた。

だからオレはいつそのこと「悪いヤツ」で通すことにした。「悪

「いやッ」というのは結構楽で、別に用もなく人を殴れるし、ちょっとからめば相手から金を出してくれる。一時期はそれがオレの使命だと思っていた。だから、周りは腫れ物に触るようにオレを扱う。ただ、たまに「これでいいのか!？」という気にもなる。それは坂本亜由美という存在を知ってからだ。

一学期の中ごろ、あの日もいつものようにいつものごとく、昼休みを過ごしていた。

「なーんか面白いことねーかな、渡辺」
「ないっすねー」

こんな会話を何日繰り返しただろう。楽しいことを望んでいながら何もせずに過ごし、今日も誰かから金を巻き上げて、その辺の遊べる店や施設をぶらついて家に帰る。そして次の日また「面白いことねえかな」なんて言っただけで過ごす。

オレの高校生活こんなでいいのか？

とか考えていると、教室のドアが勢いよく開けられた。クラス中が注目する。オレもドアの方を見た。

そこには五組の坂本亜由美が立っていた。

成績優秀、見た目も綺麗で、長い黒髪が印象的。ただちょっと気が強い。というのがもっぱらの評判の女。評判の情報源はもちろん隣にいるパシリの渡辺だ。

坂本は最初、教室中を見渡す。誰かを探してるようだ。オレが興味本位でそれをみていると、偶然目があつた。するとなぜか、こっちに向かってずかずかと教室に入ってくる。

周りを確認したが、どう考えてもオレが目当てのようだ。

まったく面識もない女なので、オレは状況を把握できないでいると、後ろで渡辺の声がした。

「あつ……」

「どうした渡辺？」

「いや、別に……」

とか言つと渡辺は俯いてしまった。変なヤツだと思いながら、もう一度坂本へと視線を移すと、すでにオレの目の前に立っていた。

眉間にしわを寄せ、凄い形相で仁王立ちだ。坂本はオレを下から上へと品定めするように視線を動かすと、ようやく口を開いた。

「アンタが門脇健児ね」

「それが何か？」

オレに対してこんな上からのモノ言いをするヤツは珍しい。クラス中もオレ絡みの出来事だからか、静まって次の反応に注目している。

オレは腹が立つ以前に面白そうなので、とりあえず様子を見ることにした。

「アンタ、うちのクラスの夕子と付き合ってるにもかかわらず、他の女の子にちょっかい出したそうね。夕子泣いてた」

「はあ？ 何のことか、さっぱりわからん」

「誤魔化さないで、他の女にちょっかい出したんでしょ？」

「訳わかんねえ。つーか、『ちょっかい』って、お前は何時代の女だ？」

「煩いっ！ とにかく夕子に代わってアンタを一発殴らなきゃ、私の気が済まないのよ！」

すると次の瞬間、坂本の手は振り上げられ、オレは思いっきり頬を平手打ちされた。視界が激しく揺れ、頬を叩く音がリアルに聞こえる。オレは反射的に口元に手をあてた。

そしてゆっくり手のひらを見ると血が付着していた。口の中を軽く切ったみたいで、ほんのり血の味がする。

オレがゆっくり坂本へ視線を移すと、コイツは肩にかかった自分の髪を払いながら、皮肉たつぷりにオレへ言い放った。

「女の子に殴られるのは初めて？ 坊や」

「——ってめえ！ ふざけんなっ！」

オレは坂本に今にも掴みかからん勢いで迫った。

全然、身に覚えの無いことで殴られるのは我慢いらない。それに

「坊や」とはどういうつもりだっ！ お前は80年代の女かつ！！

オレは制服の襟を掴もうとするが、坂本はそれを手で払いのけた。

「触らないで」

「ああ！？」

オレは完全に頭に血が上っていた。こういう勘違い女は一発殴っておかないと気がすまない。我慢の限界に震える拳を振り上げて、坂本へ正義の鉄槌を下そうとした。

もっ、何が何だかわからなかった。

ところが、事件はあっさり収束へむかう。

それは教室のドアが再び勢いよく開いたからだ。

「違うの、亜由美！ 人違い！」

「夕子？」

オレと坂本は動きを止め、夕子と呼ばれる女の方を見る。クラス全員の視線も夕子という女に注がれた。

「私が付き合ってるのは、門脇君といつも一緒にいる渡辺君なの！」

「「はあ！？」」

思わず、オレと坂本は同時に答えてしまい、さらに二人同時に視線を渡辺に向けた。

「あっ、いや……その……」

口をパクパクさせて動揺する渡辺に、オレは極めて冷静な態度で質問した。

「渡辺、今の話は本当か？」

「えっと……す、すいませんっ！！」

渡辺は大声で謝ると、さらに土下座して頭を下げた。

こうしてこの事件は馬鹿馬鹿しくも解決した。

夕子という女は坂本の元へ駆けつけると、膨れっ面で抗議する。

「もう、亜由美。私の話を最後まで聞いてくれないんだもん」

「だって、夕子の話は長くなりそうだったし」

「ええ！？ 今の言葉が浮気よりシヨック……」

「まあ、なんていうか、ブツブツ愚痴っているより。こつやって行動したほうがすつきりするでしょ？」

「たまに亜由美が本当に女の子なのか分からない時があるよ……」

「そう？」

とか言いながら、なんだか二人は笑いあっている。しかも、渡辺までがその輪に加わって楽しそうに話し出す始末。

殴られたオレは気がすまない。

「おい、殴ったことはどうしてくれるんだよ」

すると、坂本は横を向いた。

「……知らない。アンタがすぐ否定すれば済む問題だったでしょ」

「逆ギレか？ おい、調子に乗るのもいい加減にしろよ」

「なに？ 続きでもしようっていうの？」

坂本はオレを睨みつけて向き合う。自分の否ぐらい認めるよ！

実際、このまま殴ってやってもいい。むしろそうしないと、こういう女は調子に乗りそうだ。

だが、同時に自分にここまで強気で出てきたヤツはいなかった気がする。

もちろん、一般人対象での話だが。

「……あーあ、もういい」

結局、何だかオレはコイツを許す気になった。

考えてみれば、こんな風に人と言いかうのも久しぶりだ。周りのヤツは皆、関わるまいとしてオレを避けているし。

「おい、お前」

「悪いけど私は坂本亜由美って名前がありますから」

「ちっ、口の減らねえヤツ」

これが坂本とオレの出会いだった。

その後、落ち着いて話してみると、坂本はかなり良い奴だとわかった。オレがクラスでどんな立場かわかって、臆すること無い。真っ直ぐな態度で接してくれる。ケリも入れてくれば、暴言も吐く。そんなアイツが好きなかもしれない。

ということで現在、坂本を苦しめている元凶の広野貴明を待っていた。

しかし、一週間たつてもヤツはオレから逃げるように学校を休んだ。聞いたところによると、なんでも武内亜也の見舞いに行った帰り、車にはねられたらしい。オレはめっちゃめっちゃ喜んだ。天罰だ！いい気味だ！唯一、残念なことは、車のスピードが遅かったのか、打ち所のよさか、打撲程度ですんだらしい。さらに事故のことで最近、坂本は広野のところへ通い詰め。なんだかム力つく。

結局、授業が始まってでも広野は現れず、今日は諦めることにした。屋上で時間をつぶすために歩き出そうとすると、携帯電話が鳴った。

手に取るとそれはメール受信だった。

差出人は坂本からだった。本文には「昼休み屋上で。ちょっとお願いがあるの」とだけ書かれていた。

今日は少しだけ楽しい高校生活が送れそうになると、オレは胸を躍らせた。

そして昼休み。オレは屋上へと急ぐ。

久し振りに話をするような感じで少し嬉しい。

屋上に行くと、すでに坂本は待っていた。オレを見つけた坂本はこっちへ歩いてくる。

「遅いなあ、本当に門脇って時間にいい加減ね」

実際、怒られているのだが、それだけでも嬉しかった。だけど、それを言葉に出すわけもいかない。

「ああ、うるさい。で？　なんだよ？　用って」

「うん、これなんだけど……」

すると坂本はポケットから何か取り出す。

なんだよ。もう本題に入るのかよ。

「これを処分を欲しいの」

差し出されたもの、それはCD-Rが二枚。

ケースの表書きには「s u i c i d e m a g i c」と書かれていた。

第34話 「悪い奴等」

どうみてもただのCD-Rだろ？ オレは不思議に思った。

すると坂本は汚いものでも扱うかのごとく、CD-Rを指先でつまんで、オレによこす。

オレも同じようにして受け取った。

「何で？ 自分で処分すればいいじゃん」

「なんか気持ち悪いのよ。影響されそうで……」

影響されそうだという坂本の表情は暗く、本当に自分では処理したくないという気持ちが伝わった。

「へー、気の強いお前がねえ。とすると相当ヤバイ代物なんだな」

「別にそういうものじゃないけど、許せないのよ」

「許せない？」

「私を一時的とはいえ、その気にさせた、このCD-Rが。人生狂わされた人だっているし……」

言いながら坂本の表情が少し険しくなったことをオレは見逃さなかった。

それにしても坂本がその気になるCD-R。興味ある。

加えて「その気」って何だ？

と、同時にオレは頭の中である人物が浮かんできた。

「もしかして、これって広野がらみ？」

すると坂本は急にオレから視線を反らし、黙ってうなずいた。

正直、こういう坂本は見たくなかった。

女なのだが、男気があるような部分が好きだったオレにとって、今や坂本は完全に「女の子」になっているからだ。

こいつの頼みだから聞いてやりたいし、実際、処分することくらい簡単だ。

でも、広野がらみであれば話は別だ。

「どうしようかなあ……」

「お願い、広野君には知られたくないから」

「どうして？」

「こんなことに影響されて、飛び降りたなんて知られたくないから……」

下唇をかみながら、少し瞳を潤ませて坂本は俺を見ていた。

坂本はきつと、好きな人に自分をさらけ出すことが怖いんだな。

こいつきつと処女だ……いや、すまん。余計なことを考えすぎた。しかし、広野の話を聞くと自然にきつい事を言いたくなってしま
う。

「お前、本当に広野が好きなのか？」

「え？」

「本当に好きだったら、なんでも言えるんじゃないか？」

「……そうかもしれないけど」

我ながらなんてくさい台詞を吐いたものだ。

しかし、予想以上に坂本へは効き目があったらしく、だんだん思
いつめた表情になる。

こんな弱い坂本をこれ以上見ていられなくなった。

広野に告白する前はこんなじゃなかったのに。広野、ますます許
すまじ。

以前の坂本を返してくれよ。

その時、オレは良いことを思いついた。

「処分してやってもいいぜ」

「本当!？」

「ああ。ただし条件がある」

「なに？」

「来週、オレと遊びに行くこと」

「はあ!？」

坂本はあからさまに嫌な顔をした。そこまでハッキリとした態度

をとることないだろ。

これは以前のお前を取り戻すためなんだ。

「いや、もちろんオレだけじゃなくてさ。渡辺と夕子ちゃんを呼んでさ、久しぶりに皆で遊ぼうぜ」

「うーん……でも、広野君の家にも突撃したいし……」

「そんなのいつでも出来るだろ！ それともこのCD-R処分して欲しくないのか？」

「わ、わかった。でも、これは浮気じゃなくて遊びに行くだけだから」

「大げさだな、お前……」

何にしても坂本との約束は取り付けた。久しぶりに遊ぶぞっ！

その前にこのCD-Rを処分しなくちゃな。

「それじゃあ、私は行くけど……」

「えっ！？ もう行くの？」

「広野君のテスト勉強対策するから」

「……ちっ」

「まあまあ、そう僻まなくてもいいじゃない」

「ああ？ 誰がだよ！」

オレの態度に笑い始める坂本。ちょっとムカついたが、コイツが笑えばそれでいいかと納得した。

屋上のドアへさしかかった坂本は、最後に振り向いてオレに忠告した。

「これは音楽CDじゃないから、パソコン持ってないアンタには無用なものなの。いい？ 間違ってもCD-Rの映像は見ないこと」「つーか、そんなものをオレに預けるのかよ！」

オレの抗議に坂本は人差し指を顎につけ、「うーん」とか言いながら上を向いて考え事を始めた。

そして独り合点がいったように、ほんと手を打った。

「だって、門脇は私の”危険物処理班”なんだから、当たり前でし

よ？」

「ふざけんなっ！！ そんなの命がいくつあっても足らんわ！」

「あはは。アンタなら大丈夫だって。じゃあ、来週楽しみにしてるから」

「えっ…… ああ、しょうがねえな」

そして坂本は「任せた」といって屋上を去った。

くそ…… 完全にパシリ扱いだ。

でもいいか、坂本の頼みだし。

独りになった屋上で、受け取ったCD-Rを眺めてみる。

『CD-Rの映像は見ないこと』という忠告が気になった。

「うーん、よし。見てやろう」

どうせ捨てるんだし見ても構わないだろう。

決して好奇心じゃないぞ。

これは調査だ。坂本を苦しめた代物に対する調査だ。

その後、教室に戻ると、渡辺がニヤニヤしながら待っていた。頭を少し下げて、笑顔を絶やさず上目遣いでオレを見る。

本当にコイツはパシリ面してるなあ。

「どうでした？ 亜由美さんからの呼び出しは？」

「ただ、頼まれごとを受けただけだよ」

「なあんだ。二人つきりで呼び出しなんててつきり……」

「んな訳ねえだろ」

すると渡辺は斜め上を見て、独り言のように呟いた。

「オレは結構あつてと思うんですよね」

「何が？」

「門脇さんと亜由美さん」

「お前…… 分かってるじゃないか」

「恐れ入ります」

時代劇なんかで悪巧みする二人組みのような会話だな……

だが確かに渡辺の言うとおり、俺と坂本は相性が良いと思っている。

優等生と不良って典型的だよな？

……と悦に浸ってもしょうがない。オレは本題を渡辺にぶつけることにした。

「ところでお前、パソコン持ってる？」

「オレですか？ 嫌だなあ。いつも門脇さんと一緒にいるのに、持ってるわけないでしょ」

「そうだよなあ……」

オレはパソコンを持っていない。

近頃、パソコンが使えて、インターネットなどをやっているのが普通みたいだが、オレには関係なかった。

街に行けばもっと面白いことがある。万引き、強盗、喝あげ、喧嘩、ナンパ、楽しいことが一杯だ。第一、携帯電話で十分じゃないか。

それに自分がパソコン使えることを鼻にかけて使えない奴を小馬鹿にするし、引きこもってウジウジしている奴を見ると、腹が立って金を巻き上げたくなる。

ということで、パソコンなど使うやつは大っ嫌いだ。（坂本は別）

「門脇さん、どうしてパソコンが必要なんですか？」

「ああ。ちょっとCD-Rの中身を見たいと思ってな」

「エロっすか？」

「坂本が持ってたCD-Rだ。んな訳が無い」

いや、むしろエロだったら、どれだけ嬉しいことか！

どうせ生真面目で眠くなるような内容だろう。世の中の貧困なんかを映した偽善に溢れたクソみたいな番組に違いない。

だが「CD-Rを見たい」という衝動には逆らえず、どうしようか考え込んでいると、渡辺が何かを思いついたように「あっ」とか言った。

「そういえば確か、土屋がパソコン持ってたような気がします」
土屋か……アイツとは武内を襲った一件以来ずっと話をしていない。

優等生面して、誰にでも優しい優柔不断野郎……ホントにムカつく。

なにより一時とはいえ、坂本と付き合ってたのだ。

「よし、渡辺。放課後、土屋を呼び出せ」

オレは坂本に対する鬱憤を奴で晴らすことに決めた。

調子こいて女どもに媚を売るバカに天誅を下すのだ。

あつという間に放課後になり、オレは屋上で渡辺が来るのを待っていた。

なんでいつも待ち合わせは屋上なんだろう。

もしかしたら、ここには人を呼び寄せる負の力があるに違いない。

……なんて、バカみたいなことを考えていると、屋上のドアが開く音がした。

「門脇さん、連れてきましたよ」

「おう、ご苦労」

土屋は渡辺に腕をつかまれて、無理やりオレの前まで引っ張りだされた。

渡辺の上目遣いとは違う、恐れを含んだ目つきで俺を覗き見る。

「何の用？」

「まあ、そう警戒すんなよ」

「はい、土屋ちゃん。もっと前に出てね」

渡辺が背中を押すと、よろけるように前に出る土屋。

背はオレよりも高いが、華奢で威圧感は全然感じない。

しかも、くせっ毛の前髪からのぞく大きな瞳はなんの苦勞も知らない王子様のよう……つまり、軟弱ですぐにもぶっ倒せそうなザコということだ。

「土屋、お前パソコン持ってたろ？」

すると、土屋は恐る恐るといった様子でゆっくりと答えた。

「う、うん。持ってるけど……」

「実はさ。このCD-Rなんだけど……」

オレは上着のポケットからCD-Rを取り出して土屋に見せた。

ヤツはそのCD-Rを不思議そうに眺めた後、オレへと視線を移す。

「このCD-Rが何？」

「お前のパソコンでさ……」

俺の言葉と同時に土屋は怪訝な表情へと変わった。

まるで「嫌なことを察してね」と言わんばかりの顔つきにオレは腹が立つ。

「ごめん。今、僕のパソコン故障中で……」

くだらない嘘だ。

日常生活じゃあ見逃してもらえる言い訳かもしれないが、そうはいかない。

なぜなら、もしそれが本当なら、CD-Rを見せる前から言うはずだからだ。

「いーじゃねーか。ちょこつとでいいからさ、ちょこつとで」

「駄目だよ……そのCD-Rに変なウイルスが入ってる可能性だつてあるし……」

「なんだよ、さっきは壊れたとか言いながら、今度はこっちのモノのせいかな？」

「いや、そうじゃないけど……」

「じゃあ、なんでパソコンが使えないんだよ」

「それは……」

オレはしつこく食い下がったが、土屋はかたくなに拒否する。

ここまできてオレは頭にひらめくものがあつた。

「それともあれか？ お前のパソコン、エロ画像が一杯あんのか？」

エロ画像」

「え！？　ないよっ！　そんなもの！」

ビンゴ。はい、決定。

コイツ、見られてはいけないものがパソコンにはある。

土屋の評判を落とす大チャンスだ。

「ごめん。悪いけど、CD-Rなら学校のパソコン使えばいいと思うよ」

「そっか。じゃあ、しょうがねえな。無理言ってすまなかったな」

「え！？　……う、うん。それじゃあ」

土屋はオレがアツサリ引いたことに関して驚いている様子だった。別に諦めたわけじゃない。正攻法を止めたただけだ。

その後、開放された土屋は逃げるように早足で屋上を去って行った。

「いいんですか、門脇さん？」

「ああ。構わない」

オレの出した結論はいたってシンプル。

土屋の家に忍び込む。ガサ入。

今の興味はCD-Rから土屋の評判を落とすべく、パソコンのエロ画像へ完全にシフトした。考えてみれば土屋の言う通り、CD-Rは学校のパソコンを使えばいいだけの話だからな。

「とりあえずは渡辺、お前に頼みがある」

「はい？　なんですか？」

オレは口を歪め、自分でもバカバカしいぐらいの悪者顔をして渡辺に答える。

「今からの土屋の予定を調べろ」

「ああ、なるほど。そういうわけですか。了解っす！」

渡辺もオレへ応えるように悪者顔で答えた。

本当にオレ達、悪代官と越後屋みたいだな。

第35話 「発火」

とりあえず、渡辺が土屋について調べている間、オレは例のCD-Rを見ることにした。

幸い、視聴覚室には誰もいない。

というか、オレがパソコン研（パソコン研究会）の奴等を追い出した。

改めて渡されたCD-Rを眺めてみる。見た目、普通のCD-Rにしか見えない。

CD-Rの題名は『suicide magic』。意味はわからん。

とりあえずパソコン研の気の弱そうな奴を捕まえ、パソコンを起動させる。パソコンが立ち上がった後、パソコンのディスクトレイにCD-Rを入れてみた。もちろんここまでは、パソコン研の奴等にやらせたのだが。

奴等の言う、オートランが起動し、画面にはなにかしらのソフトが立ち上がった。これで動画が見られるらしい。っていうかここでもうやく、中身が動画だつて分かった。

このまま放っておけば続きが見れるらしいと確認した後、オレはコイツを追い出した。

さて、じっくりと動画を見せてもらおうか。せいぜい楽しませてくれよ。

オレは期待して画面を食い入るようにして見始めた。

しかし、5分ほどですぐに飽きてきた……なんだこりゃ？

喘ぎ声が聞えてきたと思えば、真つ黒で画像の荒いエッチシーンが始まった。正直、これがAVだったら許さねえ。いや、裏モノならありかもしれない……なんて言ってる場合か？

にしても何だ、ここは？ 誰かの家の中のような。

それほど広くない、軋む廊下に畳敷きの部屋が二部屋。
いや、一瞬奥に階段が映ったから二階建てか。

などと考えている間に、泣いている女の画面に変わった。
我慢して1、2分ぐらい見ていたが、あまりのつまらなさに見るのをやめた。こんなよく分からん家の中のごたごたを見せられても困る。

オレは停止ボタンを押した。
そしてある結論が浮かぶ。「坂本はサド説」と「盗撮好き説」だ。
最初のエロ（いや、エロと言うほどでもないが）は盗撮好きの証。
さらに泣いている女の動画はいたぶる快感を味わっている証拠。
果たして、オレにその性癖を受け止める度量があるのか……

真っ暗になった画面に映る腕組みした自分を見て、妄想列車走りすぎ！ と、つつ込んだ。

……馬鹿馬鹿しく、虚しい。

どうせ、女子高校生に嫌がらせするために送られてきた、CD-R
Rなんだろう。

こりゃ、潔癖な坂本が嫌がるわけだ。
とっと破棄するべ。

オレはCD-Rを真っ二つに割って、ゴミ箱に捨てた。
と同時に視聴覚室のドアが開く。

「あつ、門脇さん。やっぱりここにいましたか」

「おう、渡辺。何かつかめたか？」

「ええ。何でも今日、土屋は予備校で19時には家にいないらしいですよ」

「でかしたぞ、渡辺！」

「夕子を泳がせて、土屋から聞いたかいがありました！」

「よおおし、よおおし！」

オレは刑事ドラマで証拠を掴んできた新人を褒めるベテランさんのように頭をくしゃくしゃとなでた。渡辺は「やめてくださいよお」とかいいながら喜んでいた。

「で、今日決行するんですか？ ガサ入れ」

「当たり前だ。だからお前も……」

すると渡辺は両手を合わせ、拝むようにオレの前に出る。

「すみません！ 今日は勘弁してください！」

「……どうして？」

「夕子と約束しちゃって……土屋から情報を聞く代わりに今日は夜まで付き合えって」

とか言いながら、「コレがコレでコレなもんで」と文字だけじゃ分からない変なジェスチャーをした。

ちなみに最初のコレが、小指を立てて彼女のジェスチャー。二番目のコレが、キスをするように口を尖らせて、俺に夢中なんですのジェスチャー。最後のコレが人差し指をこめかみの横に立てて怒ってる印。

「貴様……彼女無しのオレによくもそんな台詞が吐けたものだなあ……」

「すいません、すいません！ お願いします！」

とか言いながらオレは顔を綻ばせていた。

別に渡辺が女と付き合ってるのが悪いわけでも無いし、夕子と上手くいつているのは微笑ましい。

何だかんだ言っで、オレは渡辺も好きなのだ。もちろん、パシリとして。

「分かったよ。今日は俺だけでやるから、さっさと行け」

「ありがとうございます！ それじゃ、失礼します！」

渡辺はペコリと頭を下げると、本当に嬉しそうに部屋を出て行った。

オレは坂本とあの二人に加えて遊ぶ来週を思うと、なんだか笑えてきた。

ガサ入れ、などといったが、単純に本人留守の時に友達面して、「先に待っていてくれ」と言われたとか言い訳をしつつ、本人宅へ上がりこんで色々調べるというものだ。

そして本人が帰宅した後で、脅せるものを探し当てたオレが本人とお金の交渉をするというわけ。

適当に街中で時間をつぶしていると、携帯電話のアラームが鳴り、ガサ入れの時間を告げた。

オレは土屋の家へゆつくりと歩いて向かう。

情報では両親が健在で、母親も専業主婦だという。

きつと今の時間なら母親のみだろう。人懐っこい一面を見せつつ、丁寧な態度で臨めば、楽に屋内に入れるだろう。

オレは色々と算段しながら、ついに土屋の家の前までたどり着いた。

どこにでもあるような二階建ての家。本当に特徴無いな。

こじんまりとした門を開けると、すぐ先に玄関があった。とりあえずオレはチャイムを押す。

しかし、留守なのか誰も応答が無い。

ここで諦めるか？ …… んな訳が無いだろ。

無人の方が都合が良いじゃないか。オレは早速針金を取り出し、玄関の力をピッキングで開ける。施錠もたいしたことは無く、鍵もどこにでもあるような単純な仕組みだった。そして開錠は普段鍛えてる（？）お陰ですぐに玄関は開いた。さっそく家に入る。

薄暗いが、外灯のお陰で屋内の構造が分かった。

まず、玄関で靴を脱いで、手に持った。これはいつでも逃げられるようにだ。

振り返って辺りを見回す。

「あれ？ 変だな……」

文字通り、第一印象は「変な家」だった。

どこか見覚えのある感じの変な家。

まあ、何処にでもあるような、普通の家といえばそうなのだが……
玄関に入ると真っ直ぐ廊下が続いていた。オレは人が居るかもしれないからと、慎重に進む。それにしてもギシギシと軋む廊下だなあ。

なぜだか初めてなのに、家の間取りも大体の構造がわかった。渡辺の情報では土屋の部屋は二階だということなので、階段を目指す。ふすまの部屋が二つあったので、一応覗いてみると人影は無く、畳敷きの部屋があるだけだった。ふすまをゆつくりと閉めて奥へ抜けると、隣には階段があった。

さらに廊下にも増して軋む階段を慎重に上ると、比較的スムーズにオレは土屋の部屋らしき所へたどり着いた。ノブの付いたドアを開けると、息を殺しながらオレは足を踏み入れた。

几帳面に片付けられた部屋は、オレの部屋とは大違いだ。

片付いてるとは言ったが、どちらかといえば何も無い部屋だった。部屋の電気をつける訳にもいかないので、外光だけでなんとか進む。今日が満月でよかった。

月明かりの中、オレはパソコンを探した。

すると、小学生が使うような頑丈な勉強机の上に写真立てを見つけた。外に向かって写真を向けると、土屋と二十歳も半ばぐらいの大人の女が、車にもたれて二人寄り添うように映っている写真があった。

土屋の奴、こんな女と付き合ってるのか……うらやましい。

んなことをやっている暇は無いと思い直し、改めて搜索を再開し周りを見渡すと、すぐに部屋の片隅にあるパソコンを見つける。

おおっ、エロ画像……じゃなくてパソコン発見。

早速、電源をオンにした。すでにオレの頭の中は「エロ画像」以外ない。

しかし、パソコンをあまりやっていないオレにはエロ画像を探すだけで一苦勞だ。

必死にパソ研の奴等に教わった知識をフル回転し、色々なものをクリックした。

その中で「本当の解決方法」とだけ書かれたアイコンを見つけた。このアイコンは確かパソ研の奴等が動画だと言っていた形と同じ。まあ、エロだと隠すために真面目なタイトルをつけるのはよくある話だ。

オレはとうとう見つけた！ 間違いなくこれはエロ画像だ！
鼻歌交じりで、速攻クリック。
すると画面が切り替わりフルスクリーンで映像が始まった。

しばらく真つ暗な画面が続く。

オレはワクワクしながら続きを待つ。

「早く、早く生まれ。あつ、そうだ。ティッシュってどこだろ？」
何とか手探りでティッシュを探し出し、再び画面へと視線を移す。
しかし、まだ画面が真つ暗だった。

「ちつ、なんだよ。ハズレか？」

少しがっかりして、画面を消そうと矢印を停止にあわせた。
だが、何か変な音がスピーカーから聞えた気がした。

オレはもしやと思い、耳を済ませる。

「……おいおい。これってアレか？」

聞えてきたのはベッドの軋む音と声だった。
しかも声は声でも喘ぎ声。

だが、これは今日聞き覚えのある声。

「まさか……」

自分でも分かるくらいに表情が固まったことに気づく。
さらに、いつの間にかマウスを持つ手が、汗ばみ震えてくる。

信じられない偶然の一致を感じずにはいらなかった。

「嘘だろ、だってアレはCD-Rの……」

オレの混乱する頭をよそに、画面は動き、廊下を進む。その画面にオレは釘付けになった。

「この廊下って、まさか……」

さっき通った、この家の廊下じゃねえか!!

オレの背筋は凍りつき、ガタガタと歯が震えだした。

坂本にもらったCD-Rとこのパソコンの画面が同じで、しかも、それが土屋の家の廊下だというのは!?

どうなってんだ? どうなってんだ!? どうなってんだよ!!
混乱のるつぼと化し、オレは頭を抱えた。

その瞬間――

「あーあ、見つかつちゃったか」

「なっ!?!?!」

――自分以外の声が背後から聞いた。

後ろから心臓をつかまれたようにその声は響く。

オレは振り向くことができない。

「僕が簡単に自分の予定を話すとも思った?」

「くっ……」

聞き覚えのある声なのに、なぜこれほどまでに恐怖心へ響くんだ。
途端にオレは金縛りにあったように動けなくなる。

恐怖で動けなくなったのだ。

さらに背中へ鈍い痛みが走る。

何かがオレに突き刺さってる……

「この画像って最後にどうなると思う?」

「……っ」

グイグイとオレの肉を押しつけ、冷たいく尖った何かが刺さってくる。

呼吸が……息苦しい……感情が高ぶり、目頭が熱くなって自然に

涙が溢れてきた。

これが恐怖だというのが……

「最後に皆、死ぬんだよ」

「て、てめえ……」

身動きが取れないオレの目には、すすり泣く女の映像が流れこんでくる。

馬鹿なオレはようやく確信した。

『触れてはいけないものに触れてしまった』

冗談じゃない、オレは皆と来週遊びに行くんだよ……

ああ、誰か助——

第36話 「被害者の会」

僕らは突然、武内の発案で遊びに行くことになった。

なんでも武内の話では、坂本亜由美の友達である門脇健児が謎の失踪をとげ、彼女が、酷く落ち込んでいるかららしい。

僕は毎日のように坂本と会うが、別にそんなことは感じなかった。しかし、武内がやたら主張するので、しょうがなく了承した。

最初は僕と坂本の二人で行けと言われたが、さすがに彼女と二人きりになるのは気が引けたので（また、詰め寄られるような告白をされても困る）、武内も行くことを条件にした。

正直、僕は武内の心配している。

あの日（ホウキでの飛行）以来、彼女は目に見えて明るくなった。でも、それが悲しさの裏返しなのでは？ と疑問だ。

僕の心配をよそに、武内は次々と遊びに行く場所や日時を決めていく。

実際、坂本を誘ったのも武内だ。なんだか今までになく積極的。

場所を聞いたら遊園地へ遊びに行くという。

僕はそんな子供っぽいところ行けるかよと抗議した。

「ホントはお店適当に回って、ファミレスよって、カラオケでも良かったんだけど、遊園地にしちゃった」

「どうして？」

「行った事ないから」

「小さい頃は？」

すると武内は教室の窓から外を眺めて、遠い目をしながら答えた。
「私の両親はあんまり日本にいなかったから、家族でどこかへ行くって事自体が少なかったの」

「えっと……」

「だから、遊園地行きたいは私のワガママ」
それ以上何もいえなかった。
と同時に遊園行きが決定したのだ。

そして当日。

「二人とも遅い！」

武内はやたら張り切って、後ろを歩く僕らをせかす。

「そんな急がなくても、遊園地は逃げないぞ」

「何、言ってるの！！時間は逃げちゃうもん！！」

肩まで伸びた髪を左右に踊らせて、どんどん先へ歩いていく武内。
ため息混じりに坂本を見ると、彼女も首かしげながら僕を見ていた。

「彼女、なんかキャラ、変わってない？ それとも、今までがウソだったの？」

「それを僕に言われてもなあ……」

僕と坂本はお互いに苦笑し合う。

三人でどこかへ行くということも珍しいので、やれやれと僕は肩をすくめた。

そして坂本は肩に掛かった髪を軽く手で払うと、僕に微笑みかけた。

「でも、広野君と、こうして休日に来て会えるなんて嬉しいな。」

「えっ、ああ……」

こういつ彼女の直球な発言に、僕は応えることができない。

せいぜい照れながら視線を反らすことぐらいだ。

すると坂本は僕の目の前に顔を近づける。

大きな瞳が僕を映しながら、見つめている……恥ずかしい。

「照れた？」

「ま、まさか……」

とか言いながらも完全に動揺していた僕は、顔を赤らめていたのかもしれない。

坂本は僕をまじまじと見た後、ようやく視線を外し解放してくれた。

そして一言呟く。

「へえ。私に対しても照れてくれるんだね」

「お前なあ……」

僕は人差し指で頬をぽりぽりと搔きながら、誤魔化した。するとまた、前方から元気な声が聞こえた。

「二人ともなにやってんの！？ 早くうー！」

武内、はしやぎ過ぎだ。

遊園地に到着しても、僕達は武内にかき回された。

坂本の手を引っ張って、次々とアトラクションに乗る。僕は主に荷物持ちだ。

さんざんアトラクションに乗った挙句、二人はベンチに座ると武内が僕を指差す。

「あー、つかれた。広野っち、ジュース買ってきて」

「誰が『広野っち』だ！ それに僕はパシリか！！」

「似たようなもんじゃない。早く買って来て！ のど乾いたー！」

武内はすまし顔で「早く〜 早く〜」なんて歌い始めている。

坂本は半ば呆れ顔で、僕と武内交互を見比べていた。

「あつ、じゃあ私も行く」

「駄目、坂本さんはここにいないと」

立ち上がるうとした坂本の腕を武内が掴んで、再びベンチに腰をかけさせる。

坂本は「きゃっ」と小さな声を上げてベンチに座らされる。その反動で、ふんわりと髪が舞った。

「ちよ、ちよつと、武内さん！？」

「駄目だよ。それじゃあ、何のために男手を連れてきたのかわからないもん。お金払うことは男の子に華を持たせなきゃ」

「え！？ そうなの！？」

「坂本、騙されるな。絶対違う」

僕と武内は顔を歪ませながら微妙な笑顔でにらみ合った。

そんな二人に坂本はため息をついた。

痺れを切らした武内は、人払いをするかのように手を振って、僕を追い出そうとする。

「さあ、行った、行った。私、炭酸系で。坂本さんは？」

「えっと、じゃあ、お茶で」

「……了解」

僕はしぶしぶジュースを買いに行くことにした。

すぐに近くの自販機を見つけ、お金を入れる。

それにしても……いくら坂本を元氣付けるためとはいえ、武内のテンションが高すぎる。

坂本だつて若干引いてるじゃないか。

つか、彼女はいたって普通だし、落ち込んでるようには見えな
い。

ジュースを買った僕はブツブツ文句をいいながら急いで戻る。

やがてベンチに座る二人の後姿が見えたので、声をかけようとし
た。

「あつ……」

でも、僕は走るのを止めてたちどまった。

それは武内が坂本にハンカチを渡し、それを受け取った彼女は自
分の目頭にあてていたからだ。

坂本……泣いてるか？

さらに二人が何か話しているので、入り込めなくなったのだ。

こうして武内と坂本が面と向かって話をするなんて……

しかも、坂本が涙を見せている展開に、僕は不覚にも好奇心が抑
えられなくなり、ベンチ近くの植え込みに隠れて盗み聞きをするこ
とにした。

「どう？　少しは気が晴れた？」

「ちよつとね……さすがに広野君の前では限界だったから」

僕の前では限界？　なにが？

武内は包み込むような優しい微笑みを浮かべながら話しかけている。

それに対して坂本はを瞳潤ませて赤く充血させながら、ハンカチで涙を拭っていた。

「なかなか難儀な性格だね」

「アナタみたいにすぐ泣いたり、弱みを見せたり、これ見よがしに自傷行為できればいいのだけど。私には無理」

「……ええっと、それに関してはノーコメント」

「というよりは、本当、アナタの幼児的行動には困るのよ」

「幼児的行動？」

「それよ。そういう無知を披露するのが、かわいいと思ってるわけ？」

なんか、僕には一触即発の会話に聞こえる。

さらに二人は見つめあいながら少しの沈黙した。

しばらく緊張した雰囲気の中、時間が過ぎる。僕は当事者でも無いのにやけに緊張していた。

そして、とうとう沈黙を破り、坂本はポツリと言った。

「ゴメン、言い過ぎた」

「うん、今日は許すよ」

武内はさっきの会話をちつとも怒っていなかった。

むしろ、笑顔を絶やさない彼女は、いたずらっ子を見守る先生のようにも見える。

それが悔しいのか、少しふくれっ面で坂本が口を尖らせる。

「本当はアナタがうらやましいだけ。私の真っ直ぐな気持ちって、嘘が多いから」

「これからは好きな人の前でも本心を言えるといいね。辛いときは

辛いつて」

「ありがとう。……一応、お礼はいつておく」

そう言つと照れたのか、坂本は視線を反らすように上を向いた。
武内も空を見上げる。

「門脇くん、見つかるといいね」

「……うん」

やはり武内の言つてたことは当たつてた。

本当に坂本は門脇のことで落ち込んでいたのだ。

僕は自分の鈍感さにあきれ、武内の他人を思いやる目に感心する。
「私が門脇に変な頼み事をしなかったら、こんな事にはならなかったかも……」

坂本は下唇を噛んで、再び俯くとハンカチを目にあてる。
それほどひどく落ち込んでいたのだ。

こんなに落ち込んでいたのに僕は気付かなかったのか……

にしても、頼みごとってなんだろう。失踪とは関係あるのだろうか？

「何があつたか知らないけど、きっと元気な顔して戻ってくるよ」

「……なんだかいつもと反対で嫌だな。まさかアンタなんかに慰められるとはね。私も焼きが回ったかも」

「いやいや、それほどでも」

「でも、アンタも自分じゃないキャラに無い事をして疲れたでしょう？」

「ううん。そんなことないよ。私も楽しんだし」

武内も照れたのか、必要以上に明るく振舞う。

それを見て坂本は前髪を少しかき上げて、武内へ微笑んだ。

「本当にありがとう。もう、元に戻っていいよ」

「……うん」

そして武内の肩が少しだけ力が抜けたように下がった。

僕は植木にもたれながら、反省した。

『自分だけが無理をして過ごしているわけではない』

んな事わざわざ言われなくなつて分かつてるけど、本当に理解して相手を労わっている人間がどれほどいるんだ。

綺麗ごとつて実践できない負い目から、否定することが多い。

でも、この二人は自然にお互いの事を考えて行動していた。知り合つて間もない間柄なのに……

しばらくして、武内は急に居住いを正して、大袈裟に咳払いを始めた。

それを見た坂本が首をかしげながら彼女を見つめる。

「坂本さん、話があります」

「な、なに？ 急にあらたまつて。楽にしたら？」

すると武内は一気に脱力するかのように体全体を下げた。

「前から聞きたかつたことがあるんだけど、聞いていい？」

「別にいいけど、何？」

「どうして、広野君のこと好きなの？」

「ええっ!？」

すると坂本は口を開けて目を丸くした。

僕も同じく、口を開き目を丸くした。

同時に自分の心臓が高鳴るのを感じずにはいられなかった。

「私の目から見ても、たいして、他の男の子と変わらんないんだけど

……」

お前はそんな目で見てたのか……

そんな僕をよそに、武内は少し俯いて坂本を伺うように上目遣いで覗き込む。

当の坂本は目を瞑り、腕組みを始めて少し考えている。

……即答できないの？

「うーん。こんなこと言つても、信じてくれないと思うからなあ」

「え？ 何、ナニ？」

楽しそうに坂本の答えを待つ、武内。

腕組みのまま片方の瞳をあけて、うなっている坂本。

そして意を決したかのように、坂本が武内に顔を近づけ、内緒話をするように話しかけた。

「実は……広野貴明は魔法が使えるの」

「うん、知ってるよ」

「え！？ ウソ？」

坂本の決意した告白を武内は即答した。

どうやら、坂本は僕の魔法を自分だけが知っている秘密だと思っ
ていたらしい。

ぽかんとしたままの坂本に武内が説明を加える。

「本当だよ。だって、私が飛び降り自殺しようと思ったのに、広野
くんに”無理やり”魔法で助けられたもん」

”無理やり”は余計だ！”無理やり”は！

武内の話を途中から顎に手を当てて聞いていた坂本は考え込んだ
後、うなずいた。

「広野君ならありえる話だね」

「坂本さんはどうやって広野君の魔法を？」

「えっと、私は中学生の時、通り魔に襲われたの。その時、広野く
んと彼のお父さんが魔法で助けてくれて……」

なんだか魔法体験発表会みたいになってる気がするのは僕だけだ
ろうか？

そして坂本の話で僕は思い出していた。

中学の頃、父親がまだ生きていて楽しかった時代。

僕ら二人は所かまわず『正義の味方ごっこ』をしていた。

魔法を使つて、困った人を「密かに」助けるというもので、僕ら
の魔法の性質上、その後当然のように二人は不幸な目に会う。

でも、父親と二人なら不幸は不幸でなかった……楽しい記憶。

坂本の話聞き終わると武内は突然ベンチから立ち上がった。状況が飲み込めない坂本へ両手を腰に当てながら、嬉しそうに武内は言う。

「なーんだ。じゃあ、二人ともあの男の被害者なんだ！」
待て、僕は犯罪者か！？」

それを聞いた坂本は「はあ？」とでも言いたげに眉を寄せた。
「私は別に被害者じゃないけど。むしろ命の恩人。ってかアナタもでしょ？」

「違う、違う！　つまり、うーん」
武内は適当な言葉が見つからないのか、うんうん唸って考えている。

僕と坂本は場所は違えど、怪訝な顔で彼女を見つめる。
ようやく、何か見つかったのか、武内は一つ手を叩いた。

「そうだ！　二人ともアイツのせいで人生変わっちゃった、ってこと！」

「人生変わった？」

「終わったはずの人生を『無理やり』再生させられたんだから、被害者仲間なの！」

「……なるほど。それいいかも」
坂本まで何を言い出すんだ。

納得する坂本に満足したのか武内は何度も頷いた。

「坂本さん、じゃあ、被害者の会結成！　ってことで」
「うん」

すると今度は坂本がベンチから立ち上がる。

不思議そうに見つめる武内へ向くと手を差し出した。
「私達、いい友達になれそうね」

武内は目を丸くし、差し出された手と坂本の顔を交互に見つめた。
あきらかに彼女は戸惑った様子だった。

「えっと……私なんかでいいの？　クラスでも広野くん以外、話すがいない様な人間だよ？」

自嘲気味に笑う武内に坂本はさらに自分の手を突き出した。

「悪いけど、私は周りの評判や噂なんかには振り回されるほどバカな人間じゃないから」

「でも……」

「私は、自己判断でアナタを友達と決めたの。同じ被害者仲間として」

「被害者仲間？」

「だって、アナタさっき言ったでしょ？『二人とも被害者ね』って」

「あの、私……」

「さあ、握手して。じゃないと手が疲れるでしょ？」

「……いいの？」

「もちろん！」

最初は困った顔をしていた武内の表情が次第に明るくなっていく。坂本もそれにつれて笑顔になっていった。

「ありがとう！」

と叫ぶと、武内は満面の笑みで坂本の手を両手で握った。硬く握られた握手。

僕はその光景に、少しやきもちを焼いた。

このまますぐに二人へ駆け込んで行きたい気分だったけど、僕はもうしばらくここにすることにした。

そうしないと二人を祝福しそうだったから。立ち聞きがバレるじゃん。

ベンチの二人も余韻を愉しむかのように静かに並んで座っていた。二人の間の距離はさっきに比べてずいぶん縮まっていた。すると武内がポツリと呟く。

「坂本さんの話ばかりで不公平だから、私も秘密を打ち明けます」

「え？ なに？」

「私、土屋君に……」

「ああ。アナタが諦められないでいる、土屋君のこと?」

坂本の言葉に黙ってうなづく武内。

そして武内は言葉が続ける。

「彼にお別れを言おうと思って……」

「お別れ? 告白じゃなくて!？」

坂本は驚きながら、武内を見つめる。

彼女はまた黙って頷いた。

僕は驚きを隠せない。

あんなに土屋、土屋、って執着してたのに……

坂本はさらに僕の先を心配していた。

「お別れってまさか、じさ……」

「しない、しない。自殺するとかじゃないから。私の区切りとして

……って、土屋君からしたら、もう終わった話かもしれないけど……

……」

武内は僕の知らないところで、また成長していた。

それは嬉しくもあり、少しだけ寂しい気もした。

「うんうん、それが良いよ。あんな奴、振っちゃえ」

「あんな奴って言うにはもう少し時間がかかるかな」

坂本は武内を優しく肩を抱いて引き寄せた後、頭を優しくなでた。

武内はされるがままに坂本へ身を寄せた。

「……あつ、でも広野君は渡さないから」

「要らない。あんな奴」

武内、僕には『あんな奴』って言えるんだな。

…… もう何も言うまい。

「そつだ武内さん、後で三人の写真取らない?」

「うん、撮ろう、撮ろう」

「……にしても遅いね、広野くん」

僕はようやく我に返り、慌てて二人の元へ戻った。

その後、僕らは写真を撮った。

少しでも皆の心が近づいた写真。

この写真はきっと三人にとってかけがえのない写真になるに違いない。

何もかもが上手く進んでいるような気がした。

そう、武内が土屋へさよならを言うまでは……

第37話 「自殺魔法」

突然だけど僕は魔法使いだ。

名前は土屋祐介。

地元の私立高校に通う高校一年生だ。

成績は上位。背は183センチ。痩せ型で周りからは「殴ったらすぐ倒せそう」なんて思われている。

いたって普通、ハッキリ言えば平凡な人間……という設定にしている。

ただ、唯一の取柄はさっきも言っただけど魔法を使うこと。

僕の言葉には魔法の力があるらしく、人間を僕の思い通りに導く。この前も気まぐれに付き合った女が自殺未遂をしてくれた。

「土屋君、ちょっといい？ 勉強で分からないところがあるんだけど……」

昼休み、自分の席で静かに本を読んでいると、僕に女の子が声をかけてくる。

いつものことだが、うつとおしい。

勉強？ どうせ僕に近づく口実なんだろう？

「僕が教えるの？ うーん、自信が無いなあ……」

「そういわずにね、お願い」

癪に障るような、猫なで声で僕に話しかけてくる。正直、耳が腐りそうだ。

さらに僕がまだ考えているフリをしているにも関わらず、この女は前の席に座り、こちらと向かい合った。

コイツは山崎美咲と言って、半年前に武内亜也を追いつめるために利用した女だ。

それ以来、しつこく僕の周りをうろつく害虫だ。

「何の本読んでるの？ うーん、難しそうな本だね」

僕を無視して女はどんどん話を進める。良く喋る女だ。

自分の顔の良さからだろうが、こうした良い意味で”積極的”、ハッキリ言えば”ずうずうしい”女が集^{たか}つて来る。

心の中でため息をつきながら、僕は対応することにした。

「で？ 分からない箇所はどこ？ 僕でよければ手伝うよ」

「ありがとう」 やっぱり土屋君は優しいよね

そうだ。まだ僕はこのクラスでは優しい奴で通っているんだ。

優しい土屋君。

二年前のことを思い出せば、せせら笑ってしまいそうな自分の姿だ……

——それは僕が中学生の時。

いつものように僕は家へ帰る。何の変哲の無い二階建ての自宅。

この辺りは個性の無い建売の家の集まりだ。昔からの街ではない、作られた街。

こじんまりとした玄関を抜け家に入り廊下を進むと、襖の向こう

から女の淫らな嬌声が漏れ聞こえた。

父は今日も知らない女を連れこんでいた。さらに部屋ではではリ

ズミカルなベッドの軋みと、息遣いが聞こえる。

僕は何の感情も抱くことなく、その部屋を通り過ぎた。

そして急いで二階のの自室に行き、ビデオカメラを手に再び一階へ戻った。

肉体的な性欲の興味はもう失せた。僕の興味は別のことに移っている。

興味の先は廊下をさらに進んだ先の部屋にいる母だ。今日もこの襖の向こうで泣いていた。

この母親は自分の夫が女を自宅へ連れ込んでいるにも関わらず、知らないフリをしている。そして何も言えずに一人すすり泣いてい

るのだ。

ここで泣いていても誰も助けしてくれない。
でも存在自体が助けて欲しいと叫んでいる。

なんて脆弱な存在。なんてな哀れな存在。なんて醜い存在。
そして何よりも美しい存在。

僕は少しドアを開け、ビデオカメラを向ける。

そうだよ。僕はなにもしない。こうやって撮影し続けるだけ。
コイツが死ぬまで。

ファインダー越しに映るこの女に僕は興奮を抑えられなかった。

夜になれば、父は理由もなく母を殴った。

殴られながら、何度も母は父へすがりつく。

もちろん僕はこの一部始終もビデオに録画した。

体中にアザを作りつた母が顔を腫らせ、鼻や口から血を流しながらもどこか嬉しそうに見えた。

それもそのはずで、もやは暴力でしかこの二人の関係をつなぐものが無いからだ。

食事をしていったって会話は無い。皆、黙って食事をしている。

時折、母が僕の学校生活を心配して家族のフリをするぐらいだ。

作り笑いで対応する母を見て、いつしか僕も表面上取り繕うすべを身に付けていった。

そして今日も父は母に暴力を振るう、浮気もする。

次第に父の行動がエスカレートするにつれて、母は追い詰められていた。

日に日に母はやつれていったが、離婚もしないし、家も出て行かない。

むしろ、家や家族を最後の拠り所にしてにしがみついている。

僕はそれを一部始終、ビデオに納める。

その度にファインダー越しの母へ気持ちが高ぶった。

とうとう父が家にも帰ってこなくなると、僕と母は二人きりで家にいることが多くなった。

すでに父がいなくなつて一ヶ月が経過している。

もう、家族と言う形態は崩壊しつつあった。

抛り所をなくし、加速度的に弱つていく母がいる。

誰もこの女に手を差し伸べない……無論、僕も助けない。

母は一人で耐えている。

そして、母の出した結論は僕を最後の抛り所とすること。

ある時、誰もいなくなつた父の部屋を冷めた気持ちで眺めていた。すると、ものすごい形相で母が走りよつてきた。

僕は身構えたが、母は構わず抱きしめてくる。

「祐介。あの男のようになつちゃ駄目だから……」

さらに父と外で会つてきたのか、母がアザだらけの腫れた顔で家に帰ってくる。

廊下でばつたり会つと、母は僕の両肩を掴んで語りかけた。

「祐介。アナタだけは女の子には優しくしてね」

いつの間にか母は家から出なくなつてしまった。

買い物だつて僕が言つて食料を調達していた。

僕が買い物袋を差し出すと、母は涙を流して手を握つた。

「祐介。アナタだけが頼りなの」

すでに母は僕の手の内にあった。

とうとう母は家の一室から出ることもなくなつた。

完全に家に引き籠もってしまったのだ。

食事は僕が部屋に運ぶ。排泄の類もこの部屋で行なうので簡易トイレも用意した。

壊れていく人間がどこまで行ってしまうのか興味があったのだ。

そしてある朝、僕がいつものように朝食を部屋の前に置いて声をかける。

すると突然、襖が開く。

引き籠もって以来、久しぶりに肉眼で見た母はもはや人間には見えなかった。

母の目は窪んで周りが黒ずんでいるが、瞳自体には力が籠っていた。

何日も風呂に入っていないので異臭を放ち、アレほど綺麗だった黒髪もツヤをなくしていた。

やはり、肉眼で見るのはファインダー越しとは違う臨場感があった。

僕が一瞬、顔を歪めると、母はぼろぼろと涙を流して僕の手を必死に握った。

「祐介。祐介。祐介。祐介。祐介。祐介。祐介。祐介。祐介。祐介。

祐介。祐介。祐介。祐介。祐介。祐介。祐介。祐介。祐介。祐介。

祐介。祐介……」

もう、潮時かもしれない。醜いだけの存在は悪でしかない。

だから、今日は言ってあげることにした。

言葉に魔法の力を込めて。

「ねえ。母さん、死んでよ。僕のために死んでよ。」

「……祐介？」

すると母は醜い顔を歪ませてさらに醜くした。

「母さんが死ねば、お父さんも帰ってくるかもしれないよ。ねえ、お願い死んでよ。」

「……母さん、死んでいいの。」

死ぬことさえも自分で決められないのか。

もう、死ぬことでしか価値が生み出せないな。

「いいよ、死にな」

僕の言葉に母は忍び泣きではなく、初めて大声で泣いた。声は醜く、僕の頭にこびりついた。

直後の夜、母は自殺した。

その夜、僕は母を撮り続けた。

自殺をためらう母は美しい。生と死の一線を越えようとする姿は、あれほど蔑んでいた女でも美しかった。

何度も何度も手首を切りつけながら、時折声にならない声を小さく上げる。

僕は手伝いたい衝動に駆られたが、撮影に専念することにした。しばらくして、ようやく動脈に達したのか血が噴出する。部屋中に血しぶきが舞い、付着した。さらにタイミングよく月明かりに照らされて、母の返り血が鈍く光ってる。

——なんてすばらしいんだ。

僕は撮影に集中していなかったら、射精していたかもしれない。

出血により母の意識がなくなり、動かないことを確認すると僕は部屋の中に入った。

足を踏み入れた畳はまだ血が固まっていなくてぬるぬるしていた。僕はそれを感じたくて素足で入室した。

部屋に入るとまず、血の匂いを嗅いで僕は吐き気を催す。それがかえって僕に現実感を与えた。目には血まみれの室内が映り、さらに月光に照らされて儚くもさえある。

あれほど醜くい一人の女が死んでいくのが、これほど胸躍るものなのか！

ビデオカメラでぐったりした母を撮影しながら、僕は悦に浸っていた。

画面上の母はあれほど苦しんで死んだはずなのに微笑んでいるようにも見えた。全てから解放された喜びがにじみ出ているようでもあった。

「……ん？」

夢中で撮影していた僕はある異変に気づく。

画面の端に光るものを見つけたのだ。ビデオカメラを顔から離し、肉眼で確認する。

そこで僕はあるものに釘付けになってしまった。

部屋の奥で父がうつ伏せに転がっているのだ。近くで確認するとすでに絶命していた。

背中に刺さった凶器は今朝まで僕が朝食の材料を切っていた包丁。でも今は、父の背中を刺している。

いつの間に父を殺したんだ？ 僕が学校へ行っている間にか？ そんな疑問も、すぐにある結論に達することでかき消された。

……ああ、これが母の出した答えか。

母は僕の事を頼りだと口では言っておいて、結局は父を投げどころにしていたのだ。

僕は映像の最後に相応しくと、二人を重ねるように寝かせる。

死体なのでさすがに重いが、何とか引きずる。畳にはその後が血を擦り付ける様に残った。僕の手にはねつとりと血が付着している。ぬるぬるしていて、だんだん服が掴みにくくなっていくのが煩わしかった。

やっとの事で抱き合うように重ね合わせる。クズ同士、お似合いだ。

死体に向かって笑みを浮かべた瞬間、こみ上げる嫌悪感で二人に唾を吐きかけ、何度か頭を踏みにじった。

なんだこの気持ちは！

——くそつ。

——くそつ！

くそつ——！！

結局、二人して僕を置いていったってわけか！

僕の存在は母にとって、おまけでしかなかったのだ！

勝手に産んでおいて！

勝手に育てて！

勝手に放置かよ！

「うわああああっつ！！」

衝動的に僕は母の太ももに噛み付いていた。

口の中にゴムのような弾力のある感触を歯で受け止めながら、うつすらと口の中で血の香りが充満した。

僕は嘔吐を繰り返しながら、何度も噛み付いて肉を引きちぎった。さらに自然に目からは涙がこぼれていた。

……なんで僕を独りにした？

——どれぐらい時間がたっただろう、僕は我に返るとある覚悟が出来た。

もういいや。

お前達がそれを望んだのなら、それでいいだろう。とうとう結論した。

弱い人間の苦しむ姿を生みだそう。

悩み苦しむ姿を僕は楽しむだけ楽しめばいい。

そして最後には恨みでも愛情でもなんでもいい、一緒に殺してくれ。

こんな人生断ち切ってくれるような病んだ人間が必要なんだ。

魔法の力はそのためにあるのだ。

それ以来、人の死というものに囚われている。

あの時の僕を差し置いて逝った、母の安心しきった顔が忘れられない。

両親の死に行く過程を『suicide magic』として映像にした。

それと共に「僕の意味」を焼き付けたCD-Rを作成した。

僕の意味——それは『死なずにはいられなくなる、自殺したくなる』という気持をこのCD-Rを見た人に植えつけること。後は心が隙だらけの弱い人間を探すだけだ。

そして僕が追い詰めた中でも一番楽しめたのが武内亜也という女だ。

彼女は僕の母と同じで、何かにすぎらなければ、生きていけないような人間だった。都合の良いことに女友達の間でもパシリをやっているような弱い人間。誰も助けようとしないう。条件は揃っている。簡単に引つかかりそうだ。

僕は早速、『suicide magic』を仕掛ける手はずを整えた。

第一に、僕は母が常々言っていた通り、彼女に優しくしてやることにした。

偶然を装い、彼女との出会いを演出し、影ながら自分の味方だと思わせる。

結果、彼女はすごく喜んだ。こうして僕は彼女の信頼を得た。

第二に、外堀を埋めた。武内亜也が言う“友達”と仲良くして彼女の反感を買わせ、武内亜也の孤立を図ったのだ。

そうすることによって、彼女は僕しかいなくなる。

この作戦はリーダーである山崎美咲の嫉妬心が考え以上の成果を上げ、彼女は僕のものとなった。

第三に彼女をさらに追い詰めるために『suicide magic』を郵送する。

これは、いわゆる伏線だ。彼女なら確実にわかるはず……死ぬことがいかに美しいか。

自殺こそが、こんな人生を終わらせる本当の解決方法なのだと。

そして今度こそ彼女によって僕は死ねる、いや、逝かされる。僕もとうとう満たされる時がくるのだ。

最後に、僕は彼女を振った。

ちょうど、“友達”たちが上手い具合に立ち回ったお陰で、順調に事を運ぶことが出来た。

難しいと思っていたことが『どれだけ彼女が僕に未練を残したまま別れられるか』であつたが、それも上手くいった。

後は彼女が僕と死んでくれればそれでいい。

だが、彼女は僕の期待を裏切る。

自分だけ死のうとしたのだ……僕の目の前で。

しかし、他の女と違って彼女は僕が原因で自殺するにもかかわらず、恨んでいるような感じではなく、幸せそうだった。

その笑顔がどこか母とダブる。

また僕を置いていくのかっ！ 死ぬならかつて死ぬ！

僕は腹立たしさのあまり、適当な演技をしてその場を後にした。

そして階段を下りながら、失敗だったと後悔していた。母には後一步足りなかったのだ。あんな笑顔を見せて死んだのに、僕を道連れにはしてくれなかった。

でも……と、ふと立ち止る。あれほど母に近かった人間もいないじゃないか。

また僕は傍観者でいるつもりか？

瞬間的に考えが閃き、結論がでた。

——死なせはしない。

僕は現場に戻り救急車を呼んだ。

そして、この行為は思わぬ効果を生む。彼女は自傷行為を繰り返すようになったのだ。

生き延びたことで終わらない絶望が始まったのだ。

僕もまた、彼女の自殺が見たくて、クラスの男達を彼女と仲良くできるように配慮する事にした。僕の誘いと見せかけて他の男を行かせたりした。当然、その男とは上手くいかず再び自殺する。当たり前だ。

彼女は僕だけが頼りなのだ！ 僕しかない！！

……そう信じていた。

しかし、最近の武内亜也はどうもおかしい。

退院してきて以来、常に広野という普通の男と一緒にいるのだ。最初はいつもの付き合い癖かなと思った。

だが、武内亜也の態度を見て、あくまでも僕のカンだが、今までの男たちとは違う「何か」があるような気がした。なぜなら、広野は武内亜也の自殺を見ても付き合う態度が変わらない。しかも、僕が暇つぶしで付き合っつて『suicide magic』を仕掛けた坂本亜由美までもが、広野にまわり付いているからだ。

なんだこのモヤモヤとした気持ちは？

まさか嫉妬？

……馬鹿な。僕が声をかければ武内亜也はすぐに自殺してくれるはずだ。

そんな時、なんと僕の携帯電話に武内亜也からメールが入ったのだ。

これは好都合だ。

僕の顔を見れば、きっとまた自傷行為を見せてくれるだろう。

彼女の傷つく姿を思い浮かべて僕は興奮した。

第38話 「暮夜」

僕は高揚している。

珍しく先に屋上で待っているのだから。

やはり、僕から逃れることが出来ないんだ。

今度はどんな死をくれるのか……

それにしても門脇の件は失敗だった。

まさか僕自身が手を下す羽目になるとはな。

これからは適当に誰か見繕って家の警護に回すべきだろう。南という女を使つての実験でさらに『suicide magic』の精度を高めたのだから、簡単に操ることは出来るはずだ。門脇の始末もそいつにさせるか。

やはり僕の力は心に隙が無い人間には通用しないのだ。

世の中を動かすことには興味は無いが万能でない以上、自分の楽しみに使うのが得策というものだ。

それにしても三月に入つたばかりで、屋上は冷たい風が吹いて寒い。

僕は撮影用のビデオカメラを屋上の隅に設置し、武内亜也とのやり取りが全て録画できるようにセットした。

もう少しの我慢だ。すぐ武内が僕を暖めてくれるだろう。

だが彼女が僕を殺してくれる状況には程遠い。もしかしたら、まだ愛情が足りないのかもしれない。

であれば、この辺りでよりを戻すのもいいかもしれない。広野という虫も湧いてきたようだしな。

と、僕が今後の算段を練っていると、錆びた屋上のドアが音を立てて開く音がした。

ドアが開ききると、やや茶色がかったセミロングの髪が見えた。
武内亜也が不安げな表情を見せながら表れたのだ。

「あつ……」

彼女は視線の先に僕がいることを見つけると、驚いたように目を大きく開ける。

その後、きゅっと下唇を軽く噛み、真剣な面持ちで屋上へ足を踏み入れた。

武内亜也は黙ったまま僕に近づいてくる。

僕は“いつもの僕”を装った。

誰にも警戒をされない笑顔。だが過去のことでもあるから少し怯えた瞳も忘れない。弱い武内亜也のことだ、それだけで負い目を感じるに違いない。

「なに？ 武内さん。用って？」

早く言ってくれ、僕に対する愛情の言葉を。

「うん……」

それっきり彼女は黙っていた。仕方ないので僕は潤んだ瞳で彼女を見つめた。

一瞬、視線が揺れる。以前なら僕に見つめられただけで、視線をそらせていたはずだ。

これはよほど何かしらの決意をしてきたのだろう。僕は思わず笑い出しそうになるのを堪えた。じゃあ、見せてもらおうかその想いを。ああ……視線だけでも逝きそうだ。

すると少しして覚悟ができたのか、彼女は口を開いた。

「……この前、来てくれなかったから、今日も駄目かと思った」

この前？ ああ、坂本亜由美にCD-Rを渡すかどうか考えていた時か。

あれは失敗だった。そのせいで門脇が家へ侵入してきたのだから。僕は俯き、いかにも辛そうでためらいがちに話しかけた。

「ゴメン。君に会うのがつらくて……」

「そ、そうなんだ……やっぱり……」

この言葉は確実に彼女へ効いてるはずだ。実際、彼女は耐えられなくなったのか俯いた。

その顔が見たい。もっとよく見せておくれ、その顔が僕をやる気にさせるんだ。

だが、まだ足りない。表情が追い詰められていない。少し餌を撒いてやるか。

僕は自分の言葉に力を込めた。彼女の気持ちをくすぐるように。

「ちよつと前も君が病院に運ばれたって聞いたよ」

「うん……私、またしちゃったから」

時々、前髪から少しだけ覗く、上目遣いの視線。そんなに僕の機嫌が気になるか？

やっぱり、僕の力は健在だった。武内亜也の心の中はまだ隙だらけじゃないか！

「本当は駆けつけてあげたかったけど、君の傷つく姿を見ていられなくて……」

「——っ!？」

ほら、すぐに反応する。武内亜也は勢い良く僕へと顔を上げた。未練あり過ぎじゃないか。その瞳に溜まった涙が物語ってるよ。

すると武内亜也は唇を震わせながら、何とか声をだした。

「あのね、今日は土屋君に言っておきたいことがあって……」

「僕に言いたいこと？」

『まだ好きなの』か？ それとも『もう一度やり直して』か？

まさか『一緒に死んで』じゃないよな。

まあ、何にしても僕の心を満たしてくるに違いない。

そして武内亜也のいった言葉は、僕の期待とは裏腹なものだった。

「私、土屋くんを諦める」

「——え？」

彼女は今、なんて言ったんだ？ 事態が上手く飲み込めない。

「今までつきまとしてゴメンね」

「……は？」

「はあ！！！！？　僕を諦める？　バカな！！　ありえない！！」

「亜也は僕のことか“まだ”好きなはずじゃないか！！」

「そんな僕の気持ちをよそに彼女は話し続ける。」

「……っていつても、もう土屋くんは、私のことなんてなんとも思っていないか」

「僕は目の前が変形していくのを感じた。どこが上だか下だかわからない。これが前後不覚に陥るということなのか？　今にもふらつき倒れそうだった。」

「何言ってるんだ武内亜也。」

「僕への気持ちはそんなものだったのか！？」

「自分で手首を切りつけた……あれは嘘だったのか！？」

「その瞬間、僕の中で波紋のように広がる声。」

「……そうだ、嘘だよ。」

「誰かが僕の心へ話しかけたような気がした。」

『だって、彼女の行動は全部アタの魔法のせいじゃないか。悪いのは自分。全部自分のせい。あの時母さんが死んだのもお前のせいだよ』

「誰だ！　誰なんだ！　僕に話しかけるのは！？」

「……まさか自分自身！？」

「土屋君？」

「……はっ！？」

「武内は眉間にシワを寄せて心配そうな表情で僕を伺っていた。」

「僕はふらつきそうな自分を何とか抑えて彼女に笑いかけた。とてもなく硬い表情だ。作り物の笑顔。今までだってそうだけど、今回はさらに酷い。」

「土屋君、本当に今までゴメンね。うん。それだけだから……」

「我に返り、正面を見ると武内は微笑んでいるような気がした。」

「いや……コイツは笑っているんだ。僕を笑っているんだ！　取り」

残された哀れな人間として……

武内亜也は僕へ一礼をすると僕に背を向けた。

嘘なんだろう？　そうやって僕の気を引く作戦なんだよな？

弱い人間のお前に僕の力が通用しないわけが無いんだっ！

段々武内亜也の後姿が小さくなっていく。

嘘だ！　嘘だっ！　嘘だっ！！　嘘だっ！！　嘘だっ！！！！
だっ！！！！！！　嘘

僕は頭を抱えてしゃがみこみたい衝動を必死に抑えた。

——もしかして！？

その時、とつさに頭に浮かんだのは同じクラスの広野貴明だった。

僕は武内亜也へすがるように問いかけた。

「広野のこと好きなの？」

すると彼女は歩みを止めた。一瞬肩が震えた気がする。

少し間をおいて振り向くと、武内亜也はにっこり微笑んだ。

「そんなわけないよ」

「ああ……」

明らかにウソだった。この女は顔を作ってから言っている。

これで、この女の広野への気持ちはわかった。

武内亜也の心の隙を埋めたのは広野だということのか！？

だから、僕の声を通じなくなったというのか！？

やたら心音が頭に響く。この僕が緊張しているというのか？

僕は明らかに今、広野に嫉妬している。

やはりあの時、南に広野を殺させるべきだった！

待てよ……広野を殺せば、武内亜也は戻ってくるはずじゃないか？

——いや、来るはずがない。

お前は忘れたのか？　母が何をしたのかを。

武内亜也だって広野が死ねば、後追い自殺しかねない。

また僕は置いていかれるのか？

そんなの………

そんなの……

僕が――

「許さない」

僕は武内亜也に早足で歩み寄った。

そして無防備な背中に手を伸ばし、肩をつかむ。

「えっ!？」

彼女はすぐに振り向いた。瞳を大きく開き、口を歪ませている。明らかに動揺しているようだった。

僕は彼女を抱き寄せてキスしようとする。

「い、嫌っ!！」

彼女は必死に僕の胸を押して拒んだ。それどころか、僕から逃げようとした。

もはや体面なんて構っていられない。僕は叫ぶように武内へ懇願した。

「待ってくれ! 僕は、僕は、気付いた! 今でも君のことが好きなんだ!」

「――え?」

彼女は一瞬動きを止め、僕と至近距離で向き合った。ああ、数ヶ月前、確かに僕はこの女を抱いたんだ。その瞳、その唇、その体、全てが僕のものなんだっ!!

「だから、だから、僕を拒まないでくれ!」

「あつ、あの……」

彼女は僕の言葉に瞳から涙をこぼした。自分でも気づかなかったのだろうか、頬を伝って一筋流れていく。

僕と武内は見つめあったまま動かないでいる。もう、視線は離れないはずだった。

しかし、彼女は目を伏せ、僕から離れていく。

そして決定的な言葉を告げた。

「ごめんなさい。私、もう決めたから……一人でがんばるって」

その瞬間、僕の中で何かが壊れた。

涙を拭いながら彼女は再び屋上のドアへと歩き出した。

コイツも僕を置いて死んでいったあの女と同じか……

僕はポケットにあった“アレ”を握る。

「僕がいなけりや駄目なくせに！」

情けないが大声で叫ぶ。なんという負け犬の遠吠えなんだ。

しかし、彼女はもう振り向くことは無い。

僕は足をゆっくり上げた。

「……一人で行けると思っているのかい？」

駆け出した僕は武内亜也に向けて一直線に駆け寄る。

僕が近づいた瞬間、武内亜也は振り向いたので半身の体勢になった。

そして、この女にアレを突き出した。

「あぐっ！」

僕の突き出したナイフはこの女の胸に突き刺さった。

亜也は状況が飲み込めないのか少し驚いた顔を見せ、突き刺したナイフを見た後に僕を見る。

「っ、つち……や……くん……これ……」

「光栄に思っただね。このナイフは母さんが自殺する時に使ったものなんだから」

「はぁ、はぁっ……嫌……」

「死ねよ」

僕はナイフを一気に引き抜くと、制服がどんどん血に染まっていた。

武内亜也はそれを押さえようと必死に胸に手を当てる。まったく無駄な行為だ。

「どうだい？ 自傷行為とは痛みが全然違うだろ？」

「痛いっ、痛いよう……なんで、なんで？……うつつあああっ！！」

とうとう太ももが震えだし、武内亜也は膝から崩れていく。そのまま体を床に打ちつけるように倒れた。

それでも僕をじっと見つめ口を動かすが、聞く気も無いので無視をした。

「でもね、僕の痛みはこんなもんじゃないんだよ？」

「はっ…はっ、はあっ……かはっつ！ ……ああっ、はああっ……」

呼吸困難に陥ったのか、過呼吸気味に呼吸を乱して、次第に胸をかきむしり始めた。

そして亜也は口から血が漏れた。最初は堪えていたようで、閉じた口からゆっくり流れ流れていた血も、限界に達し口を開くと同時に吐しゃ物のように噴出した。

「あぐっ……あぐっ……ぐぐっ……ぐ……」

さらに、涙と口からの血が混ざり合って流れる。血を吐きながら、何かを言おうとする姿は魅力的だった。

すごく綺麗だ。傷口を舐めたい。顔をうずめたい。亜也の血に包まれない。

「大丈夫だよ。すぐに僕も行くから」

「……」

「二人で新しい『suicide magic』を作ろう」

彼女はもはや何も言わず、体を軽く痙攣させているだけだった。

徐々に床に血が広がる。その血が僕の足元に達する頃、僕は彼女が自殺した時の撮影用として持ってきていたもう一台のビデオカメラをカバンから取り出し、撮影を始めた。

これは二人だけの時間だ。誰にも邪魔させない。

「撮り終わったら、早速家に帰って準備をしよう」

暗くなつたのを見計らって、亜也と共に家へ帰るとするか。

今、僕は最高に幸せだ。

第39話 「白夜」

それは夜、坂本亜由美からの電話で始まった。

「あつ、広野くん？ 変なの！」

坂本はいつもの自信ありげな感じではなく、少し慌てている。でももう寝ようと思っていた僕は状況がよく飲み込めない。

「何？」

「亜也が……武内亜也が何処にもいないの！」

僕は武内がいらないことより、なぜ坂本が武内のことを心配しているかが気になる。

それに呼び方が「武内さん」から「亜也」に変わってるじゃないか。

つまり、余計なことを考える余裕があり、この段階では武内のこととは本気にしていなかった。

「なんでそんなことを坂本が気にしてるんだ？」

「実は今日、亜也が私の家に遊びに来る予定だったの」

「遊びに来る？」

遊園地以来、二人はそこまで仲良くなっていたのか。

「うん。『土屋と縁切れてよかったねパーティー』を企画してたの」

「あ、そうなんだ……」

お前達は何を企画してんだ。

僕の突っ込みをよそに、坂本は声のトーンを一段と落としながら話し続ける。

「土屋君にお別れを言ってからここに来る予定だったんだけど……」

「武内は土屋に会いに行つたのか？」

「土屋にお別れを言うためにね」

武内がお別れを言うということとは知っていたが、まさかそれが今日だとは気づかなかった。

なぜ僕に言ってくれなかったんだよ……いや、それより今は状況

確認だ。

「その後、すぐ来るって言ったのか？」

「うん。今日は一人じゃ何かと考え込んでるうって、私の家に泊まりに来る予定だったの……でも来ないし。それどころか、携帯電話もつながらなくて……」

「まさか……」

土屋の名前を聞いた以上は放置しておけない問題だ。

僕は背中に冷たいものが走るような感覚をおぼえた。ここでもうやく現実味が増したのだ。

「だから私今、学校の周辺を探してるの。そこでお願いだけど、広野君は亜也の自宅を探してくれない？」

「よ、よし。分かった！」

僕は慌てて電話を切った後、武内の家へ駆けつけた。

でも、家には着いたものの、ドアには鍵が掛かっていて中に入れない。外から伺っても家全体が暗く、とても人がいる雰囲気に見えなかった。

僕が思案した末、鍵を魔法で開けることに決めた頃、ちょうど坂本が駆けつけてくれた。パーカーにジーンズと比較的軽装であらわれたところを見ると、坂本も慌てて探しに出てくれたに違いない。

僕が搜索の結果を聞くと、坂本は黙って首を振る。ようするに駄目ってことか……

「それじゃあ、後はこの家を探すだけだな。まってる今魔法で鍵を開けるから」

すると坂本が僕を手で制しながら、着ていたパーカーのポケットから何かを取り出す。

「魔法なんて使わなくても大丈夫、私が合鍵持ってるから」

「え！？ いつから？」

「二、三日前かな」

いつのまにそこまで二人の仲が深まっていたのだ？ ちょっとだ

け坂本に嫉妬しながら家の中に入った。

しかし、二人で手分けして探したけど、家には誰もいない。
この事実坂本と僕は、改めてよく考えてみることにする。

あくまで僕は自殺の線を捨てきれないでいた。

「前回はここで自殺を見つけたから、他の場所なんじゃないか？」
もし、他の場所であれば、もう遅いかもしれない。

しかし、坂本は眉間にシワを寄せて首を振った。

「亜也はもう自殺なんかしないはず」

「なんでそう言えるんだよ」

「だって、亜也は土屋に縁を切るために行ったんだよ？」

確かにもう覚悟を決めていったはずなんだから、今更振られても意味が無い。だとしても、武内は気持ちがまだ揺れ動いているようなところがあるから油断なら無い。

僕が納得できない表情でいると、坂本は自分を抱くように腕を回し、俯いた。

「それと……私に『自殺はもうしないって』言ったから……」

そう言っ坂本は下唇を軽くかむ。確かにそれは遊園地で僕も（隠れて）聞いた。病院では僕にも『頑張る』って言ったし……

ふと坂本の顔をみると、すっかり黙り込んで顔面が蒼白になっていた。彼女にしてみれば、この二週間の間に友人が二人行方不明になったことになるので無理はない。

このまま手をこまねいて立ち止まっいても冷や汗を流すだけに過ぎない。とにかく武内を探さなければ。

「坂本。……だとしたら、辿るしかないな」

「辿るって？」

坂本は答えを必死に求める生徒のように、僕へ期待の視線を向ける。

「今わかっていることは、土屋に会いに行っってからいなくなった、
ってことぐらいだ。だから、土屋の家に行く」

「うん。おそらく、それしかないと思う」

坂本は頷き、僕らは土屋の家へ向かうことになった。

とはいえ、僕は土屋の自宅を知らないので、坂本に案内してもらうことにした。

時間が無いので僕と坂本は早足で進みながら、話をする。

「たしかに私も家の前までは行ったことあるけど……」

「そうか、坂本は土屋と付き合ってたって話だよな」

「あんまりそれは言われたくないけど、事実だから……」

すると坂本は浮かない顔をした。なぜそんな顔をするのか僕はよく分からない。

まあ、そんなことよりも僕は土屋について実は良く知らない。武内の話を聞いてからは特に避けていたのではなおさらだ。

丁度いい機会なので土屋の家に到着する前に坂本へ聞いてみようと思う。

「坂本、土屋の印象ってどんなの？」

「えっ！？ 広野君は同じクラスじゃない」

「うーん、そうだけど。僕が知っているのは誰に対しても優しい優等生ってイメージだけだからなあ……」

正直、あまり土屋のことは好きではなかった。武内との関係も嫌いになった要因ではあるけど、一番ネックになっているのが、『誰にでも優しい』という部分だ。

誰にでも同じ態度ということとは、分け隔て無いという意味もあるけど、常に一定距離を保つてるともいえるから、どこか僕の「他人とほどよく上手くやるっていう」気持ちに似ていると思ったのだ。もつと言え、僕のやりたいことを難なくこなしているという気がして君が悪かった。同属嫌悪みたいなものかな。

「私もまったく同じ印象だよ」

「え！？ 付き合ってたんだろ？ 他のやつらとは違うだろ？」

すると坂本も早足で歩きながら腕を組んで考えた後、苦笑気味に

僕へ答えた。

「本当のところ、あんまり付き合ってる感覚がなかったな」

「どうして？」

「誰に対しても優しいし。私に対してもそれは変わらないの」

「そ、そうなんだ……」

ふと気づくと坂本は上目遣いでこちらを伺っていた。

そして僕と目が合うと彼女は申し訳なさそうに、おずおずと話し始めた。

「あの……土屋と付き合ってて、ごめんなさい。ただ、広野君と付き合った時、戸惑わないようにするための練習だったというか……」

「心配しなくても全然気にして無いし」

「……気にしてないんだ」

「その通り。今は武内を探すことに専念だ」

「う、うん……」

その時なんだか坂本が目を伏せた気がしたけど、僕にはそれを気にしている余裕がなかった。

「もうすぐ着くよ」

「へえ、この辺りに住んでいるのか……」

土屋の家は閑静な住宅街にあった。

同じような家が並んでいるこの辺り一帯は、無個性の塊のようだった。

「こんな場所だから」誰にでも優しい土屋”ができたのだろうか？さらにたどり着いた土屋の家は、予想通り何の変哲のない、ありふれた二階建ての住宅だった。

ほとんど話した事はないけど、色々と話を聞いたことがある人間と会ったのは、なんだか奇妙な気分だ。僕は少し緊張しながら玄関のベルを鳴らした。

するとインターフォンから土屋らしき声が聞こえた。

「はい、どなたですか？」

「えっと、同じクラスの広野だけど、ちょっと聞きたいことがあるんだ。今玄関に出てこられる？」

「……わかった。ちょっと待ってて」

僕が話し終わった後、土屋がそれを返答するのに十数秒ぐらいを要した。

しかも、いつも聞いている人当たりのよいソフトな声とは少し違う気がする。

とにかく、外まで来てくれるので、玄関前で待つことにした。

すると「私は土屋君と会いたくないから」と、坂本は玄関から離れた。確かに別れた彼氏と会ったから気まずいといえは気まずいか。

しばらくすると、玄関の明かりがついて鍵の開く音がした。

続いてゆつくりと玄関のドアが数十センチほど開き、半身を出すように土屋が顔を出した。

なんだかいつも笑顔の印象があったのだけど、今日はいつもと違って無表情だった。

特に目が何と言うか……光が無い。死んだ魚の目？

違うな、そう、例えるなら暗闇だ。

「何か用？」

「――っ!？」

よくわからないが、たった一言声を聞いただけで、体が電気が走ったように反応する。

何なんだ一体……ちょっと足がすくむ。

でも、普段と印象が違うからと言って怯むわけにもいかない。

僕はなるべく簡素で単刀直入に質問した。

「土屋。いきなりだけど、今日お前、武内と会っただろ？」

それを聞くと、土屋は口を歪ませ、眉間に力が入り、「あからさまに」嫌な顔をした。学校でのニコニコ顔とは大違いだ。

しかも、暗闇の瞳は相変わらず、僕を飲み込んでしまいそうだ。

「確かに会ったよ。でも、それが何か？」

さらにフンと鼻で笑い、馬鹿にするような口調で言葉を続けた。

その声は僕の怒りを増幅させるには自然なものだ。

人を腹立たせる力がある声なんてそうはないな。

「ナンだかよく分からないけど、彼女はもう付き合ってもいないのに、勝手にお別れ言って、勝手に帰って行ったよ。本当に迷惑な話だ」

「何だと!？」

土屋の言い方に僕は瞬間的に頭へ血が上った。

武内がどんな気持ちで、再び土屋の前に立ったのか、コイツは少しもわかってないじゃないか！

……だけど、土屋の話が本当ならば、武内は本懐を遂げたわけだ。コイツもいきなりの話しだったろうから、怪訝な顔を見せるのも仕方ない気がした。

第一、今はそんな場合ではなかった。

「それだけだな。なにも武内が傷つくような言葉を言っていないな」

「はあ!？　なんで僕がそんなことを言わなきゃいけないの？」

「本当だな」

僕は土屋を睨みつけた。土屋も目を逸らさない。

本能がそうさせるのか、暗闇の目に僕の体がビリビリ反応する。だからって逃げないぞ、こっちは武内の運命が掛かっているんだ。

緊張状態が続く……かに見えたが、すぐに終着を迎えた。

「悪いけど、僕は忙しいんで」と言つと、土屋はドアを閉めたからだ。

閉じられたドアに向かって一つため息をつくつと、どっと疲れが襲う。

——なんだあのどんよりと飲み込んでしまいそうな威圧感は……

今回のことで土屋の印象が一気に変わった。

結局、僕はゆっくりと振り向き、他をあたることに決めた。

家の外では坂本が心配そうに僕を迎えた。

「大丈夫だった！？　なにか言い争っているように見えたけど」

「なんでもないさ。さあ、他を当たろう」

これ以上、留まるのはゴメンだった。いきなり夜遅くに家まで押しかけてきた事は悪かったけど、あんな態度で接することは無いだろう！　やっぱり武内の件を含め、土屋は最低だ。

僕は足早に立ち去ろうとしたけど、なぜか坂本が動こうとしなかった。

変に思った僕が振り返ると、彼女は自信なさげに話しかけてきた。

「あの……」

「どうした？」

「ここで見てたからよくわからないけど、土屋の手がやけに汚れていた気がする……」

「そうかな？　でも仮にアイツの手が汚れてたとしても関係ないだろう」

「う、うん……」

いつまでも坂本がグズグズしていたので、僕は彼女の腕を掴むとこの場を立ち去った。

それから、僕達は街のあちらこちらを探したが、武内は見つからない。

坂本はさすがに疲れた顔をしていた。無理もない、あれから六時間以上休みなしに探し続けているのだから。

僕にも疲れと、心の中で武内の喪失感が広がっていく。

――嘘だろ？　今日まで元気だったじゃないか。

いつの間にか、僕と坂本は無言で立ち止まっていた。しばらくして、坂本がつぶやいた。

「もしかして、もう……」

坂本のその言葉に、僕は異常に反応してしまった。

「そんなことはない！　武内は『頑張る』って言ったんだ！！　僕は武内を信じる！！」

すると、坂本は少し口を尖らせながら、しゃがみこむ。

「本当に好きなんだ……彼女のこと」

「今は関係ないだろ、そんなこと！」

確かに一番の関心事は武内を探すことだ。

でも、実はそれ以外に別の事も考えていた。

それは自分にこれから降りかかるであろう、身の振り方。

この考えは、まだうつすらとしたものではあるが、少しずつ僕の頭に広がっていく。

僕の思いとは関係なく、坂本は勢いよく立ち上がると、こっちを睨みつけた。

「そんなに私に向かって彼女の想いをぶつけないでよー!!」

「?!」

僕は坂本が今何を考えているのか、よく分からなかった。
なんでそんな事を今叫ぶんだよ。

「こんな時に何を言ってるんだ？ 武内の命がかかってるんだぞ！」

「それはわかるけど……わかるけどー!!」

坂本は歯を食いしばり、何かを我慢するように目を瞑る。

その直後にふっと脱力したように肩が下がった。

「私だって女の子なんだよ……こんな遅くまで一緒に探しているのに……家族にだって嘘ついてるのに……」

なんだか僕はその言い分に腹が立ってしまった。

辛いのは坂本だけじゃない、僕だって同じだ。

「わかったよ。坂本はもう帰れ」

「そんな……」

「後は僕だけで武内を探す」

すると坂本は一步、二歩と僕はゆっくり歩み寄る。

その表情は何かにすがるように必死に見えた。

「広野君？ 一人で探して見つかると思ってるの？」

「わからない。でも、武内は今どこかで苦しんでるかもしれないん

だ」

「じゃあ、警察行つて捜索願いをだそうよ」

「そうだな。坂本、悪いけど家に帰りがてらに武内の捜索願を出してくれよ」

「広野君は？」

「僕は武内を探す。一分一秒だつて無駄に出来ないんだ」

そう言つて僕は坂本に背を向けて歩き出した。

すると数歩歩いた後、坂本の叫び声が聞こえる。

「もう、なんで！？ さつきから亜也ばかり！」

僕が何事かと振り向くと、坂本は大粒の涙を流して、再びしゃがみこんでいた。

なぜ坂本が泣いているのか意味が分からない僕は首を傾げてしまふ。

それに彼女は敏感に反応した。

「私は広野君のこと……アナタのことがこんなに好きなのに！」

「坂本？」

「そんなに亜也が好きなら勝手にすればいい！！……帰る！！」

坂本は立ち上がると、そのまま振り向かず走り去ってしまった。

その時ようやく、坂本の気持ちを無視していたことを知る。

でも、今の僕に坂本を気遣っている余裕はない。

お互いに疲れているからあんな言い方になっただけの話だ。

僕は一人で探すことにした。

それからどれだけ時間がたったのだろうか……何処まで探しても、武内は見つからない。

探しながら僕の頭の中でぼんやりしていたものが、次第にハッキリする。

この時の僕には、二つの選択肢があった。

魔法を使つて運命に逆らうか？

使わずに運命を甘受するか？

雨が降つてることに気付いた時には夜が明け、よくわからない路地裏で、僕はびしょ濡れになって立ち尽くしていた。

まだ探せるはずだ……僕は歩けるだけ歩く。

辺りは明るくなって、暗くなって、また明るくなる。

いつしか本当の目的がおぼろになり、僕はさまよっていた。迷えば迷うほど当初の目的を忘れていく。

……そうだ武内を探さなきゃ。

でも眠気と諦めが僕を襲う。「探すのをやめれば楽になる」ホントにそうだ。だけど、考えれば考えるほど……「今はただ、一人でも武内を探すことだけが僕のやるべきことだ」と思い直す。

しかし、足取りはたどたどしく、周りの風景は歪んでいった。

ここはどこだ？ 何をしたらいいんだ？

天地が回転したような感覚に陥り、僕は膝から崩れた。直後に顔面に衝撃を受けた後、目の前が真っ暗になる。ぷつつりその後の記憶が無い。

まだ探さなきゃ……

第40話 「深更」

あれは確か武内がいなくなった日の放課後だった。

僕は帰り支度をすると思席を立ち上がる。最近坂本と武内と僕の三人で帰ることが多かったので、自然に武内の様子を伺った。

すると、彼女はまだ何も用意をしておらず、机に肘ついて座ったままだった。

「武内、帰らないのか？」

「うん、今日はちょっと用事があるから……」

なんだか返答も歯切れが悪く、一瞬様子が変だなと感じた。

僕の怪訝な表情を感じ取ったのか、武内はこちらに微笑みかけた。
「うん、大した用事じゃないよ。出席日数の関係で先生と話があつてね」

「マジで？ お前、進級大丈夫なのか？」

「大丈夫、大丈夫。補習の話になると思うから。だから心配しないで、広野先輩」

そういうと、武内はニコツと歯を見せて笑った。

僕は呆れて自然にため息が出てしまう。

「はあく。お前なあ、そういう冗談は止めろよ」

「でも、可愛い後輩に『先輩』とか言われて構われない、っていうのが男のロマンでしょ？」

「一体それ、どこ情報だよ……」

僕の呆れ顔を確認したところで、武内は満足そうに目を細める。

でも、すぐに表情が戻り、少し真剣な表情で続きを話した。

「と、まあ冗談はさておき。明後日から春休みだし、またどこか遊びに行こうよ」

「おう、絶対行こう！」

「もちろん、坂本さん入れて三人で」

「お、おう。当たり前だろ……」

しまったと思ったが後の祭り、武内はジト目になりながら僕を覗き込む。

そして顔をそらす僕。

「何で今、返事する勢いがなくなったの？」

「そうか？ 気のせいだぞ」

「……顔、赤いよ」

「えー！？」

「あはは、冗談だよ」

弄ばれている状況になんとか恥ずかしくなり、僕は手で顔の側面を押さえた。

しばらく武内は僕を覗き込んでいたが、飽きたのか教室の窓へと顔を向ける。

外は夕暮れで、オレンジ色した太陽が教室を照らしていた。

「私は今の関係が一番幸せだなんて思う。このままずっと続いて欲しいな……」

「どうしたんだよ急に」

「別に」

すると、武内は僕へと振り向く。夕日を浴びた彼女はちょっとだけ神秘的だった。

「ただ、広野君が何か進展を望んでいるんだとしたら、もう少し待ってくれないかなって思っただけ」

「僕が進展を望んでる？」

「違う？」

「えっと……」

少しの間、僕と武内は見つめあったまま動けなかった。

武内の言う進展の意味が僕にはわからないので答えられない。

いや、わからないフリをしていただけなのかもしれない。

結局、この状態を破ったのは武内だった。携帯電話を取り出し、時間を確認する。

「ごめん、ちょっと今日の私変だね。じゃあ、時間だから」

「俺もついていこうか？ 職員室まで」

「いい。これは私の問題だから」

と言つて武内は教室を出て行つた。

それが彼女を見た最後だった。

教室を出て行く瞬間、僕に武内は笑いかけた。歯を見せた満面の笑みは僕を安心させた。

と同時に、辺りが真っ暗になる。頬に固い感触。気づけば僕は倒れていた。

何だ一体！？

……これは夢だったのか？

暖かい光りが、まぶたを閉じていても降り注ぐ。

僕は眩しくて目を覚ますと、どこかの部屋にいた。

半身を起こして辺りを見渡す。確実に言えるのは、ここは僕の部屋ではないということだ。

まず、雰囲気からしてカーテンがピンク色系統だったり、ぬいぐるみが辺りに置かれている。部屋中がきちんと整理がされていて、なんだこのベタな女の子した部屋は？

僕が色々と思案していると背後に誰かの気配を感じた。

「武内！？」

「……ごめん、亜也じゃなくて」

「ああ、坂本か……」

振り向くとそこにいたのは坂本だった。

僕は最初何も言えず、ずっと坂本を見つめていたが、やがて顔をそらした。

坂本も僕と目が合った瞬間、目を伏せていた。

やはり、ケンカ別れしたこともあって、気まずい雰囲気が漂う。

「……まだ動かないほうがいいと思う。雨にぬれながら三日探し続

けて、風邪引いて倒れたんだよ」

「坂本？」

坂本はまだ目は合わそうとしないが、淡々と話し続けた。

「それから二日もずっと眠り続けていたんだから……」

「……そうか」

「あつ、安心して。ここは私の家だから」

「もしかして、坂本が運んでくれたのか？」

すると坂本は頷き、僕が寝ていたベッドから離れた。

僕は時間の観念もわからず探していたけど、あれから合計で五日たったことになる。

「家には連絡しておいたから。もちろん私じゃなくて、後で話す広野君と同じクラスの男の子に頼んだの。『友達の家に泊まる』って」

「そうなんだ……ありがとう」

確かに今頃何も連絡していなかったら、家中が騒ぎになっていたかもしれない。

坂本に感謝するべきだと思う。

でも、今はもっと気になることがあった。

「で、武内は？」

坂本は黙って首を振る。僕の心にズシリと重いものが再びのしかかった気がした。

探さなきゃ。僕はベッドから身を乗り出した。

「どこいくの？ まだ動いちゃ駄目だつて！」

「そういうわけにはいかない、探さなきゃ」

しかし、ずっと寝てたせいもあってか、僕は上手く立ち上がるこゝとができない。よろめく僕に坂本が駆け寄り、体を支えてくれた。

「無理だつて！ とりあえず座つて」

坂本に力づくでベッドに座らされる。簡単に女の子によって押さえつけられる程、僕の体力は落ちていた。かなり自分が情けなく感じた。

「闇雲に探しても結果は同じだと思うよ」

「じゃあ、どうしたらいいんだよ！」

「そんなに大声で言わないで。少し落ち着こうよ……」

「……ごめん」

坂本は俯いて何度も前髪を整えながら、僕が落ち着くのを待っていた。

危うく、この前の二の舞になるところだった。

何か坂本に考えがあるのかもしれない。僕はまず意見を聞いてみることにした。

「実は広野君が寝ている間に私なりに調べたの」

僕が寝ている間に調べた？

坂本は僕の無神経な言葉に怒っていたはず。

それでも、彼女は倒れた僕を自分の家まで運んでくれた。それだけでなく、武内のことまで調べてくれていたなんて。

僕は自分が情けなかった。一人で戦っていた気になっていた。

もう坂本を心配させるわけにはいかない気がした。これからは協力して探すが一番だ。

「ありがとう、坂本」

「ううん、気にしないで。私だって我まま言っでごめんなさい」

坂本は歯を見せて僕に笑いかけた。でも、すこし無理のある笑顔に見えた。

そしてこの表情が最後に見せた武内の笑顔に似ていて驚いた。もしかして武内もあの時無理をして……

「話を続けるね。広野君と同じクラスの門脇が、二週間近く行方不明なのは知ってるでしょ？」

「知ってるけど」

だから3人で遊園地行ったんだ、忘れるはずない。

坂本が門脇と友達だったのが意外だったが、それとどう関係があるというのか。

「門脇の友達に渡辺っているのがいるんだけど、彼に失踪前日の話を聞いた事があったの。広野君の家に電話してくれたのも彼だよ」
「渡辺？ ああ、同じクラスの門脇といつもつるんでいた男か」
「うん。そしたら……門脇が失踪直前に『土屋の家に忍び込む』って言うてたらしいの」

「土屋だつて!？」

また奴の名前が出てきた。僕は驚きを隠せない。

そのまま坂本へ視線を移すと彼女は真剣な表情で頷いた。

「もうわかったと思うけど、亜也と門脇の2人の失踪した出発点は、土屋君なの」

しかし、五日前に土屋の家へ行つたときは……

「土屋は知らないって言うてたぞ」

「だから私も改めて土屋君に聞こうとしたんだけど……」

「どうした？」

「彼、四日前の終業式を欠席したから聞けなくて……それに広野君は倒れてて寝てたし、私ひとり先走るのも危険だと思って……」

そついい終わると坂本は目を伏せた。すぐに行動しなかったことを後悔しているのだろうか？

俯く坂本の頭に僕は手をやさしく乗せた。すると坂本の肩がわずかに震える。

「本当にありがとう。坂本がそんなに一人で無理しなくてもいいよ」

「……ごめんね」

「悪いのは坂本じゃないさ。最初から協力して探さなかった僕が悪い」

僕はここで初めて土屋に対して憎しみを抱いた。

もちろん、まだ奴の責任だと決定的に決まったわけじゃない。だけど本能的に告げるのだ。土屋は危険だと。

「よし、土屋の家に行こう」

「待って、今度は私も最後まで付いて行く」

僕はふらつく体に苛立ちながら立ち上がる。

すると坂本が僕の腕を掴んでサポートしてくれた。

「よかったら、私につかまって」

「ありがとう」

そんな坂本の気遣いを嬉しく思う。

こうして僕たちは改めて土屋の家に向かうことにした。

土屋の家に行く頃には日はもう沈みかけていた。暗くなった道路には、街灯があちらこちらに点き始めている。坂本は僕を気遣うように寄り添って歩いてくれた。

坂本の顔を自分の近く感じていると、彼女は僕へと質問する。

「前から思ってたこと聞いていい？」

「何？」

「広野君はなぜ魔法を使って探さないの？」

真剣な坂本の眼差しが僕へ突き刺さる。その質問にはどこか非難めいたものを感じた。もちろん僕の思い込みかもしれない。

「魔法を使えば簡単に解決できるじゃない」……と。

僕はその質問には今だに上手い答えが見つからないでいた。

いや、実はもう見つかつているのかもしれない。

しかし、僕はわからないフリをする。

「僕の魔法の原動力は使用者の幸福なんだ。そして、使用後には必ず、使った幸福の埋め合わせとして、不幸なことが起きる。だから魔法で武内が見つかったとしても、僕に何らかの不幸なことが起きることになるんだ」

坂本は黙って聞いている。

ここから僕は慎重に話し始めた。色々と悟られないように。

「不幸の種類と言うのは様々あって、怖かったんだ。魔法を使った末の僕の不幸が、武内の死じゃないかって……」

僕はテストで言えば半分正解の答えを出した。

坂本はしばらくじっとこっちを見つめている。なんだか僕の答えに対して不満そうに見えた。

しかし、やがて坂本は目を瞑り、一つ頷いた。

「……わかった。広野君の気持ちは」

僕はまた、坂本の気持ちを損ねたかもしれない。

ただ、正確な話は伝えられない、僕だって揺れ動いてるんだから。そして僕の腕を掴んでいる坂本の手が力が入った。

「大丈夫。私は私なりに、気持ちの整理ができたから。今は、亜也を探し出すことに集中することにしたの」

僕は坂本の気持ちはよく分らないが、「武内を探すことに集中する」というところには賛成だった。魔法のことは武内を見つけてからでも遅くはないはずだ。

僕らは再び土屋の家に着いた。自然に僕はゴクリと唾を飲み込む。かなり慎重になっていた。それもそのはずで、今度は質問をするだけじゃあ終わらないだろう。言い争うかもしれない。もしかしたら、暴力沙汰になる可能性だってある。

なにより、以前感じた土屋の迫力に僕は気圧されるかもしれない心配があった。

「今度は私も一緒に行くから」

そう言って坂本は僕の手をギュッと握った。僕もまた強く握り返した。

玄関の前に立ち、僕の指がベルを鳴らそうと近づいた瞬間、ドアが乱暴に開いた。

「誰？」

開いたドアから顔を出したのは中年の男が出てきた。確か土屋は両親と暮らしているという話だから、きっと父親だろう。

しかし、この父親らしき中年男性は土屋の顔とは似ても似つかない。顔の彫が浅く、全体的にのっぺりした印象を受ける。一重だし、鼻も低く、唇が厚い。

僕はとりあえず、質問することにした。

「あの、すいません。僕たち土屋祐介君と同じ学校の者なのですが、

土屋君のお父さんでしょうか？」

しかし、その男は首を振った。

僕たちはその反応に驚きを隠せない。じゃあ、アンタ誰だよ。

「ここには父親なんていないよ。俺はここで部屋を借りてるものだけど」

「え？ 失礼ですが、土屋君との関係は？」

「大家と借主。一階を俺が使わせてもらって、あの子が二階に住んでるんだ。でも、ここ4、5日姿を見ないんだよな。まあ、俺が夜働いていてすれ違いの生活をしているからかもしれないけど」

僕と坂本は顔を見合わせた。これは何かある。そう二人で頷きあった。

これは確かめる必要がある、まずはと坂本が男性へ問いかけた。

「夜勤なんですか？ じゃあ、どうして今の時間もここにいてるんでしょうか？」

「なぜ、君達にそこまで答えなきゃいけないんだい？」

男性は表情を崩さず、無表情で坂本に答える。

ここで怯んでいるわけにはいかない。

僕は坂本を庇うように前に出て、男性の相手をする。

「それは数日前にここへお邪魔したときに、アナタはいなかったからですよ」

しかし、僕の言葉を無視して、中年男性は腕時計を見た。

「悪いけど今から仕事なんで、帰ってもらえますか？」

男は玄関のドアを閉めようとする。この機会を逃すわけに行かないので、僕が慌てて足をドアの隙間に挟み込んで閉まらないようにした。

僕の行動に男性はドアが閉まらないことを確認すると、また無表情に言葉を発する。

「何を入れる」

「申し訳ないですが、土屋君の部屋で待たせてくれますか」

「断ル」

明らかにこの様子は変だ。

と僕が思った瞬間、男がドアノブから手を離し、何かを振り上げていた。

——包丁だっ！！

さらに叫び声を上げながら男性は僕へと襲い掛かった。

「ッ！！！！」

やばいっ！ 反射的に僕が身構えようとする。

すると続いて僕に耳元で大声で叫ぶ声が聞こえた。

「広野君どいて！」

「坂本！？」

僕が慌てて足を引つ込める。

と同時に坂本が勢いをつけて玄関のドアを締めた。

そして大きな衝撃音と共にドアが揺れる。

男がドアにぶつかった何よりの証拠だった。

「はあ、はあ、はあ…… やっちゃった。私、あんなに刃物を持った人が怖かったのに……」

「坂本、ありがとう！」

「え…… うん」

坂本は興奮で息が荒い、さらには手も震えていた。

しかし、坂本が自分の恐怖を乗り切った瞬間でもあった。

にしても頼もしいぞ、坂本。

「でも、これで土屋が怪しいってことになったな」

「うん、中に入って確かめましょ」

ドアを開けると、よほどの衝撃でぶつかったのか、男は大の字に倒れて気を失っていた。

僕らは男を避けるように家に入った。

とりあえず、どこに土屋がいるかわからないので一室ずつしらみつぶしに探していく。

まずは一階にある襖の部屋を搜索する。なんの変哲もない畳の部屋には何も置かれていなかった。まったく生活感のない部屋に僕は違和感を感じた。

これは……本当に人が住んでいる部屋なのだろうか？

「なんかこの家の中、見たことがあるような……」

坂本は辺りを見渡して、腕を組んだ。

「どうした、坂本」

「うん。なんでもない」

そして僕達は一階に何も無いことを確認すると、二階へ上がった。ドアを片っ端に開け、しらみつぶしに探そうとする。

まず最初の部屋のドアを開けた。

瞬間、僕は凍りついた。坂本は思わず、口元に手を当てる。

「——っ、何、この匂い？」

今まで嗅いだことのないような臭いがまとわりつく。なんと表現した方がいいのだろうかわからない。こみ上げそうになるのを必死に押さえる。やたらと鼻の奥に残りそうで、僕は思わず鼻と口を手でふさいだ。

坂本は一旦、部屋を出たぐらいだ。

「なんなの？ この臭い」

「わからない。だけど、この部屋が怪しいのは明らかだ」

僕の説得に坂本は顔を青くしながら答えた。

「うん……かなり嫌だけど。入るしかないよね」

何とか嗅覚が麻痺してきた頃、再び僕は部屋へと視線を移す。

真っ暗な部屋の中、目を引くものがあつた。

それは、奥にあるパソコン。電源が入りっぱなしだった。

画面上では何かの映像が繰り返し流れているようだが、入り口付近からでは良く見えない。

僕はパソコンに近づくことにした。

やがて明瞭になっていくディスプレイに僕たちは歩みを止める。

視線を動かせなくなったのだ。それは映像には武内が映っていたから。

場所は学校の屋上だろうか。

遠くから二人をビデオカメラが撮影している。

一人は武内らしき人物、もう一人は土屋らしき人物。

最初は何か話をしていたようだが、武内がやがて背を向けて歩きだす。

すると、土屋はポケットに手を伸ばしたと思うと、武内へと走りよった。

小さい衝突があった後、武内はよろよろと歩いて倒れこんだ。

そして土屋は少し離れて画面から消えていった。

さらに画面が切り替わり、続く映像に僕たちは足が震えだした。まず、坂本が膝から崩れ落ちる。

「な、なにこれ……」

場面が切り替わると武内が画面いっぱいに映し出されていた。

胸に刺さったナイフ。血まみれの制服。そして、蒼白の顔。

やがて武内の動きが緩慢になり、最後には静かになってしまった。

——これは武内の死に行く過程。

それを僕はただ見つめるだけだった。

「亜也が、ああ……血を流して……ああ、嫌だ、嫌だよ……」

坂本は口を押さえて必死に泣き出すのを堪えているが、すでに涙は流れていた。

僕はといえば、この状態が受け入れられずに、ただ茫然としていた。

んなわけが無いさ。武内が死ぬわけがない。

これは冗談だよな。土屋の悪趣味さ。最近じゃあ画像の修正って素人にも簡単にできるんだぜ。

はは……ははは……

僕は乾いた笑いしかでない。声も出ない。

「うわああああああっっっ！」

隣では坂本が声を上げて泣き出した。
なんで泣いてるんだよ。僕達は騙されているだけさ。
今にその入り口から武内と土屋が出てくるんだろ？
さあ、隠れてないで出て来いよ。

そして僕が部屋の入り口へ視線を注いだ瞬間、人影が見えた。

「勝手二入ルナー!!」

大声を上げ、さっきの男が仁王立ちで立っていた。よく見ると手にはさっきの包丁を持っている。息を荒げながら、一步、一步近づいてきた。

坂本は色々な事が同時に起こったため、混乱して泣き崩れたまま、床に座り込んだまま動かない。

僕は中年男をじつと見つめていた。

なんでお前が出てくるんだよ……そこは武内が出てくる場所だろ？

——なんで？

——なぜ？

「なんでお前が出てくるんだ!!!!」

包丁を振り回し襲い掛かってくる男に僕は手をかざし、魔法を唱える。

すると男は僕から弾かれるように吹き飛び、部屋の押入れにぶつかった。

その拍子に押入れのふすまが、外れて落ちる。

「——っ!!」

落ちた襖と男の間から、押入れの中が目に入った。

襖が落ちる物音に坂本がこちらを振り返る。

その瞬間。瞳は大きく開かれた。

決して知りたくなかった事実。それは簡単に訪れた。

「いやああああっ!!」

そこには見覚えのある人物がいた。

押入れにねじ込まれるように、体をあらぬ方向に折りたたまれた

クラスメイト。

すでに絶命しているの門脇健児の姿。
坂本は悲鳴を上げ、僕は息を呑んだ。

第41話 「選ぶべきもの」

夜の住宅街は騒然とした。

土屋家の周りには野次馬と数人の警察で埋め尽くされ、赤々としたランプが周囲を照らす。僕達が警察に通報したからだ。

その後、警察署に連れられた僕達は刑事の事情聴取を受けた。

聴取で何を聞かれたのか、どれだけの時が過ぎたのか、全然覚えてない。

ただ、刑事達同士の会話の中で、土屋の家にいた中年男が全て自分が出たことだと自白したらしいと聞こえた。そして土屋も武内も中年男の被害者としてみなされていると言う話だった。

さらに僕と坂本はクラスメイトを心配した勇敢な学生として判断されているようで、刑事が事情聴取の最後に僕達の行動を危険な事だと叱りながらも、褒めてくれた。

でも、今の僕にとってはそんな事はどうでも良かった。

事情聴取が終わって部屋を出ると、そこには母親が迎えに来ていた。

僕は最近口々に口も利いていないので、無視して前を通り過ぎる。すると母親は黙って後ろをついてきた。しばらく無言のまま警察署を歩く。

「貴明、タクシーで帰る？」

署をでたところで母が話しかけたが、僕は無視して歩き続けた。

日が昇り、すっかり朝になった街を進んでいく。三月も後半とはいえ空気が冷たい。白い息を吐き出しながら、僕はある思いを抱えていた。

背広を着た人達がまばらに僕とは反対方向へ足早で歩いていた。彼らはきつと今から仕事なんだろう。僕はすでに春休みなので朝の心配をする必要もない。さらに人の流れに逆らって歩く自分と、今

後の運命を重ね合わせてしまう。

『もう、戻れないところまで来ている』という思いと、『今なら引き返せる』という思いが交錯していた。

そして母はゆっくりだが確実に僕へ近づいてきた。何か声をかけるつもりなんだろう。僕は少し身構えた。すると案の定、母は何を恐れているのかわからないが、おずおずと話し始めた。

「……警察の人が言うには、あなたたちは事件には関係ないって」
んなことはもう知ってる。僕は母を無視した。

「今回の事は残念だったけど……」

『残念』って一言でいうな。まあ、アンタには関係ないことだからしょうがないよな。

所詮、部外者には一言で片付けられる気軽さがあるし。

「もし今後、良く眠れないとかあったら言ってね。カウンセラーの方が相談に乗ってくれるそうよ」

僕の苛立ちとは関係なく、母は優しく語り掛けてきた。

その優しさが今は押し売りされているように感じて、余計にストレスを溜める結果になる。

さらに母は優しさのため押しをした。

「……心配したのよ」

「そりゃどうも」

僕が吐き捨てるように言うと、母はそれ以上何も言えなくなった。2人の沈黙は家に着くまで続く。

そして、家に着くなり僕は自室に閉じこもった。

覚悟を決める勇気を、僕はなにもせず膝を抱えてただ待っている。ぼんやりと昨夜の事を思い出していた。

襖が開いたことで一気にこみ上げるような異臭が漂うけど気にしていられない。

土屋の部屋で門脇を見つけてしまった後、僕と坂本はしばらく放心状態に陥り、その場で立ち尽くした。一度に色々な事が起き過ぎたために、次、どうしていいか分からなくなったのだ。

門脇はすでに肌の色が変色していて制服を着ていなかったら判断できなかったかもしれない。変わり果てた姿……じゃあ武内は今どうなっているのだろう。

——待て。武内はどこにいる？

そこでようやく我に返った僕は他の部屋を調べることにした。正確に言えば、それしかすることを思いつかなかったのだ。

早速、二階を探したが、どこにも武内はいなかった。僕は再び一階を調べるべく、階段を駆け下りる。さっきまでは土屋を探していたので、大して調べなかった押入れなどを懸命に調べた。なのに結果は「どこにもいない」だった。

「もしかしたら、引き出しも調べた方がいいのか？」

僕がポツリと独り言を吐き出すと、背後から声が聞こえる。振り向くと、そこには目を赤く腫らせた坂本が立っていた。

「広野君、冷静になって。引き出しにいるわけ無いでしょ？」

「んなことわからないだろ！ 門脇だってあんなところに押し込まれていたじゃないか！」

「そうだね」

坂本は淡々とした口調で僕に答える。表情にもまったく抑揚が無い。

「なんだかその余裕ぶりに僕は腹が立った。」

「なんでそんなにすましていられるんだよ！ 人が死んでるんだぞ！」

「わかってる」

「『わかってる』って……坂本！」

すると坂本は自嘲気味に口を歪める。

そして同時に瞳からは涙が一気ににじみ出た。

「だって、そこはもう私が探したから……」

「え!？」

「引き出しにもいなかったし、下駄箱にもいなかったし、トイレのタンクにもいなかったよ」

「坂本……」

「もうここにはいないの! どこにもいないんだから!」

叫んだ後、坂本はその場にしゃがみ込んでまた声を上げて泣いた。坂本は僕よりも頭が混乱していたのだ。

じつくりと坂本が泣き止むのを待つ間、僕の気持ちは落ち着いていった。

「そうだな。じゃあとりあえず、警察に連絡しよう」

「うん……」

その後は割と冷静に二人は行動していたと思う。

まずは気を失っていた中年男を縛り、動けなくする。さらに坂本は携帯電話で警察に連絡した。後は到着を待つだけだ。

「坂本、家の外で待つか?」

「ううん。ここで待ちたい、忘れたくないから」

「そうか……」

正直、僕はこの部屋を出たかったが、坂本のことを尊重して待つことにした。

もう後は警察に任せよう。そんな気持ちになるほど僕達は疲れきっていた。

坂本は壁にもたれてしゃがみ込み、僕も足を投げ出して座っている。

そんな中、坂本がぽつりと呟くように言った。

「広野君、門脇を外に出してあげていいかな?」

「……坂本の気持ちはわかるけど、現場は保持しておくべきだと思う」

「でも、それじゃあかわいそうだよ」

「わかるけど、それは……」

「門脇っ！」

坂本は門脇の名前を叫ぶと同時に押入れに駆け寄った。僕は座っていた分だけ動きが遅れ、彼女を制止できなかった。

すぐに坂本が門脇の体を掴んで引つ張り出そうとした。遅れること数秒、僕は坂本の腕を掴んで振りほどく。すると坂本は諦めずにまた門脇へと腕を伸ばす。

「やめてっ！」

「坂本、駄目だって！」

僕は必死に坂本を制止しようともみ合う。

その時、僕達が暴れたせいか、門脇の死体がこちらへ傾いてきた。一瞬迷ったが、僕は門脇を受け止める。

坂本の気持ちも理解できるけど今は現場保持をしよう。

僕はゆっくりと門脇を元に戻そうとした。

すると坂本が僕の肩を掴んでそれを止めに入る。

「ちょっと待って！」

「坂本、何度も言うが、お前の気持ちはわかるけど……」

「違うの……」

だけど、坂本は僕の肩を掴んで離さない。

しかも掴んでいる手は力が入りすぎているためか、震えていた。

そして僕は困惑したまま坂本を見ると、彼女の視線はこちらになった。

「広野君……奥を見て」

坂本の言うとおり押入れの奥を見る。

すると僕の視線も一点に集中した。

「……どうということだよ」

門脇が押し込まれていた奥の壁には張り紙があった。

その張り紙は赤い文字で書かれている……血文字だ！

内容は一言だけ。

それは——『学校の屋上で待つ』

僕と坂本はしばらくこの張り紙に見入ってしまった。

——学校で誰が何を待っているというのだ？

しばらくして、誰から言うこともなく、話し始めた。

「広野君、もしかして、このメッセージって土屋から？」

「そう考えるのが自然だろうな……」

「これって……私達を挑発してるの？」

「わからない。だけど、屋上にいるんだろうな土屋が」

「——っ!!」

すると坂本が僕を押しつけ、貼り紙を剥がしてしまう。

「坂本！？ それは警察に！」

「嫌っ！ これを警察に渡すわけには行かないの！」

さらに坂本はパソコンへ近づき、デスクトレイを開く。

トレイの中にはCD-Rが入っていた。

「やつぱり、こんな事したのも全部土屋だったのね」

CD-Rを取り出した坂本は自分のポケットに入れてしまった。

そして彼女は僕へ振り返ると、宣言するように言い放つ。

「広野君、これは土屋からの挑戦状よ！」

「どうしたんだよ急に」

すでに坂本はさっきまでの憂鬱な表情ではない。

拳は硬く握られて、瞳に力籠っているし、口元は笑ってた。

「仇を取る最後のチャンスだよね！」

「……ああ」

「どうしたの広野君、嬉しくないの！？ わざわざ土屋から教えてくれたんだよ！」

「そうだな……」

僕はきわめて歯切れの悪い返事をした。

対照的に坂本は見つけるべき最終地点を発見し、意気揚々としている。

さらにタイミング良く、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。

結局、坂本へ言えなかった。『警察に任せればいいだろ』って。

そして今、僕は坂本に会うことなく、逃げるようにして家に帰ったのだ。

時計の秒針がやけにうるさい。そんなに僕を責めるなよ。

僕は土屋と決着をつけなければいけない。

そんな事は十分覚悟している。

ここまでしておいて、何もなかったとは言わせない。
全力をもってアイツを叩きのめす！！

だが、問題はその後だ。

僕は武内の現状を確認しなければいけない。

まだ、生きていればそれでいい。

もし、死んでいれば………生き返らせる必要がある。

僕は魔法使い。

人を生き返らせることも、また可能だ。

でも………それには自分の命がなくなってしまうだろう。

なあ、そんなことできるのか？

お前、死ぬんだぞ？

僕は膝を抱えて震えた。

………父さんのようにはなれないよ。

第42話 「メビウスを駆け巡る」

ひざを抱え目を瞑ると、そこは闇だった。

どこまでも続く暗い世界に、僕は目まいを起こしそうになっていた。

前後左右、何かなんだかわからない。

……そうか、僕は現実に酔っているんだ。

「——っ!」

不意に吐き気を催す。四つんばいになって何度か嘔吐を繰り返した。

しかし、何も出てこない。反動で目に涙が溜まってくる。

涙でぼやけた視界には自室の床が映っていた。

何やってんだる僕は……

「貴明、入っていい?」

「——!」

そんなとき母親の声と共にドアをノックする音がした。

こんな時に一番聞きたくない声だった。

僕は涙で潤んだ目頭をぬぐい、立ち上がってドアを睨み、無視を決め込んだ。

しかし数秒後、母は勝手にドア越しで話を始めだした。

「今日のことはまだ」お父さん」は知らないの。母さん、言つつもりないから」

「——なっ!」

”お父さん”それは父の命と引き換えに生き残った男のことだ。

今の僕にあの男のことを言うなんて、無神経にも程がある

僕はカッとなり、勢いに任せてドアを開けた。

「あっ、貴明。開けてくれたのね」

「くっ……」

開いたドアの先には母がいた。

僕は視線を下げ、母と正面から向かい合う。

「どうしたの？ 目の周りが赤い……やっぱり事件が怖かったのね」

「っ！？……違う」

「何が違うの？ 怖いときはね、無理しなくていいのよ」

母は僕へと近づき、優しく前髪なでてくれた。

そんな優しさに僕の怒りは一気に高まる。

「何もかもだよっ！ 事件が怖かっただって！？」 冗談じゃないっ

！！ わかったような口を利くな！！」

怒鳴りながら僕は手を払いのける。

弾かれた手を摩りながら哀れんだ視線を送る母を見て、少しだけ

僕は冷静になった。

なぜ僕はこんなに怒鳴ってしまったのだろう。

……いや、わかってるはずだ。

きっと僕は目を腫らしていたからって、友達を失った『悲しみ』

じゃなくて『怖い』という言葉を選んだ母に腹が立ったのだ。

——心の中を見透かされているという事実。

「貴明、言わなきゃ何もわからないでしょ？」

母は僕の怒鳴り声にも動じずに僕の腕を握って、諭すように話し

かける。

それが余計に癪に障った。

「母さんに言ってもわかるわけ無いさ」

「どうして？」

「それはね、死んだ父さんから受けた幸せを享受するだけのアンタだからだよ」

すると同時に母の目は大きく開かれ、僕を腕を掴んでいた手が離れていった。

さらに僕は勢いに任せて”禁句”を言ってしまう。

「……僕にとって”お父さん”はいつまでも死んだ父さんただ一人だ」

「——えっ!？」

実はこの言葉、今まで一度も母に言った事がない。

父さんが命がけで助けた友人が新しい父親になった時に、僕の中では禁句になったのだ。

これを言ったら終わりのような気がしたから。

でも今は違う。コイツを言い負かさなければ僕の気が済まない。

禁句だった言葉を受けた母は、言葉を失い黙ったままうつむき、さらに手で顔を覆い、しゃがみ込んでしまった。

その姿に僕は思わず笑みを浮かべる。

勝った。僕は勝利を確信した。見ろよ、この女の小さくなった様を。いい笑い種だ！

父さんを裏切ったのだから後ろめたさを感じるのは当たり前だろ。むしろ今まで僕が言い出さなかったのを感謝して欲しいくらいだ。

このまま平手打ちの一発でも浴びせてやろうか。父さんの無念をここで僕が払ってやる!!

僕は拳を固めて振り上げると、丸まった母親の背中へ狙いを定めた。

「……さい」

腕を振り下ろす寸前に母から何か声が漏れたように思え、その声に耳を傾けた。

「……ごめんなさい」

母は震えながら涙声で僕に謝っている。

「もう償えないかもしれないけど……でも……でも……ごめんなさい……」

その瞬間、電撃のような何かが僕を貫く。

振り上げていた拳を下げ、その場から動けなくなった。

僕は馬鹿か——そして何て小さな人間なんだ。

自分がどうして良いかわからない感情を目の前の母親にぶつけるなんて……

怒りをぶつける相手を間違えてる。

くだらない自己満足に酔って勝利気分に浸っている。

……何一つ勝利など手に入れてないのに。

後悔だけが僕の心を覆い、次第に焦りを帯びてくる。

一步。また一步、僕は後退していった。

そしてドアノブへ手をかけるとわずかな滑りを感じる。手にはいつの間にか多くの汗をかいていた。

「ごめん、母さん。言い過ぎたよ……色々と頭が混乱してるんだ。少し一人にしてくれるかな？」

「！？ 貴明？ 今何て言っ……」

母親は僕に言葉に反応して顔を上げる。大粒の涙が流れた泣き顔だった。

僕はそれに顔を反らして、再びドアを閉める。

母との会話は情けない自分がさらに深まっただけに過ぎなかった。

それからしばらく母は僕の部屋の前にいたが、いつの間にかいなくなっていた。

僕はといえば、また膝を抱えてしゃがみ込んでいた。

さらに武内の事と父親のことがごっちゃになっていた。

ふと机を見上げると写真立てが目に入った。

そこには少し前に遊園地へ行った時の僕と武内と坂本が写っていた。

皆楽しそうに笑っている。とりわけ武内は初めての遊園地ということもあり、はしゃいでいるように見えた。

屈託のない笑顔を見ていると胸が締め付けられる。感情が高ぶって体が震えた。

なあ……お前本当にいなくなったのか？

父もこんな風に迷ったのかな？

好きな人のためだからできたのかな？

僕は好きな人のためにそこまでできるのかな？

それ以前に僕は武内のことが好きなのかな？

いくら考えても答えは出ない。

部屋は静かで僕はうなだれている。

結局、何もできないのか？

思考の渦に飲まれそになった時、携帯電話から着信音が鳴った。嫌な予感がして携帯電話を手に取り、画面を見ると坂本からだった。

少しためらったが、僕は電話に出ることにした。

「もしも——」

「で、いつ行く？」

坂本は待ちきれないといった風に僕の言葉にかぶせて、いきなり尋ねてきた。

「行くつてどこへ？」

そして僕はあえてとぼけてみた。

もしかしたら、違う話かもしれないという期待を持って。

「学校の屋上に決まってるじゃない！」

坂本の語気は荒く、明らかに苛立っていた。

しかし、僕は逃げる。

「もう……いいよ。後は警察に任せよう」

「はあ！？」

彼女の大声が聞こえた後、少しの沈黙が流れる。

このまま電話を切ってしまうのか、僕は悩んだ。

しかし、悩んだことが災いしてタイミングを逃し、彼女は話を続

けた。

「広野君、それでいいの？」

坂本は詰め寄るような口調で僕を責める。

それに対して僕はどうしようもなく、さらに逃げ込んだ。

「……だつてしょうがないだろ」

「しょうがない？」

携帯電話を持つ手がやけに滑る。僕は明らかに焦っていた。

「あんな映像見せられて、どうしようもないさ。きつともう、武内は——」

「それ以上は言わないで！」

「んなこと言つてもどうせ……」

「広野君……」

坂本はそれ以上言葉に詰まったようにまたしばらく沈黙した。

母さんの次は坂本が僕に問いかけてくる。

どうしてこうも部外者は土足で僕の領域に入り込もうとするのだろうか。

……と、やるせない気持ちで一杯になった頃、坂本は再び話を進めた。

「しょうがない？ どうしようもない？ 広野君らしくないじゃない！？」

「っ！？」

「あんなに必死に亜也を探してたのに！！」

くそっ……僕はこんなことで怒つてもしょうがないと感じながら、自制がきかずに怒鳴つてしまう。

「僕らしい？ 坂本は僕の何がわかってるんだよ！ 僕の『覚悟』も知らないくせに！！」

僕は明らかに坂本に八つ当たりしていた。

本当に魔法を使わなかったのは『僕の命』が惜しかったからだ。それは、武内がいなくなった時点ですでにわかっていた。

すると坂本はさつきとは明らかに声のトーンが下がった感じで僕に応えた。

「……確かに私は広野君に幻想を抱いて理想化しているのかもしれない。でも、でも私、悔しくて……」

言葉通り、悔しさをにじませたような、絞り出す声。

「門脇も亜也も……アイツに殺されたんだよ……」

受話器越しに坂本のすすり泣きが聞こえた。

その音は僕の耳へ突き刺さるように響く。

「それに……広野君の亜也に対する気持ちって……そんなものだったの？」

僕は答えることができない。

さつき怒鳴ったせいで、やけに頭がズキズキする。

今までで一番長い沈黙が二人を支配した。

坂本は僕の決断を待っている。彼女はきっと学校へ行こうって欲しいのだろう。

でも……でも……でも……

煮え切らない僕の態度にととうとう坂本は痺れを切らしたのか、再び力のこもった声で話始めた。

「もういい。私だけでも学校へ行く。これは理屈じゃなくて、もう一度彼女に会いたいだけ。たとえそれが亜也の死んだ姿でも……それじゃあね」

そして電話は切れた。

「はあ……」

僕は大げさにため息をつく、携帯電話を机に置いて再び一人たずむ。

やけに部屋が広く思えて心細くなった。

母は「怖ければ無理するな」と慰めてくれる。

坂本は「動き出そうと」と急かしてくる。

だけど僕はどちらにも動くことができない。

くそっ……何をやっているんだ！

衝動的に何度も机を拳で殴りつける。

怖い、怖い、怖い！

魔法以外での解決方法はないのか！

僕は何か鬱憤めいたものを吐き出すように机を乱打する。

「くそっ、なんでっ、なんでっ、なんで僕なんだ！」

やがて、呼吸を乱して手が痛くなった僕は動きを止め、拳を解いた。

はあ……このままじゃあ父さんを見捨てた母のことをとやかく言う権利はないな。

僕だつて武内の死を目の前にして、それを見過ごそうとしているんだから。

今の敵は土屋ではなかった。僕自身だ。

言い訳、臆病者、身の保全、恐怖、受け身体質。

こういったものが僕の結界の周りに張り付いて身動きが取れなくなっている。

こんな”くだらない”結界が欲しかったのか？

僕が欲しかったものってなんだ？

それは、それは、それは……

と、ここで僕はあることに気がつく。

さっき坂本は「自分だけでも学校へ行く」と言った。

……駄目だ！ それじゃあ、土屋の思う壺だ。

彼女の力ではアイツに殺されに決まってる。

すると僕は居ても立ってもいられなくなってきた。

とにかく行かなきゃ。武内に対する考えは後回しにしても、今確実に生きている坂本を何とかしないと……

そして僕は歩き出してノブに手を掛ける。

『坂本を助けに行くだけだ。死に行くわけじゃない』そう言い聞かせてドアを開ける。

「——っ!!」

その瞬間、僕は息を呑んだ。

「貴明、どこへ行くつもりだ？」

目の前にはもつとも会いたくない相手が立っていたから。

死んだ父さんが助けた相手……つまり、今の父親が立っていた。

僕は思わず、息を呑んだ。

第43話 「螺旋を駆け上る」

僕よりやや背が高く、体格の良い男が目の前に立っている。

二年前は今にも折れそうなくらいやせ衰え、生気に乏しい体だったのに……

「母さんから事情は聞いた」

僕はその言葉に思わず眉間にしわを寄せてしまった。

……この人には報告しないって言いたくせに。

「お前も高校生だし、自分なりの主張もあるだろう」

物分りのよさそうな振りをしてコイツは話しかけてくる。

折角学校へ向かおうと考えていた僕の気持ちは萎えてきた。

「でも、母さんを泣かすのはどうかと思うぞ」

「悪いけどどいてくれるかな？ 行かなきゃいけないところがあるんだ」

「そこへ何しに行くんだ？」

なに父親ぶってんだよっ！

その言葉に僕はついカツとなってしまうた。

「死に行くんだよ。じゃあね」

僕はこの人の横をすり抜けて行こうとするが、腕をつかまれてしまった。

「離してくれよ」

「それはできない」

力強く繋がれた腕は簡単に振りほどけそうにない。

さらにコイツは僕に質問を続けた。

「どこに行くかは知らないが、それは誰かを助けるためか？」

「僕が誰を助けようと勝手だろ？」

本当にウザいな。こうなったら魔法で吹き飛ばしてしまおう。邪魔をするコイツが悪いんだ。

かなり睨みをきかせてこの人へ警告した。

「僕はアナタを吹き飛ばすことができるんですよ」

するとコイツは少し目を細め、頭をかきながらため息をついた。

「……魔法でか？」

「え！？」

僕は驚きを隠せなかった。

なぜなら魔法のことは話したことがなかったからだ。

今まで生活してきた二年間の中でも、一度として家族の話題にのぼらなかったのに。

「不思議そうな顔してるな。お前の親父に聞いたから知っているのさ」

「父さんに……？」

死んだ父さんにいつ聞いたってっていうんだ？

「でも、無理だな。そんなんじゃない、お前の父さん……三田和哉には遠く及ばない」

「どうして！？」

「三田和哉だったら、脅しなんかせずにそのままオレを魔法で眠らせるさ」

「勝手なことを言うな」

「本当のことだ。実際、お母さんは止めようとしたが有無を言わさず眠らされた」

次々と僕の知らない事実を聞かされる。それにしても三田という苗字を久しぶりに聞いた気がする。僕も昔は三田貴明だった……だが、再婚したお陰で広野と名乗ることになったのだ。

驚きと悔しさが入り混じった複雑な気持ちになった。

「オレに対して迷いのあるそんな態度じゃ、押しのけて家を出る勇氣なんてないさ」

「……違う」

「いい口実になったじゃないか、『親父が家を出してくれなかったんだよ』ってな」

「なっ……!？」

母さんの時とは違い、感情を爆発させることなく僕はそれ以上何もいえなくなった。

それは心の片隅で確かにホツとした気持ちになったのも事実だからだ。

僕はまともに前が見れなくなり下を向いて黙り込んでしまった。

「……少し言い過ぎたな。お前が物騒なことを言うもんだからムキになってしまった」

それでも何も言えずに黙っていると、掴んでいた腕を放し、しゃがみ込んで僕と視線を合わせた。

「オレを魔法でどうにかする前に三田和哉の話でも聞いてくれないか」

「え……?」

「お前がどういう結論を出すかはわからないが、聞いて損はないだろう?」

僕は自然に頷いていた。

それをみて、二年前の父についてゆつくりと話し始めた……

オレは若くして癌に侵されてしまった。しかも、かなり進行が早く手遅れのようだ。

ここ数日、病状も思わしくなく、この先の人生を諦めていたオレはやせ細り、すっかり生きる気力もなくし、無気力に過ごしていた。そんな時だ……三田和哉が現れたのは。

空ろな目で病室のドアを見つめると、彼はオレを睨みつけていた。さらに無言で入室してきた和哉はオレを見るなり一言、言葉をか

けた。

「死んでしまえ」

「……っ！」

今までいた周りの人間は無駄だとわかっているのにオレを励まそうとする偽善者が沢山いた。それが、いきなり死ねと言われたのだから、少し面食らった。

だが心のどこかで当然かという思いもあった。

和哉は大学時代からの友人で、十数年たった今でも頻繁に会っていた。それは彼の妻、美佐^{みさ}も同じサークル仲間で仲が良かったせいもある。

さらに言えば現在、オレは美佐と良からぬ仲になってしまった……いわゆる不倫ってやつだ。和哉にはバレない様に会っていたつもりだったが、オレのが病に冒されてから、美佐が和也に関係を告白した。そして家を出た彼女はオレの看病に集中してくれていた。そして今日、家に着替えを取りに行った美佐がいない隙に和哉が来たと言うわけだ。

「いいざまだ。数々の悪行のツケが回ってきたってことだな」

「どういうことだ？」

オレは分かっているながらもとぼけることにした。

しかし、和哉はそれを許さなかった。

「お前が美沙を奪ったからに決まってるだろう」

「……すまん」

その後、和哉は恨み言をオレにぶつけて罵りながらドンドン近づいてきた。

オレは病床に臥しているというのになぜこんな仕打ちをと内心ため息をつきながら、ただ謝るしかすべを持たなかった。

「そんな言葉で許すと思っているのか？」

「すまん……」

「他人の家庭をぶち壊しやがって」

「……申し訳ない」

「この盗人」

「くっ……」

「殴らないと気がすまない」

そう言ってアイツはオレの前までたどり着くと拳を振り上げた。こうなることは予想していた。元気な頃やってしまった過ちは、こつやって自分が窮してから襲ってくるものだ。

「……覚悟はいいな」

オレは抵抗して動き回るほど体力も残っていなかったから歯を食いしばるので精一杯だった。ゆつくりと和哉の拳がおりてくる。しかし、なかなか衝撃は来なかった。

「っ……！」

「はぁ……止めだ」

「なんだと？」

ため息混じりに和哉の呟きが聞こえるとアイツの腕はオレの肩へと動いた。

肩に置かれた手を見た後、視線を和哉の顔へ移す。

するとアイツはオレを真っ直ぐに見つめていた。

「……でも、それでも美沙はお前を選んだんだ」

さらに奴は真顔でオレにこう言った。

「だから、お前は生きろ」

「……んだと？」

オレはない体力を使って思い切り叫び、一気に感情を噴出させた。

「はぁ！？ ふざけんな！ お前はこれから生き続けるからそんなこと言っただろうが！」

「……違う」

オレの勢いとは対照的に和哉はすっかり元気をなくした様子で首

を振った。

「違わないさ。散々言いたい事を言って、最後には『生きる』だ？馬鹿にするのもいい加減にしろっ！」

「違うんだ話を——」

「希望にもならない希望を語りやがって！ 綺麗事言った自分に酔えただろ？ これで気が済んだか？ だがな、オレはお前たちが自己満足するための道具じゃねえんだよ！！」

オレは叫んでいるつもりだったが力なくかれた声しか出なかった。和哉もそれ以上は何も言わない。

最後にオレは自分が嫌になって、破棄捨てるように言葉を発する。
「もう、オレは死ぬんだよ。奇跡でも起きない限りな……」

「そつだな……」

和也は一言呟き、次の話を続けた。

その言葉にオレは耳を疑った。

「もし、俺にその奇跡が起こせるとしたら？」

「は？」

「オレならお前を助けることができる」

一瞬、心が晴れた気持ちになったが、すぐに暗雲が立ち込める。医者でもない一般人がどうにも出来るわけがないだろう！再び沸々と怒りがこみ上げてくる。

「お前、まだそんな寝言を……」

「これでも信じられないか？」

言いながら和哉は花がいけてある花瓶を指差す。

すると数秒後、手前においてあった花瓶が宙に浮いたのだ。

「な、なんだ？ 手品か？ ……トリックはなんだ？」

「まあ、信じる信じないはお前の自由だ」

「……和哉？」

「でも、お前はこれから生き続けなきゃいけない」

そして奴はオレに向かって手をかざした。

依然としてオレは信じられずにいたが、アイツの真剣な表情と宙に浮いた花瓶を見てみると、心のどこかで『もしかしたら』という気持ちになった。

しかし、なんだか急に胸騒ぎがしてオレは慌てて和哉の腕を掴んだ。

「ま、待ってくれ」

「なんだよ。折角病気が治るって言うのに」

オレはこの手品ともわからない現象の理屈がまったく理解できない。

さらに加えてもう一つ、理解できなかったことがあったのだ。

「なぜオレを助ける？」

「なに？」

「オレが死ねばお前は……」

「嬉しいだろうな」

奴は悪びれも無くオレの目を見てを言った。

しかし、直後に目を逸らすと溜息混じりに答えた。

「だが、美佐が悲しむ」

何だというんだ。浮気をした妻を未だに想い続けるというのか。

「悲しみなんて一瞬だろ。時間がたてばまた笑えるようになる」

「だろうな……」とは言え美佐はお前のことを忘れないだろう。そしてお前は永遠に勝ち続ける」

「勝ち負けの問題か！？」

和哉はオレの言葉を見無視して手を解く。

「なあ、知ってるか？」

再びこちらへ手をかざした。すると和哉の手の周りがゆっくりと光りを帯びてくる。

「恋愛ってのはな、最後に好きな人を笑わせたほうが勝ちなんだ」
すると輝いていた手の光りが、オレへと移って暖かい光に包みこまれる。

なんだこれは……でも、なんだかとても幸せな気持ちになった。

数十秒続いたのだろうか？ オレには長い時間にかじられた。すると時間を追うごとに信じられないが一気に体が軽くなり、力がみなぎってくるのを感じた。

しばらくすると光が消え、儀式とも言える行為は終了した。

そして和哉は目を伏せ呟いた。

「これが多くの人を助けるあまり、大切な人を守ることを怠ったツケだ」

「か……和哉？」

オレはコイツが何を言っているのかわからなかった。

ただ、何か懺悔の気持ちであることは確かなような気がした。

和哉は再びオレへと顔を上げ、話しかけてくる。

「そうだ。お前に頼みがある」

「なんだよ」

「ここであつた事は貴明に黙っていてくれ。父親が浮気相手に罵っている姿なんて聞かせたくないだろ」

なぜそんな頼みごとをするのか不思議に思った。

和哉の息子、貴明とは挨拶を交わす程度で別に遊び相手になつているわけでもないからだ。

これからだつて深く関わることはないだろう。

でも、コイツが父親としてそう言ったのであれば聞いてやるべきだと思つた。

「……そうだな。わかつた」

「んじゃあ、最後に……美佐を頼む」

「何だよ。まるで最後の挨拶みたいじゃないか」

いつの間にかいがみ合っていたオレ達はお互いを許しあっていたように思えた。

不思議なものだ。あんな光に包まれたぐらいで病気が治るわけではないのに……

そして和哉オレの質問には答えず、ニツコリ笑った。

「最後ぐらいカッコつけさせるよ」

そう言っただけは振り返らずに病室を出て行った。

独りになった病室でオレは考える。

オレは生き続けるのか？

変な体験で、未だに半信半疑だが、体の状態を考えると信じられそうな気がした。

そしてオレは事実を知ることとなる。

奴が去った一時間後、慌てて美佐が病室へと駆け込んできた。

「あの人——和也は来なかった!？」

「少し前に……って、おい、どうした？」

「あの人、あの人……自分の命を犠牲にして……」
すると美佐は泣き崩れた。

後で聞いた話だが奴は本当に魔法を使えることを美佐から教えてもらった。その力は自分を犠牲にして行なうものであり、まさに身を削っていたのだ。

さらにその力を使って色々な事件解決を陰ながら手助けしていたという。新聞で報道されたような大きな事件から小さな事件までさまざまだ。

しかし、その活躍は誰にも見つかることはない。

知っているのは家族ぐらい。

見返りも無く、ほとんど休むことなく助け続けたという。

オレは美佐に和哉の仕事が忙しくて構ってもらえないとだけ聞いていた。

だから遠慮なく美佐を自分のものにしたり、家族を放っておくアイツに怒りすら感じた。

しかし、友と妻に裏切られてもなお、アイツは最後まで誰かのた

めに尽くそうとした。

そして最後には愛する人のために憎い相手を救ったのだ……

「オレからの話は以上だ」

全て話し終わると、父さんは深くため息をついた。

「父さん……」

「悪かった。こんな話は聞きたくなかったかもしれない」

「いや……」

むしろ良かったとさえ思っている。

さっきの話から死んだ父も迷い悩んだに違いない事が分かったからだ。

「だが、お前の父親の最後を知っているのはオレだけだからな。伝えておきたかった」

父さんは全てを分かっているもなお、幸せになって欲しいと願って死んでいった。

好きな人のために。

それが父の選んだ道だった。

「お前の言うとおりオレは父親にはなれないのかもしれない」

「あつ……」

僕は何も言うことができない。

「だから、お前の父親に生かされた友人として言わせてくれ」

「なぜ自分を犠牲にしてまで、その子を助けるんだ？」

「……」

「どうした？ 答えられないのか？」

僕は首を振った。

答えられなかったのは瞬間的に何かが見えたからだ。

『その子』と言われて真っ先に浮かんだのは武内の笑顔。

…… ああ、やっぱりそうなんだ。

武内への想いに至った瞬間、僕の中で何かがあふれてきた。

それは止め処なく体の芯から熱くなってる。

やがて自分の心音が聞こえてくる。

ドキドキと心地よい音だ。不思議な感情。

でもコレだけは言える。

武内を助きたい。

この気持ちは何処からか、与えられたものではない。

結局、覚悟は自分の中にあつたのだ。

そして僕の結界は今、砕け散った。

「……その子に生きて欲しいから」

「本当に助ける気なんだな」

その問いに僕はハッキリと頷いた。

今なら言える。

自信を持って言える。

勇気を持って言える。

僕は空気を吸い込み、力強く宣言した。

「大切な人を捨てて手にした毎日なんて僕は好きになれないよ」

「貴明……」

父は僕を見て微笑んでくれた。

全てが上手くような、そんな気がした。

しかし、父の背後からの声がそんな気分を吹き飛ばす。

「そんなの許さないっ！」

「え！？」「」

僕と父さんの視線が少し離れた場所に集まる。

「母さん……」

「行かせない。貴明だけは行かせない。だって、私の子だもの！」
母さんはゆつくりと歩み寄ってくる。

それよりも僕の目には母さんの持つている包丁に釘付けになっていた。

「貴明を刺せば、ここから出られなくなるでしょ」

「美佐、やめるんだ！」

「アナタは黙ってて！ 私はもう後悔したくないの！」

もし、父さんの話を聞く前だったら僕は混乱していたかもしれない。

さらに都合がいいなんて考えたかも。

「貴明。アナタはまだ若いから、勢いだけで突っ走ってしまうものなの！ 今は我慢して！ きつとそのうち良い事があるから」

母は本気で僕を刺そうと近づいてくる。刃先が震えながらも着実に僕へと向かっているからだ。

でも、今の僕はいたって冷静だった。

それは、もう自分の行なうべき行動が決まっているからだ。
もう、なにものにも揺るがない。

僕はゆつくりと母に手をかざした。

「ゴメン。僕は後悔を引きずって生きられるほど、強い人間じゃないんだ」

僕の指先から出た光りは母を包み、確実に彼女を眠らせる。

母は力尽きたように膝から崩れ落ち、それを父が慌てて支える。

薄れいく意識の中、母はかすれ声で呟いた。

「ねえ、私、今度も止められないの……？」

父の抱かれ心地よい寝息をたてる母。

すぐさま僕は父へ指先を向けた。

しかし、父は首を振って手で僕を制す。

「オレは止めない。止めようとしたって不思議な力でオレは動けな

くなるからな」

「父さん？」

「だったら、お前の父親として最後まで見届けさせてくれ」

「……うん。ありがとう」

そして僕は二人の横を通り過ぎる。

心の中で『ごめんなさい』と『いつてきます』と声をかけ、僕の視界から二人が消えていく。

すると父は後姿の僕に話しかけた。

「なあ、本当の親だったら美佐のように死に物狂いで止めたのだから……でも、約束したんだ。この女性を幸せにするって」

「大丈夫だと思つよ。たとえ死んだ父さんでも僕を快く送り出してくれたと思う」

「勝手な解釈だな」

「勝手な解釈できるのも生きている者の特権だよ」

「……負けるなよ」

「うん」

心の中で何と戦うんだろうと考える。

……きつと自分に負けるなつてことだよな。

ゆつくりと一階に降りて進んでいく。

そして僕は玄関のドアノブに手を掛けた。

自宅を出るともうその先は未知の世界。

少し気合を入れて扉を開いた。

朝、家を出てからずいぶん経つらしい。空がやや赤みがかっている。夕方、黄昏時。

ほんの少ししか立っていない気がするのに外の空気がおいしく感じる。

僕はゆつくり道に出ると、徐々に歩く速度を上げ、いつの間にか駆け足で学校に向かい始めていた。

なるべく無駄な魔法は使いたくない。後で重要なものが待っているんだからな。

ひたすら走るのみ！

その時、携帯電話の着信音が鳴った。携帯電話を取り出して画面を見ると坂本からの発信だった。

僕は待つてましたとばかりに電話に出た。

「もしもし？ 坂本、無事か？」

電話するぐらいだから、今襲われているってことはないよな……

しかし、電話口からは一向に返事が返ってこない。

さすがに僕も慌ててしまう。

「おい、坂本！ どうし——」

「ひ、広野君……」

ようやく聞こえてきた声の主はまさしく坂本だった。

だが、かなり弱弱しい声が聞こえてくる。

「私、私、私、私……」

「私だけじゃわからないぞ。どうした？」

「ああ、こんなに血が……」

「……血？」

「止まらないよあ……ねえ、血が止まらないの……このままじゃあ、このままじゃあ……」

明らかに少し前の強気な彼女の口調ではなかった。

ましてや血が止まらないなんて言っている。

ただ事ではない雰囲気伝わってきた。

「どうした！？ 落ち着いて話してみろ！」

「っ、土屋……」

「どうした？ 土屋に何かされたのか！？」

「違うの……」

すると坂本は一瞬黙った後、呟くように答えた。

「殺しちゃった……」

「え？」

「私……土屋を殺してしまったの……」

「殺した……？」

僕はその言葉に驚き、走るのをやめていた。

第44話 「預言者」

血の色のようにやや赤みがかつた人通りも少ない街中を僕は走り抜ける。

それにしても不可解だ。

坂本が土屋を殺しただって！？

土屋が坂本を殺すことがあっても、逆はありえない。

こんなことありえるのか……こんな不幸が……

「——まさか！？」

僕の中で『もしかして僕が魔法を使ったからか？』という疑問が生じる。

確かに僕が使う魔法は自分の幸福を媒介として力を行使するものだ。

そして、幸福の穴埋めとして不幸が訪れる。

つまり、幸運と不幸のバランスはつねに均等に扱われ、幸福と同程度の不幸が訪れるのだ。

でも、僕は母さんを眠らせたただけぞ。

眠らせると同程度の不幸が、友達が犯罪を起こすことなのか！？

まさか、幸福と不幸のバランスが崩れてきているのか？

……にしても不自由だ。

使った魔法に対しての不幸が選択できれば問題ないのに。

幸福と不幸をコントロールする方法が……

そもそも僕に振りかかる不幸の定義とは何だろう。

……もしかしたらそれは僕次第なのかもしれない。

なぜなら不幸の価値基準は人それだからだ。

僕が不幸だと思わなければ、起こった幸福の穴埋めにはならない。までよ……ということは起こる不幸というのは意識、無意識に関

わらず、僕が不幸だと感じる出来事なのか？

だったら自分で制御することも可能なのだろうか？

今回の件だって坂本が土屋に殺されるかもしれないと思ったことが発端だとすると……

『坂本に殺されて欲しくない』が僕の考える幸福だとして。

これに対する不幸な展開は『坂本が殺される』または『坂本が殺してしまう』にならないだろうか？

……いや、考えすぎか。無理がありすぎる。

第一、坂本が人を殺すという展開に納得がいかない。

ただ、『納得がいかない』からこそ、魔法の存在を考えに入れたくなるのだ。

とはいえ、根本的な問題として僕以外に魔法使いはいないはず。

「でもな……」

駄目だ。なんでも魔法のせい不幸になるという想像はやめておいたほうがいい。

ここまでの思いに至ると僕は首を左右に振った。

それにしても不可解だ。

僕はとにかく事実関係を確認すべく、学校へ急いだ。

学校に到着すると、春休みの夕暮れのせいもあって学校には人気がない。

校門をよじ登って校庭に着地する。

ゆっくりと校舎へ目をやると、窓からは誰もいないことが分かり、建物は不気味そのものだ。

さらに視線を上げていくと屋上に行き着く。

あの場所で起こっていることを今から受け止めなければならない。僕は大きな音を立てて唾を飲み込むと、歩き始めることにした。

校舎へは誰が開けたのだろうか、窓の鍵がかかっていないものがあり、そこから入ることが出来た。

静かな廊下は僕の足音だけが響いていた。

屋上へ続く階段へと向かうために途中、廊下から教室が見えた。そういえば終業式出ることが出来なかったな……そう思うと、これが見納めになるかもしれないから目に焼き付けようという気になった。

普段、嫌というほど毎日通った教室がもう当たり前の風景でなくなるかもしれないと思うと少し切なくなる。僕は走りながら流れていく教室を見つめていった。

さらに、階段を一気に駆け上がると、屋上へと続くドアに到着した。

今から最後の決着をつけんだ……よし！

ドアノブへゆっくり手を伸ばし、ノブを回すと僕の緊張は頂点へと達する。

決意という心の叫びと共に僕はドアを一気に開いた。

大きな音を立てて開かれたドアの向こう側に、僕は息が詰まってしまった。

まず、よく分からない類の異臭がして思わず口に手をあててしまう。

そして十数メートル先の地面にある塊が目飛び込んできた。

「まさか、あれが土屋か？」

まさしく塊は学校の制服を着た男、土屋が横たわっている姿だった。

次に倒れている傍らで、ひざを抱え俯いている坂本の姿が見えた。

「おい、坂も……」

少し歩き出した僕は言葉と共に歩みも止めてしまう。

なぜなら二人の間から地面へ少しずつ広がっている血溜まりを見つけたからだ。

——本当にやってしまったのか？

僕は意を決してゆっくりと二人に近づく。

どんとん近づく、と輪郭もハッキリし、ことの詳細が見えてきた。確かに土屋は腹部を刺されて倒れている。近くに血が付着したナイフが落ちているのがその証拠だ。さらに制服も腹部中心に赤黒く染まっている。血溜まりもコイツのものらしい。

さらに土屋をよく見る。するとまだ肩が動いていた。

よし、まだコイツは生きている。救急車を呼べばまだ助かるはずだ！

僕が土屋の生存を確認した頃、ヒザに顔を埋めていた坂本が僕に気づいたのか、俯いたまま一瞬肩を震わせた。

「坂本？ ……大丈夫か？」

そして彼女はゆっくりと顔を上げて僕のほうへ顔を向けた。

まず、涙でくしゃくしゃになった顔。赤く腫れた瞳。微妙に唇は震えていた。

「あっ……」

「よかった。お前は無事みたいだな」

とにかく彼女を安心させようと僕は微笑んだ。

すると同時に彼女は口をゆがませて叫ぶ。

「嫌あああ！、広野君見ないで！」

とつさに坂本は手で顔を隠そうとするが、血まみれになっている自分の手を見てまた悲鳴を上げた。

さらに僕から逃れようとして、這いつくばりながら離れていく。

「ま、待て！ 別に僕はお前をどうこうしようってわけじゃないんだ！」

「駄目……駄目……もう、私駄目なんだよ……」

それでも逃げようとする坂本に僕は駆け寄り肩を掴んだ。

肩を引き寄せこちらを向かせようとするが、坂本は顔を背けた。

「離して。私はもう戻れないんだから！」

「でも……」

僕には彼女を無理やりこちらを向かせても、かける言葉が見つからなかった。

今出来ることと言えば、虫の息の土屋を救急車に運ぶことだろう。

「とにかく救急車を呼ばないと！」

僕は携帯電話を取り出し、電話をかけようとする。

携帯のボタンを押そうとした瞬間、叫び声が聞こえた。

「駄目っ！ 電話しないでっ！！」

「もしかしてすでに連絡済なのか？」

すると坂本は答えない。

「連絡していないんだな」

すると彼女はこくりと頷いた。

僕はそれを確認すると、もう一度電話をかけようとした。

「お願い！ 待って！」

坂本が僕の腕にしがみついて、振り回す。

僕は重さに耐え切れず、思わず携帯を地面に落としてしまった。

「おい、何するんだよ！」

「だって……電話したら私は……」

掴んだ腕からのぞく坂本の赤く腫らした瞳から、さらなる涙がじわりとにじんでいた。

確かに電話をしたらただでは済まないだろう。

そのことに思い至ると僕はどうすることもできず、立ち尽くしてしまった。

「くくくっ……」

「っ！？」

わずかに笑い声が下から漏れてくる。

声の主を探すべく、僕と坂本の視線が集まった場所には土屋がい

た。

「土屋、お前っ!!」

「ざまは……ないな。この僕を……振る……からだよ」

血だらけになって横たわっている人間の言葉には思えなかった。今だって血液が大量に流れたせいで寒いのか背中が震えていた。これが、門脇を殺し、武内を殺した犯人の最後と思うと何とも言えない不完全燃焼な気持ちになった。

「死にかけてるくせに何をたわごとを……」

「ふん……」

すると、土屋は顔を歪めながら制服のポケットから紙をだして、血まみれの震える手で地面に軽く放り投げた。

放り出された四つ折りの用紙には何かが書いてあるようだった。

「これを読めってことか？」

「がはっ……はあはあはあ……」

土屋は荒い息をして、わずかに首を縦に振った。

ご丁寧にも僕はそれを拾い、開いてしまう。

そこには土屋の直筆らしき文字が綴られている。

まず、最初に『予言書』と書かれていた。

さらに読み進めると、土屋がこの事件が起こる前に書いたと思われる文章がならんでいた。

『僕が変人じみた笑いを浮かべて偉そうに君たち待っているとでも思ったのかい？

それは大間違いだ。この手紙を読んでいる頃にはそれが証明できていることだろう』

なるほどこれは今の状況は起こるべくして起こったと主張したい土屋の自己顕示欲のつまった手紙ってわけだ。

今、倒れている土屋の顔を手紙越しに見ると、なぜか苦しそうな顔をしているのに、勝ち誇っているかのようだ。

『さて突然だけどね、あの時、君たちが見た亜也の動画に魔法をかけさせてもらった』

はあ！？ 魔法だった？

僕はいきなり心臓をつかまれたような衝撃が走った。

『あの画像を見て先に屋上へ着いたものが、僕に殺意を抱くという魔法だ』

どういうことだ？

あの画像に土屋の意のままに操れるような何かがあったというのか？

それが魔法だと？

『といっても信じられないだろうが、本当に僕は魔法使いなんだよ。言葉や映像に自分の念を込め、意のままに操る能力があるんだ。ここまで言えば、亜也の動画を見た君たちには本当だとわかるだろう？』

いつの間にか手紙を読んでいる僕の横から、坂本が覗き込んでいた。

驚いた表情を彼女は見せるが、僕はすでに何もいえなくなってしまう。

信じられない、魔法使いがもう一人いるなんて……

手紙はさらに続いており、土屋の自己顕示は続いた。

『僕は常に対する感情について劣情を抱いていた。』

いや、死に対する恐怖や安らぎの念に憧憬を抱いていたと言い換えてもいい。

死ねば、それ以上は年を取らず、永遠にそのままだ。
さらに二人で死ねば、永久に結ばれる。そう信じている。意外にロマンチストだろ？

僕は独りが寂しくないなんて言わないよ。
強がって一人にいるようなそんな浮ついた自信家じゃないんだ。
僕は自分の弱さを認めている真の自信家だ』

「くつくくつ……」

何が可笑しいのか土屋は震える口角を無理やり引き上げ、笑っていた。

いや、どちらかと言えば僕に見せ付けるためにやっているように思えた。

『死を恐れ憧れる僕は探していたのだ。一緒に死んでくれる人間を。そしてとうとう見つけた……亜也だ』

何を言っているんだ……コイツは狂っている！

死に憧れているが、一人じゃ嫌だから永遠に一緒にいられるような人と死にたいと言っているんだぞ！

さらにその相手が武内だって！？ ふざけるなっ！！

僕の中に怒りが沸々と湧き上がってきた。

それを煽るかのように手紙の文章は続いている。

『その亜也を奪おうとした広野、お前だけは許さない。

だから置き土産をすることにした。僕はただでは死なない。

お前が僕を殺すか、坂本が僕を殺すか、とにかくどちらかに犯罪者となってもらう。

君の場合ならば、後者が精神的に辛いものになるだろう』

土屋は僕を陥れるために、坂本までも巻き込んだというのか！？
だとしたら、僕が彼女を追いついたと言っても過言じゃない。
僕は覗き込む坂本の顔を見ることが出来なくなってしまった。

『僕と亜也は二人で死んでゆく。』

そして君たちは僕を殺した罪により、悩み、苦しみ、この世で裁かれるがいい！』

いつの間にか紙を持つ手は震えていた。

ここまで憎悪に満ちて自分に向かってくる人間を始めて肌で体験したからだ。

人のものを盗んじやいけません。

人が困ることをしちやいけません。

人を殺しちやいけません。

普段、人が犯してはいけないと避けている、僕がモラルと呼んでいたものをこの男は軽々と踏みにじっていくのだ。

すでに人間すらないのかこの男は……

おまけにコイツは魔法が使えるという。

よく読むと魔法とは言いがたいものだが、この人間ではない土屋が使えるそれは魔法なのだろう。

僕の心の中が暗闇に包まれてそうになった頃、文章は終わりを告げる。

そして最後のは一言で締められていた。

『僕の勝ちだ』

くっそっ！

僕は読み終わった後、なぜか敗北感で一杯だった。

武内を殺し、他人を巻き込んで死のうとして、憎い人間まで陥れ

る。

すべて土屋の思い通りに進んだわけだ。

「ひつ……」

坂本は手紙を読み終えたのか、小さく声を上げて二歩、三歩と後ずさりした。

すると地面からタイミングを見計らっていたように声が聞こえてくる。

「この人殺し……」

「いやあああつ！！ 私、取り返しのつかないことを！」

坂本は両手で耳をふさぐとその場にしゃがみ込んだ。

”人殺し”と言う言葉を振り払うように、顔を何度も左右に振って大声で叫ぶ。

「だって、仕方ないじゃない！ 脅すためにナイフを持っていたら、屋上着いた途端に記憶がなくなつて、気づいたら……あああああああああああつ！！！！」

「落ち着け、お前が殺したんじゃない、土屋が——」

「そんなこと誰が証明するの！？ 『彼には魔法の力があつて』なんて信じてもらえるわけないでしょ！！！！」

坂本はすっかり錯乱状態に陥り、四つんばいになると何度も拳を地面にたたきつけた。

やがて拳が赤く染まるが、僕はそれをとめることが出来なかった。僕はそれ以上坂本を直視することが出来ずに、背を向けて倒れている土屋をぼんやりと見つめた。

悔しい気持ちは僕にもある。

さらに土屋の計算を阻み、坂本を助ける方法もある。

それは……土屋か武内を助けること。

しかし、土屋がここまで計算してるわけではないと思うが、坂本のことで武内を助けることはできなくなった。

武内を生き返らせたところで、坂本が犯罪を犯してしまったという事実はなくならないからだ。

一人の命には一人の命しか犠牲に出来ない。

もし、この現象を回避しようと思えば、僕は土屋を助けなければいけない。

折角、武内にこの命捧げようと思えたのに！

こんな男のために自分を犠牲にするなんて！！

倒れて息絶え絶えの土屋を見ると、どうしようもない悔しさを押さえきれない。

そして喉の奥から叫びのような思いが溢れそうになった。
しかし――

「あああああああつ！！！！！」

悲鳴とも叫びとも聞こえる声が僕の背中では響く。

次の瞬間、何かが倒れたような鈍い音が聞こえた。

いやな予感に後ろを振り返る。

そこには地面を殴り、血まみれになった手に握られたナイフ。

さらにすりむけて赤くなった手は自分の腹部に宛がわれている。

坂本が自分の腹を刺している姿だった。

「ぎい……」

うずくまるように倒れた坂本は体を何度も震わせる。

体が揺れることにうめき声ともつかない声が漏れてきた。

「坂本！！！！！」

僕は彼女へと駆けつけ、すぐに土屋と同じように横たわらせる。

坂本は赤く充血した瞳を揺らせながら、僕を見上げてた。

「痛い、痛……」

「すっかりしろよ、何でこんなことをしたんだ！」

「私、もう人殺して……血で汚れちゃったから……」

「馬鹿野郎っ！ だからってこんなことすることはないだろう！！」

どうしたらいいんだ！？

救急車を呼ぶべきか！？

でも、この状況をどうやって説明するんだ！！

僕は誰をどうやって助けたいんだ！？

今起こったことに対して完全に思考停止となってしまうた。

「あああああああつ……！」

そして気づけば僕も叫びに声をあげ、坂本と同じように地面に向けて何度も拳をぶつけていた。

第45話 「すべてが不幸になる」

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

自分の荒い息遣いがやけに耳に入ってくる。

僕は地面を殴るのを止め、へたり込んでいた。

真っ白な頭だけが頭を支配し、動けないでいる。

ここは屋上だ。日は暮れかけている。そして周りが暗くなっていた。

上手い具合に辺りが見えなくなる。どんどん自分の中へと引きこもっていく。

コノママニゲテシマエ。

「うう……」

「——！？」

わずかに呻き声が耳に入り、僕は我に返る。

目の前に広がる二つの塊。わずかに動きながらその命を主張していた。

刺された者と刺した者。騙した者と騙された者。

——助けなきゃ。

僕は立ち上がろうとして地面に左手をつき体重を掛ける。

その瞬間、手がすべて体が左へと流された。

「えっ！？」

僕はなすがままに肩から倒れこんでしまう。

そして地面からの視界から、歪に折れ曲がった紙が見えた。

……あれで滑ったのか。

土屋からの手紙。まるでこの展開を見越したかのような勝利宣言。なにより、土屋も魔法（というには稚拙なものだが）使いだということがわかった。

『言葉や映像に自分の念を込め、意のままに操る能力があるんだ』
本当ならば確かにすごいが、土屋の力には何の見返りもないように思える。

何かを犠牲にして使うような魔法ではない。というか、そんな魔法は存在しない。

だから、どちらかと言えば魔法ではなく、催眠術に近いんだろう。
『意のままに操る』というよりは、『思い込ませて行動させる』
ということだ。

いや、そんなことを考えている暇はない。

とにかく救急車を呼ばないと二人が死んでしまうじゃないか。

……でも。

しかし、ここで事を一段落つけてしまっているのだろうか。

救急車に運ばれても、土屋が死んでしまったら？ 坂本が犯罪者になったら？

なによりこの機会を逃すと、もう土屋と合間見える機会を失いそうなのがする。

やはりここは魔法で状況を打開するしか方法は無い。

土屋の思い通りにはさせない。お前の予言は外れるんだ！

この魔法で運命を変えてやる！

僕はゆっくりと立ち上がり、服についた汚れを払う。

軽く深呼吸をして、改めて倒れている二人に近づいた。

さて、誰を助けるか……

助ける対象は三人いる。

まず、武内を助けるか？

でも、武内は生死がハッキリしていない。

仮に死んでいたとしても死体が無いことには魔法を使う対象がないことになる。

じゃあ、坂本を助けるか？

——駄目だ。このまま命が助かったとしても、土屋の問題は解決せずに彼女が犯罪者になっってしまうじゃないか。

じゃあ、土屋を助けるのか？

横たわり僅かに肩が動いているところを見ると、まだ取り返しがつく気がした。

血の広がりか勢いをなくしている。助けるなら今だ。

「……くそっ」

——だけど、だけど、だけど！！

なんでこんなヤツを助けなければいけないんだよ。コイツは死にたがっているんだぞ。 とも言え、土屋を助ければ、武内の居場所も分かるし、坂本は罪から開放される。

……しかし、感情が、魂が、承諾できない。

それに問題は土屋を助けてしまった後だ。

僕に重傷の傷を治すと同様の不幸が降りかかるから、武内を助ける機会は失うだろう。

下手すれば僕が土屋に殺されかねない。

なぜ僕がそこまでのリスクを背負う必要がある？

きつと土屋は助けたとしてもまた誰かを殺すに違いない。

また誰かに催眠術のようなものをかけて、思い込ませるんだ。

そして不幸の連鎖がまた続いていく。

大げさに言えば、コイツは人類に有害な不幸を作り出す人間なんだ！

「……くん」

「坂本？」

「ここから……逃げ——うつつ！」

坂本は痛みからか、悲しさからか、目じりにたくさんの涙を溜めていた。

そして溢れたものが、下へと流れ地面に落ちていく。

「何してるんだ僕は……」

彼女の表情を見つめると僕の唇は震えだした。感情が高ぶり目が潤んでしまう。

くそっ、僕は何を損得勘定で迷っていたのだろう。

——やるしかない。

僕は一步一步踏みしめて土屋へ近づく。

大丈夫だ。上手くいく。

深く長く息を吐き出すと土屋に向けて手をかざす。

僕の手は暖かくなり、やがて腕全体を光が覆うと熱さを増した。

「よし、行け！」

僕の掛け声と共に光は手のひらで球形をつくり、土屋へと放たれた。

土屋の体がわずかだが宙へ浮かんだ。

ぼんやりとした光が腹部へ集中し、体内へと入っていく。

これでこの男の傷は今すぐ治る。もう坂本が犯罪者になることもない。

武内、ごめん。

今は目の前にいる坂本を救うべきだよな。

たとえ、この後不幸が訪れるとしても。

土屋が不幸を作り出す人間だとしても。

少しして土屋の体がピタリと動きを止めた。

その様子には僕はコイツの治癒が終わったことを確信する。すると、同時に土屋はゆっくりと半身を起き上がらせた。

「どうしたというんだ。これは一体……」

コイツは今起こった現象を信じられないのか、何度も自分の腕を回したり、手を開いたり閉じたりしている。

まあ、当たり前かもしれない。さっきまでの苦しみが嘘のように消えているんだから。

僕はやるせない気持ちを抱えながら、土屋の前に歩み寄る。

近づく僕に気づいたのか、こちらへ顔を向け不思議そうな表情をした。

「土屋、どうだ？ 元気になった感想は」

「なに？ ……するとこれは」

「ああ、僕がやったよ」

僕は土屋を助けてしまったとう敗北感を拭うべく、なるべく偉そうに話し始めた。

「さつき、お前は手紙の中で自分は魔法使いだと書いたな」

「……それがどうした」

明らかに土屋は僕を警戒しているみたいで、余計なことは一言も話さないといった様子だ。

僕だつて半分以上やけくそで話している。

土屋を助けた以上、坂本は今から救急車で運ばなくてはいけないし、武内の居場所を聞き出す機会を失うかもしれないからだ。

「僕から言わせれば、土屋、お前のは催眠術に過ぎない」

だが、土屋はそれには答えず、黙り込んで僕をジッと観察している。

僕はその様子に乗じて憂さを晴らそうとしていた。

「なぜなら、僕こそが本当の魔法使いだからだ！」

「……ふん」

土屋は僕の言葉に鼻を鳴らすと、立ち上がって腹部の汚れを手でなぞった。

「偉そうに言うな。そんなことは自分の体を見れば分かる」

「土屋、悔しいのか？ 本物がいたことに驚いたか？」

「ぐっ……」

「お前だけの特権だとも思ったか!!」

奥歯をかみ締めているのか、土屋は少し口を歪ませながら僕を睨んでいる。

そのにらみ合いはどれだけ続いたのだろうか、やけに長く感じた。

すると土屋は僕の言葉とは関係ない質問を返してきた。

「なぜ僕を助けた？」

僕は質問の真意を測りかねていた。

だが、こんなことやっている場合じゃない、救急車を早く呼ばないと。

手短に終わるような答えをとっさに言ってしまう。

「簡単だ。お前に僕の力を見せ付けるために決まってる」

「ほう……」

僕は単純な人間だ。

考えたって土屋の思考力には敵わないだろう。

だったらここで素直にハッキリと言ってやろうと思う。

「これで分かったろう？ お前がその力を使って皆を不幸にしても

……」

「ん？ 不幸だと？」

「僕が魔法の力を使って、その不幸をすべて幸福に変えてやる!!」
すると土屋はまた考え込むように黙り込んだ。

その姿が腹立たしいんだよ！

僕はその隙について土屋へと近づく。

もちろん、奴の顔に一撃見舞うためだ！

なぐつたらすぐに各所へ連絡するっ！

「なるほどな……」

やがて土屋は何かを思いついたのか、僕から視線をそらすと何かに納得したようだった。

「ふざけんなっ！！　いつまでも優位に立っていると思うなよっ！！」

僕は渾身の力を込めて、腕を振り上げて土屋へ拳を突き出した。

「――馬鹿が」

しかし、僕の拳は土屋を捕らえることなく空振りした。

さらに、僕の腕をかくぐった土屋が、一気に間を詰めてくる。

奴の動きは見えている。でも、体が反応しきれない！

「そんな動きじゃ、素人だって避けられるさ」

土屋の突き上げられた拳が迫ってくる。

僕はそれをスローモーション映像を見るように眺め、やがて自分の顎に当たるのを感じた。

その瞬間、脳が揺さぶられるような衝撃と共に視線は上と押し上げられた。

「んぐっ！」

そして僕は尻餅をつくように地面へと倒れていった。

かろうじて両手を突いて体勢を整える。

「――っっ！」

顎の下の部分に強烈な痛みを感じる。

殴られた部分を手で摩ろうとするが、触るだけで激痛がした。

口の中が血の味がする。

「くっくくくっ……」

土屋は倒れた僕に対して含み笑いが止まらないといった具合に身をかがめている。

僕は顎を殴られた衝撃で上手く話せないのをなんとか押さえつつ、怒鳴った。

「……何がおかしい！」

「何が可笑しいだつて？　――あははははっ！」

土屋は何がおかしいのかずっと笑っている。

僕はその隙に痛みを堪えながら、なんとか立ち上がった。

顎を殴られたせいなのか眩暈がする。

手を頭にあてて、正気を取り戻そうと強く押し付ける。

一方、ひとしきり笑った土屋は僕の姿に目を細めながら、口を開く。

「本物の魔法が使えるなんて驚きだ。確かに一種の敗北だよ、これは」

「何言つてやがる……」

「そして僕はこの敗北に今最高にムカついているんだよ!!」

土屋は今まで聞いたことのないような大声を上げる。

僕がその威圧感にわずかだけど怯んでしまう。

本当にこいつの声には力があるのだろう。

大声はまるで獣の雄叫びに近く、心の底から魂をどこかへ持つていかれる感覚を覚えた。

続けて土屋は声を張り上げ、叫ぶ。

「もうっ！　せつかく死ねると安堵したのに！」

「は？」

さっきの迫力は無かったかのように、土屋は地団駄を踏み始めた。その姿はまるで駄々をこねる子供のようだった。

「すべてが終わったはずなのに！　先に死んだアイツ等に追いつけると思っただのに!!」　「なんなんだお前は……」

今度は言葉にまったく力が無く、ただ拗ねている子供のようだ。

「広野っ！　本当に君はクソ野郎だ！」

コイツはとんでもない凶暴性や幼児性を兼ね備えているということにとだろうか。

いや、と言うよりは幼児がもつような善悪の無い凶暴性をこの歳まで持ち続けたということか。

僕があっけに取られていると、土屋は落ち着きを取り戻したよう

に深く息を吐いた。

「まあ、僕に関してはまた死ねばいいだけのことだ……」

再び背筋が凍りつくような感覚が僕を襲う。

何かよからぬことをコイツが起こすという本能からの恐れか？

「僕が死ぬ前に広野、貴様にお仕置きを与える」

「なに？」

土屋はさっき僕が魔法を使えるという話を聞いていなかったのか？

お仕置きなんて出来るはずが……

「君が魔法使えようが何しようが関係ないね」

「っ！！」

「君が考えそうなことはお見通しだよ」

嘘付け。僕の頬が引きつってしまったのを見逃さなかったただけだろう。

さらに土屋は腕を突き上げ、僕へと力を誇示するように叫んだ。

「僕にはこの力があるのだから！」

何を仕掛けるつもりだ？

まずいぞ、コイツの口を封じるか？

……駄目だ。土屋は言葉だけじゃなくて紙や動画にも自分の念を送り込めるんだ。

だったら吹き飛ばして、気絶させるしかない。

そして僕に迷いが生じている間に土屋は自信たっぷりになんて言った。

「まずはお前の魔法を使えなくしてやる」

まずいつ！

時間を置いて二人を助けようと思ったのにっ！

魔法が使えないと、この場を切り抜けることも武内を救うことは出来ない。

「でも、待てよ……それでは手緩いな」

不幸、不幸、不幸、不幸、不幸、不幸……頭に駆け巡る憎むべき

文字。

土屋を助けることで武内や坂本を救うなんて無理な話だったのか！？

不幸は不幸でしか拭えないのか！

僕は土屋へ手をかざし、突風を起こすべく心の中で呪文を唱えようとした。

しかし、土屋はそれを見逃さず、僕へ向けて怒鳴った。

「待てーーーーーえええつつつ！！！！！」
「なつつつ！！」

鼓膜まで破られそうなぐらいの衝撃が僕を襲う。

頭に浮かんだ呪文も消え去り、頭が真っ白になってしまった。

そして僕は腰が抜けたようにその場にへたり込んだ。

「僕を封じるんなら、もっと早くすべきだったね。優柔不断の広野君」

「くっ……」

……コイツの力がここまでだったとは。

僕は自分の馬鹿さ加減を呪った。

土屋に一泡吹かせようなんて思わなければ良かった。

「さて、お仕置きの続きだが、よくよく考えてみると魔法が使えなくするという案は却下だ」

「何？」

「貴様には亜也を生き返らせてもらわないとな」

「武内を？」

そうか、コイツは武内と一緒に死にたがっていたんだっただとすれば……

「そうだ。お前に亜也を蘇生させて、もう一度殺すでしょう」

「はあ！？ ふざけんな！」

「本気さ」

なんとか声は上げられたものの、まだ体が上手く動かすことが出

来ない。

僕を見下した目つきで土屋は薄笑いを浮かべた。

「さつき、貴様は『自分の魔法で不幸をすべて幸福に変えてやる』とか何とか言っていたな」

くそつ、あんなカツコつけたことを言うために土屋を生かしたんじゃないかったのに！！

本当に僕は馬鹿だつ！

「……よし、お前のお仕置き方法は決まった」

僕は下唇を噛んでじつと何かに耐えるように身を固めた。

まるで死刑宣告を受ける受刑者のように。

そして静かに目を閉じた。

第46話 「魔法を信じるかい？」

元々薄暗かった屋上。目を瞑れば、本当に暗闇になる。

これからどんな重荷を背負わなくてはならないのだろうか。

僕は奥歯をかみ締め、手で耳を塞いだ。

もしかしたら土屋の声が聞こえなくなるかもしれない。

「今からお前の魔法行為は全て……」

しかし、そんなことに構うことなく土屋の声は耳に飛び込んでくる。

やはりどんな障壁があってもどめておくことが出来ずない。

真っ直ぐに脳内へ響いてくる。

いや、脳内から発せられている声なのか？

僕が自分の状況を把握できず、挙動不審者のように辺りをうかがってしまった。

「——っ!？」

すると不意に土屋と目が合ってしまう。

いけないっ!! 心ごとと持っていかれるっ!!

皆、幸せに出来なくてごめん……

そして、奴の口が再び開いた。

「自分の不幸となつて降りかかる!!」

「——なっ!？」

不意に頭に何かが駆け巡る。次に頭が締め付けられるような衝撃襲う。

さらに体が一瞬震え、すぐに硬直した。

土屋の魔法が履行されたというのか？

それにしても……今、土屋は何を言ったのだ？

『今からお前の魔法行為は全て自分の不幸になつて降りかかる』

まさか……まさか、まさか、まさか、まさか……！
奴の言葉は本当なのか！？

すぐには理解できずに僕は客観的に見て呆けた顔をしていたに違いない。

そんな僕に土屋が近づいた。

「どうした？　驚いて何も言えないか？」

「え？　いや……」

僕は自分の顔色が読まれるのを恐れ、顔をそらしてしまう。

さらに土屋は僕の反応を見るべく近づいてきた。

「簡単に説明すると、君はその不思議な力は使えるが、それがすべて自分の不幸につながるんだよ」

「分かってる……」

「ふん、そんな口を空けた表情で理解できてると思えないがな」
なかなか形にならなかったものが次第にその姿を現す。

僕に不幸が訪れるだって？

土屋は不幸を作り出す人間だって？

「ははは……」

力のない笑いが漏れる。絶望してるからじゃない。

希望に打ち震えているからだ……！！

もやもやとした思考の霧が一気に晴れていく。

吹き抜けるような爽快感が僕を貫いた。

できるっ！　やれるっ！！　勝てるっ！！

手のひらを眺め、開いたり閉じたりする。

拳に籠った力は強く、まだ戦えると感じるには十分だった。

僕は全身に力がみなぎってくるのを感じた。

そしてゆっくりと立ち上がる。

さらに土屋を無視して坂本の元へ歩き出した。

「ほう、不幸になっても彼女を助けるのか？」

「まあね」

「迷いが無いな。自分が不幸になるんだぞ」

「……もう、それについては散々悩んだから」

「なに？」

ほとんど動かなくなっていた坂本の隣へしゃがむ。

さらに彼女の腕を掴んで、僕は心の中で呪文を唱えた。

すると、僕の手は輝きだし、すぐに坂本の腕を光りが伝達する。

刺さったナイフが抜き取られると、わずかに体が反応した。

白がかった顔色がどんどん血色を取り戻し、微弱だった呼吸も寢息程度の穏やかなものに戻っていく。

「おい。そろそろ起きろよ、坂本」

「うつん……」

すると坂本は寝起きのように目をこすりながら、片目を開けた。

ゆっくり上半身を起こ上がらせると、小さくあくびをする。

そんな坂本が可愛くて僕は思わず微笑んでしまった。

「坂本、まだ寝るには早い時間だぞ」

「……え？」

ようやく、今の事態が読み取れたのか、坂本は辺りを何度も見回し、自分の体を触って無事を確認した。

「……あれ？ もう、痛みの感覚もない。死んじやったのかな私」

「じゃあ、なんで僕が隣にいるんだよ」

「広野君も……死んじやったから？」

「おいおい、勝手に殺すな。お前が生きているからに決まってるだろ」

僕の言葉に坂本の瞳は大きく開かれた。

まだ信じられないみたいだな。

「嘘？」

「本当だ」

「なんなら俺の後ろを見ろよ」

「え!？」

坂本が僕の肩越しに見つけたもの。それは元気な姿の土屋だった。今は土屋に構っている暇はない、後でちゃんとかたをつけてやる。

「う、嘘!？」

「お前、さつきから『嘘』ばかりだな。僕の魔法が信じられないのか？」

僕を見つめる坂本の瞳は潤んで今にも溢れそうだった。

唇が震えながら強張った笑顔を浮かべている。

「だって、だって、こんな魔法使いみたいなことを……」

「言っただろ？ 僕は魔法で坂本を守ってやるって」

「覚えてくれてたんだ……」

「ま、まあな……」

「ああっ、広野君っ!！」

坂本は僕へ倒れこむように飛びつく。

さらに泣き声を上げながら何度も僕の胸へこすり付けるように顔を埋めてきた。

「もう、駄目だって何度も、何度も……」

「心配かけたな」

こっちの背中が痛くなるぐらい坂本は強く抱きしめて僕を放さなかった。

それだけに彼女の嬉しさを感じて僕も充足感に浸った。

『魔法で守ってやるなんて』とっさに出た言葉だったけど、否定すると場の雰囲気壊しそうなので黙ることにする。

「広野、それぐらいにしてくれないか。醜いもの同士の抱擁は悪にしかない」

土屋の声が背後から聞こえると、坂本がさらに僕を強く抱きしめる。

確かにもうそろそろ決着をつけないといけないな。

僕は坂本の頭をそつとなでた。

「広野君……」

「大丈夫。もう問題は解決したんだ」

優しく坂本と離れると、僕は土屋へと向き直す。

土屋は相変らず余裕のある笑みを浮かべていた。

すでに勝負は決しているというのに。

「広野、自己犠牲見事だった……といたいところだが、愚か以外何者でもないな」

「あつそ」

「なんだ、余裕だな」

「別に。すぐわかるさ」

僕の挑発に土屋は少しだけ閉じた口を歪ませた。

そしてコイツは宣言するように僕へ指を刺して叫んだ。

僕はそれに対して腕を組む。

「さあ、起こりたまえ！！ 君に不幸が降りかかれっ！！」

声が屋上中に響き渡る。

日が半分以上沈み、屋上の以外の風景が黒く染まっている。

学校外の道路に車が何台か過ぎる音が耳に入った。

もう、人々が家路に急ぐ時間なのだ。

馬鹿馬鹿しい時間が過ぎていく。

次第に土屋の表情が曇っていくのが、こちらから見て取れた。

「……で？」

「なんだと？」

土屋の声とは裏腹に何も起ころうとはしなかった。

さらに睨み合いが数分続く。

土屋も僕も視線をそらすことは一切ない。土屋の目の奥に漂う暗闇を感じる。

どれだけ光りを放つても全て吸い込んでしまいそうな闇。しかし、僕はもう怯むことはなかった。

「どうした？ なにか起こるんじゃないのか？」

「貴様、何か知っているのか！？」

僕はわざとらしく鼻を鳴らして、土屋を見下すような目つきで眺める。

すると露骨に土屋は敵意むき出しの表情へと変化した。

「説明してなかったよな。僕の魔法の秘密」

「お前の魔法……秘密？」

「僕の魔法はね……幸福を媒介にして行使されるんだ」
「なっ！？」

土屋の表情がめまぐるしく変化している。

すでに敵意むき出しではなく、驚愕の表情へと変化していくのがわかった。

「幸福が起こった埋め合わせとして、それと同程度の不幸が降りかかるのさ」

「——そんな馬鹿なっ！……」

土屋は今までに考えられないぐらいの大口を開けて、空に向かい叫ぶ。

コイツもここでようやく理解できたのかもしれない。

そうなのだ。

土屋の魔法は僕の欠点を補うものになってしまったのだ。

「お前が今さっき僕の魔法行為自体を不幸にしてくれた。どういうことが分かるな」

「不幸が相殺されるというのか……」

土屋は認めたくない事実を搾り出すように呟いた。

さらに顔に全ての力が集中しているかのように引きつり、歯を食いしばっている。

「お前のお陰で僕はもう魔法をつかっても後から不幸になることはないんだよ」

「虚言だっ！！」

すでに土屋の目は血走っていた。

唾を飛ばしながら、何度も同じ言葉を口にした。

僕はそれを妙に冷めた気持ちで観察した。

「騙されないぞっ！　僕は徹底的に否定する！！」

素直に魔法を使えなくすれば、簡単に勝利を得たはずだ。

だが、コイツは人がさらに苦しみ不幸になる姿を望み、選択をし
てしまう。

自業自得。すべて自分に返って来ただけの話。

「土屋、形勢逆転だ」

「うああああっ！！」

すると土屋はガックリと肩を落とし、そのまま膝をついた。

両手を地面につけ、何度も拳を地面に叩きつけ始めた。

自分に対しての強い怒りが行動させているのだろう。

少し前の僕がそうだった。

——と、僕が判断した瞬間、土屋がニヤついた表情で顔を上げる。

「なんちゃって」

「土屋？」

僕の怪訝そうな顔をみて土屋の口元は緩む。

さらに今までの演技だったと言わんばかりに満面笑顔で僕に答
えた。

「簡単じゃないか。僕の暗示さえ解けば、君は元の魔法使いに戻る

わけだ！」

「……そうだな」

なんだ、そんなことか。

コイツはまだ気づいていないらしい。

「であれば、話は早いっ！　今から——あがつ！」

土屋は突然、喉が詰まったような声を上げる。

そして発声練習をするように何度も息を吐き出す。

「はぐつ、あうつ、はつ……うぐつ……」

「無駄だよ。声を出せなくさせてもらった」

「うぐつ！」

すると喉を掻き毟る仕草で土屋はのたうち回り始めた。
別に呼吸が出来ないわけではない。

まだ、コイツにはやってもらうことがあるからだ。

「僕が今まで魔法を使い渋っていたのは、不幸が降りかかるという足枷があったからだ」「はあ、はあ、はあ……」

「いくら優柔不断な僕でも同じ失敗はしない」

僕はここで完全に土屋を封じ込めたのだ！

ハッキリ言ってカツコ良くはない。偶然の勝利だろう。

でも、僕は必然と思うことにした。

なぜなら自分の魔法に対する足枷を覚悟でここに乗り込み、掴んだ結果だからだ。

それに僕は土屋よりずっと前から不幸について悩み苦しんできたのだから。

「んぐつ、んぐつ……」

すると土屋は舌を出し、噛み切ろうとした。

しかし、僕はそんな土屋にしゃがみ込んで近づき、そつと耳元で
呟く。

「自殺しても無駄だ。僕が魔法で何回でも蘇らせてやるからな」

「——っ！」

僕の言葉を聞いた土屋は脱力したように動きをやめ、ぐつたりと
横たわった。

視点は定まっておらず、空ろだ。

もう、どうにでもなれというのだろうか？

僕はその姿をみて自然に笑みが漏れてくる。

あの余裕ぶっていた土屋がふてくされてるぞ！

ここでようやく一段落がついたわけだ。

土屋は助かった。坂本も助けた。
残るは一人しかない。

「じゃあ、本題に入ろう」

僕は立ち上がり、きわめて高圧的に質問した。

「武内はどこにいる」

しかし、土屋は何も答えない。

それどころか僕の言葉が耳に入らないという様子だ。

「魔法で聞き出してもいいんだぜ？」

正直言えばそんな事はしたくなかった。

コイツが敗北を認めて武内を差し出すことが大事なのだ。

「さあ、早く答える」

「あがつ！」

しかし、土屋は薄笑いを浮かべながら僕へと唾を吐いた。

とつさに唾を避けたが、瞬間的に高まる怒りには逆らえない。

「てめえっ！！」

僕は感情に任せて腹部に蹴りを入れようとした。

その瞬間、坂本は僕の腕を掴み力強く引っ張ることで、動きを静止させた。

「広野君、待って！」

「なんだよ」

だが、勢い良く僕の腕を掴んだ割に坂本はなかなか次の言葉をかける事ができない。

それどころか、視線をわずかに横に反らす始末だった。

「あの……」

「坂本、何か知っているのか？」

「う、うん……」

彼女は非常に歯切れの悪い返事をした。
何かを知っているのか？

「実はもう亜也は……」

「死んでいるんだろうな。だから死体を探すんだ。そして蘇らせる」
「でも……」

「あがつ、はがつ、はがつ……」

すると突然土屋は声の出ない笑いを上げた。

坂本は俯いてなかなか答えない。

何があつたというんだ？

第47話 「孤独を抜け出す方法」

土屋は不敵な表情を浮かべ、声にならない笑いを発した。
坂本は僕から目を逸らし、下を向いている。

明らかに僕が来る前に何かがあったようだった。

「坂本、何があったか教えてくれないか？」

「えっ……うん……」

彼女は口元に自分の握った手を当て、ためらっていた。
しかし、何とか意を決したのか僕へと顔を向ける。

「私がおかしくなっちゃった原因なんだけど……ああ、頭がおかしくなりそう」

「なんだよハッキリ言えよ」

もったいぶる彼女に少し苛立ちを感じながら僕は彼女の返事を待った。

「実は……あっ！？」

すると坂本が急に目を開き、僕に対して驚いた表情を見せる。

「なんだよ、僕は何も」

「広野君……アレ……」

彼女は僕の向こう側を指差した事に驚いていた。

示す方向……つまり、土屋がいる位置だった。

僕はやや警戒しながら振り振り向く。

「嫌っ、もう見せないで！」

「……なんだあの白いのは？」

振り向いた先には土屋が片膝をついて座っていた。

そして右手に何か白いものを指で摘んでいる。

それほど大きくはなく、消しゴムのような大きさだ。

「広野君、落ち着いて聞いてね」

僕の背後で坂本は声を震わせながら、話し始めた。
冷たい風が僕に吹きつける、もう夜が始まる。

「……あれはね、亜也なの」

「——まさか!？」

周囲の空気が緊張に包まれる。

土屋は僕たちに見せびらかす様に骨を舐め、笑いかけた。

まだ、勝利を確信してるかのような行為だった。

「土屋は亜也を……」

「坂本、それ以上言うな!」

そんな結論聞きたくない!

これ以上僕に想像させないでくれ。

「亜也を食べたの……」

「ふざけんな!!」

さらに土屋は骨を口の中に入れた。

坂本はそれを見て悲鳴を上げる。

僕は土屋へ向かって駆け出す。

「やめろ! それ以上、武内を汚すんじゃない!」

近づく僕に合わせるかのように土屋は口の中で武内の骨を転がす。

僕は土屋に対して渾身の力を込めて拳を振りかぶる。

「ふん」

あと数センチで僕の手が届く瞬間、土屋の頬に力が入った。

——コイツ、骨を噛み砕きやがった!!

僕の耳に土屋の歯と武内の骨がぶつかる音が聞こえそうだった。

「うわああああっ!!!!」

声を上げたまま僕は土屋の横っ面に拳を叩き込む。

手首に押し戻そうとするような衝撃が襲い、折曲がりそうになる。

だけど、殴り飛ばす勢いを止めるわけに行かない。

「くああああああっ!!!!」

手首に激的な痛みを感じながらも、重圧を吹き飛ばすように腕を回す。

そして僕は腕を振り抜き、土屋の顔は反転するように回っていく。土屋はそのまま倒れこんで、体を床に打ち付けた。

僕も勢い余って前につんのめったまま、屋上のフェンスに激突する。

「広野君っ！！」

坂本がこちらへと駆け寄る。

僕はフェンスにぶつかって倒れたまま動けなかった。

肉体的ではなく、精神的ショックが大きい。

くそっ、僕がいたのに武内が一度ならず二度も蹂躪された！

「大丈夫？」

「……ああ」

なんとか坂本に起こされ、僕は土屋へ近づいた。

土屋は殴られて倒れたまま、起き上がるうとしない。

へらへらとニヤついた表情を見せて、横たわっていた。

「コイツ、避けられるくせに……」

なぜ僕の拳を避けなかったか聞きたかった。

でも土屋のことだ、きっとこう言うだろう。

『お前達の絶望した顔が見たくて、拳を避けるのが惜しかった』と。

本当に最悪な男だな。

こいつを生かしたことを一生後悔するだろう。

「亜也……」

坂本が僕の袖を引っ張り、地面を指差した。

そして足元を見ると、さっき殴った衝撃で土屋の口から飛び出した白い塊が落ちていた。

それを拾い上げ、手のひらで転がす。

「なんて小さくなったんだよ。お前は……」

白い塊……これが今の武内だった。

こんな理不尽なことってあるかよ……これから頑張って生きようとしていたんだぜ。

僕の手のひらにそつと手を重ねた坂本は赤く目を腫らせていた。

「魔法で生き返らせることは出来ないよね」

「……無理だよ。この世にない物は蘇らせることはできない」

そして突然、奇妙な大声が僕の耳に入ってくる。

「があああああつっ！」

僕と坂本が向けた視線の先には土屋がいた。

「土屋！？」

僕の言葉を聞いた土屋が突然立ち上がった。

その表情は今までは違い、目や口を大きく広げ、わずかに体を震わせていた。

「はがつ、はがつ、はああっ！！」

「坂本、危ないっ」

「きゃっ」

土屋は勢いよく駆け寄り、僕の胸倉を掴んだ。

不意の事に僕は坂本を突き放すことで精一杯だった。

「がはっ、はああっ、ああっあああ……」

力強く服をつかまれ、何度も乱暴に体を揺すられた。

最初は訳がわからなかったが、次第に土屋が僕を攻撃するためにやっているのではないことがわかる。

それ以上、危害を加えてこないところからもわかった。

どうやら出ない声で僕のことを非難しているらしい。

「ああがつ、ああっ！！」

目が充血し、口から涎が流れているのにも構わず、何かをまくし立てている。

この様子はすでに狼狽に近いものだった。

話の流れから考えれば、これは武内のことを言っているのだろうか？

そう思うと僕は急にやるせない気持ちになった。

「ははは…… お前も簡単に武内が生き返るとでも思っていたのか？」

「ぐっ……」

すると、土屋は急に動きを止め、僕をジッと睨みだした。

徐々に近づいてきた土屋は頭突きをするように額をぶつけてくる。お前が散々おもちゃにしてきた武内が生き返らないことが、そんなに腹立たしいのか！！

「ふざけんな！！」

僕は土屋の胸倉を掴み返し、ねじり上げた。

さらに、頭を後ろへ引くと土屋へ思いきり頭突きを食らわせた。

「あがうー！！」

頭全体が揺れ動くような衝撃が来るが、負けないように突き出す。鈍い音を立ててヤツの頭は後ろへ吹き飛んだ。

すると土屋は僕の前から崩れ落ちるように倒れた。

「全部、お前がやったことじゃねえか！！ 勝手すぎるんだよー！！」

しばらく土屋はうな垂れるように、へたり込んでいた。

さらによく見るとコイツの肩が震えている。

最初は頭突きが利いたのか？ と思ったがどうも様子がおかしい。床についた手のひらに、何かが零れ落ちた。

—— 涙！？ まさか、悲しんでいるというのか？

「うつ、うつ……」

そして、ついに僕の耳へ嗚咽が漏れ聞こえてきた。

コイツ、本気で泣いているのか？

坂本も僕へ近づき、土屋の姿をみて驚いていた。

「広野君…… 土屋が泣いている？」

「ああ、そうみたいだな……」

なぜ？ お前の思い通りじゃないのか？

僕はぼんやりと泣いている土屋を見て、コイツの書いた手紙のことを思い出した。

たしか土屋は一緒に死んでくれる人間を探していたんだっただな。本気で武内を最後を共にしてくれるパートナーと思っていたのだ。そのパートナーを失い、独りになった悲しみにくれているということなのか？

『独りは嫌』か……

それはきつと武内も同じで、人との繋がりを感じるためにリストカットしたんだ。

土屋と武内はそういう意味で出発点は同じだった。

だけど、向かう方法が違ったんだな。

武内は生きて孤独を抜け出す選択をした。

土屋は死んで孤独を抜け出す選択をした。

ところが現実とはまったく逆で、土屋は生き残って泣いている。

僕も坂本も土屋の姿に戸惑いを隠せなかった。

坂本は困ったような表情を僕に向けた。

「ねえ、広野君本当に方法はないの？」

「一応は……ある」

「本当！？」

方法は常にあるものだ。

しかし、それが現実可能かどうかは別の話。

「もし一つだけ方法があるとすれば、誰かが武内の肉体を作るための犠牲になることだ」

「どういうこと？」

「犠牲になる人間の体を使って武内の体を再生する」
すると坂本は表情を少し明るくし、僕へ質問した。

「じゃあ、死体を使って――」

「無理だ。細胞が死んでる」

「そんな……」

「だから生きている人間じゃなければならぬし、肉体を差し出した人間は死ぬ」

出来るわけがない結論ほど虚しいものはない。

坂本は目を伏せ、うな垂れた。

くそつ、僕の体を差し出したいけど、術を執り行う人間がいなくなるからな……

「ぼあつー!!」

急に何かがズボンを引つ張り揺すり始めた。

それはへたり込んでいたまま、僕へ飛び込んできた土屋だった。僕はなんとかバランスを保ちながら土屋の頭を掴んで静止した。

「なんだよ、お前は」

「ぼ、僕の……体……使え……」

「馬鹿な、声は奪い取ったはずなのに!」

魔法の力で強制的に押さえていた声を出すなんて!

なんて、精神力なんだ!

絶対だと思っている力を超えてきた存在に僕は思わずうろたえてしまう。

「お、お前が死んで武内が生き残るんだぞ。それでいいのか!?」
何言っているんだ僕は。

このまま何も質問せずにいれば、土屋は死んでくれるじゃないか。しかし土屋は搾り出すようにかすれた声で無理やりに話を続けた。

「ち、違うね……死に場所を……探していた……」

なんだって言うんだ!?

コイツは自分が死にたいから、ここまでしてるのか?

僕はいつの間にか自分の口元が震えていることに気づいた。

「僕は彼女の……肉体と共に……死ぬ」

土屋は僕の服を伝い、徐々に立ち上がった。歯を食いしばり、さっき殴られたためか口から血を流しながら、土屋が迫ってくる。

僕の体は硬直し、土屋の迫力に押されていた。

「そして僕の……肉体は彼女の……魂と共に生きる」

とうとう土屋は立ち上がり、僕の顔から数センチの距離まで近づいた。

顔をしかめながら、土屋は苦笑いにしか見えない笑顔をみせる。

僕が生唾を飲み込み、喉鳴りがやんだ頃、土屋最後の言葉を吐いた。

「……最高に興奮するじゃないか」

「土屋……」

そうか……そうだな。

僕は納得してしまった。

本人なりのルールがあるってことか。

あくまでもお前は『死んで孤独を抜け出す』ってことだな。

「……わかった」

するとホッと表情を浮かべた土屋が倒れてしまう。

魔法に逆らって行動することが、これほどまでに体力を蝕んでいくのだなと妙に感心してしまう。

さらに、土屋という人間の執念と突き通す信念が伝わった。

よし、コイツに負けないよう、僕もやるべきことをやるべきだ。

僕はすぐに体を復活させる魔法の準備に取り掛かった。

近くにいたって誰か判別しにくいほど暗くなった屋上。

そこでは一つの命が消失し、一つの命が復活しようとしていた。

裸になった土屋の体の上で魔法陣を空中で組む。

やがて宙に描き出された文字は輝きを放ちだす。

「これが魔法なの？」

坂本が感動にも似た声を上げて遠巻きに様子を伺っていた。すっかり暗くなった屋上では魔方阵の光りはより綺麗に見えるのだろう。

僕は慎重にその魔法陣を沈め、土屋の体へと埋めていく。

「うがああああっ!!」

土屋は叫び声をあげながら、自らの魂がなくなっていく様を体感していた。

実は痛みなどほとんど無いはずだ。

だが、自分の魂がどこかへ飛ばされるような感覚に戸惑いがるだろう。

「……ん？」

ふと、手元に目が行くと、偶然土屋の手が目に入った。

よく見ると手に何かを握っているのが見える。

それを確かめようと目を凝らした瞬間、鈍い音が響きだす。

「広野君、この音……」

「骨格や筋肉が変化を始めたんだ」

骨折や脱臼するような音が屋上に響き渡る。

坂本はその音に耐え切れずに耳をふさいだ。

あまり気持ちのいい音ではないので僕も耳をふさごうとした。

しかし、形を変えていく体から何かが飛び出す。

こちらへ向かってくるそれを僕は掴んだ。

「これは……紙？」

指でつまんだそれは確かに土屋が書いた手紙の切れ端だった。なぜ、こんなものを土屋が……なんだ？ 赤いものが見える。

これは血文字だ!!

すると紙に書かれた文字が目飛び込んできた。

『僕言つた魔法はすべて取り消す』

「なっ！！！！」

コイツ、最後になんて隠し玉を！

いつの間にこんな血文字を書いて念を込めていたんだ！！

その瞬間僕の脳内で何か衝撃が走った。

土屋の魔法が履行されたってことか……

なるほどね。これが土屋を助けたときの埋め合わせに起こった不幸って訳だ。

……これで不幸の相殺は出来ない。

「広野君、どうしたの！？」

「いや、なんでもない」

少し離れた場所にいる坂本にはバレていないようだ。
何とかなるだろう。

元々、その覚悟で来たんだ。

何を今更って感じだな。

僕はやれやれとため息をつく。

さらに耳をふさぐことをやめ、再び変化していく肉体に目をやった。

こんな音だつて武内が生き返る過程なんだ。

それなりに男らしかった体が、どんどん丸みを帯びて女性の体になつていく。

土屋にしか見えなかった顔も今では武内の姿そのものだ。

この瞳をもう一度見たかった。

この唇をもう一度見たかった。

いや、武内自身にもう一度会いたかった。

武内の体が完全にその姿を取り戻したことが、堪らなくうれしかった。

確かにあの時、彼女を飛び降り自殺から助けなければ、こんな目には遭わなかった。

——でも。

助けなければ、こんな気持ちにはならなかった。
元の姿を取り戻していく武内に僕は呟いた。

「……好きだ」

第48話 「会いに行くからね」

とても深い場所にいた気がする。もう這い上がれないぐらいの深淵。

真っ暗で私は独り。そこで膝を抱えじっとしていたのだと思う。

——ああ、もうこのままで良いかもしれない。

そう思った瞬間、何かが私の腕を掴んだ。

ものすごく力強く引つ張られる感覚と共に私はどこかへ浮上していく。

どこへ向かっているのかはよくわからないけど、上っていくことに体が温まっていくようだ。

なんだ心地良くて、優しいイメージが私を包む。どうなっちゃうんだろ。

すると上方の暗闇が切り裂かれるように開かれていく。

急に明るい光りが差し込んできた。かなり眩しい。

私はまぶたを強く閉じた。でも光りはどんどん明るさを増した。

眩しさを防ごうと手で顔を覆おうと考えた瞬間、明るさは無くなっていく。

不思議に思った私はゆっくりと目をあけた。

「うーん……」

なんだか急に寝起きのような気持ちになった。まだ寝ていたいような感覚。

でも、すぐにそんな気持ちも吹き飛んだ。目の前には見たことのない天井があったから。ここ、私の家じゃない。……っていうかベツドにいるし。私は寝てたの？

辺りをうかがうと、ピンク系統で覆われた室内、明らかに私より整理整頓されている本棚。いや、私は本あまり読まないからそもそも置いてないし。

なにこの女の子した部屋は？

「亜也……気がついた？」

「え？」

聞き覚えのある声が聞こえたので、そっちへ顔を向けた。
すると長い髪に整った顔。これはまさしく……

「坂本さん？」

「良かった。二日間も眠ってるものだから、いつまでも目が覚めないのかと思った」

そこには坂本さんが膝を抱えて座っていた。丁度、私が寝ているベッドと目線が同じぐらいになって、彼女の顔がはっきりとわかる。坂本さんはなんだか浮かない表情をしている。

「もしかしてここは坂本さんの部屋？」

「……うん」

歯切れの悪い返事。何かあったのだろうか。
というより私が高んどこににいるんだろう？

すると坂本さんは私の疑問に答えるような言葉を続けた。

「生き返ったアナタを私が運んできたの……」

「生き返った！？ 誰が？」

「『亜也』がに決まってるでしょ」

「私！？」

坂本さんが何のことを言っているのか意味がよくわからなかった。

私がいつまでも要領を得ないと、彼女はため息をついた。

「本当に思い出せないの？」

「……うん。ごめん」

「謝らなくて結構。説明してあげる」

なんだか急に坂本さんの口調が強くなる。どうも私の態度がイライラさせるらしい。

「アナタは六日前、土屋祐介と屋上で会う約束をして――」

「あつ……」

そうだ。私は土屋くんに別れを告げるために呼び出したんだ。多少、ためらいはあったけど何とかお別れを言い終えて帰ろうとした

……

そして――

「アナタは殺されたのよ」

「――っ!!」

瞬間的にあの時の場面がフラッシュバックする。

彼に胸にナイフを刺されて私は――!

「はああつ……!!」

すると急になんだか息苦しくなつて私は急いで半身を起こした。さらに胸へ手を当てて何度も傷口を確かめる。

…… あれ? 傷がない。

「あれ? 私生きてる」

「だから言つたでしょ! アナタは生かされたの!!」

坂本さんは大声で叫ぶと、私へ近づき腕を掴んだ。

やっぱり私に対して何か怒ってるのだろうか?

にしてもなぜ私は生きているんだろう。

でも、それより気になったことがある。

「坂本さん、目が赤いね」

「……」

彼女が明らかに泣いていた後がうかがえた。

自分の事も知りたいけど、坂本さんが悲しんでいる理由も知りたかつたのだ。

「何かあつたの?」

「『何かあつた』って?」

私の言葉に坂本さんは眉間にシワを寄せ、信じられないといった態度を見せた。

さらに続けて彼女は私の腕を強く握って声を上げる。

「そんな言葉じゃ片付けられない！」

「……どうということ？」

「何も知らないって幸せね」

私がかここにいるのも、坂本さんが泣いていたのも、どうも私が知らない間に起こったことが原因みたい。

だったら聞かなきゃいけない。

……でもかなり不安だった。だって少なくとも今の状況は坂本さんには喜ばれてないから。

だけど、覚悟を決めなきゃ。

「ごめんなさい。本当にわからないの」

「……だから？」

だけど、覚悟を決めなきゃ。

私は腕を掴む坂本さんの手を掴み返した。

すると彼女は目を大きく開けて私を見つめる。

「全部教えて。私がいけない間に起こったことすべて」

「……わかった。ショックな話もあるけどちゃんと聞いて」

「うん」

そして坂本さんは私が土屋君に刺された後の話を教えてくれた。

広野君と坂本さんが街中を捜し歩いてくれたこと。

突き止めた土屋君の部屋で見た門脇君の死体と私の動画。

私の敵討ちを提案したけど広野君は最初否定的だった。でも、最後には駆けつけてくれたこと。

坂本さんが土屋君を殺してしまったけど、広野君が助けてくれた。さらに土屋君の使う不思議な力に打ち勝ったこと。

最後に……広野君が魔法で私を生き返らせてくれたこと。

全て話し終わると坂本さんは私の腕から手を離してくれた。

「とりあえず、以上が起こった事すべて」

「わかったよ……教えてくれてありがとう」

正直、今でも自分が死んだなんて納得いかない部分もある。
でも、坂本さんの真剣な態度と傷一つ無い今の自分の体を考える
と、理解できた。

そしてなにより広野君が魔法使いだって知ってるから、信じられ
る。

「……そっか。やっぱり広野君が助けてくれたのか」

嬉しいような、恥ずかしいような、くすぐったい感覚。

なんだか照れ隠しがしたくて、ついつい悪態をついてしまう。

「まったく、広野君はお節焼きだなあ」

「え！？　今なんて言ったの？」

「だって、私なんて死んでいればよかったに、余計なこととしてくー

ー」

「ふざけないで！」

「えっ!？」

坂本さんの声と同時に私の頬に衝撃が襲う。

高い音を立てて彼女が頬を平手打ちをしたからだった。

少しして痛みをじわじわ感じ、私は頬を手で何度もさする。

「冗談でもその言葉は止めて。虫唾が走る」

「坂本さん……」

すごく真剣な眼差しが私に突き刺さる。

彼女が広野君を好きなことをすっかり忘れてた。

だけど、なんだか誰かが好きとか嫌いだとか考えると日常に戻っ
た気がする。

全ては元に戻ったんだ。

「そうだね。折角生き返らせてくれたんだもん」

「……そうじゃなくて」

「わかってるって。お礼ぐらい言わなきゃ。広野君はどこ？　自宅

かな？」

「それは……」

でも、どれだけ待っても坂本さんはそれ以上何も言わなかった。彼女が目を伏せ震える口元を見て、私は少し不安になる。

「坂本さん、どうしたの？」

「実は……どこへ行ったかわからない」

「なんで？」

「知らない！ こっちが聞きたいぐらいよ！」

「っ！？」

私はその瞬間ショックで次の言葉がなかなか出てこなかった。

お互い黙ったままの微妙な時間が流れていく。

ふと坂本さんを見ると、彼女はいつの間にか私を真っ直ぐ見つめていた。

なぜそんなに私を見るの？

まるで広野君がいなくなった原因が私にあるみたいじゃない。

確かに私のせいで皆が危険な目にあったけど、結局は広野君の魔法で……

「——あっ」

私は瞬間的に昔、広野君が言ったことを思い出した。

『実は魔法を使えばオレが不幸になる仕組みとなっているんだぞ』

「まさか私に使った魔法で……」

私の言葉に反応するように坂本さんは黙ってうなづいた。

「アナタの体を再生する魔法までは大丈夫だったのに……魂を呼び戻す魔法になった途端……」

「どうしたの？」

「髪の毛は白髪になったと思ったら急に倒れて、そのまま消えてしまったの……きっと広野君の死んだお父さんと同じ目にあっただんだと思う」

すると坂本さんはベッドにしがみつくようにして、顔をマットに

うずめた。

時折肩が震える姿を見ると、声を立てないように泣いているんだろ。

「死んだお父さんと同じ目？」

「広野君のお父さんは昔、親友を救うために自分の命と引き換えに魔法を使っただけ……」

「そんな……」

確か坂本さんが昔魔法で助けてもらったって話に出てきた人だよ。ね。

私は死んだ原因については聞いたことが無かった。事実を知ってもわからない事だらけだ。

……でも、これだけはわかる。

私は納得いかない！

「ごめん。広野君が死んだなんて私は信じられない」

「アナタはあの姿を見てないから……」

そう思うと居ても立ってもいらなくなった。

私はベッドから足を下ろすとふらつきながらも何とか立ち上がる。しばらく立っていなかったからバランスが難しい。

私の行動をみて啞然とする坂本さんの視線を感じた。

「私、確かめてくるね」

「何を？」

「事実を。休ませてくれてありがとう」

よたよたと歩きながら私は部屋のノブに手を掛けた。

そんな私に坂本さんは不思議そうに質問する。

「どこへ行くの？」

私は迷わず答えた。

「広野君の家」

「……そう」

彼女はそれ以上何も言わず、再びベッドへ顔をうずめた。

私はそのまま振り返らずに坂本さんの家を出て行った。

そとはまだ明るく、お昼過ぎだった。

日差しが眩しい。

私、やっぱり生きてるんだね。

——とはいえ。

勢いで出てきたものの、広野君の家に行くのはこれが初めてだ。
場所は話で聞いていたので、大体わかる。

ちよつと緊張もするけど、それ以上に私は腹が立っていた。

自然に歩きながら口から漏れてしまう。

「私に黙って死んじゃうなんて、ありえない！」

「礼も言わせないなんて、カッコつけすぎ！」

「私にだって言い分があるんだから！！！」

文句を言っているうちに気持ちが高ぶってくる。

さらに歩くのも不便だったのに、いつの間にか私は走っていた。

「あの、キザ男っ！」

「優柔不断男っ！」

「鈍感男っ！」

最後は何を言っているのか意味がわからない。

でも、広野君の文句だと思つと気持ちが弾んだ。

そして、何とか話に聞いていた付近までたどり着く。

周りは住宅街で家も多く、すぐには見つかりそうに無かった。

でも、弱音は吐いていられない。さっそく広野という表札を探し始める。

だけどさすがに聞いただけでは場所は全然特定できない。

そして三十分ぐらいが経過していた。

体を動かしていなかったせいか、すでに体力を消耗して汗だくになつていた。

ちよつとどこかで休もう……くやしいけど。

そう思った矢先、私の背後から声が聞こえた。

「もしかして武内さん……かな？」

「え！？ はい、私ですが」

声の方向へ振り向くとそこには男性が立っていた。

背は私よりもはるかに高く、体格もガツシリしている。

「あの、どなたですか？」

すると男性は良く通る声で私に応えた。

「貴明の父親です」

「え！？ は、はじめまして……」

確かお父さんは死んだはずじゃあないの？ と言う疑問のまま、曖昧な挨拶をしてしまった。

すると男性は家まで連れて行ってくれと言った。

ものすごく怪しい。私は思い切って聞くことにした。

「あの、本当に広野君のお父さんですか？」

「え！？ うーん、難しい問題だけど……一応、二人目の父親かな」

それでも私が疑いの眼差しを向けていると、男性はあからさまに慌てた。

ますます怪しい。

「もしかして怪しんでるかな？ えーっと、少し前に坂本亜由美さんという女の子から君の話を聞いたんだけど……」

「は？」

直後、私は何度も頭を下げて謝った。

そして坂本さんに感謝した。

その後、家に案内してもらうと、広野君のお母さんらしき人が待っていた。

充血した瞳にこけた頬を見ると、かなり憔悴しているように思えた。

家に入り、居間に通されると、私と広野君の両親と机を挟んで向

かい合いに座る。

私は彼女に上から下へと値踏みされるように見られた。

かなり居心地の悪さを感じながら、広野君の居場所を聞いた。

「あの子の居場所を探しているの？」

「はい」

「そんなのこつちが聞きたいくらい」

「はあ……」

すごく言葉の端々に冷たさを感じる。

この人、私にいい印象を持ってないよね。

「仮に知っていたとしても、正直言えばアナタを会わせたくない」

「それは……」

あまりにもハッキリとした拒絶だった。

お母さんの顔は最初から表情の無表情で冷たくこちらを見ていた。

私は明らかに動揺した。

「大事な子をアナタに盗られたのだから当たり前でしょ」

「……ごめんなさい」

「これは、謝って済む問題じゃないの」

「すみません……」

私はお母さんの大切な息子を取った女に見えているんだろうな。

いたたまれない気持ちにさいなまれる。

「でも……」

ここで初めてお母さんの表情に変化した。

私から視線を外し、何かを我慢しているような顔をする。

少し下をみると、いつの間にかお父さんがお母さんの手を握っていた。

「今はそんなことを言っている場合じゃない。時間が無いの」

「どういう意味ですか？」

さらにお母さんは表情を曇らせ、目じりからは涙があふれ出しているように見えた。

「貴明の父親が死んだ時は魔法を使ってから三日後なの……」

「と、言うことは」

「おそらく期限は三日……つまり今日まで」

そこでようやく私は二日も目が覚めなかったことを思い出し、後悔した。

「それじゃあ広野君はまだ生きてるんですか!？」

「ええ。でもどこへ行ったのか誰も分からない」

すると堪えきれなくなったのか、お母さんはお父さんの胸に顔をうずめて震えていた。それに対してお父さんは包み込むようにお母さんの肩へ腕を回す。

声が震え、聞き取りにくい声でお母さんは私に言った。

「行つて。多分、アナタしか貴明は受け入れないと思うから……」

「……はい。ごめんなさい」

私にはこれ以上の言葉はなかった。

今日までなら生きている確率がある、それだけ聞ければ満足だった。

立ち上がり、お辞儀をすると私は部屋を出ようとした。

「待つて、武内さん」

最後にお父さんが私を呼び止めた。

「もし、貴明に会うことが出来たら……」

しかし、それっきり黙りこんでしまう。

私は言葉が出るまで待つことにした。

すると、お父さんはニツコリ笑う。

「……ごめん。やっぱりいいや」

「わかりました。お父さんがよろしく言っていたことを伝えます」

「ありがとう」

そう言つと広野君のお父さんとお母さんは二人で慰めあうように寄り添ったまま、私を見ようとしなかった。

私もそれっきり黙って広野家を出た。

これから私は広野君を探さなければならない。
坂本さんの話だと夕方に起こった話だから、多分日没が期限だろう。

私は心当たりを探すことにした。

まず、私は学校の屋上を探すことにした。
私と広野君の関係が始まったのも、消息を立ったのもあの場所だった。

学校まで駆け足で急ぐ。さっきの疲れはどこかへ吹き飛んでいた。

なぜだか私は使命感のようなものを背負った気がする。

広野君の最後を見届ける。

そんな大役を任された気になっていた。

でも、本当にそれでいいの？

誰かが私に語りかける。もちろんもう一人の私だ。

任務だとか言って何か大切なことを忘れてるんじゃないの？

……知ってる。知ってるよ。

何を知ってるの？

屋上のドアを慎重に開けると、そこには青空が広がっていた。

ここで数日の間に血生臭い事件が起きたとは思えない。

しかも被害者は私なのだ。

一歩足を踏み入れると、足から伝わる床の感覚があの日を思い出させて吐き気がした。それでも我慢しながら屋上へ入り、色々な場所をくまなく探す。

「うそでしょ？ 誰もいない……」

でも、どれだけ探しても誰もいない。

自分の勘が外れたことを残念に思いながら、この場所を選ばない

広野君に腹が立った。

時間も限られていることもあり私は屋上を後にする。

それから思いつく限りの場所を回ることにした。

初めて二人の復讐に使ったゲームセンター。

ここで門脇たちにタライをぶつけたんだっけ。

次に私の自宅。

真夜中にもかかわらず、リスカした私を助けに来てくれた。

さらに病院。病室や屋上をくまなく回る。

ホウキで空中散歩なんかをした。すぐ夕焼けが綺麗だった。ここで私はまた生きてみようかなと決めたんだ。

そして、念のため遊園地も回った。

皆で写真をとった場所。坂本さんと友達になれた場所。

しかし、どこにも広野君の姿はなかった。

私は完全にあてを見失ってしまう。

もうどこにもいないの？

よくわからない路地脇に腰を下ろしてしまった。

一度座ってしまつと、全身に疲れがしみこんでくる。

色々な場所に重みを感じ、体を動かすのが億劫になった。

さらに精神的な疲労感も高まっていた。

私は広野君の最後に会わなければいけない義務があるのに……

思い出の場所にいるなんて考え方が甘いのかな？

広野君は死にそうになっているのに、私との思い出の場所になんて来ないか。

自分の事で必死だろうし。

……でも。

でも、私のことを……と思つてはすぐに否定する。
そんな訳が無い。

広野君が私のことを……だなんて。
だけど、ちよつとは私のことを考えてくれてるなら……
つていつか考えてよ！

私は広野君の事を考えてるんだから！

……言つてしまった。

心の中でさえも否定し続けたのに。
坂本さんがいて、土屋君のこともあつた。
だから無意識に遠ざけていた感情。

『好き』

いつからそう思うようになったのかな？
よくわからない。

クラスの皆に復讐をしているときかな？
病院で手を繋いでくれたときかな？
空中散歩で私を励ましてくれた時？
病室で怪しい雰囲気になったから？
なにより、自分の命をかけて私を救つてくれたから？
きつと、もう全部が好きな理由なんだよ。

広野君が「私を魔法で助けてくれる」なんて言つてくれたから。
嬉しかった。本当に嬉しかった。

『自分を大切にしてくれる人がいる』
それだけで心が満たされた。

だって、私の手を繋いでくれるんだもん。

ん？ ……繋いでる。

—— あっ。わかった。

私の頭の中で閃きという信号が駆け巡るの。
ようやく私は理解できてしまった。

広野君がいる場所を見つけてしまった。

それだけで体が軽くなるから不思議だね。

私は飛び起きるように立ち上がる。

次に空を見上げた。

もう夕焼けだ。

やばい、時間が迫っている。

とか考えている間にもう私は目的地に向かって走り出していた。
きつとあの場所にいるはず。

待ってなさい、すぐ会いに行くから。

第49話 「もう一度 suicide magic」

長い影が伴走するようについてくる。

私は目的地へ向かって走っていた。息も軽やかだ。

それにしても何だろう、この高揚する気持ちは。

きっともう会えなくなるって気持ちよりも、今会えるって気持ちが先行しているからだと思う。

前に進もうと、歩幅がどんどん大きくなっていく。

やがて私の見慣れた風景があらわれ始めた。

四階建ての校舎、広いグラウンド、見えてきた校門……そう、学校だ。

きつとここなら広野君がいるはず、今頃気づくなんて私も結構鈍感だ。

もうすぐ会える、会える、会える。

私の気持ちがどんどん高ぶる。大袈裟だけど心臓の鼓動だけで体全体が揺れるようだ。

すると門柱が近づくにつれて、校門そばに立っている人影が私の視界に入ってくる。

まさか、広野君……のはずはないか。

「あれは……」

だんだんと人影が誰か分かると、私の歩幅はやがて小さくなった。さらにはとうとう走るのを止め歩いてしまった。

少しずつ息を整えながら近づいていく。気持ちの整理がつかない。ある程度の距離を保ち私は立ち止まる。

そして人影は一步、私へと前に進んだ。

「結構、時間かかったんじゃない？」

「……坂本さん」

私は思わず口をつぐんでしまった。

すると坂本さんは、その表情を見逃さなかった。

やや勝ち誇ったような薄笑いを浮かべながら私に話しかける。

「あれ？ 私がわからないとでも思った？ あの場所は私にとっても思い出の場所だからね」

「だよね……」

俯き加減に坂本さんを覗くと私をじっと見つめていた。

別に彼女のことを忘れていたわけではないけど、少し後にして欲しかった。

恨み辛みはいくらでも聞く覚悟はあるから。

やがて私への眼差しが鋭くなると、彼女から口火を切った。

「私はアナタより先にこの場所が分かった」

「そう……」

彼女はまた一步私に近づく。

でも、ここで引くわけにはいかない。

私もあわせるように一歩前に出た。

「私はあなたより先に広野君と出会ってた」

「うん、知ってるよ」

私の言葉に坂本さんは歯を食いしばるような仕草を見せた。

今は何を言ってもきくと通じないと思う。

それにしても、あんな言い方しかできない自分に腹が立った。

「亜也、私は……私は……」

すると彼女は下を向いたきり、動かなくなった。

夕方ということもあり、俯いた表情は読み取れない。

でも、私にはわかってしまった。引き裂かれるような辛い思いが坂本さんのそんな姿を見ていられなくなり、私は彼女へと手を伸ばしてしまっ

「あのね、坂本さ——」

「触らないで!!」

乾いた音がして、伸ばした手が乱暴に振り払われる。
私の手に痛みがはしる。

同時に私に向けられた彼女の瞳からは雫がこぼれた。

「私はあなたよりずっと先に広野君が好きだった!」

「――っ」

その言葉に対して言い返すことが出来なかった。

私はずるいから。最後まで何も言おうとしなかったから。

坂本さんは勢いのまま私の肩を掴み何度も揺する。

「亜也と私、何が違うの!？」

私は揺すられながらも、坂本さんの潤む瞳から目をそらすことは出来なかった。

なんだか土屋君に振られた自分に似ている気がしたから。

「どうして広野君はアナタを選んだの？ わからない。わからないよ……」

声を震わせながら坂本さんはその場へ膝から崩れるようにしゃがみ込んだ。

いつもはあれだけ強気だった彼女が目を何度も擦り、子供のよう
に泣いている。

そして私は何もできずに見つめるだけだった。

「ねえ、彼に振り向いて欲しくて色々努力したんだよ?」

だんだん、いたたまれない気持ちが増れてくる。

ここで謝ってはいけないとわかっている。

でも……

「……ごめんなさい」

「えっ!？」

次の瞬間、まずい事を言ったと思い、私は思わず口に手をあてて
しまう。

すると彼女は急に立ち上がり、再び私を睨みつける。

「なんで今謝ったの？」

「あ……」

「まるで私が広野君に振られたみたいじゃない！」

ここで謝ったら坂本さんを余計に傷つける結果になることは分かっている。

しかし、今の私にはそれしか言えなくなっていた。

そして坂本さんは力なく笑う。

「あはは、そうか私振られたんだった……」

「ごめんなさい……」

「やめて。そんなことされたら、私が惨めになるでしょ……」

「……ごめん」

「また言った！ 謝って欲しくないって言ったでしょ！」

そして坂本さんは私の胸倉を掴んでねじり上げた。

されるがままに私は突き上げられる。

涙で一杯の彼女の表情を目の当たりにして、私の抵抗する気持ちは失せていった。

彼女はさらに腕を振り上げて、その平手を私の頬へと狙いを定める。

私は次に備えるべく、歯を食いしばり目を瞑った。

……しょうがないよね、これはせめてもの罪滅ぼしだから。

「っ……」

だけど、いつまで経っても何も起きなかった。

ゆっくりとまぶたを開けて様子を伺う。

すると坂本さんは掴んだ襟元を離した。

不思議に思う私に彼女は相変らず厳しい視線を向けている。

「アナタを引つ叩きたいところだけど……しない」

「坂本さん？」

そして彼女は私の頬にそっと撫でるように手を添えた。

暖かい手の温もりが私の頬を包む。

強張った表情で彼女は懸命に微笑んだ。

「だって、頬を腫らせたアナタに会ったら、広野君がビクリするでしょ？」

「ああ……」

その瞬間、私はなぜだか涙が溢れてくるのを止められなかった。頬を伝った涙が彼女の手に伝い落ちた。

猛烈な後悔の念にさいなまれた。

「坂本さん、あのね、あのね、私、私……」

とにかく謝りたい。ずっと黙って本心を隠していた自分を許して欲しかった。

すると坂本さんは「もういいよ」とだけ言って、私の涙を指でぬぐってくれた。

さっきまでとは違う、優しく語りかけるような声で私に話しかける。

「実はね私はアナタより先に来てたけど、これ以上進めなかった……怖かったの。情けないよね。あれだけ好きだって言っておいて、このざま……」

私は上手く声に出せなかったので、何度も首を振った。

そして私を包む、坂本さんの手に力がこもる。

「でもね、アナタが楽しそうに走ってくるのを見て思ったの。『やつぱり私じゃ駄目だ』ってね」

いつのまにか頬にあった手は再び私の肩を掴んでいた。

さらに勢い良く反転させられ、私は坂本さんに背を向ける格好になった。

「もう私は必要ないね。残念だけど、広野君はあなたを選んだのだから」

「そんな……」

「……じゃあ、頑張つてね。私にはもうこんな事しか言えない」

彼女は言いながら私の背中を軽く押してくれた。

そして私はグラウンドへ足を踏み入れた。

「広野君は任せた。最後ぐらい、うんと幸せになりなさいよ」

坂本さんへ振り向くと、彼女は泣きながら懸命に笑おうとしていた。

私だけが幸せになる、こんなことでは許されるわけが無い。

でも、彼女は送り出してくれたんだ。

私は一つ頷くと校舎へ向かって歩き出した。

「ねえ……」

数歩進んだ私に彼女が話しかける。

「そのまま聞いて」というので私は立ち止まって聞くことにした。

「もし、私が死んだとしても広野君は助けてくれたかなあ……」

彼女の言葉に私は振り向くことも答えることもできなかった。

「変なこと聞いてごめん、それじゃあね」

そして坂本さんの足音が段々遠ざかっていく。

私はまた校舎へと歩き始めた。

頭を切り替えなければならぬ。

せつかく彼女が送り出してくれたのだから。

広野君と会うのだから。

後はあの場所目指して行くだけだ。

にしても、本当に広野君はいるのだろうか。

どうやら坂本さんも同じ場所を見つけたみたいだし、きっと大丈夫だろう。

でも、それは命がけの勝負になると思う。

校舎へ忍び込み、廊下を抜け、階段を上る。

そして徐々に訪れる不安。

広野君は来てくれないかもしれない。

もし来なかったら……じゃない、来てくれる。

きつと来てくれる。

絶対来てくれる。

絶対、絶対来てくれる！！

私は校舎の階段を登りきると、『屋上につき関係者以外立ち入り禁止』という看板のついた扉の前に立つ。

さらにドアノブを握り、ゆっくりドアを開いた。

ドアを開けると一気に風が吹き込んでくる。

髪が暴れるのを押さえつけながら、一歩踏み出す。

……ついに到着してしまった。

ここは屋上。

確かに屋上は最初に訪れた地だった。

でも、まだ探していない場所があったのだ。

ゆっくりと歩き、屋上を真つ直ぐに横断する。

とうとう屋上の端とたどり着き、柵に手をかけた。

私の向かう先、それは……

——屋上の外。空中——！！

なんとかよじ登り、柵を越えると、わずかな校舎の出っ張りに足を乗せる。

柵に手を掛けて張り付くような姿勢をとった。

夕方のせいなのか下が暗くてよく見えない。

そこは底なしの暗闇にしか見えなかった。

吹き上げる風が、私に吹き付ける。

初めて飛び降りたときは何も感じなかったけど……なんだか、怖い。

これが最後だから許してね。

もう命を絶対に無駄にしません。

自分も傷つけません。

今後は自分を大切にします。

だからお願い、もう一度あの魔法を！！

……そして私は柵から手を離れた。

一瞬どこにも抛り所をもたない不安定な感覚に陥る。

やがて体は傾き、強烈な重力には逆らえず落下を始めた。

まるで今まで私が生きてきた軌跡のよう。

体全体に風圧を感じながらどんどん落下していく。

やけに長い時間だと感じる。

地面がだんだん大きくなって、ハッキリしてくる。

……これつてもしかして落ちるんじゃない？

嘘？

嘘でしょ？

こんなの嫌だよっ！！

そして恨みを込めて私は彼の名を叫んだ。

「広野君！！」

「——わかってるよ！ 今待ってる！」

「え！？」

どこかで声が聞こえたと同時に私の落下は止まった。

そして気づいたら仰向けになり、肩と膝の裏に腕が回って抱きか
かえられていた。

もしかしてこれ、お姫様抱っこ！？

「馬鹿かつ！ お前は命をなんだと思ってるんだ！！」

聞き覚えのある低く良く通る男の子の声。

背中に翼を生やした姿なんて、知り合ったときと同じ。

別にイケ面って訳じゃないのに、なぜだか微笑んでしまう顔。

私の知っている彼だ。

でも、髪の毛はお話通り白くなってるね。

「あはは、変な髪の毛」

「笑ってんじゃねえよ」

彼は眉間にシワを寄せているけど、怒っているんじゃなくて困っているようだった。

ゆっくり浮上する私と彼はかなり顔が接近していて、少し照れくさい。

何て言ったらいいんだろう？

そして私は緊張で上ずりそうになる声を抑えつつ、彼の名を気持ちを含めて呼ぶことにした。

「広野君……」

「なんだよ」

困ったような顔から、今度は少し微笑みながら私に応えてくれた。なんだかずっと見つめていたい。そんな気持ちにさせるような笑顔だった。

彼に再会するまで長かったような短かった様な、よくわからない気持ち。

でも、私はあえて言うことにした。

「……やっと会えたね」

「お、おう……」

すると広野君は顔を赤くしながら答える。

それだけで私は胸の奥からゆっくり暖かくなっていった。

第50話 「ターミナルケア」

なぜ僕はまた助けてしまったのだろう。

こんなことをまた自問自答する日が来るなんて……

武内を引き上げながら、今までのことを思い出していた。

時間は武内を生き返らせた直後へ戻る。

父さんの例を考えると二、三日は猶予がありそうだと感じる。

『どうせならすぐ終わればいいのに』と思いながら。

すでに僕の死への準備は始まっていた。

今更家にも戻れないし、戻ったところで別れが辛くなるだけだ。

「うーん……」

生き返った武内を目の前にどうしようか思案していると近くにいた坂本と目があつた。なぜか坂本は眉間にシワを寄せて僕を睨んでいる。

「坂本、どうした？」

もう、僕が魔法を使つて死ぬことがバレたのか？

術の途中で土屋の魔法が解けたなんて言つてないし。

内心焦りながらも、なんとか顔を作っていると、坂本が近づいてきた。

僕は焦つてちよつとだけ身構える。

「広野君、むこう向いててくれる？」

「えっ、なぜ？」

するとさらに坂本が険しい顔になったと思つたら、大声で叫んだ。

「亜也が裸だからに決まつてるでしょ！」

「ええっ!？」

さっきまで術に真剣だったから気づかなかった。

武内は呼吸はしているものの意識は無い。

外見上、寝ているのと変わらない。

それにしても惜しいことをしたな。

ちよつと横目で見てみようか……

眼球だけを横にずらした瞬間、坂本の視線とぶつかる。

「広野君！」

「ご、ごめんなさい！」

とりあえず土屋の服を着せた後、この場所から移動することにした。

「それじゃあ、私の家に運んで」

「武内の家じゃないのか？」

「うん。私の家なら色々と用意が出来るし、いざとなったら大人の
手も借りられるしね」

坂本が自分の家を指示したので、成り行き上、僕が武内を背負って運ぶことになった。

武内を背負うと確かに生きている人間の温もりと重さを感じた。
かすかに寝息が耳にかかる。わずかに顔がほころんが、すぐに坂本の咳払いが聞こえたので真剣な表情に戻した。

家に運んだ後、武内をベッドへ寝かせると、坂本は色々と行動した。

さつそく、武内の家から着替えを持ってきて彼女に服を着せる。

坂本から許可をもらい、部屋に入ると武内が静かな寝息を立てて眠っていた。

それにしても本当に生きているのだろうか。

確かに呼吸はしてるし、寝返りをうつところを見ると、しばらくしたら起きるのだろう。

……でも、起きたら何て言えばいいのだろう。

この二人とももうすぐ別れなければならぬのだが……

ともあれ、武内の看病と言うことで、その日の宿は坂本の家に決

まった。

夜はさすがに疲れてすぐに眠ってしまった。

次の日、僕は坂本に起こされて目が覚めた。
眠い目を擦りながら、坂本を見るとなぜか慌てている。

「どうした？　アイツが目を覚ましたのか？」

「……違う」

すると坂本はそつと僕に手鏡を差し出した。
不思議に思いながらも鏡を覗く。

その瞬間僕の背筋に冷たいものがはしる。

「髪の毛が……白？」

なんと一日経過すると僕の髪の毛はどんどん白くなっていった。
徐々に迫る死の恐怖を感じる。

本当に僕はこの世から消えてしまうのか……

自然に鏡を持つ僕の手が震えだした。

さすがに坂本も気づいてしまうかもしれない。

「広野君その髪……」

「あつ、あれ？　なんだろなこれ」

そう言いながらも僕の声は震えていた。

気づけば唇もなかなか言うことをきかない。

「……誤魔化さないで」

坂本の瞳はすでに涙で溢れていた。

これ以上はここにいられない。

僕はとっさに立ち上がった。

「じゃあ、家に帰るよ」

しかし、すぐに腕をつかまれる。

振りほどこうとするが、さらに力強く握り締められた。

僕は坂本から目を逸らし、冷静になるように努める。

「離してくれよ」

「……駄目…… もう会えない気がするから」

さすがに女の子の勘は鋭い。

坂本は腕を引っ張り、無理やりに視線を合わせてくる。

それだけでもう僕はこの部屋を出て行くことができなかった。

それ以上は何も無く、二日目も過ぎていく。

夜になるが、僕は一向に寝付くことが出来なかった。

部屋の中には僕と坂本と武内がいる。

すでに部屋を暗くして各々が床についていた。

今日も武内は起きることなく、ぐっすりと眠ったままだ。

このまま眠り続けるのかもしれない。

そしたら僕は生き続けることができるのだろうか？

室内の暗闇が余計に僕を不安にさせた。

やっぱり死ぬのは怖い。

…… 嫌だ。 嫌だ！ 嫌だ！！

心の声が大きくなり、僕は目に涙をため、叫びそうになった。

『まだ生きていたい！』

僕の心が爆発する寸前、自分に何かが覆いかぶさるのを感じた。

「なっ！？」

「……しっ」

さらに誰かが僕の口をふさいだ。

僕は目を開け、慌ててもがくように手を払う。

やがて、荒い呼吸が聞こえ、目が慣れてくると正体がわかった。

「坂本？」

僕が問いかけた瞬間、頬へ何かが落ちてきた。

それは紛れも無く涙だった。

僕の目の前には坂本が涙目で覆いかぶさっている！？

「広野君、絶対に変だよ。髪の毛の色が変わるし、思い悩んでいる

ようにみえる」

「……そんなこと無いって」

「お願い、本当のことを教えて。一人で苦しまないでよ」

今にも唇が届きそうな位置まで坂本の顔が迫っていた。

近づきすぎているために視線を逸らそうにも出来ずにいる。

それどころか彼女の瞳に吸い込まれそうだった。

……非常にまずい状況だ。

僕は何とか誤魔化そうとした。

「顔が近い。それ以上近づいたらキスしちまうぞ」

「え!？」

すると坂本は我に返ったのか、一瞬顔を引つ込めた。

なんとか、この状態を乗り切ったと安心した直後、坂本がポツリと呟く。

「いいよ」

「……え!？」

「私なら覚悟はできてる。だって好きな人を自分の部屋に泊まらせているんだよ」

男の僕が坂本の家に泊まることができるのは、彼女が僕を家族に友達だと説明しているからだ。

そのため、トイレに行くにも家族の目に触れないようにしなければならぬ始末だった。

だけど、そのお陰で家に帰らなくても済んでいるわけだし、武内の近くにもいることが出来た。

「軽はずみな言動は後悔の元だぞ」

「だったら本当のことを教えて」

坂本の表情はやっぱり真剣で、雰囲気流されて言っているのではないと理解できる。

誰にも言わないつもりだったけど、彼女には言っておこうという気持ちになった。

とうより、一人で抱えきれなくなつたからという理由もある。
できるだけ簡素に魔法のこと、自分の命が短いことを伝えた。
聞いた直後は坂本は驚きの顔を隠せないようだった。

「もう変えられないんだよね」

「無理だな」

「……亜也にはどう言うの？」

「適当に伝えておいてくれるかな」

「私が？……まさか、いなくなるつもり？」

「わからないよ」

「そう……」

すると坂本は自分の布団へと戻っていた。

実際、もっと泣かれるかなと思つたので少し拍子抜けだった。
しばらく無言の状況が続く。

そして、少ししてから静けさの中で彼女の声が響いた。

「ねえ、広野君。私は泣かないから」

彼女は何か決意したような強い口調で話し始めた。

僕は黙って聞くことにした。

「私は意気地が無いから……せめて笑ってお別れしたいの」
すると布団に何かが入ってくるのを感じた。

さらに僕の手になにかが触れる。

少し冷たいけど、しっかりと僕の指に絡みつくもの。

それは彼女の手だった。

「だから最後をお願い。私が寝付くまで手を繋いで」

彼女には本当に悪いことをしたと思っている。

告白をしてくれたのにもかかわらず、振った拳句、土屋の事件に
巻き込んだ。

一時は自分を傷つけるという事態まで起こしてしまう。
それなのにこの僕を信じてくれていて、決して大きなことはねだ
らない。

「……わかったよ」

僕はすでに触れられている彼女の手を強く握り締めた。
せめてもの罪ほろぼしのつもりで……

結局眠れないままにカーテンから光が漏れてくる時間になっていた。

隣をうかがうと、坂本はすでに寝息を立てて眠っている。

握る手もわずかに緩んでいた。

……出て行くなら今だな。

僕は決心するとそっと手を離す。

静かに立ち上がり、部屋のドアに手を掛けた。

「……さようなら」

僕の背後でそう聞こえたようなきがしたけど、振り向かずに部屋を出ることにした。

外に出た僕は足取りの重さを感じた。

なんだか息苦しくもある。

——もしかしてこのまま死ぬんじゃないだろうな。

「かはっ！ はあっ、はあっ、はあっ……」

無理やりに呼吸を何度も繰り返す。

しかし、口の中に空気が入るだけで肺まで届いている感覚はなく、浅い呼吸が続く。

過呼吸な状態に陥り意識が朦朧となった。

まだ動けるんだ。進め、進むんだ。

ふらつく体を壁伝いに進むことで支え、歩き始めた。
まるで死に場所を探すように。

……それにしても僕はどこへ行くつもりなのだろう。
そしてどれぐらいの時間が経ったのだろうか。

わからないまま僕が壁伝いに手を伸ばして何かを掴んだ。
なにかと思い、手先を見ると鉄製の校門だった。

僕は何気なしに学校へ向かっていたのだ。

無意識に最後の場所として選んだに違いない。

「まあ、悪くないか」

何とか校門をよじ登り、落下するように降りる。

よろよとグラウンドを横断すると校舎へ向かった。

校舎内に入った僕は自分の教室へたどり着く。

自分の机を探し、席に着くとうつ伏せになり、荒れる呼吸を整えようと休むことにした。

すると、昨日ずっと起きていたこともあり、いつの間にか僕は眠ってしまった。

寝ている間、何を夢見ていたのかさっぱり覚えていない。

なぜなら起きてからの出来事に記憶を奪われたからだった。

どれぐらい時間が経ったのかわからない。

静かだった教室にわずかに異音が混ざった。

「――!?」

迫ってくるような足音が耳に入り、僕は目を覚ました。

左右を見たけど、誰もいない。だけど、確かに足音がする。

僕はとっさに机の陰に隠れた。

窓を見るとすでに夕暮れだった。

そして足音がする教室の廊下側を伺っていると、入り口の窓から人影が通り過ぎるのを見てしまう。

一瞬見えた人影は……紛れも無く彼女だった。

「……武内、目が覚めたんだ」

揺れる肩に掛かりそうなぐらいの髪、光を帯びた大きな瞳。

何より動いている彼女をもう一度見られたのが嬉しかった。それにしてもどこへ向かったのだろう。

まさか、僕を探しに来たんじゃないだろうか？

……んな訳がないか。

アイツは別に僕のことなんかなんとも思っていないはずだし。

ただ、ほんの少しでも僕に会いたいと思ってくれていたら……
だとしても、どの面下げて彼女に会ったらいいんだ。

もう、僕の命は残り少ないんだぞ。

——でも、その時間が少ないからこそ、会っておかなければならない人がいるんじゃないか。

いつの間にか僕は自分の机を力強く握っていた。

ここで武内が声をかけてくれたから始まった。

『人なんかのために魔法を使うなんて馬鹿らしい。裏切られのがオチだ』

『距離をとってそれなりにやっていけばいいじゃないか』

『人と深くかわりあい、情けをかけて面倒なことになるなんてのはゴメンだ』

あの頃いつも考えていたことだった。

でも、この言葉を簡単に乗り越えられる気持ちがあったのだ。

それは『好きになる』ということ。

結論とはいってもありふれた言葉で構成されている。

なぜなら問題は、『それを誰に向けて行動するか』にかかっているからだ。

「——よし！」

武内の行くところは一つだ。向かう場所は屋上。

僕は教室を飛び出し、後を追った。

……その結果が、今武内を引き上げている僕に繋がっていた。
まだ魔法が使えたこと自体奇跡だと思っているのだが、上手く
ってホント助かった。

彼女を抱きかかえたまま、屋上へと着地する。

改めて彼女を見ると本当に生き返ったのだと実感した。
風に吹かれて彼女の髪が揺れる。

少し寒いのか、身を縮めてしかめっ面をする仕草。

全てが新鮮に見えた。そして彼女とまた話がしたい。

でも、なんだか照れくさく、何言っていいかわからない。

僕は視線を逸らして誤魔化そうとした。

「広野君、えいつ」

「は？——っ!!」

その瞬間、僕の頬に強烈な衝撃が襲う。

必要以上に顔が横を向き僕は少しだけよろめいた。

もちろん、武内が平手打ちをしたからだ。

「な、何するんだよ!!」

「私の裸見たでしょ」

「あっ……」

否定すればいいのに僕は思わず、バツの悪い顔をしたに違いない。

……っというか、なんでこんな時にそれを言うんだよ。

と僕が思うのもつかの間、再び武内の平手打ちが今度は反対の頬
を叩く。

「痛——っ!!」

「今のは黙っていなくなった分」

両方の頬が痛みで交互にジンジンする。

頬を摩りながら武内を見ると、ジト目で僕を睨んでた。

なんだよ、なんなんだよ!!

ちっとも感動の再会にならないので僕は正直がっかりした。

さらに武内は指を差して僕に宣言した。

「これで済むと思ったの？ 今から皆の分を晴らせてもらいます」

「はあああっ！？」

ちよつと待て、これは戦闘漫画じゃないんだから、それはしなくて良いんじゃない？

僕は思わず後ずさりした。

それを見逃さない武内は一步前に踏み出す。

僕の喉がゴクリと鳴った。

「じゃあ…… まずはお母さんの分」

武内が何か言いながらどんどん迫ってくる。

しかも今度は両手を伸ばしてきたじゃないか！

どれだけ叩く気なんだよ！！

僕は必死に弁解しようと説得を試みる。

「まて、こんな時に何——！？」

問答無用に近づいた武内は僕の頬に両手を添える。

柔らかくて暖かい、手の感触が僕の頬に伝わった。

そのまま彼女の顔が近くなる。

まさか——瞬間、僕の胸は高鳴った。

「んっ……」

そして僕たちは唇を重ね合わせた。

一瞬だけの軽いキス。

武内はすぐに顔を離し、微笑んだ。

さらに驚いて言葉が出ない僕へ呟く。

「次は坂本さんの分……」

情けないけど、僕は彼女の行動に動くことが出来なかった。

少しでも舌で唇を舐めた彼女の仕草に見とれてしまったから。

湿り気を帯びた唇をわずかに開きながら武内は近づく。

「んんっ……」

僕の下唇へ甘噛みするように、彼女の唇が触れる。
やや吸い付くように唇を動かして、僕の唇全体が重なった。
時間にして数秒、僕にとっては長いキスだった。

ゆっくり彼女が顔を引いて離れる。

視点が合った彼女の瞳は潤み艶を帯びていた。

僕もなんだか気持ちが高まり、すこしだけ目が潤み始める。

自然に武内の肩へ僕の手は移動していた。

「ちよつと、待って。まだ終わってないから」

「え？」

「……これが私の分」

頬を包んでいた武内の手に引かれて、僕は再び彼女へ近づく。
すると僕の唇をこじ開けるように彼女の唇が横から入り込む。
お互いに唇で噛み合うように、顔を少しだけ上下に動かした。
柔らかく口をふさがれる感覚に僕は酔いしれる。
程よい湿り気がお互いの唇の動きを滑らかにした。

「んん……んんっ……」

少しだけ武内の息継ぎが聞こえた。

それだけで愛しい気持ちが増幅すから不思議だ。

さらに歯がわずかに触れると、今度は何かが僕の口へと入ってくる。

僕は慌てることなくそれを迎え入れた。

舌を動かすと同じようなうねりをもったモノが絡みついた。

舌先で確かめたり、擦りあったり、それまるで僕たち自身が絡み合っているようにも思えた。

さつきとは比べられないような長い時間が過ぎた。

武内が顔を離すと、僕との唇の間で少しだけ糸を引く。

すると彼女はいたずらっ子のようににはにかんだ。

やばい。このまま抱きしめたくなくなってしまった。

それにしてもなんでキスなんだよ。

平手打ちじゃなかったのか！？

そんな不思議そうな表情を見せた僕に、武内は目を細めながら応えた。

「それだけ広野君が、皆に愛されてたって印」
「えっ……」

すると武内は数歩僕から離れた。

彼女は顔を傾けて視線を逸らした後、再び僕を見つめた。
そしてわざとらしく咳払いを一度する。

「こほん。もう湿っぽいのは一切無しでお願い」
「なんだよ急に」

「だって、私はお別れに来たんじゃないの。幸せになりに来たんだから」

「幸せに？」
「うん」
「なるほど……」

僕は少し前まで死ぬことばかり考えていた。

確かに死んでしまうのだけれど、迫ってくる時間に怯えてばかりいた自分がいた。

「だけど……彼女は「幸せになりに来た」と言う。
僕に残された時間を楽しみたいということなのか。」

「広野君、言っただじゃない『また騒ぎたいんだよ。それがどんな空騒ぎであっても』って」

「武内……お前……」

「だからせめて、今日一日……ってもう後数時間しかないけど、私と一緒にいて欲しい」 そうだ、楽しもう。

抱き合って涙に暮れるだけが最後の時間じゃない。

悲しくたって、空騒ぎだって、僕らは楽しむんだ。

もう、これでお別れならば笑って過ごすしかないんだよ。

「駄目？」

「そんなわけあるかよ」

「よかった。それじゃあ——」

「ちよつと待った」

僕は悔しかったので腕を伸ばし、武内を引き寄せた。

「キスされっぱなしじゃあ気が済まない」

「あつ……」

驚きながらも近づく武内の額へそつと唇が触れる。

さすがに唇へ行く度胸がなかった……

ちよつと情けなさを感じながらも彼女を離す。

武内は顔を真つ赤にして僕を俯き加減に見つめた。

そして口を尖らせながら呟く。

「おでこつて……」

「しょうがないだろ……僕は慣れてないんだから」

「そうじゃなくて」

顔を赤らめたまま、武内は近づき僕の服の袖を掴む。

「なんだか改めておでこにキスされると……照れるね」

「あ……」

別に狙ったわけじゃないけど、怪我の功名と言つべきなのだろうか？

そして不意に強い風が屋上を吹き付けた。

武内はそのまま僕に寄り添って風よけにする。

そして彼女の体を僕全体で受け止めていた。

武内が顔を上げると、僕たちはまた触れそうぐらいな距離で向かい合った。

「ねえ……寒いから教室行かない？」

「お、おう」

そして僕たちは最後の時を教室で過ごすことにした。
全てが上手くいったわけではない。
なんせ僕は初めてだったのだから。
でも、そんなことは関係なかった。
彼女の温もりを直接感じ、生きている感覚を味わえたのだから。
もう、愛しくて、愛しくてずっと抱きしめたい気持ちで一杯だ。

いつの間にか外はすっかり真っ暗になっていた。
月明かりが教室内を照らし、なんとか視界は保たれている。
この夜が明けるまで僕は生きられるのだろうか。

上着を敷いた床で僕たちはぼんやりと外を眺めていた。
僕はいつの間にか彼女の頭を腕で包み込み、何度も撫でていた。
そうすることではなぜか僕は落ち着いた。

「こっやって撫でられるの好き……安心するから」
どうやら武内も同じ気持ちらしい。
しばらく無言で時間が過ぎていく。

こっという一見無駄だな時間も大切に思えて、僕は不意に彼女を強く抱き寄せた。

すると、武内も僕に応えるように僕の体に手を回してくれた。

「広野君……ありがとう」

「な、なんだよ急に」

「何も無かった私に色々なものをくれて」

……泣かないつもりだったが、少し涙腺が緩んだ。

僕は何か話さないと、さすがにやばかった。

「お前絶対に命を大切にしろよ」

「ふん、命を投げ出した人に言われたくない」

「てっ、てめえ！」

「——わかってる。大切にするよ」

そして彼女は僕を強く抱きしめた。

背中に回した指を立て、強く僕へと押し当てる。

「もう無駄にしない……絶対に」

「武内……」

「何が起きても生き続けたい……今はそう思うんだ」

この時、自分のしたことに間違いが無かったことを確信した。

どっと背負っていた重荷のようなものが降りた気がする。

愛しい人に捧げてよかった。

生き続けてくれよ。これからもずっと。

「そうか、良かった……」

ん？ どうしたんだ？ 言葉が上手く出ない。

……気のせいかとてつもなく強い眠気が襲ってくる。

「どうしたの？ 広野君？」

「なんで……もない」

ああ、そうか僕はもう時間切れなのか。

だけど、不思議ともう怖くなかった。

もういいか……あっ！？

そして急にわきあがってくる思い。

しまった。武内に言い忘れたことがある。

とても重要なことを本人に向かって言っていないことに気づいた。

僕は何とか声を絞り出そうと頑張った。

「……お前のこと好きだ」

多分、もう声は出ていないだろう。

息だけが漏れているだけに過ぎない。

それなのに、薄れ行く意識の中で、彼女の口が動く。

「私もだよ……大好き」
ああ、良かった。
——ありがとう。

最終話 「私たちの魔法使い」

差し込んできた光が、まぶたを照らす。

目を瞑っていても日の明るさや暖かさを感じた。

そつと目を開ける。なんとなく目が覚めた朝。

目覚まし時計を見ると設定時刻より五分だけ早い事が分かる。

でも、あまりの気だるさに、なんとなくこのままでいいやと思っ

ていたら、私を呼ぶ声が聞えた。

「亜由美、そろそろ起きなさい」

「……わかってるって」

「今日は武内さんが待っているんでしょ？」

「うーん、もう分かったって言うてるのに……」

最近、特に母親の私を起こす声がうるさくてしょうがない。

……まあ、私がちゃんと起きていればこんな目にも会わないのだから。

こんないい加減な気持ちになるのはきつと春のせいだ。

早速、身支度を整え、朝食を取る。

ご飯に味噌汁、それにハムエッグにサラダ。

こんなに食べられないって。

とか言いながらちゃんと平らげようとする私は律儀だ。

「二年生になったんだから、もう少しちゃんとしたら？」

「わかってる」

わざわざ言わなくていいようなことを母親は話しかけてくる。

確かに今日から新しい学年の始まりだけど、気持ち的にはまだ一年生だ。

「まったく。春休み中、だらけっぱなしだったから、そういうのは癖になるんだからね」

「嘘ばかり。春休みでも毎日起こしに来たくせに」

「当たり前でしょうが。私は今から働きに行くの。それに子供のア
ンタが合わせるのが当然でしょ？」

「あゝ、はいはい」

朝はやたら忙しそうにあちこち駆け巡る母。

だったらこんなに朝食作るなっつーの。

腹立つからもつと食べてやるっ！

……食べ過ぎたかも。

数分後、なんとか朝食を食べ終えた私はカバンを持ち、駆け足で
玄関へと向かう。

朝食を食べていたせいで、亜也との約束の時間に遅れそうになっ
ているのだ。

急いで靴を履き、ドアノブに手をかける。

すると背後からまた母が話しかけてきた。

「ねえ、亜由美」

「もう何！？」

正直、またお小言言われるのかと思うと、苛立つてくる。

しかし、母は私の考えていた斜め上をいつていた。

「ご飯、食べられるようになったんだ」

「……え？」

「よかった。少し心配してたんだから」

「あつ……そうなんだ」

ようやく私は母親の行動を理解した。

休みの間、朝ちゃんと起こしに来たのも、朝食がやたら多かった
のも、私を心配してくれていたからなんだ。

緊張の糸が切れて、どこかへ飛んでいきそうな私を繋ぎとめてく
れてたのかな？

なんだか照れくさい気持ちを抑えながら母親を見ると、ニッコリ
笑ってた。

「いつてらっしやい」

「いつてきます！」

私は勢い良くドアを開け、学校へ向かった。

外にでた私は意味もなく走りたい気持ちに駆られていた。

暦は四月、新学年になった。

私はまたあいも変わらず学校に行く。

それが学生の本分だからしょうがない。

何があっても、また行かなくてはならないのだ。

それが悲しい出来事であっても。

「亜由美ちゃん、おそいーっ」

待ち合わせていた公園で亜也は大きく手を振って私を迎えてくれた。

近づきながら私は軽く片手を上げて謝りながら近づく。

「ごめん、ごめん。お母さんが、朝食食べてけってうるさいから」

「うんうん、いいお母さんだね」

「感心するところじゃないって……」

でも、私は最近、なんだかルーズになった気がする。

やっぱり緊張する相手がいないと、どうもだらけてしまう。

「じゃあ、行こっか」

公園内を二人並んで歩く。周りの風景もすっかり春だ。

植え込みの桜も綺麗な桃色を見せて私たちを楽しませるように咲いている。

ちよつと、散り始めてるけど……

「同じクラスになるといいねー」

亜也はなんだか、嬉しそうだ。彼女の髪も踊るように揺れている。それを見て、私も彼女の調子に合わせることにした。

「こればかりは時の運だからねー。わかんないよー」

そしたら、亜也は頬を膨らませて怒った。

「そんなこと言っちゃ駄目！ そんな気持ちじゃあ、同じクラスに

なれないもん!!」

「亜也、その『もん』って言うのやめたほうがいいよ。子供っぽいし、媚びてるみたい」

すると、亜也は私の前に身を乗り出すと、振り返った。

「いいもん！ 私、まだ子供だもん！ 未成年だもん！」

「開き直ったの？」

しかし、私の言う事を聞かずに彼女は身振り手振りを加え、大声になる。

いや、恥ずかしいから止めて。

「そして、どんどん媚びて悪い大人からお金を巻き上げるんだもん!!」

「つか、『もん』って、わざと言うなーっ!!」

「いやあ〜っ」

亜也が私から逃げ出したので、追いかける事にした。

しばらく追いかけてこは続く。

暖かみを帯びた風が私を通り過ぎる。

少し前までの刺す様な冷たさのある風にはない優しさを感じた：

…はずなんだけど。

「はあ、はあ…… ちょっと、本気で逃げないでよ！」

「私はいつでも本気ですっ！」

すると亜也は私へ振り向き、まるで海岸で海水をかけるような仕草をした。

「あはは、あはは。私をつかまえてごら〜ん」

「二世代ほど前のアイドルか、アンタは！」

どちらかと言うとお笑いのネタかな？

にしても、突っ込みも体力がいる事が分かった。

春休みの間、家をほとんど出なかった私には正直こたえる。

ヘトヘトになっている私に亜也は走りながら言った。

「きっと大丈夫。広野君が魔法で、同じクラスにしてくれるよ」

「えっ……」

私はその言葉に思わず立ち止まった。

今日初めて聞いたその名前に反応して、私は下を向いてしまった。どうしてだろう。もう平気だと思ったのに。

そこへ、亜也が近づき覗き込む。

心配そうに見つめる彼女と私の目があってしまった。

「亜由美ちゃん、ゴメン。まだ、このての話は辛かった？」

「何言ってるの。私なんかよりアンタの方が……」

私の手を握り、じっとこちらを見つめる様は、心から心配してくれている事が十分に伝わった。

私は瞳から溢れてくる雫をやっぱり止められなかった。

「ほらほら、学校行く前から泣いちゃだめだよ」

涙ぐむ私に亜也がハンカチを出す。私は無言で受け取った。

あれからまだ、二週間しか経ってない。

学校に到着すると、すでに下駄箱付近にクラス替えの名簿が掲示してあった。

それを見つけた亜也が一目散に走り出し、向かっていく。

私よりクラス替えが気になっているのは彼女だろう。

亜也は手を胸の辺りで組んで、しばらく、名簿を心配そうに眺めていた。

「あーっ！」

するとひと際大きな声を上げたかと思えば、満面の笑みで私に振り向く。

「同じクラスだよ！」

亜也は私に駆け寄ると、手を取って小さく飛び跳ねて大騒ぎしている。

そんな姿を私は客観的に見つめてしまった。
なんでこの子はこんなに笑えるのだろう。

亜也は本当に強いと思う。

だって、葬儀の時も涙一つ見せずに、泣きじゃくる私を一生懸命に慰めてくれたんだから。

——もう、広野貴明という人間はこの世に存在しない。

その事実さえ未だに私は受け入れられない、受け入れたくない。でも、いつかは忘れる日が、この日々を懐かしむ時が来るのだらう。

……今の私が、あの時の広野君が、過去になる日。来てほしくない。

できることなら一ヶ月前に戻って、あの時間をずっと繰り返して過ごしたい。

遊園地に行つて皆で撮影した写真は大切に持っている。

唯一、私と広野君が並んで撮った写真。

「ねえ聞いている？」

机で頬杖ついてる私を亜也が覗き込む。

いつの間にか新しいクラスに移動して、休み時間に彼女と話をしていたのだった。

「聞いている、聞いている。私は赤のほうがいいと思うけど」

「やつぱり？ 私もそう思ってた！」

亜也はカタログを見ながら、あれこれ迷っている。

少し前に行なわれた始業式で校長は門脇が殺された事に触れていなかった。

犯人は（土屋の名前はあえて伏せていた）いまだ逃走中なので、夜道には気をつけるようにとかそんな話だ。

すでにこの事件はテレビでは連日放送されていて、犯人は自殺したんじゃないかと報道されていた。

もちろんこの報道に広野君の名前は一切出ない。

校長の話の中にも拳がっっておらず、大きな事件のさなか、まったく関係ないところで死んでしまった一生徒といったあつかいだった。

「うーん、通販のカタログって本当にいい暇つぶしになるね」

特に買うつもりもない服を亜也は真剣に物色している。

この子が数週間前は死んでいたなんて、誰も知らないに違いない。……私を除いては。

「本当、カラオケの曲名が載ってる本ぐらい暇つぶしできるよね」
「うん……」

ただ、悪い言い方をすれば、広野君は亜也のせいで死んだ。それは亜也もわかってるはずだ。

私は葬儀の後に亜也をなじるだけだった。

悔しかったのだ。

式の間、泣かなかった彼女を。泣き崩れた私を慰める余裕のある彼女を。

言える限りの悪口、誹謗中傷をぶつけた。

でも、亜也は黙って何度も頷きながら聞いてくれた。

「やっぱり、服より雑貨だね。『これ何に使うんだよ!』みたいな掘り出し物があるし」

「そして買っても結局数日しか使わないんでしょ？」

「うん、正解！」

でも、気づいてしまったのだ。

葬儀の間、トイレや雑務から戻ってくるたびに彼女の瞳が赤く腫れていたことを。

とたんに私は自分が恥ずかしくなった。

「買い物症候群にならない程度に楽しもうね」

亜也は楽しそうに鼻歌交じりで言う。

私はそれを見て不思議に思った。

今はもう平気なの？　って。

「あのさあ、亜也」

「ん？」

「淋しくない？」

すると、亜也の表情が一瞬だけ動きを止める。

そして小さく溜息をついた彼女は私に真剣な眼差しを向けた。

「うん。淋しいよ」

「そうなんだ……」

私はまずい事を言ったと後悔した。

そして言いたい事を何でもぶつけて、彼女に甘えている自分を情けなく思った。

しかし、彼女はすぐに私へ笑いかけ、目を細めた。

「でも、私には亜由美ちゃんがいるしね」

「亜也……」

「広野君はきつと……私たちを会わせる為に現れてくれた魔法使いだと思う」

「私たちを会わせるため？」

「うん。あの人に助けてもらってなかったら、私は死んじやってて、ずっと一人だったかもしれない。彼は死なない限り一人じゃないって私に言ってくれたもん」

そして亜也はカタログに再び、目を移して微笑む。

私は何も言えない。

この子はどれだけの悲しみを我慢しているのだろうか？ 私にはわからない。

きっと、それは私には抱えきれないものだと思う。

彼女は強く、そして優しい。

そうだよな。

あのちよつと頼りなさげな魔法使いのお陰で私達は生きているんだから。

なんだか心が温くなる。包み込まれるようなイメージ。
広野君、頼りなさげなんて言って、ごめんなさい。

——やっぱりアナタは私の王子様です。

「ねえ、亜也」

「ん？」

カタログを見ながら亜也は軽く返事をした。

それでもいい。亜也に今の気持ちを伝えたい。

「ごめんね」

するとカタログを見ていた亜也は急に顔を上げる。

首を傾げて、不思議そうな眼差しで私を見た。

「ど、どうしたの？ 急に」

「これが私の気持ち」

「え？」

「本当にごめんね。それから……」

私の表情からどんどん無駄な力が抜けていく。

そしたら自然に微笑むことができていた。

「これからもよろしくね」

初めは亜也は少し戸惑っていた。

だけど、やがて私に釣られて彼女も笑顔になる。

「こちらこそ、よろしく！」

そして私と亜也は握手をした。

柔らかい手が私を包む。今日からはこの温もりが私の支えとなる。

これからも私達は友達だ。

ずっと……ずっと……

『suicide magic』 完

最終話 「私たちの魔法使い」 (後書き)

これでお話は終わりです。

お読みいただき、ありがとうございました。

感謝、感謝でございます。

ちなみに次回はあとがきとなっております。

あとがき

『suicide magic』をお読みいただきまして、誠にありがとうございました。

こんなにも長いお話に付き合っただき、本当にお疲れ様でした。

後書きの枠もちゃんとあったのですが、ちょっと長文には向いていない気がしたので、こちらにて書かせていただきます。

いや、それにしても途中、どうなることかと思いましたが、終わらせることができてホッとしております。

しばらく更新が無くなったり、最初と展開が変わってくるし、かなり皆さんを振り回してしまったことと思います。ごめんなさい。しかしここまでこぎ着けたのも読者の皆さんのおかげでございます。

感想を頂けると萎えてた気持ちも解消されますし、なにより励みになりました。

終わりよければ全てよし……ということ。

以下は、『suicide magic』におけるチョットした制作話を書いています。

・始めに……

まず、お伝えしなければならぬことは、このお話は私が六年ほど前に自分が書いた小説を書き直したものだということです。

本作品を先に読んだ方がほとんどなので、「だからどうした」だと思います。

読んでも無い話の話題をされても困ると思います。
ごもつとも。

ただ、以下の文章を読み進めるためには知っておいてもらいたい要素なんです。

最初の頃の更新が早かったのはこのためです。

自分のにですね、六年ぶりに書き直して色々と成長を伺えたな、何て思います。

単純に文章量から言って原型の三倍ほど増えています。

しかも、40話以降はほぼ完全に書下ろしとなっています。
なので、お話の後半は更新速度がガクツと落ちたわけです。

・最初の展開……

六年間、最初はラブコメを書きたかった記憶があります。

まあ、最初から自殺を取り上げておいてラブコメも無いだろと思
います。

ラブコメは基本好きです。そしてサイコちつくなものも輪をかけて
大好きです。

・途中の路線変更について……

六年前からそういう展開だったのでそのまま踏襲しました。

ただ、本文中の書き込みが増えているので、かなり暗い展開にな
ったのかなと自己分析しております。

あれだけ暗く書かないと、最後に『生き続けたい』って言っても
説得力ないですね。それに私はキャラクターを書くのが大好き
なんです。

このお話もある意味、「武内亜也って子はこんなに良い子なんで
すよ〜」って言いたいがために書いたものなんです。（これは他の

キャラクターにもあてはまります)

作者なんてどのキャラクターも溺愛してます。土屋も然りです。

・ラストについて……

これはかなり悩みました。何をかといえば「広野を生かすかどうか」です。

六年前の原型は死にました。

だから今回は生きててもいいかなって思いました。

でも、結局殺しましたけど。(今も悩んでます)

本当に第45話を書くまではまだ決めてなかったからです。

ただ、原型の最後はとも気に入ってたところだったので、変更無しとしました。

あれだけの事が起きて、三人無事でしたじゃあ、私の気がすみません。

「何でもありかよ」ってなりますから。

それと、好きなんです。完全に幸福でもないけど、不幸でもないってやつが。

バランスの問題ですが

・今後は……

原型があるように、実は続編が存在します。

ちなみに舞台は17年後の話になります。

ただ、文章上今と比べても稚拙な箇所が多く、掲載するレベルに無いと考えています。

それに今は他のお話を書きたいです。

今度はコメディイ書きたいですね。(アホみたいなやつ)

本来、私は短編なんかでコメディイを書いてたはずなのですが、いつの間にかシリアスになってしまいました……

(ありがちな展開ですね)

あとがきはとりあえず以上です。

今後も精進いたしますので、リープって名前見つけたら、また読んであげてください。

それではまたどこかで会いましょう。

最後に『suicide magic』をお読みいただき、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5073b/>

suicide magic

2010年10月8日13時30分発行